

連載専門誌

# 対人援助学マガジン



vol. 15 No. 1

第57号

JUNE 2024

対人援助学会

## No.57 M O K U J I

目次		002-003
ハチドリの器	見野 大介	004
執筆者@短信	執筆者全員	005-015
付け加えることができる価値は何か？	千葉 晃央	016-019
臨床社会学の方法 (45)	中村 正	020-029
アソブロックに新卒がやって来た	団 遊	030-032
解放の心理学 (5)	藤 信子	033-035
カウンセリングのお作法 (39)	中島 弘美	036-038
晩年 D・A・N 通信	団 士郎	039-054
幼稚園の現場から (57)	鶴谷 圭一	055-057
福祉系対人援助職養成の現場から (57)	西川 友理	058-061
ああ、相談業務 (17)	河岸 由里子	062-066
路上生活者の個人史 (11)	竹中 尚文	067-068
スポーツおじいさんになりたい！ (新連載)	國友 万裕	069-078
役場の対人援助論 (48)	岡崎 正明	079-082
臨床のきれはし (25)	浅田 英輔	083-085
発達検査と対人援助学 (16)	大谷 多加志	086-088
講演会&ライブな日々 (39)	古川 秀明	089-092
立場が変わると何かが見える (9)	坂口 伊都	093-097
周辺からの記憶 - 東日本大震災家族応援プロジェクト - (43)	村本 邦子	098-123
精神科医の思うこと (33)	松村 奈奈子	124-126
番外やぶにらみ日記・ニューヨーク編	柳 たかを	127-134
心理コーディネーターになるために	山下 桂永子	135-138
先人の知恵から (44)	河岸 由里子	139-145
うたとかたりの対人援助学 (29)	鵜野 祐介	146-148
ああ結婚 (30)	黒田 長宏	149-154
PBL の風と土 (29)	山口 洋典	155-160
接骨院に心理学を入れてみた (28)	寺田 弘志	161-168
現代社会を『関係性』という観点から考える (28)	三浦 恵子	169-174
保育と社会福祉を漫画で学ぶ (24)	迫 共	175-179
「余地」—相談業務を楽しむ方法— (27)	杉江 太朗	180-183
原田牧場 Note (17)	原田 希	184-186
サイコロジー (5)	川畑 隆	187-191

応援、母ちゃん (17)	玉村 文	192-195
HITOKOMART (16)	篠原ユキオ	196-199
川下の風景 (14)	米津 達也	200-201
こころ日記『ぼちぼち』PartⅢ	脇野 千恵	202-203
父が自分の身を呈して教えてくれたこと	高名 祐美	204-207
一語一絵 (14)	畑中 美穂	208-212
対人援助をレポートするこの一冊 (25)	渡辺 修宏	213-216
新・島根の中山間地から Work as Life (1)	野中 浩一	217-221
ヨミトリとヨミトリ君で一緒にしましょ！ (9)	高木 久美子	222-226
こかげのにちじょう (8)	鳴海 明敏	227-228
コソダテノシンリ (7)	中谷 陽輔	229-239
教室の窓から	來須 真紀	240-241
社会科の授業を対人援助学の視点から	内田 一樹	242-244
人生は対応のバリエーション	宮井 研治	245-249
けふばあちゃんからの手紙	乾 京子	250-251
生殖医療と家族援助	荒木 晃子	252-254
編集後記	編集長&編集員	255-256

ハチドリの器 40

見野 大介

*Mino Daisuke*



右上：四月、大阪での三人展。

右下：五月、滋賀での陶器祭。

左：五月、工房での展示。



## 高名 祐美

元旦に発生した能登半島地震。発災から5ヶ月が過ぎようとしている令和6年5月25日。団士郎さんのトークショーが石川県金沢市で開催された。金沢市では、市内に1.5次避難所、二次避難所やみなし仮設などで能登の住民が避難生活を送っている。会場となった「金沢市福祉用具情報プラザ」では「あつまらんけ〜のと」というネーミングで、避難者への支援物資配布やカフェ、社会福祉士による相談対応を行っている。その「あつまらんけ〜のと」のスペシャル企画が、団さんの家族漫画展とトークショーのイベントだった。

当日は避難生活を送っている方、そして支援者など34名が集まり、1時間半のトークショーを楽しんだ。もちろん私もそのひとりだ。また会場には10点の漫画掛け軸が展示され、来場者の目を楽しませてくれた。団さんの漫画を掛け軸で読むことは初めてで、本で読むのとはまた違った読み応えだった。

5ヶ月たっても能登の町並みは、発災当時と様子がほとんど変わっていない。二次避難所やみなし仮設の人々は、見知らぬ土地でつながる人も居場所も少なく、これからの生活をどうしていくか、辛い選択に心悩ましている。団さんの「災害は人命だけでなく様々な物を奪う。何もかも失われたような喪失感に打ちひしがれる。でも本当はなくなったのはモノだけ。わたしたちの中にある記憶や思い出は奪われては

いけない。」というメッセージに心が動いた。未来の自分の物語を語り、今自分ができていることを考えて、固まってしまった物語から自分をときほどしていこうと思った。団さん、ありがとうございます。

### 父が自分の身を呈して 教えてくれたことⅢ P204~

## 水野スウ

3ヶ月ごとのマガジン原稿、さあ、そろそろ書き出そう、と思っていた矢先、すべて転んで顔をうち、数日間は頭がぼわ〜ん、考えまともらず、早々に今号の原稿はお休みすることに決めました。

念の為、はじめて受けてみたMRI検査。いろいろな音がするのでびっくりしないように、と事前に説明はうけていたけど、頭の上からいきなり、ずんずんっ、ポコポコ、ドコンドコン、パチパチ、とさながらテクノポップ。坂本龍一さんだったら曲がつくれちゃうなあ、なんて思ってるうちに検査は終わり、脳内のどこも異常はないようで、まずはひと安心。

原稿を提出しない代わりに、お知らせを一つ。56号にも登場した、石川県野々市にある野菜とフェアトレードのお店「のっぽくん」。能登半島地震が起きた直後から何度も能登に足を運び、刻々かわっていく被災地のニーズをキャッチしてはSNSで発信してくれているのっぽくんが、このたび、能登への想いをつなげる手立ての一つとして、「NOTO, NOT ALONE 能登は、ひとりじゃない」というロゴの入ったトートバッグの販売をはじめました。定価2600円のうち、1400円が能登への寄付金になります。

バッグを縫うのはインド、ムンバイのスラムに住む女性たち。京都のフェアトレードの会社、シサム工房さんを通して輸入、プリントされる、正真正銘のフェアトレード商品です。

しっかりした作りのおしゃれなこのバッグ、使いやすくて私も愛用しています。能登半島地震に関する報道は全国レベルで激減していて、「私たち、もう忘れられてるみたい」という声も能登から聞こえてくる。とても胸が痛いです。どんな小さなことからでもいい、どうか能登を忘れないで、そして能登と長くつながってくださいな、と願っています。

「NOTO, NOT ALONE」のトートバッグのお問い合わせやご注文は、のっぽくん ☎  
076-246-0210  
<https://noppokun.co.jp>



きもちは言葉をさがしている  
休載

## 馬渡 徳子

能登半島地震発災から4ヶ月半を経た。3月中旬には1.5次避難所に子どもたちがいなくなったことから、私たちキッズスペースのメンバーの活動は二次避難先で生活する子どもたちとその保護者支援と、能登地区で生活する子どもたちの放課後の生活支援が中心となった。

春休みには緊急学童保育所が開設し、私は保育にあたった。そこで、なんと偶然にも教え子に出逢った。金沢大学卒業後は地元の自治体職員として働き、その後外国生活を経て地元に戻り、市議会議員を務めておられた。なんと、市議会には、もう一人若い金沢大学卒業生がおられ、ともに幅広い世代の市民のニーズ実現の為に奔走しておられることを知ることとなった。お二人は、学部は異なるが、金沢大学のフィールドワークとして、またサークル活動として能登半島を度々訪れていた方々であった。

任務を終えて別れる際に、「先生が成人祝に下半期授業の最終日に唄ってくれた『憲法13条の唄』(水野スウ作詞)を覚えています。目標にしています。」との言葉をいただき、胸が熱くなった。

若い世代の彼らのあり様に接し、日頃政治に対して文句ばかり言っている自分を

恥じる機会となった。

無性に、団士郎さんと早樫一男さんに逢いたくなかった。いしかわ家族面接を学ぶ会の事務局メンバーも同じ思っていた。

その思いは届くこととなり、団さんには5月に漫画展・トークショー・研修会、早樫さんには7月に研修会にご来県いただけることとなった。

この企画に多くの県民にご参加いただきたいと心から願っている。どなたにも、自分自身のストレングスに改めて気付いて、エンパワーメントされる機会となりますように。今回、本文をお休みいたします。

### 馬渡の眼 休載



## 乾 京子

後期高齢者の割には、忙しい毎日を過ごしています。集団に属することが嫌いで、マイペースがいい。そういつて憚らなかったのに、いつしか関係する団体の一員で、しかもいろんな集いの企画やら、雑用係やらと仕事はどんどん増えていきます。いつしか手帳の空欄が埋まっていき、この4月、5月はこれらの総会が目白押し。集いの記録集の編集などという慣れない仕事も飛び込んできました。おまけに免許更新手続きの前に後期高齢者運転免許更新講習会なるものも飛び込み、なんと認知機能検査なるものもあるとか。友達にネットにその例文が出ているから練習しておいた方がいいよと言われ、少々予習。お蔭かどうか、認知機能も運転技術も「大丈夫ですね。確認もちゃんとできているし、安全運転でどうぞ」と無事お墨付きをいただいた。もうしばらく車の運転ができそうです。45歳で免許を取ってから30年、滋賀県内は言うに及ばず、京都、兵庫、信州、北陸、四国、両親の介護で鳥取の往復とこの30年、よく走りました。父の7回忌に

車で帰ろうかなあと言ったら、弟妹、息子たちからブーイング。「電車にしといて、高齢者の運転は顔を見るまで心配だから。と言う訳で、電車で帰省してきま〜す。

### じゃりんこ文庫 P250〜

## 宮井 研治

相変わらず、日常の面白さの中心的事象は、孫である。言葉が増え、世界に対する彼なりの認識の仕方が変わっていくのを、見せてもらえるのは幸せなことである。同居しているわけではないので、日々見せてもらえるわけではないが、その分発見も多い。周囲の人への順位付けがはつきりしてきた。「ママ」「パパ」は最高位にある。その次は、順当であれば「ジイジ」がくるはずである。でも、彼の言葉や扱いからそうではないことが最近はつきりしてきた。両親以上に遊んであげていると自負している「ジイジ」であるが、「ババア」の扱いが「ジイジ」より丁寧であったり、あろうことか新参者の保育園の先生が、好きな人順位において「ジイジ」より上位に来るようになったりしてしまっている。由々しきことである。しかし、オママゴトでこさえたハンバーグを、目の前のジイジを通り越して、母親のもとに運ぶ孫をみていると、愛着の優先順位がきちんとできてるじゃん、ホツとしたりするのである。爺馬鹿である。ちなみに、彼の重機好きは今も続いているが、最近はその「オママゴト」が加わっている。多様性である。

今回は、私の数少ない師匠筋のひとり、岡田隆介さんについて書かせていただいた。この対人援助学マガジンにも、現在はお休み中であるが、長らく執筆されてきた児童青年精神科医である。ファンの多い人であるが、私も岡田さんの治療スタイルやスキル、考え方を自分なりに自分の臨床に取り込んできたと思う。支えられてきたと言っている。いつか文章にしたいと考えていたのうれしい。では、お読みください。

### 人生は対応のヴァリエーション P245〜

## 内田 一樹

二度目の担任が始まった。新高校1年生。18歳から15歳の生徒に変わること

は自分の姿勢にとっても大きな変化だ。身体に染みついたクラスナンバーがふとした瞬間、口をついて出てしまいそうになる。今思えば…と前のクラスへの新しい意味づけが、新しいクラスになって接していると出てくる。それでも毎朝新しいクラスの出席をとるとき、自分はこのクラスの担任だと実感する。そしてクラスの子ども達にエンパワーをされる毎日である。

### 社会科の授業を 対人援助学の視点から P242〜

## 中谷 陽輔

長男がこの春に小学校に入学しました。入学式では、教室にいるわが子を見るだけで、非常に感慨深いものがありました。その後、4月には「学校行きたくない〜」と朝に泣いていたこともありましたが、5月になってからは「学校楽しくなってきた！」となんとか登校し続けてくれております。

今回は、近年のコソダテにおいて、検討を避けては通れない「スマホ・タブレット」を話題にしました。本文では先行研究をもとにデメリットを強調していますが、実のところ、親としての私は、長男が1歳頃、そのうち使うだろうとタブレットを購入していました。ただ先行研究を調べるほどに、「こんなもん絶対子どもが小さいときに使わせたらあかん…」と確信するようになり、自分自身のスマホの使用も含めて、大いに見直しを図りました(ちなみにタブレットはメルカリで売却済みです)。今となっては、正しく知ること、自分で考えることの大切さを噛みしめています。世の中は、企業が売って儲かるものの広告で溢れていますからね。



そんな折、長男の通う小学校から、GIGAスクール構想の名のもとに、タブレット購入に関するお便りが届きました。学校から言われたら…と思いつつ、家には持ち帰らせたくないんです、と家庭訪問のときに担任に伝えさせていただき、意外とあっさり了解いただきました。

そんなこんなで、私自身、コソダテしながら試行錯誤している最中だったりします。

引き続きよろしく願いいたします。

## コソダテノシンリ

P229～

### 櫻井 育子

ショウガイハツツ、という「生涯発達」という文字ではなく「障害」という字を書かれることが多く、わざわざ伝え直さなくてはならないこの不具合にそろそろ屋号を変えようかなあ、など感じているこの頃。そもそもそれほど大きなことをしているわけでもなし、何をしてもどこにいても限りなく自由なのだ、この身が、ということが増えた。こうした思考や安定しない心理状態であることにはもう随分と慣れていて、思えばこれまでの人生で「安定している」などと味わったことはない。しかし、これは誰もがそうなのではないか。あるいは、「不安定であること」が不安すぎるので病気になるのは、我を忘れて働き続けるか、何かに夢中になったつもりで正義のままに活動していくか、なのかもしれない。ぼんやりと、何もしない自分をゆるす。できないことを見ないのではなく、できないことは、誰かに頼む、ができればいいだけだな、と思う。

今回の連載はさまざまなことが重なってしまい、無理せず「おやすみ」をした。無理をしない、がまんしない、気にしない、は我が家の家訓なので、これらの実践者として生きていこうと思っている。

[shukou0122@gmail.com](mailto:shukou0122@gmail.com)

<https://ikuko-sakurai.com>

わたしはここにいる

休載

### 鳴海 明敏

県庁職員を定年退職した翌月に新規開設された、情緒障害児短期治療施設(現在は、児童心理治療施設)の園長を引き受けてから、15年目に入っています。

園長室には「こかげ」という名前がつけられています。ということで、サブタイトルは「こかげのにちじょう」とします。紹介する子どもたちについては、それなりのカモフラージュを施しています。

児童心理治療施設は、現在全国で53か所が運営されています。その全児心協議会の全国施設長会議が、2024年5月

15日～16日横浜市で開催されました。こしばらく新設がなかったのですが、来年度は新施設がありそうとのことでした。

会場は、横浜市中区の技能文化会館でした。関内駅を降りて、お昼を食べるところを探してウロウロしているうちに、どびこんだお店が、ちょっと風変わりなお店でした。

入口に頭を突っ込んだら、黒いTシャツを着た体格のいい厳ついおじさんと目があってしまいました。この雑然とした感じはなんだろう、別のお店なのかなあと思いつつ、いいですかと聞いたら、はいどうぞというので、身体を店の中に入れたのですが、なんか様子が違う感じがしたのですが、もう引き返せない感じで、これは店選びを失敗したなあと思いながら、カウンターの椅子に座りました。

薄暗い奥の方を改めて眺めると、店の奥の広いスペースにフロアマットが一面に敷かれていて、壁際にはサンドバックが何本もぶら下がり、赤や青の防具もおかれています。空手の道場だったのです。

いまさら逃げ出すわけにも行かず、覚悟を決めてカレーを注文しました。カレーを作っている先ほどのおじさんと話してみると、穏やかで意外といいおじさんでした。空手の道を究めようと、空手一つ筋で努力をしてきて、ようやく道場を持たけど、経営が苦しいので、副業として食堂や輝石のプレスレットの制作・販売をしているのだそうです。さらに話しているうちに、お互いの奥さんが同郷であることも分かり、一気に親近感が湧いてきました。

私が横浜に来た理由を話すと、道場に通ってくるこどもたちのなかにも発達障害のこどもがいることや、刑務所を出てきたばかりの人や生活保護受給者の居場所にもなっているということでした。

## 児童心理治療施設の園長室から

～こかげのにちじょう～

P227～

### 高木 久美子

ついに念願の査読付き論文を「対人援助学研究」学会誌に投稿しました！お世話になります。ヨミトリ君開発者の岡田浩さん(一般社団法人 愛知情報教育支援協会)を筆頭著者として、増尾明さん(星城大学)と高木(東海地区遷延性意識障

害者と家族の会「ひまわり」)の共著です。重度の障害により、言葉を発しているのにそれが届かないことに苦しんでいる方々の、その覚醒が論文を通して広く社会に認知され、双方の希望となることを願って書きました。どうぞよろしくお願い致します。

ヨミトリとヨミトリ君で一緒にしましょ!

P222～



### 野中 浩一

今年から、主催するフリースクールの中で、「ゲーム部」を発足した。生徒たちと話し合い、ストリートファイター6、大乱闘スマッシュブラザーズ、ぷよぷよテトリスの3種類のゲームでお互いを鍛え合い、年に1度は大会に出ることを目標としている。

部の名前をゲーム部としたのは、小学校2年生のファミコンのときからゲームに親しんでいる私なりのこだわりである。近年は「e スポーツ」という名前が世間に浸透するとともに、様々な学校にeスポーツ部が勃興している。競技としての側面を打ち出すとともに、学校の部活としては、ゲーム好きの生徒を呼び込む狙いも感じ取れることがある。

しかし、私が好きなのはeスポーツではなくゲームである。ゲームをダシに生徒を呼び込みたいのではなく、今いる生徒と一緒にゲームを楽しみたいのである。40年に渡りゲームに親しみゲームを楽しみ続けてきた私としては、ゲームの一部が競技化したeスポーツではなく、それらも内包する全体としてのゲームを打ち出したかったのである。親しんだゲームの名前を掲げて、ゲーム好きなメンバーと一緒に、ゲームを本気で楽しむことを部活にしたいとの思いを込めて「ゲーム部」とした。と、冒

頭からどうでもいいこだわりを語ってみる。

## 「島根の中山間地から Work as Life」 P217～

### 畑中 美穂

幾つか請け負っている仕事の一つをこの春を機に辞めた。大切に想ってきた仕事だったので散々迷ったが、事情には勝てずやむなし。しかしそう決めてから、「それを覆うくらいのことがないとね」と思い、新しいことを始めた。好きなこと・ずっときちんとやってみたかったことであり、今、その道を歩み始めたことを感じる。

“こころは器のようなもので、ひとつ空間ができればまたそこに新しいものが容れられる”。

本当にそうだなあ、と、思う。“器”のなかにどのような色、カタチが拡がっていくのか。楽しみである。

一語一絵  
P208～

### 渡辺 修宏

時々、長くあっていない友人のことを思い出す。そして、その友人が自分にしてくれたことを思い出す。あの時、あの人が、ああしてくれたから、自分はとても助けられたのだと、再確認する。友人に感謝する。きっと友人がいなければ、私は今ここに、いなかったらう。些細なことだけど、とてつもなく大きなことをしてくれた友人に感謝してやまない。

対人援助実践をレポートする  
この一冊  
P213～

### 米津 達也

今年で 47 歳になる。同い年のクライアントと出会うし、周囲の友人も俄かに 50 手前で病気の心配をし始めている。無事に 50 歳を越えられるだろうか。この歳になって、クライアントとの面談でこう尋ねることが増えた。「人生に後悔はないか？」もちろん、答えは様々。そんな答えを聞きながら、人生というものが有限であることを実感している。

川下の風景  
P200～

### 玉村 文

2024 年 4 月 18 日に第3子を出産しました。37週6日で出産、3336g の男の子でした。子どもは 3 人までと決めたこともあり、妊娠出産は今回で最後。産育休も最後。最後なので、3 回目の帝王切開について記録しておこうと思い、まとめました。

「自分の帝王切開を見た」という記事は医師で漫画家のさーたり氏の漫画で読んだことはありましたが、まさか今回自分もそれを体験できるとは。気分はブラックジャックのようでした。

最後の産育休の今年度、家族メンバーも確定したので、家づくりをしたりと仕事以外の活動にも挑戦しようと計画しています。

応援 母ちゃん！  
P192～

### 川畑 隆

編集長が「どうぞどうぞ」と言ってくださるので、『ザイコロジー』の前に連載していた『かけだ詩①～⑫』を本にすることにしました。『児童相談所から教わった～職場でのエピソードの回想と六十五歳からの詞集』というタイトルで、第一部に「駆け出しからのエピソード記憶」として児童相談所勤務時代のことを書き、第二部に「詞集～何か知らんけど教わった」として『かけだ詩』を納めました。



まあ舞台が職場とはいえ自分史と詞集ですから、出版の社会的意義は高くはないということになれば自費出版です。でも調べてみたら結構高くなります。そこで私の前に現れてくれたのが、アマゾンからの無料

のオンデマンド出版。電子書籍ではなく紙の本を注文に応じて印刷して送ってくれるというもの。アマゾンのサイトに載るわけですから宣伝にもなります。本の値段も自分で決められます。そして、原稿の編集や出版の手続きなどを代行してくれるサービスがまたあって、そこに依頼しました。安価ですが丁寧にサポートしてくれています。今月のうちには発売になると思うので、アマゾンのサイトを覗いてみてもらえたら嬉しいです。

ザイコロジー  
P187～

### 杉江 太郎

児童の分野で相談業務をしている杉江と言います。4月から新しい支店が出来て、少し小規模化しましたが、カフェの売り上げはさほど変わらないようです。とは言え、収支など一切把握してない、いつでもニコニコ現金払い、セルフ式のため、あくまでも感覚的なものですが。そうしたカフェでも、毎年恒例の、サクララテ味というものがあるのですが、これがまあお客様に不評で、でも、毎年3月～4月頃のその味を忘れた頃に発売されるので、また買ってしまい、結果、また不評で、在庫過多になってお客様に配り出す・・・ということをこの数年繰り返しています。ただ、このやり取りを続けていると、「今年も買ったの？」「美味しくないのに」「いやいや今年のは一味違うはず」なんていうようなやり取りが生まれ、コミュニケーションを活性化させる起爆装置に貢献しているのではないかと思うようになりました。また来年も懲りずに買っているのだろうなあ。

「余地」-相談業務を楽しむ方法-  
P180～

### 浅田 英輔

われらが弘前大学に、公認心理師の大学院が設立された。以前は教育学部に臨床心理士の養成課程があったが、事情により閉鎖となってしまっていた。それが平成28年ころとのことで、8年ほど間が空いて、これから青森県からも公認心理師が生まれることとなった。設立記念公開講座が3回シリーズで開催される。私もお呼ばれしています。お近くの方はぜひどうぞ。

<https://www.eps.hirosaki>



[u.ac.jp/open\\_lecture/](http://u.ac.jp/open_lecture/)  
**臨床のきれはし**  
P83~

## 三浦 恵子

令和6年1月1日の能登半島地震の支援に入っている職能団体その他の方々から、ニューズレターその他で現地の状況を伺っています。私自身は家族介護や自身の怪我もあって現地入りできず後方支援に徹している状態ですが、既に喪失感からのアルコール等への依存なども報告されており、物的支援だけでは埋められない「喪失と孤立」へのケアの必要性を再び認識しています。

ちなみに、阪神淡路大震災当時、駅舎ごと高架が落下するような甚大な被害を受けた神戸～大阪を結ぶ交通の大動脈であったJR線は震災発生後から2月半で復旧を果たし、東日本大震災当時では、震災発生後からわずか1月余りで「新幹線リレー号」を介してではありませんが東京から仙台までの陸路での移動が可能となりました。

ただ、それらは利用客が極めて多い路線での話であり、例えば常磐線などは、原子力発電所事故の影響もありますが、全線開通までに10年の歳月を要しました。R6年1月1日の地震は、交通の便が悪い、孤立集落が多い地域での発生であり、インフラの復旧の遅れが孤立にますます拍車をかけるのではないかと懸念しています。

更生保護護官署職員

(認定社会福祉士・認定精神保健福祉士)

**現代社会を『関係性』という  
観点から考える**  
P169~

## 迫 共

「保育の当事者研究会」を毎月1回のペースで始めています。大きなきっかけは昨年の対人援助学会広島大会のシンポジウムでした。登壇した西川さん、南部さんと迫が呼びかけ、「保育現場での困りごとをもてなす場」をオンラインで開いています。困りごとが解決するときもありますが、それは目指していません。「困りごとをじっくり眺めること(=研究)」を楽しんでいます。現状では保育関係者が少なく、看護や福

祉の領域の方が多いです。興味を持って下さった方は、ぜひお問い合わせください。  
追メアド：[sakotomoya@gmail.com](mailto:sakotomoya@gmail.com)  
**保育と社会福祉を漫画で学ぶ**  
P175~



## 黒田 長宏

心臓リハビリテーションをしていない病院が手術先だったため、本から独学で、と言うか勘だが、1万円のエアロバイクは思った以上に使えて、休日には朝食前に25分間、昼食前に25分間。夕食前に15分間こいでいる。エアロバイクにも心拍数機能がついてはいるのだが、胸に巻いてスマホと連動させるアプリを見ながら運動している。急性心筋梗塞の再発が恐ろしいので、この運動は休日中に必ずやっている。やらないと再発してしまうのではないかと不安感からである。だが、設定も独自だし、効果のほどもわからない。地上波やBSだとつまらない時間帯にこぎたくなってしまうときもあり、なんだか時間がもつたいないので、以前のNTT西日本開発の装置が壊れてしまったので、amazon fire tv stickをテレビに付けて、YouTubeでも動画サービスでも観ながらこいでいる。人によっては外に出て周囲を散歩するのだろうが、私にはそれが嫌なのだ。

<https://konnankyuuujotai.jimdofree.com/>

**あぁ結婚**  
P149~

## 松村 奈奈子

今年の春の旅は初めての下北半島と津軽半島。本州の北端はなかなか人を寄せ付けないワイルドな自然の風景が美しい。津軽半島の先端には青函トンネル記念館があります。ケーブルカーで海面下140m下の坑道見学では、トンネルは複雑な構造で「よく昭和の時代に、こんなもの

を作ったな！」と感動しました。

一方、半島沿いの道には、人の住まなくなった昭和の建物がたくさん目に付きまです。泊まった温泉街も、半数の旅館が閉業して、時が昭和で止まったまの街並みでした。半島の町々について検索すると、どちらの半島も人口減少率は高く、人口がどんどん減っているようです。半島の海岸沿いをドライブしながら、変化していく集落を見て、いろいろ考えてしまいました。

**精神科医の思うこと**

P124~

## 団 遊

自宅近くに、美容室というよりは理容室に近い素朴なカットハウスができた。

一度行ってみようと、散歩がてらフラリと出掛けた。20分ほど歩いてドアを開けると予約の有無を聞かれた。「待ちますよ」と言ったのだが、予約が基本らしく、諦めて帰路についた。

仕事はアポだらけだけど、普段の生活には極力「予約」を入れたくないと思っている。そんな中「街外れの理容室までが予約か」と思ってしまう。これはまったく個人の見解だけれど、予約をすると、「行きたい店」や「行きたい場所」が「行かなければいけない店」や「行かなければいけない場所」になる気がして、多くの場合、行く気が失せる。予約した時が一番行きたいときで、当日になると、面倒になることが多い。

先日、有志メンバーたちで主宰するとある集いの誘いに「行けたら行く」と回答した人がいて、「それなら来てもらわなくていい」という流れになった。準備にそれほど寄与できていないことへの遠慮もあり、強く意見はできなかったが、個人的には「それ分かるなあ」と思った。朝起きて、行きたいと思ったら行くし、そうでなかったら行かない。そんな風には選べるのは、もはや散歩くらいなのではないだろうか(散歩も歩数目標を決めている人もいる)。

「仕事終わりの一杯」なんかも、前々に決めた会食は、結構な確率で当日面倒になる。道でばったり再開したとか、たまたま遅くまで仕事をしていた仲間と、などと思いつきのように行った先での一杯ほど格別なものはない。二度とない貴重な時間

を共有できている気がして、とても嬉しい。  
人生の楽しみは偶発性にあると思うんだけど、予約社会は大変だ。

### 団遊の脱線的経営言論

P 30 ~

## 村本 邦子

楽しすぎた 1 年間のサバティカルが終わり、4 月から職場に戻ると、責任の重い仕事や頭を抱える手のかかる仕事など、いろいろと負担も増えた。が、1 年をあまりに楽しく過ごしたせいなのか、何を隠そう、実は仕事が楽しくてたまらない。パワーあまりすぎて前のめりになり、頭がいつも忙しく、朝早くから眼が覚めてしまって睡眠不足気味だ。自分でもちょっとこれやばいなとブレーキかけるよう努力中。

### 周辺からの記憶

#### —東日本大震災家族応援プロジェクト—

P98 ~

## 國友 万裕

今号からいよいよ連載をリニューアルしました。

基本的な部分は変わらないのですが、これから 60 代なので、身体性や老い、食事やファッション、生活やスポーツを中心に歳を重ねていく様子を綴っていきたくので、あえて連載のタイトルを変えました。

ちょっと宣伝になりますが、前回まで連載していた『男は痛い！』に関しては、新刊『インセル時代の男たち 弱者男性で読む日米映画』で、所々抜粋しています。これまで連載に関心があって読んでくださっていた人は、ぜひ、本を読んで欲しいです。まだ値段も発売日も決まっていませんが、もうすぐ出ます。

これからもご支援ください！

### スポーツおじいさんになりたい！

P69 ~

## 西川 友理

この春から、大阪キリスト教短期大学で働かせていただくことになりました。新しい環境でも、保育士・幼稚園教諭の養成をさせていただいています。新たな繋がりが出来たり、新たな活動が生まれたり、その一方で長らく続けさせていただいていることにもゆったりとした変化が生まれ、今年

度は毎月のように小さな挑戦がある年です。

頑張らにやあ、と張り切って約 1 か月、やらかしました、久々の 9 度近い発熱です。幸い、コロナでもインフルでもありませんでした。「のどが真っ赤になって、微熱が 1 週間くらい続くからね。2 週間くらい前から、こういうの流行ってるんだよねー。」と言うお医者さん。「はあ、で、結局何なんですか、この病気」と聞くと、「わかんない」とのこと。「なんかねえ、今までの感染症の常識が通じなくなってる。昔は冬場に流行っていたインフルが、今は一年中見受けられるし、夏場のプール熱が、冬場にも頻繁に見られる。一つはコロナの影響で、昔なら受診しなかった体調不良でも、みんなすぐに受診するようになってきたから、今まで見えてなかった疾患が見えてきたってことかもしれない。とにかく、コロナ以降、あらゆる感染症の常識が変化して、僕たち医者もついていけないところがあるんだよねえ。」とのこと。とりあえずロキソニン出しとくから、様子見てねーと言われ、見事に 1 週間ほどで微熱が収まりました。社会のあり方が変わると、思わぬところの様相も変わります。自分の体や心と仲良くしながら、変化の多い一年を乗り越えていきたいと思います。

### 福祉系対人援助職養成の

#### 現場から

P58 ~

## 竹中 尚文

4 月の初旬にお寺の庫裏の天井裏にアライグマが住み始めました。周囲の人たちに「絶対に手を出してはいけない。大怪我をするよ」と警告を受けました。大声で、早く出て行くようにいうのですが、いつの間にか子どもを産みました。天井裏をノッシノッシと我が物顔で歩く足音は、連れ合いが廊下を歩く音が変わりません。私は連れ合いと間違えて天井越しにアライグマに話しかけるということが度々あります。アライグマにとっても居心地のいい我が家のようなです。子どもたちが自立をすると、出て行ってくれるでしょう。切に子どもの自立を願っています。

### 路上生活者の個人史

P67 ~

## 坂口 伊都

最近、字を見るのが辛い。それは、老眼だから。カードの番号を記入してくださいと書かれていても、文字が小さすぎて見えない。拡大鏡で確かめて、PC 画面を見ると歪んで見えて面倒くさい。で、はまったのがオーディブル。いろいろな人が「いいよ」というので、年末休みから始めてみました。

聞いていられない人の声もあるけど、好きな語りの声は、世界が広がって没入できます。『スピノザの診察』が面白くて、夏川草介氏の作品を探したら、『神様のカルテ』シリーズがありました。内科医の一止さんが夏目漱石の『草枕』を白衣のポケットに入れている変人医師という設定で、シリーズの合間に『草枕』を聞いて、満足度が上がりました。文章で読んでも頭に入ってこない時がありますが、オーディブルは語りが心地いいと聞き入ることができます。そして、荷物にならないのがこれまた嬉しい。いい時代だなあと思いつつ今日も聞き入っています。

### 立場が変わると何が見える

P93 ~



## 河岸 由里子

### 【引きこもり青年との再会】

調子の波があって、1 年ほど札幌でのデートが延期になっていた。その間は zoom で面談を続けていた。面談と言っても病院でカウンセリングを受けているので、30 分くらいの雑談だけである。画面を通じていた彼は、相変わらずやや太り気味の丸顔で、変化はわからなかったが、今日 1 年ぶりに会ってみたら、すっかりほっそりして、眼鏡も金縁から黒っぽい縁のものに変え、髪も少し格好よくまとめていて、素敵な青年になっていた。画面だと太って見えるのだなと感じた。

また、今日は13時半に待ち合わせだったが10時半くらいにメールで、「今日は行けそうですから予定通りで」と連絡までくれた。今までは、私が着いてから遅れてくるので、来るのか来ないのかとやきもきしたものだ。今日は私より少し早めに来ていて、私も時間前についたのだが、似ているなど思いつつあまりにも違って見えたので気づくのにかかってしまった。

以前は出来なかったことが少しずつできるようになってきたという。自分で床屋さん予約を入れるとか、病院予約を入れる、病院受診に電車に乗って出かける等々。こうしたことが自分一人の力でできるようになった。今年で29歳。15の時から引きこもって、そのまま時間が止まっていたが、少しずつ大人に近づいてきている。就職についても考え、通信制大学に行くか、働くかなども考えている。まずはデイケアに通って生活リズムを整え、その後就労について考えていこうと伝えた。焦るところで失敗する。ゆっくりでよい。病氣も持っているのだから、障害者就労でも良い。勉強したいならそれも良い。広く、ゆったりと考えよう。30分ほど喫茶店で話し、その後駅の近くで立ち話が30分くらい。立ち話の方が盛り上がるのが面白かった。面と向かうと緊張してしまうのだろう。1時間余り付き合っただけで別れた。今回同様、自分からまた札幌で会いたいと言ってくれるのを待とう。必要ならサポステに案内するのもありかな？そんなことも考えながら、ちょっとうれしい1時間だった。

公認心理師・臨床心理士・北海道  
かうんせりんぐるむ がかし 主宰

ああ、相談業務  
P62～  
先人の知恵から  
P139～

## 大谷 多加志

前号が発刊されてすぐの3月末に、家族で台湾に出かけました。いろいろ面白く思ったのですが、その中でも印象に残ったのが、建物の外観の雑多さです。古い建物はほとんどベランダがないのですが、各家庭が独自に出窓のようなものを設置しており、植木鉢がおける程度のものから、エアコンの室外機の設置スペースや、果

ては小型のベランダを付けて洗濯物を干している家庭まで、その形態は本当にさまざまです。その分、見た目は悪いというか不規則的で雑多なのですが、なんというか、生きていくエネルギーのようなものを感じました(出窓の植木鉢から水が落ちてきて慌てて避ける、ということもありました)。歩道へのバイクの駐車や、路上喫煙などもアリで、何となく20-30年くらい前の日本の街中のような風景でした。帰国した日本は、マンションの外観も整然としていて、道にもゴミはなく、とても清潔です。一方で、「誰かに迷惑にならないように」設計された日本の町はとても弱々しく見え、静かに日本が衰退していついっしょに重なって見えました。そんなことを言っている間に、4月には台湾でも地震があり、建物が倒壊する事態もありました。付け足されたベランダは耐震性の問題もありそうですし、実際、台湾でも新しく建造中のマンションは、日本と同じく予めベランダがある、整然とした外観をしていました。台湾も、ひょっとすると日本と同じ道に入りつつあるのかもしれない…と思いつつ、それぞれの国の10年後、20年後に思いを巡らせています。



発達検査と対人援助学  
P86～

## 鶴谷 圭一

少子化の波を顕著に受けています。今年度は弊園を含め「幼稚園、幼稚園型認定こども園」という3歳以降の子どもたちを対象とした幼児施設の園児はぐっと減りました。幼保連携型こども園や保育園は、まだ大きな波は受けていませんが、地方では待機児童も解消し0歳児の入園児数がじわじわと減っています。園児は少ないのに、保育者の人手は必要

になってきています。手のかかる子どもが増えているからです。困っている子どもが増えているから、個々に丁寧に育てていく必要があります。子どもは動物と違って本能では育てられないんですよ、それを伝えていかなくてはならないこの頃です。

原町幼稚園 <http://www.haramachi-ki.jp>

メール [office@haramachi-ki.jp](mailto:office@haramachi-ki.jp)

インスタ haramachi.k

ツイッター haramachikinder

幼稚園の現場から  
P55～

## 中村 正

定年退職は思ったよりも解放感がある。大学というところはそれほど縛りがあったのだろうか。定期的な会議や義務がなくなくなるということが解放感の大もとにあるのだが、もちろんそれなりに仕事をしてきたという満足感や充足感もある。くわえて、いままでやってきたことを事業化するための一般社団法人 UNLEARN を創業したこともあり、ワクワク感が強い。特任教授なのであいかわらずこの創業は兼業であるのだが、本業と区別がつかないくらい一体化しているのでやりたいことができるという感じが強い。それと単に暴力や男性のことを対象にした事業をやるということだけではなく、カフェと協働することになったのでその高揚感が大きい。若い人たちやこれまでのネットワークがそうした事業に活かしていることも嬉しいことだ。今年一年は、事業予算の確保や拠点としての事務所作りに精を出す。

臨床社会学の方法  
P20～

## 団 士郎

病院のギャラリーで掛軸漫画展を開きたいと打診された。依頼者の希望する作品を三作発送しておいたが、予定日になっても展示の報告がない。問い合わせたら、内容が政治的だというので一日で撤回になったという。

面白いことが起きるものだ。確かに作品が時代の政策傾向に批判的には描かれている。しかしその見解が展示を拒否されるようなたいした中身とは思えない。「規制緩和」と題した当たり前の疑問について

扱ったものだ。

過剰に自主規制しているのか、ただただ横暴なだけの管理者なのか？展示撤収・中止など、作品の中身よりもその経過が大問題だ！などと言う人もいて、そういう所もあるなあとは思った。

しかし主張のためにマンガを描いているわけでもないで、このような巻き込まれ型のトラブルはうっとうしい。面倒な輩に私の時間に侵入されるのはゴメンだなあ。

### 晩年 D・A・N 通信⑦

P39~

## 中島 弘美

家族療法の相談機関を退職し、独立して仕事をしはじめたころ、働く女性のネットワークに入会した。この会は、20代から80代の女性が、ゆるやかに支えあい、学びあう、よこのつながりの会で、今年40周年を迎える。支援という面から考えると対人援助学会と共通点が多いように感じる。いつか、みなさんに、ご紹介できるといいなあ、交流ができないかなあと細々と思っている。

### カウンセリングのお作法

P36~

## 藤 信子

纏向遺跡に出かけた。昨秋行った吉野ヶ里が頭にあっただけで、なんとなく拍子抜けした感じ。卑弥呼の墓は吉野ヶ里か箸墓か、と言われていたみたいだから、整備されていると思っていた。箸墓古墳は、そばを歩いたけれど、確かに大きい。でも宮内庁の管轄だから立ち入れない。入ってもいいと言われても、鬱蒼としている木々を見ると、ためらうだろう。吉野ヶ里に広大な遺跡の建築群を立てることできたのは、もともと国交省が工業団地を造る予定のところ、遺跡が出てきたということがあったからだそうである。纏向のほうは、古墳が沢山あるようだけれど、人家があり畑があるようなところだから、遺跡が出たと言っても、大規模な公園のようににはできないだろう。近くの桜井市立埋蔵文化財センターの方は親切で、定休日だったにもかかわらず、たまたま行き合わせた、我々ともう一組のために、センターを開けてくださった。

### 解放の心理学へ

P33~

## 篠原 ユキオ

### お気に入りのフレーズ

NHKの朝ドラ『虎に翼』が面白い。これを見ながら若い頃を思い出しているいろいろ反省することもある。

このドラマの中で度々主人公が使うフレーズに『はて』というのがある。相手の発言や行動に疑問を感じたときに使うのだが、これが反抗的でも威圧的でもなく、とても自然にふとした疑問を発する言葉として心地良い。

それどころか、言った方には僅かながらの優位性も感じてしまうのが痛快である。かと言って言われた方も反発を感じる事は少なく、お互いに意見を交換する雰囲気も醸し出す。

落語『はてなの茶碗』はひび割れも無いのにお茶が漏れてしまう安物の茶碗を、趣味人が面白がったのがきっかけでどんどん高価な値が付くという噺なのだが、この『はてな』も『はて』の同義語である。

さまざまなハラスメントや対人トラブルが連日のようにマスコミを賑わしているが、この言葉は上手く使えるのではないかと思ったりする。これは今年の流行語大賞の有力候補ではないかな。



HITOKOMART

P196~

## 鶴野 祐介

最近、絵本カフェを訪ねるのがマイブームになっています。先日は大徳寺の近くにある絵本カフェ Mebae に行ってきました。くつろいだ空間と美味しいランチ、ぜひお勧めです。

### うたかたりの対人援助学

P146~

## 寺田 弘志

思うツボ

接骨院で患者さんに施術中のことです。

「ここが痛いということは、こっちも痛いんですか？」

「いたたた…わかるんですかー…先生の思うツボですね」

「えー、うまいこと言いますね。30年近くやって、思うツボと言われたのは初めてです」

「へたに触ると、あっちもこっちも痛いですよー」

「大丈夫ですよ。お任せください。ところで「思うツボ」というネタ、使わせてもらっていいですか？」

「かまいませんよ」

「ちょうど対人援助学マガジンに書くネタがなかったんで助かります。ありがとうございます」

本文では「歯科医院に心理学も接骨院も入った」を書きました。

### 接骨院に心理学を入れてみた

P161~

## 古川 秀明

スクールカウンセラーに限らず、どんな職業でも理不尽な対応を受け、続けられなくなる可能性はある。その時に抵抗するもよし、すがりつくもよし、去ってしまうのもよし。いずれの道を選ぶにしてもそんな底の時に絶望しないころの訓練が必要かもしれない。私は長く般若心経に支えられている。

### 講演会 & ライブな日々

P89~

## 山下 桂永子

この春はバタバタとしているうちにすっかり5月も下旬になり、今年もあと半分になりーちだと思わずとぞっとするようなびっくりするような。そして昨日、見事に完全なるぎっくり腰になりました。のたうちながら今朝を迎え、何とかたどりついた職場で壁や机をつたいながら牛歩の歩みで一步ずつ進む私に職場のみなさんがそれぞれに「ロキソニンいる？」「私はボルタレンあるよー」「家が近いから昼休みにコルセット取りにいったあげる！」「足を冷やしちゃだめって整形外科の先生言ってたよ！」「寝るしかないよね。今日は出張なの？かわいそうに」などなど温かいお言葉やお恵みをくださるのです。腰痛コミュニティの結束力半端ない。そして我が職場の腰痛率も

半端ないと思った次第です。特に内容とは関係ありませんが読んでいただければ幸いです。

## 心理コーディネーターになるために P135～

### 脇野 千恵

予定通り、4月からフリーな生活が始まった。どこに所属することもなく、自分でやりたい仕事ができることを楽しみたいと思っている。退職となり雇用保険解除のためハローワークに数回通った。今はweb上での求職システムが充実していて、ハローワークに朝早くから並ぶとか混雑はほとんどない。対応も早くスムーズ、社会は変化している。面接で求職意欲があるかと問われると、曖昧に「うんまあ…」と答えておいた。有難いことに、失業給付金というものもらえるとのこと。私の年齢を確認し、「ただ後期高齢者ですので、これ一回きりです」そうだろうな、もったいな話だ。もらえるだけでも有難い。早速求人の新着情報が、頻繁にメール配信されてくる。興味深く求職欄を除くと、65歳以上でも元気に働いておられます！などのメッセージが目立つ。一番多いのは、介護職。次にメンテナンス業、教育では学童・幼稚園・小学校などの補助員。高校の部活動の補助員には少し興味を持ったが、剣道、書道、ダンスなどの資格が必携となると、無理だなあとその気もないのに呟く。求人欄は社会の鏡のよう。聞いてはいたが、仕事は溢れているのに人が集まらない現実。改めてそんな社会の状況を垣間見るようになった。

## こころ日記「ぼちぼち」 P202～

### 岡崎 正明

マガジンでいつか書いたかもしれないが、私の実家は広島で「和食のお食事処」をやっている。ちなみに「お食事処」というのは、私の中で勝手に「食堂」と「料亭」のちょうど中間くらいの形態のお店のことである。

その店を約50年前に始めた私の父は、商売のことや地域の商店街や商工会のことなど、いろいろと活動的にやっていた男であったが、病を得て1年以上前から入院生活をしている。店は従業員さんが切り

盛りしてくれており問題ないが、息子としてアレコレ手続きだの、用事だのと動き回ることもあり、団編集長の言う「家族にはいろいろなことが起きる」を体感させてもらっている。

その流れでこの度、ひょんなことから父の自伝小説を出版する方向で話が進んでおり、父の書いたものに私が手を加えたり、修正したりと結構忙しく準備をしている。今年中に父との共著で出版予定で、まさかこんな形で人生初の出版を経験するとは思ってもいなかった。つくづく家族とはいろいろなことが起きるなあと思う。

もし万が一興味を持ってしまった方は、インスタグラムで「おか半総本店」と検索いただくと、出版に向けた動きが確認できたりする。

## 役場の対人援助論 P79～

### 來須 真紀

4月からめでたく職場復帰いたしました。半年前、まさか自分が、体力と気力だけが自慢の私が、バタンと倒れるなんて…。「人生には3つの坂があります。」ではないのですが、「まさかまさか」の出来事でした。とはいえ、この病休中の半年は、今までノンストップで、人生を突っ走ってきた自分を見つめ、家族と向かい合う貴重な時間となりました。この話は、また今度ということで、4月からは、ケースワーカーとして、務めることになりました。がんばります！！と言いたいところですが、また、バタンと倒れないようにいろいろな方にお聞きしながら、ポチポチとやっていきたいと思えます。

## 教室の窓から P240～



### 山口 洋典

「ホームランを数えてるうちは四番にはなれないぞ。」あだち充先生の作品『タッチ』で、主人公の上杉達也(および上杉和也)のライバル、新田明夫が県大会の決勝で

チームメイト(2年生の大熊)に向かって言う言葉です。手元にある単行本(少年サンデーコミックスワイド版)では、第10巻の第18話「10割だよ」に登場するセリフです。この数ヶ月のあいだ、私はこのセリフをよく想い起こしました。

1月27日に令和6年能登半島地震の支援に現地を訪れるようになってから、5月までに第12回の訪問を重ねてきました。時折「次で何回目ですか？」そんな問いかけをいただくこともあり、そんなときに冒頭のセリフが頭をよぎります。「数えているうちは支援者にはなれない」と断言できるだけの支援を重ねられているかは定かではありませんが、少なくとも支援者側が前のめりになって被災された方々の思いを踏みにじってしまうことは避けねば、と心しております。そんななか、共同研究者である渥美公秀先生らと新潟県中越地震で大きな被害を受けた小千谷市塩谷集落には2019年の時点で288泊以上にわたってフィールドワークをしてきた記録があり、この10月23日で20年を迎える、ということを見ると、忘れ去ることのできない悲しみに思いを馳せ続けることの大切さを改めて感じ入る今日この頃です。

## PBLの風と土 P155～

### 千葉 晃央

30年ぶりに「ぱびい」として時々活動している。学生時代、キャンプリーダーをしていた。その活動中は、日常との区切りの意味もあるのだろう、全員がキャンプネームをつけていた。当時から、老けていたのでオジサンぽい、オレ。じゃあ、せめてかわいくして…と「ぱびい」というキャンプネームをいただいた。現在、ぱびいは「森のようちえん」という事業のスタッフをしている。目的は、自然の中で季節を感じながらのびのびと活動して、五感を刺激するプログラムを行うこと。地域の子育てを豊かにして、家ではできない体験を同じ子育てをしている親子と一緒に共有しながら体験してもらうことを目指しています。参加するのは20組の親子。申し込みが多くて、抽選をする状況。子どもは幼稚園、保育園世代の子どもをメインに、そのきょうだいの乳児から小学生まで。先月は、手のかたで家族の旗をつくり、草木をつかったた

たき染めでエコバッグ制作、マシュマロやバームクーヘンを焼き、食べました。バームクーヘンをくるくる回すのは大変！今回は、カレー作り、フィンガーペインティング、おやつはポップコーン作り。ポップコーンの味付けで子どもたちにも一番人気があるのは「ほりにし」とカレー粉のブレンド。「ほりにし」は私は知らなかったけど確かにおいしい。クローズドグループで3回連続なので、関係が深まり、子どもたちも、保護者の方々もつながる。

他にも、同じようなプログラムで、参加者をシングルマザー親子限定のこういった事業もあるそう。そこでは、すぐ参加者同士がつながり、ライングループが作られ、日常にそのコミュニティが追加されるそう。火起こし、火の番は人気で、火を見ているだけで癒されるお父さんたち続出！ここでも、いろんな家族の姿に出会う。次回も無事に役割を果たしたい。

#### 家族支援と対人援助 **ちばっち**

[chibachi@f2.dion.ne.jp](mailto:chibachi@f2.dion.ne.jp)

090-9277-5049

障害者福祉援助塾

P16~



#### 荒木 晃子

原稿が遅々として進まない。本篇で伝えたいこと、知ってほしいこと、協力してほしいことがたくさんありすぎて、うまく表現できず苦しい時がある。そこに、無力感が加わると全く身動きが取れなくなる。確かに体力は衰えたものの、無気力ではないので更にたちが悪い。

おもうに、最近向き合っている“子どもとの家族形成に問題を抱えるあらたな当事者性”に「圧倒されている」感は否めない。そこ(彼ら)には、不妊心理に通ずるものがあることは確認できている。しかし、“子どもとの家族形成の問題”より以前から、

自分自身に起きている「心と体の不条理」を受け入れられないことに端を発した「尽きることのない怒り、憤り、不満、欠損感」は不妊心理の比ではないように感じるのは私だけだろうか。

かつて自分にあった「当事者であるが故に尽きることの無い怒り、憤り、不満、欠損感」は、近ごろ影を潜めている。今も昔も変わることなく、不妊心理の援助者として、また家族形成支援の研究者として私の原動力となっていることは疑う余地もない。以前と異なるのは、普段の日々に、緩やかで満ち足りた時間を過ごすことが増えたこと。性格も多少まーるくなったかなと感じることもある。もしかすると、これは「老い」の効果なのだろうか。であれば、喜んで受け入れよう。

#### 生殖医療と家族援助

p 252~

#### 原田 希

大阪に住む姪っ子たちが思春期に入り、気になる出来事が起こってきたタイミングでたまたま見た番組。信頼できる人にひつついて不安を和らげ安心したい本能的欲求＝アタッチメントについて詳しく知りました。姪っ子たちがそう出来る人が多方面に居ることが大事だな。北海道で大きく手を広げていつでもおいで！と言ってあげられるように、と思う叔母です。アタッチメントでいうと、牛も同じで、初めて搾る時は体の一部をピタッとくっつけ、だいじょうぶよ、と言いながら作業します。傍目には蹴られないかな？と心配な距離ですが、妙に距離を取る方が牛に不安感を与えます。牛の場合はベタベタに慣れすぎてもダメなのですが、ほど良くお互いが安心できる心地いい距離感。どの世界でも大事ですね。

#### 原田牧場Note

P184~

#### 見野 大介

小学校デビューした息子が突然、夜は一人で寝ると言い出して寝るようになったため、夜の残業タイムにも良い変化が。子供の成長の早さに驚きと感謝を覚える今日この頃です。

#### ハチドリの器

P4

#### 柳 たかを

本誌に連載させていただいてきたストーリー4コマ「やぶにらみ日記」も前号(第56号)で終了、今号はエピローグとして青年になってから経験した我がニューヨーク体験を2回に分けてご覧いただきたいと思えます。

ところで「将来やりたい職業が見つからない」と悩みをもらす少なくない数の子どもの声を耳にします。私がかつて勤務した芸大マンガコースを志望して入学して来た若者は、マンガ家を目指すというより、「好きなマンガキャラクターを描いて4年間を過ごしたい」、卒業後は出来ればその経験を活かせる仕事に就きたいという願いを抱いている人が多かったです。卒業生の中には見事に夢を実現しゲーム制作会社に就職できたり、東京の有名出版社の漫画雑誌にデビュー作品が掲載された人もいましたが、実力があつたとはいえほんの一握りの卒業生がつかめたラッキーな人生切符。その親御さん達も可愛い我が子の独り立ちを懸命に応援し、安くない入学費・学費を工面された。「マンガなど描いてうちの子が将来的に食べていけるのか」、親としては他にやりたいことが見つからない我が子が「マンガなら好きなキャラクターを描いて過ごせるなら」と漏らす声にすがってみよう、そんな思いの家族が多かったように…私自身を振り返ってみると、幼少期から将来の仕事は“マンガ家”しか考えていなかった。高校生のとき、同級生から「おまえはいいなあ 将来やりたい事が決まってる…」と言われました。「一生好きなことをしたい」それが望みで、それでお金を稼ぎたいとかの欲はなかった。人生に成功の人生・失敗の人生があるのかどうか、個人的には好きでもないことをやり続ける人生は失敗の生き方かもと思えます。コツは「一つだけつかんで離さず 他は捨てる」、それなら誰にでも出来るのではないのでしょうか。

#### 思い出ほろほろメモ

P127~

#### 小池 英梨子

これは、長い長い言い訳です。今回は短信のみで休載させていただきます。

「昨日の晩に、マンションの2階のベラ

ンダから飼い猫が逃げてしまった」という  
捜索依頼がありました。現場に伺って痕  
跡を探すと、マンションのフェンスとブロッ  
ク塀の間に、猫の毛が付着していました。  
毛の付着位置から、裏の会社のバックヤ  
ードに入った事が分かりました。許可を得  
て入らせてもらおうと、側溝の中、タイヤの  
下に迷子の猫さんを発見することができま  
した。結果、猫さんは無事に保護するこ  
うでしたが、自分の右手首をガツ  
ツリ噛まれてしまい、こちらは負傷(笑)。  
まあ、よくあることだと放置していたところ、  
めちゃくちゃ腫れてキーボードを打つのが  
激痛…。いつも締め切りギリギリにしか書  
き始めないのが悪いんですが、そんなわ  
けで、今回は休載です。皆さん、猫に引っ  
搔かれても大した事はありませんが、噛ま  
れると、ばい菌の注射をされるような物な  
ので、腫れたら内科に行ってお薬処方し  
てもらいましょう。



そうだ、猫に聞いてみよう  
休載

# 付け加えることができる価値は何か？

～ 親族が協力して、みんなで子育て ～

## 6

千葉 晃央

2023年11月にオーストラリア、ブリスベンの児童福祉に関連する機関で学ぶスタディツアーに参加しました。その中で、日本でいうと児童相談所にあたるチャイルド・セーフティ・センターという機関を訪問しました。この研修でも、伝統的にこの地で暮らしてきた方々への敬意を示してから始まりました。今回も聞き書きを文字に起こしたものです。ご理解の上でお読みください。

### チャイルド・セーフティとは何か？

チャイルド・セーフティ・センターとは、1つは州による児童保護を業務としていません。政府が指定したコミュニティのエイジェンシーへの資金提供、介入を行っています。「児童保護はみんなに関連することですよ！」をスローガンにしています。2つ目にコミュニティを担当する組織として、緊急性のあるケースへの対応を行っていま

す。3つめに児童の保護です。子どもにリスクがあるという疑いが生じた場合、聞き取りに行きます。この聞き取りに関しても、地域の組織に依頼するか、自分たちが行くのか判断します。深刻度、履歴で、どこの誰が行くかを決めています。行った時には調査とアセスメントを担当します。



### 支援の透明性を確保する

調査の1つは虐待の調査です。こうした



調査の場合、家族はショックを受けることもあります。最初に相手を尊重し、こうした理由での家庭訪問に関して、透明性を保つよう努めます。現状に関して、サポートをする姿勢があることを相手に伝え、示していくことから始めます。

調査では、学校で子どもと面談をして、家で家族と面談もします。犯罪に関連していたら、警察と一緒に調査を行います。子どもがアボリジニ、トレス諸島等のルーツがあれば同じルーツを持つ担当者につながります。複雑な状況なら、機関の責任者が行くこともあります。その時も、家を訪問して、学校にも行って、警察からも情報を集めています。

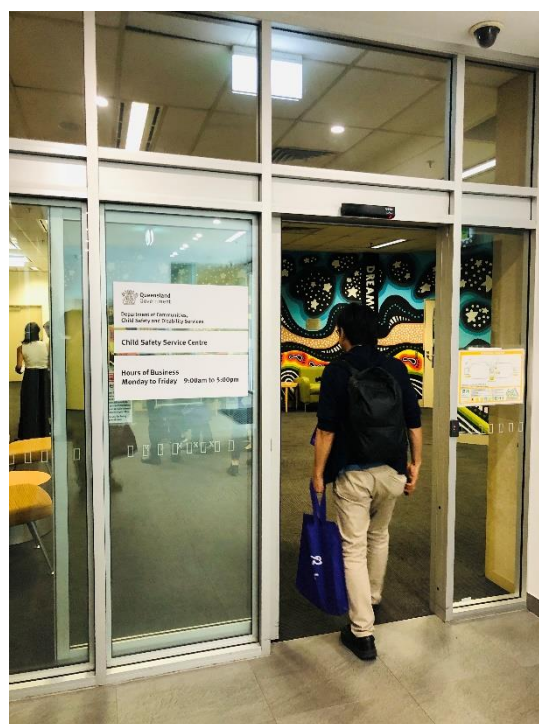
## 保護者に

### リスクを低減する意思があるか

こうした懸念がある時には、事実かどうか？まずは判断します。約65%が虐待の事実の立証は不可能です。つまり、「虐待の懸念が公的には特定できなかった」ということがあるということです。

一方で、立証できることもあります。その結果、他のサービスにリファーすることもあります。実際に加えられた危害としては、どんなことが起こったのか？について調べ、確認のために、法的に認定された団体をお願いすることもあります。

こうした事案では、「保護者がリスクを低減させる意思がない」という時がリスクです。保護者が子どもを守るように動けるか



どうか？シンプルにいうと、子どもを守る意思があるといえるかどうか？です。こうしたケースの場合、支援の終了も、関与継続も、裁判所の命令で決まります。

### パーマネンシーの確保

社会的養護の環境を永続的に保つことも、生活の安定の視点から重要になるときもあります。そこでは、親族里親も優先して行います。約60%の子どもは、親族によって養護されています。施設入所は少ないです。

こうした保護を受けている人の半分は、先住民にルーツを持つ方々です。先住民は約6万5000年の歴史を持つ文化があります。先住民の文化では、刑務所、児童保護という仕組みはありませんでした。すべてコミュニティで行われてきたのです。その先住民が現在トラウマを抱え苦しんでいるの

は悲しいことです。

## つながりを持ち続ける

何らかの状況があって、家族と過ごせなくても、つながりを持ち続けることは重要です。そのなかで、「自分はどこからきたのか？」など、自分の家族について分かっているかどうかが大切となってきます。

先住民族の方に対しては、オーストラリアの(先住民に対する侵略の)歴史を考えると、法的にサポートできるようにしなくてはなりません。児童保護法のなかでも、先住民と協働していかななくてはならないのです。先住民の方々のこれまでの歴史的経過を考えると、家族とのつながりの面、文化とのつながりの面からも現状では完璧な制度ではありません。支援者も、先住民の方々に謙虚にかかわっていく必要があります。そして、かかわりを継続しなくてはなりません。



## 家族の下で成長する権利の保障

また予防も欠かせません。家族の下で成長する権利の保障が必要です。子どもがどこ出身なのか、地元とつなげる必要があります。現在は、家族とのつながりを第一に考えています。

つまり、支援のプランは、まず「家族(親族)」と暮らす環境を実現することが第一優先で検討します。その次に、同じ先住民のケアラーです。そして、最後に非先住民によるケアを選択するという優先順位を明確にしています。自分のルーツ、自分たちの文化につながるからこそ、権利の保障です。

## オーストラリアから日本をみて

日本をみていると、里親制度が長い時間をかけて、変化をして充実していく「旅」のようなものが始まったところのように思います。私たちが思うのは、「文化」から始めた方がいいということです。

日本には「もったいない」文化もありますし、「金継ぎ」のように壊れたものを修復し、再度つないで使っていく考えがあって、素晴らしいと感じています。こういった考え方は、家族が人生を歩んでいく姿、事情がある子どもが成長していく経過にも重ねることができます。

オーストラリアというところは、イギリスの植民地となり、先住民の文化が奪われ、その中で成長した世代がいます。その方々をストールン・ジェネレーションといいます。本来の保護者から子どもたちを奪って、自分たち侵略者側がうまく育てられると当時は思っていたのです。その結果、言語、文

化、家族も先住民の方々は失いました。

に、そしてともに活動し、仕事をしていくことが大切です。

## 実親のところで支援を実施すべき

重要なことは3つです。1つ目は、思いをはせて、親切に接し、公平な状況を作ることです。2つ目は、必要な子どもに対して、社



会的養護を届け、またその政策実施過程に巻き込みながら、政策を前進させていく。これを社会がしていかななくてはなりません。3つ目は、家族・親族によるケアを大切にすることです。見知らぬ人によるサポートは優先順位では最後でなくてはなりません。実親に留めた上で支援を行っていくべきです。

そのためには、家族に初期の段階で介入を行い、子どもが引き離される前の段階に、もっと投資をすべきです。また、家族から離れたとしても、できる限り早く家族に返すことも忘れてはいけません。

つまりは、すべての人を同じように取り扱うということです。日本がすべきことは、自分の国にいる民族に対して向き合うことです。民族によっては、「リスク」の考え方も異なります。ニュートラルな立場に立って接していかななくてはなりません。お互い

## 日本の国内にも文化が様々ある

日本にも民族や地域ごとに文化があり、その中で子育てを協働しながら、ペアレンティングをしてきた文化があると思います。大型の福祉施設ができたのは、貧困と戦争のせいです。いわゆる西洋式のフォスターケアが形成されてきたのです。

文化に合わせて、侵略的ではないやり方で行っていく必要があります。それを自分たちの民族が責任をもってしていくことが大切です。それは、1つのアプローチではないはずです。



# 臨床社会学の方法

## (45) 共同親権と男親塾

中村 正

### 1. 共同親権制度の導入が決まる

共同親権に関わる民法が改正された。2024年4月16日、衆議院本会議で賛成多数で可決された。さらに、5月17日、参議院本会議でも採決が行われ、可決・成立した。

共同親権については賛否両論があり、世論は割れている。今次改正は、離婚後に父と母のどちらか一方が子どもの親権を持つ現行の単独親権に加え、父と母、双方に親権を認める共同親権を導入する内容となった。争点となっていたのはDVや虐待が背後にある場合である。DVと子どもへの虐待のおそれがある場合は裁判所が単独親権にしなければならないとされた。離婚後、父と母は協議によって共同親権か単独親権かを決め合意できないことがある場合は家庭裁判所が判断することになる。また法務省は、父と母が話し合うことができない状態となり、共同で子どもの養育を行うことが困難な場合も単独親権になる可能性があるとする。

すでに離婚している親やその子どもが、共同親権を裁判所に申し立てることも可能である。その際裁判所は、DVの有無や養育費の状況などこれまでの経緯を調べた上で、子どもの利益のために共同親権が必要かどうかについて判断することになる。

私はこの改正にコメントを求められ、「共同親

権、大事なのは子の利益 DV見逃す懸念、専門職配置を、家族と関わる支援者は」と題した記事のなかで発言した(『朝日新聞』2024年5月18日朝刊)。以下は記事の一部で、私の発言部分を中心とした引用である。

#### ■「加害者変える講座、対策に組み込んで」

改正法をめぐっては、夫婦間の暴力(DV)が継続することへの懸念が大きな論点となった。日本では、DVがある場合、被害者が子連れで離婚し、単独親権を得ることが事実上の避難ともとらえられてきた。改正法は、DVや、そのおそれがあれば家庭裁判所が単独親権にすると定めるが、精神的暴力など見えにくいDVを家裁が見逃し、共同親権になることを懸念する声は根強い。

内閣府の男女共同参画会議「女性に対する暴力に関する専門調査会」委員で立命館大特任教授の中村正さんは、「共同親権が一定程度機能するには、当事者へのサポート態勢が整うのが前提。DVの形態は多様なため、評価にあたっては精神科の診断だけでなく、家族関係の親密さなどを分析する心理学的なアプローチも含めた客観的な指標づくりが必要」と話す。

具体的には、虐待の一時保護などで用いられている「リスクアセスメント」の手法を導入し、調査官に加え、ソーシャルワークのできる専門職を家裁に配置することが必要という。

日本のDV対策は、被害者の一時保護や、引越し

先の住所の秘匿を行政が支援する措置など、「逃げる」ことに力点を置く。そうした現状に対し、改正法の付帯決議では、加害者プログラムの実施の推進が盛り込まれた。

中村さんは、自治体と連携し、関西で加害者プログラムを運営している。DVや虐待の加害者同士が体験を語り合い、暴力で支配するという誤った考え方を変えていく。受講によって、元配偶者と子育ての協力関係を築ける人も2〜3割はいるという。「親は、子どもの将来のモデルになる。プログラムを受講して変わっていく姿は、子どもにもいい影響を及ぼす」。ただ、「家裁で、受講を免罪符に使う加害者には注意する必要がある」とも釘を刺す。

改正法施行は公布から2年以内。中村さんは「当事者任せにせず、リスクアセスメントと加害者プログラムを組み込んだ体系的なDV対策の整備が必要だ」と注文する。

## 2. DV や虐待の事案が課題だという議論にも欠けていたこと-男親塾の紹介

課題の指摘のなかにも、男親へのアプローチをどうすればよいのかについては議論がほとんどなかった。DV と虐待による離婚の場合でも男親が暴力を振った場合の親権の扱いについてである。「家族のなかの男性性ジェンダー規範とケアすることの相剋」がここには含まれている。私は17年前から研究プロジェクトとして男親塾を大阪圏域で開発し、実践を行ってきた。男親塾は地方自治体と大学の研究プロジェクト(立命館大学人間科学研究所臨床社会学プロジェクト:中村正代表)が連携し、虐待を理由に子どもを保護された家族、特に父親向けの脱暴力にむけた家族再統合支援事業である。これを男親塾と名付けた。参加を義務付ける制度は日本にはないが、家族のやり直しに向かう意志のある人が任意に参加してく

る。登録している父親は40名程度である(2024年5月段階)。父親たちへの「介入後支援」が必要であるし、それはいかにして可能なのだろうかという問題意識からの取り組みである。虐待事例のほとんどは刑事事件とならない。児童相談所を中心とした子ども家庭支援が基本となる。

そこで、父親を想定した場合、いかなる支援をするべきなのかと考えてきた。離婚せざるを得なかった夫婦が面会交流についての協働を行う際に、対話をもとにして相互に尊敬できる関係をつくれるかどうかが鍵となる。離婚後の子どもとの面会交流において特にリスクのある非同居親には脱暴力という課題を課すべきであり、そのための試行的な実践が男親塾である。共同親権となった場合に子どもの発達をはじめとして夫婦が協働するための家族関係機能回復の場の提供ともいえる。グループワークやカウンセリングである。この一端は、『ハートネット TV シリーズ 子どもの虐待 どう救うのか? ①深刻化する虐待-児童相談所はいま』、NHK-E テレ、2013年5月6日(午後8時~午後8時29分)等で放映され関心をもたれた。

男性・父親問題を対象にした心理的支援や加害者臨床の取り組みが少ないこともあり、そうした領域での開発が求められると常に訴えてきた。男親塾は虐待親の脱暴力の場として位置づけた男親のやり直しのためのグループワークである。制度上は児童虐待防止法がいう「家族再統合事業(この言葉自体はたんなるやり直しのように誤解を招きやすいが)」の一環である。この取り組みは児童福祉の一端を担う。

虐待のあった元の家族へと子どもを帰すだけの取り組みのようになってしまうと、これは私の本意ではない。「古巣に縊りを戻すのではなく新しい鞆をつくる」という視点からのもので

あり、子どものための家族再統合という視点がないと、単に「家族依存」を強化するだけとなる。

こうしたことを背景にして始めた男親塾である。その理由は、虐待対応の課題は親であるということにつきる。虐待した親がすべきことは脱暴力である。たんに家族の暮らしを再開することだけを家族再統合と呼ばない、家族から暴力・虐待を取り除くことである。また、性的虐待の場合は念入りな親指導となる。

こうした虐待親とかかわりながら思っている。たとえ家族が再統合できなくても、最低限、子どもにとっての親のあり方として、虐待親のもとに産まれたというネガティブな像だけで関係が切れてしまうのではなく、親もまた変わろうとして努力をしていたということが伝わるだけでも子どもには救いではあるし、親から離されたのは子どもの責任ではないということの理解を進めるだけでも子どもの利益になる。何故ならば、子どもを虐待する親は、きまったように子どもの側に虐待を誘発する問題があったからだとは他罰的な態度と意識をもつからである。それが子どもにすり込まれている。

さらに、虐待された子どもはそうした親のもとに生まれたので、将来、自分もまたそうなるのだろうかという不安を抱えることがあるという。加害親として「男親塾」に参加している男性たちには、被虐待経験をもつ者がほとんどである。だから、虐待・DVの事案の場合の面会交流を仮に組織するとしても、こうした男性・父親問題にかかわる相談やカウンセリングを準義務化することが必要であると考え。そうした制度構築をとおして、現行の単独親権制度にも接木すべきだし、何らかの形態で続く父子交流にとっても活かせる方策となるはずだ。DV 加害を主訴として受け付ける京都府の男性問題相談事業でもそうしたことを希望する当事者男性は

いるし、長じた子どもにとっても父親の変化を見ることは意味がある。

### 3. 虐待の中心には「マルトリートメント」があること

父親にアプローチする際、彼はどんな虐待をしたのかと考える。男親塾に参加する父親の多くはしつけのつもりで叩いて育てるというマルトリートメント(不適切な養育)maltreatmentが多い。また、父親の多くは子育てに取り組んでいないことが多く、せいぜい「協力」程度であることも男親塾の事例には多い。妻に任せたワンオペ育児であることも多く、父親のネグレクト neglect が常態化しているともいえる。にもかかわらず子どもに関わることがあり、子どもが何かをした場合に登場する。通例それは叱るべき行動であると親が思うことが多い。その手段として身体的な暴力が選択される。これはアブユーズ abuse となる。この三者の絡まり合いのなかで虐待が起こる。

さらに見逃せないことは DV との関連である。妻に子育てを任せておきながら、「お前の子育てはなっていない」として子どもを強く叱責し、妻を批判する事例が少なくない。これは心理的な DV であり、子どもにも悪い影響を与えるので虐待ともなる。面前 DV という言い方があるが、子どもの前で妻に暴力を振るうことだけでは狭い表現である。家族システムとしてみると、夫がコントロールしていること自体を課題にする必要がある。この場合は広い意味での DV と捉えるべきである。こうした子ども虐待研究と DV 研究の成果を社会実装しているのが男親塾である。

しかし全体としては児童福祉の制度の取り組みなので、主に夫婦のパートナーシップの課題である DV 問題は前景化させにくいし、

法制度も異なる。逆にいえば、虐待問題をとおしてDV問題を関連させて扱うべきであるということがよく見えてくることもあり、外部からの連携組織である男親塾はDVの克服も視野に入れている。保護者指導や再教育を対象にすることは児童福祉の枠内ではペアレンティングということになるが、ジェンダーの視点が十分ではないと実質的には母親向けプログラムとなりがちである。社会福祉が家族システムへ働きかけていると想定するペアレンティングはマザリングとなりジェンダー秩序を強化してしまうことになりかねない。

#### 4. 対象を男親として定義したこと

そこで彼らを男親として対象化することにした。これは参加者たちの意見でもあった。当初は「お父さん子育て支援塾」としていた。それに父親たちが違和感をもった。「俺たち子育てしていないのにしつげと思ひ虐待してきた」という意識が深まった声である。子育てを積極的にはしていない父親の何を問題にすべきなのかと本人たちが問い返してきた。父性を涵養しつつペアレントトレーニングを経て、養育責任を自覚しつつ子育て技術を学ぶという直線的なニーズではないのだと当事者たちが発言してくれた。

総体としての子育て力を身につけていくという、直線的なことではないと父親たちと対話しながら気づいた。ケアと男性性はどう折り合いをつけられるのか、自らの男らしさが課題だろうと考えた。

まず問題とすべきなのは彼らの持つ男性性ジェンダー作用だと考えた。こうして男親塾と名称変更した。さらに、自分の父親と同じようなことをしているとすべての男性が話した。暴力の再生産の告白だった。「男であること、関係

性の再生産(暴力の連鎖)、気づきと再学習」という要素を脱暴力化支援として児童福祉の枠のなかで扱うことにした。こうして男性の虐待被害者の自己認識としての男親が抱える課題に照準することになった。

男親塾は、個別相談とグループワークを基本にしている。児童相談所のケースワークと連動させている。男親塾の担当カウンセラーが各地の児童相談所で非常勤スタッフとして個別の相談に応じており、男親塾参加ケースについてのスーパーバイズも行っている。年に一度は男親塾事例をもとにして家族システムにおける男性性ジェンダーと父親の暴力とDV対策の見地から総合的な研修会も開催している。里親家庭も対象にしているので総合的な男性・父親向けの取り組みとなっている。

男親塾は男性性ジェンダー問題を子ども家庭福祉に持ち込む。具体的には虐待とDVが交差している点を介入対象とする。根拠となる法律や所管が異なることもあり、さらに高齢者虐待やストーキング行為規制も含めた家族丸ごと支援が「家庭の問題」には必要となるからである。親子関係・夫婦関係(内縁関係や元夫婦関係含む)のサブシステムから成る家族は、関係性の束として存在しているが法制度は縦割りなので現実の問題解決に十分には応答できていない。外部連携をとおして接合することを試みてきた。

当該の家族システムにとって父親の暴力は破壊的なので、それを男性性ジェンダー研究の視点から除去することがまずは先決となる。男性性ジェンダーを色濃く纏い、日常的な育児にはあまり関与しないにもかかわらずしつげと称して暴力を用い、家族を統制する義務と役割そして権利が父親にあると考えている男たちを対象にした家族のやり直し支援としている。

## 5. その男親はモンスターではない

虐待する男親は、特異な存在ではない。一般的にも子育てに積極的でない父親が多いことと重なる。男性の育児休暇の取得率は、2019年度 7.48%と2018年度の 6.16%から1.32%上昇したものの、依然として低い水準にとどまっている(厚生労働省「令和元年度雇用均等基本調査」から)。子育てに無関心で何も関与しなければ、子育てに随伴する虐待は起こりようがない。これはネグレクト的な状態が続くだけである。しかしそのなかで突発的な事件・事故が起こる。そうした父親の育児に関する無関心の日常は、単に発見されない、虐待ともされない「よくある現実」である。もちろんそれ自体は母親の孤立的育児の一因でもあり、間接的な虐待への関与ともいえる。

そこで男親への支援内容が問題となる。男親塾は脱暴力化支援である。躰のために暴力を用いないこと、叱る必要はあるが手段としての体罰をやめること、夫婦のパートナーシップ課題を抱えていることもあるのでDV対策的視点をもつことなどを重視している。これらを結節する男性性ジェンダーの現実根ざすこととしている。男親塾の参加男性たちの日常生活の仕方や育ちの過程で身につけた暴力を肯定する男性性ジェンダー意識や行動を俎上に載せ、彼らと協働して脱暴力への歩みだしの機会と場を創出し、エピソードを出してもらい、言語化し、暴力を用いるのではない選択肢や分岐点について想起していく。それを聞いている他の男性から肯定的なコメントを出しあう。そうではなかった行動の可能性や選択肢が欠如していることを自覚できるようにしている。グループでの語り合い(ナラティブ)をとおして脱暴力の方向性を探るための共通言語をつくりだしながら社会制度としてのハームリダクション政策

展開の礎とすべく取り組んでいる。ハームリダクションとは問題行動を縮減させていくための措置を刑事罰以外に社会的に講じることである。

男親塾は、虐待での介入後支援の必要性について、父親の虐待加害が多くなってきたということに対応している。さらに、「平成20年度に家庭復帰した事案734件」の事例のうち、「施設入所から家庭復帰までに要した期間が3年以内75.9%、2年以内が63.2%、1年半が50.8%、半年以内が21.4%という」現実があり、多くは家庭復帰していることもあり、その過程でこうしたプログラムにつながる事が大事となる(「児童相談所等における保護者援助の在り方に関する実証的研究」『日本子ども家庭総合研究所紀要』第48集、2010年主任研究者山本恒雄、136ページ)。また、「児童相談所はその各約85%程度に段階的親子再接触の枠組による支援を実施し、さらに約40%の事案に何らかの特定の保護者支援プログラムを実施、その両方を併行して実施しているものが各30~40%台認められる(137ページ)、としている。しかしこの時点での保護者援助の調査にジェンダーの視点は無く、男親塾も対象になっていない。が、貴重なデータであり、これを男親の加害が増加している現在に照らして再検討が必要だろう。

「家庭復帰事案、施設入所事案共に、児童相談所はその各約85%程度に段階的親子再接触の枠組による支援を実施し、さらに約40%の事案に何らかの特定の保護者支援プログラムを実施、その両方を併行して実施しているものが各30~40%台認められる」としていることから男親塾の組み込みで奏功することもであると推定できる(136ページ)。



## 6. 男性のケア能力を鍛える—男親塾での事例をおして

そのために認知と行動と感情の変更を求めていく。「夫婦喧嘩ではなくDVである」、「しつけではなくて虐待である」、「放任ではなくネグレクトである」、「熱情的な恋愛ではなくストーキングである」、「小言や叱責ではなくモラルハラスメントである」などと別様なかたちでの意味づけがなされていく。以下、男親塾に参加している男性を紹介する。面会交流をすすめる際に男性・父親問題が重要であるという本稿のテーマとなるので紹介しておきたい。

### 1) Aさんは「未熟な父親」として育ち直しをはじめた

父親の虐待で5年間子どもが保護されていた家族である。父親は男親塾という教室に、母親は別のグループに参加し、家族のやり直しを準備していた。二人の子どもを養育する児童養護施設の職員も協力してくれた。その後、写真の交換、手紙のやりとり、ボイスメール、ビデオレターへとコミュニケーションの濃度を高めていくこととした。手紙の交換の段階で小学6年になった息子から問いかけがあった。「おとんはどうしてあんな暴力をふるったのか」と。体を強くするために相当な回数のスクワットをさせ、へこたれたり、いうことを聞かないときはすりこぎでなぐったりしたという。

男親塾で手紙にどんな返事を書こうかと話をした。みんなはとりあえずいったん自分でよかれと思う内容で返事をまとめてみたらということになった。いきなりグループのみんなにまとめてみせるのは難儀だということで下書きするから私にみて欲しいということになり、3枚の便せんに書いてきた。いきなり私がコメントして添削するよりも、みんなの前で読んで感想をもらっ

たらどうかと勧めた。次回の男親塾で別の父親にゆっくりと大きな声で返信の原案を読んでもらった。みんな子どもになったつもりで聞いて欲しいと指示をした。その下書きは虐待をした理由を書いたものだった。冷蔵庫のタバスコを飲ませた理由は、こう書かれていた。「冷蔵庫のなかには薬や酒もあり子どもが飲むとよくないものがあるのだということを分からせたかったから」と。スクワットは強い男の子になって欲しいからだと。これを聞いた男性たちの感想は一樣に、「なんだか悪いのは自分みたいに聞こえる」だった。虐待した理由の説明は、子どもを責める内容になっているのだ。子どもをしつけるためにということらしいのだが他に方法はなかったのかと思う。結局は言い訳にしかならない。説明すればするほどこうなる。暴力や不適切な手段を用いていうことをきかせ、親の思うようにさせようとするのだから、説明する語彙は貧しいし、そしてなによりも文脈が間違っている。

ではどうすればいいのだろうか。語彙と文脈を変えない限り、親子のコミュニケーションは再開できない。男親塾で考えた。そこで最後はこうなった。「すまん。恥ずかしいけど間違ったことをしていた。だからおとんは男親塾というところで親をやり直す勉強をしているんや。おかんにも迷惑かけていた。」という短い返信となった。手紙のやりとりをすることさえできずにいた親子のコミュニケーションの再開はこうしてはじまった。ボイスレターもやった。そして考案したのがビデオレターだ。親が並んでビデオに向かって元気かと呼びかけるのは不自然きわまりない。担当ワーカーが考えた。筆者がインタビューを両親にするというものだった。「お父さん、最近、親のための塾に通っているそうですね。それはどんなところですか。勉強になっていま

すか。」と私が質問した。少々ぎこちなく彼が答えた。「そうですね。私は親としては失格でした。いまから思うと間違った子育てでした。児童相談所によって二人を保護された後に、お母さんと考えました。これからどうしようかと。こんな塾があるけど行ってみないかと提案されて通い始めたんです。いろんなことが勉強になりました。親としては5歳くらいの段階だったのかなと思います。子どものためにというのは言い訳で、自分がむしゃくしゃしていたから虐待をしていたんだと気がつきました。」と話をしてくれた。

お母さんにも聞いた。「塾に通い始めたお父さんはどうですか。」と。「そうですね。塾のあった日は必ずこんな話をしたとかこんなことに気づいたとか話が弾みます。」と答えてくれた。トータルで15分くらいに編集した。次にそれを子どもたちにワーカーがもっていった。そこでさらに工夫した。施設の食堂でビデオレターを観ている二人の様子をビデオに撮ってもらったのだ。小学6年の息子と5年の娘が真剣に見つめている様子が映っている。それを両親にみてもらった。両親が努力する様子のビデオレターをみて、「おとんの目がたれている。やさしそうな顔つきだった。」という感想を息子はもらしてくれた。その直前に届けた写真は施設の部屋のなかに貼ってあった。この家族は離婚ではないが、父性を育む過程こそが虐待を乗り越えて家族をやり直す際に不可欠であると考えての回復プログラムを組んだ。離婚後の父子の関係性をつくっていく際にもこうしたプログラムが要る。週末だけ子どもと過ごせるようになった父親が、小学校高学年になった息子と、公園で自転車に乗る練習をした体験を話した。養護施設には自転車がなく、その子はうまく乗れない。大きな子が補助輪を付けた練習なの

で、周囲の目が気になりつつ、でもうれしくもあったという話に、ほかの参加者は、「父親の役割ってこういうことかとわかったようでした」と語った。傷ついた家族のやり直しには長い時間がかかる。

## 2) Bさんは暴力が原因で離婚したので自分を変える努力を続ける

二人の息子と脱暴力をしてから会いたいと思っている。長男も次男もすでに成人している。次男が小学6年生の時に妻からの申し出で離婚をした。原因はDVである。彼はそれを認めた。離婚の調停、その後は親権の確認、養育費や慰謝料のこと、不動産のことなど法廷で確認をしてきた。その間に、浮き沈みをしつつ仕事もなし、自らの体調も壊したけれども、いままでも踏ん張ってきた。男親塾にも参加をしてくれている。

ここまでこられたのは彼が友人に恵まれているからだ。社交性もある。もうすぐ55歳。成人した長男なのだから大人同士あうこともできる。それでも彼は遠慮している。本当は会いたい。親父としての今を見せたくないと考えている。自分が惨めだと思っているので、ふがいない父親像をみせたくないというのだ。これは確かに難しい。そんなことはなくて、DVも認めてやり直そうして脱暴力に取り組む姿勢は誠実である。養育費も支払い、住宅も明け渡し、男親塾に通うだけでも多くの離婚後の男性の現実からすると立派だと思う。だからこうした取り組みを進める彼に対して、そろそろ子どもにアプローチしてはどうかと勧める友人たちも多いという。彼を知る近所の人でも心配して声をかけてくれるという。そしてようやく24歳になった次男と再会できた。でも兄はまだ暴力の記憶があるのだろう、再会はできていない。男性は自らの

思いもあり、積極的にはアプローチはしないつもりだという。脱暴力を試みる父親になってから会いたいという思いもわかるが、離婚の原因となった暴力を反省し、脱暴力に取り組む長い経過があるだけでも十分だと思うし、子どもは自らの物語力があるので、惨めかどうかは子どもが考えることだと示唆したこともある。とはいえ、やはり本人の意思もあり、納得のいく時間とすべく共在している場が男親塾である。

### 3) 日常のエピソードをもとにして子育てを語り続けることだけでも意味がある

Cさんは離婚後父子生活を続けている。子育てがうまくいかずに最近、大きな声で叱責した。それが通報され、児童相談所に子どもを保護されたという。長く男親塾に通ってくれている。その動機は自らの戒めである。保護されるまでは児童虐待ではなく、防止のためにと自主的に参加していた。珍しい父親である。怒りのコントロールが悪いと自認しているので、男親塾での話はいつも子どもとのコミュニケーションのことが中心となっていた。その日の出来事を詳細に語ってくれる。自らも大きな声で叱られ、体罰も受けてきたという。頭ではわかっている、小学5年の子どもに大人同士のようなやりとりで叱責してしまうのだという話をしてくれる。

少々発達に課題のあるお子さんのようで、きちんと片付けることができないこと、こだわりの行動があり時間が守れないこと、物事を運ぶ段取りが悪いことなどがたくさん語られる。

男親塾に参加している男性たちは月に2回集まる。前半はこの2週間の家族の出来事や自分の感情や心境を語る。後半はそれに対してシェアする。批判はしない、「私」を主語にしてアサーション的コミュニケーションに心がける。

親子の会話のシミュレーションとなる練習でもある。

Cさんの父子生活で努力をする姿にはみんな共感する。その上で、自らの姿に重ねて話ができる。対等に子どもと接して叱りつけた段階でもう子どもに巻き込まれている。子どもに完璧さを求めると悪いところが眼に入り、叱りつけることを肯定してしまい、子どもが悪いようにみえてくる。いったい何のために叱っているのかわからなくなるという意見もでてくる。

さらにDVのあったBさんが語る。「Cさんが子どもを叱った後にすぐに謝るという光景に過去の自分が重なりました。それは妻に暴力を振るっていた時の自分の行動でした。自分も暴力のあとには謝罪をしていました。それでもまた暴力がでるのでその謝罪は意味がないこととあとで気がついたので。」と。頑張り屋のCさんはきちんと育てようと意気込んでいる。学習面もそうだが、何よりもしつけに留意しているようだ。あれこれ気づくので子どものアラが目立つ。多少、ゆるめて子どもをみることができるようになるといいなと他の男性たちから期待が語られる。

男親塾に定期的に参加をし、これ以上、関係が悪くならないようにしたいと思っている。子どもも複雑な愛着関係となっていく。怖いけど好きだという矛盾した関係を築くしかない。保護されている期間に何ができるか、男親塾のみんなで考え続けていく。

この三人は男親塾をとおして、子ども虐待や離婚にも直面しながら、子ども、家族、父親の役割、怒りコントロールなどを学んでいる。家族のやり直し、面会交流への動機形成、父子生活の努力というそれぞれの課題は違えども、男性・父親問題としての課題を自覚して取り組んでいる。それまでの家族生活におけるの失敗

を憎悪ではなく、対話と理解の方へと進ませているのは、子どもが大切だと理解をしていることにある。関係を変えた後にもなお、当該の親子関係は残る。子どもに何の責任もない事柄である。もっぱら夫婦や男女の関係の問題を親子関係に持ち込むべきではない。子どもの成長・発達に責任をもつため、リスクの高い男性・父親への面会交流にこうした場を用意すべきだろう。さらに、父性発達のためにも、任意であれ、一般に、離婚後の男性・父親に提供されるものであるとよいと考える。離婚後の男女ができる親としての協働はこの父性涵養に向けた取り組みにあるといっても過言ではないだろう。

## 7. 共同親権と暴力・虐待問題、そして子どもの権利と利益

77年ぶりの民法改正だが課題山積なので2年かけて準備することになった。先立って2024年4月よりDV防止法が改正された。精神的・心理的暴力が追加された。民法改正ではDV・虐待がある場合は除外することとなったが、新聞のコメントでも指摘したように、特に精神的・心理的暴力について家庭裁判所には判断ができる体制が整ってはいない。DV防止法だけみても加害者対策はなされていない。被害者が逃げるだけの方策である。

ようやく加害者プログラムの実施にむけて自治体を支援するための財政的支援の方策が出された程度である。子ども虐待でも同様に紹介してきたような男親塾の導入はなされていない。離婚の過程における脱暴力の組み込みやそもそもの事前防止の必要性について、連動すべきDVと虐待の防止法への関連付けにつ

いて今次改正はまったく触れていない。暴力があることを前提にした事後的対応だけが山積する課題として指摘されているだけである。総合的な家族にかかわる暴力問題への対応がかけているので、共同親権だけをとりだして組み込むという発想に無理がある。

さらにいえば、改正DV防止法では、長年の要望と実態に即して精神的・心理的暴力により「心身」に害が及ぶ場合、保護命令発令の対象となった。しかしその判断基準は「通院加療していた医師の診断」によるとされた。PTSDなどの診断書が必要となる。実際には、例えば加害者からDVの判断をした医師の供述について、加害者が「虚偽DVだ」と述べることもある。その医師に責任がないと確定するまで3年以上かかった事例もある。日本小児科学会、日本産婦人科学会、日本法医学会などから共同親権の慎重な検討を求める要望が出されていた背景である。

子どもの医療について、別居親の同意を得なかったとして、大学病院が訴えられ、損害賠償が認められたケースがある。この別居親は子どもへの面会交流が認められないと家庭裁判所に判断されていたにもかかわらず、別居親に同意を得るべきだと地方裁判所が判断した事例である。裁判所の判断で、面会交流は認めないとしたにもかかわらず、医療同意を求めるかどうかでは、司法も揺らいでいる。

あと2年、こうしたことを精緻に議論していきたい。

立命館大学(社会病理学・臨床社会学)

# 共同親権 大事ななのは子の利益 DV見逃す懸念 専門職配置を

## 家族と関わる支援者は

家族や子育てのあり方が多様化するなか、離婚後の父母双方による「共同親権」を導入する改正民法が17日、成立した。離婚しても、子どものためには協力を。そうした理念を掲げるが、多くの家族と関わってきた支援者らが挙げる課題は少なくない。

▼1面参照

### 改正法のポイント



- 親権者の定め方は…
- 協議離婚の場合、父母間の協議で定める
  - 裁判離婚の場合、裁判所が定める
- 裁判所が必ず「単独親権」としなければならぬケースは…
- 一方の親に虐待や家庭内暴力のおそれがある
  - 父母が協力しあうことが難しい

「夫婦としては別れても、子どもには責任を持つ」という価値観が浸透する可能性がある。離婚家庭の面会交流を支援する団体「おやこリンクサービス」の新川てるえ代表(59)は、法成立をそう受け止めた。

国会審議では「協力し合えるなら離婚までしない」など、父母が協力関係を持ちつづけるよう求める声もあがった。新川さんは、ひとり親家庭をサポートする前身の団体を含め20年の活動なかで、「元夫(妻)と連絡を取りたくない」と同居親が話すのを目の当たりにしてきた。子どもが別居親との面会の際に買ってしまったおもちゃを

### 国会で指摘された改正民法をめぐる課題

- 家庭裁判所の体制強化  
裁判官や家裁調査官の増員、DV被害に関する専門性の向上が必要
- 仕組みの周知  
政府が支援できる体制を定められる「日常の行為」「急迫の事情」の意味を明確に
- 父母の協力構築  
離婚後の親へのガイダンスや、子育てに関する計画作りの推進を
- 子どもの意見の尊重  
専門家が子どもの意見を聞き取る体制の整備を

## 「加害者変える講座 対策に組み込んで」

「親権があること、面会できるかは別の問題」と前置きしたうえで、新川さんは法施行を機に、離婚後の子育てへの意識が変わり、面会交流を望む親が増える可能性に期待を寄せる。

懸念の一つは、意思疎通が難しい親子をサポートする態勢が十分ではない点だ。法務省がホームページで紹介している面会交流支援の団体は全国に60弱、新川さんの団体にも遠隔地からの相談が寄せられることがある。

「団体はどれも手いっぱい

改正法をめぐっては、夫婦間の暴力(DV)が継続することへの懸念が大きな論点となった。日本では、DVがある場合、被害者が子連れで離婚し、単独親権を得ることが事実上の避難ともとらえられてきた。改正法は、DVや、そのおそれがあれば家庭裁判所が単独親権にすると定めるが、精神的暴力など見えにくいDVを家裁が見逃す懸念する声は根強い。内閣府の男女共同参画会議「女性に対する暴力

### 切断

中村さんは、自治体と連携し、関西で加害者プログラムを運営している。DVや虐待の加害者同士が体験を語り合い、暴力で支配するといった誤った考え方を変えていく、受講によって、元配偶者と子育ての協力関係を築ける人も増えるという。中村さんは、自治体と連携し、関西で加害者プログラムを運営している。DVや虐待の加害者同士が体験を語り合い、暴力で支配するといった誤った考え方を変えていく、受講によって、元配偶者と子育ての協力関係を築ける人も増えるという。中村さんは、自治体と連携し、関西で加害者プログラムを運営している。DVや虐待の加害者同士が体験を語り合い、暴力で支配するといった誤った考え方を変えていく、受講によって、元配偶者と子育ての協力関係を築ける人も増えるという。

©朝日新聞社 無断複製転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

# アソブロックに新卒がやってきた ～人が育つ会社論～

## 働き手は「労働市場」の商品なのか？

アソブロックに、わずか1名ではあるが、新卒社員を迎えた。

私が社長を引退していた期間（2021年～2023年）は新卒を採っていないので、久しぶり。アソブロック程度の会社規模（20人程度）で「新卒を再開」と言うと「マジか」「金あるな」「ビジネスモデルがしっかりしているんだな」などと言われることもあるが、目論見があつて採るわけではない。新卒を受け入れるのは、法人の義務だと思っているからだ。

学生時代を終えたタイミングで、多くの若者は実質的な社会人としてデビューする。その多くは会社員になるのだが、受け入れる側が温かく迎え入れることこそ、良き社会を育む一員になる契機になると思うので、可能な限り、会社はそのようなフィールドを用意する義務があると私は常々思っている。

そんなアソブロックでは、私が社長に復帰してから、毎月1回「アソプロ会」を実施している。お昼時間帯ならランチ、午後帯ならケーキを食べながら、前半に少しだけ会社のことを、大半は一人ひとりが毎回設定したテーマに応じた話をする。

先日のアソプロ会のトークテーマは「私のこれまで最大のカルチャーショック」。最大でなくともいいのだけれど、それぞれが8分間、短くない話をした。

内容はやはり海外旅行にまつわる話が多かった。実家が京都のお寺で、本堂には葬式を待つ亡骸が横たわっているのが日常だったと語るメンバーは、海外旅行に行くと「吊い」が気になるらしく、ガーナで出会った葬式について話をしてくれた。

日本アルプス山系の山小屋での勤務歴があるメンバーは、前日元気に酒を飲み交わしたお

じさんが、翌朝亡くなっていた話から、毎冬4~5人は亡くなる話をして、「死は遠くではなくすぐ横にあるのだ」と実感した話をしてくれた。

そんな流れの中で、新卒入社したメンバーが話してくれたカルチャーショックは「デンマークに留学した際に、彼の地の多くの大人たちが、利他的で親切だったこと」だった。とても親切にされて、「なぜ私にこのように親切にしてくれるのかが不思議だった」と語った。

私はこの話を聞いて、残念な気持ちになった。これは裏を返せば、彼女は22年間、そのような大人にあまり出会えなかったということでもあると思ったからだ。

「デンマークの皆さんの振る舞いは利他的で、地元の大分を思い出しました（彼女は地元が大分なのだ）」なら「東京は砂漠だね」と返せるし、「幼き頃を思い出しました」なら「個人主義のなれの果ては利他の心をなくすことだよ」と返すことができた。しかし、彼女の語りは、いずれでもなかった。そしてそれは、今日を生きる20代の多くがそうなのではないかと思わされた。

もちろん留学先での話と、日常でのそれは違うという意見もあるだろう。日本人だって、訪日外国人には親切だと言われれば、そうだろうとも思う。ただ、彼女がデンマークで感じた利他の心は、そういう区分的なものではなかったようだ。

\*\*\*

新卒入社した彼女に、私が繰り返し言い聞かせていることがある。

それは「そんなにすぐに成果を出そうとしなくていいから、まずは『迷惑かけるけどよろしくね！だって私は新卒なんだから！』くらいの気持ちでいろ」ということ。

人を雇わせてもらう立場にある身としての実感だが、最近特に雇われる側が「迷惑をかけないように振舞いたい」「より早くお役に立ちたい」と思い過ぎているきらいがある。それ自体は真面目で、前向きで、何も悪いことだとは思わないが、一方で、これも個人主義の一面だと私は思う。

ある友人はこれを「なんでも市場化することの弊害ではないか」と話してくれたが、自分を「労働市場の商品である」と捉えすぎるのは、健康的な暮らしを支える考え方だと、私は思わない。

誰が考えた標語なのかは知らないが、「大卒即戦力」であることを求められ、入社したら

たで、個人主義という名の放置プレイにさらされ、大して輝いていない上世代を見ながら暮らさざるを得ない面が、今の20代には少なからずあると思う。

新NISAの話で盛り上がり、わが身のための小銭の確保に奔走したりする前に、新卒を含めた20代をどのように会社に迎えるべきかを考えたほうが、よほど老後の備えになると私は思う。

文/だん・あそぶ

「人の成長に資する場づくり」をポリシーに、アソブロック株式会社、株式会社 ea、有限会社 salvia、株式会社小さな広場ほか、10社近くの業態様々な会社の経営・運営に携わる。その独自の経営手法が、働き方改革の流れで注目され、全国でワークショップや講演も行っている。21年より対人援助学会理事。24年4月に軽井沢にある学校法人風越学園の理事に就任した。

団遊の組織論 ; <https://corp.netprotections.com/thinkabout/1536/>

団遊の採用論 ; <https://job.cinra.net/special/asoblock/>

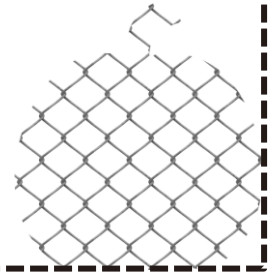
仕事を辞めたくなくなったときに ; <https://goo.gl/bFQdpC>



# 解放の心理学へ

## ー ブラックボックス ー (5)

藤 信子



先回は病院の業務と電子カルテのことから、疎外について考えていた。そんな時、時々受診する近所の医院の待合室に「〇月から電子カルテを導入するため・・・」しばらく会計に時間がかかり、お待ちいただくことになります、という趣旨の張り紙があった。なかなか率直というか、これから起こるちょっとした混乱を小さくするための方策なんだろう、と思うけれど、新しいシステムを導入する時に生じる戸惑いや混乱を予測し、前もって知らせることは事態を把握し、待っている患者さんへ受付のスタッフも対応しやすくなるのだろうと思った。こういうところでの対応に比べて、マイナンバー・カード普及は、人の作業をあまり考慮しないで進めているために、エラーが生じた時に、不安を持つ人が増えているのでないだろうかと感じた。

先日奈良のある駅で、交通系カードにチャージしようとしたけれど、うまくいかなかった。入れた紙幣が戻ってくるのに、カードの残高が増えていた。そこは無人駅で、今まで見たことも無い券売機だったこともあって、何が起きたのかわからなかったため。後で大きな駅に行って駅員さんに事情を話して、調べてもらおうと、ポイントでチャージしたことになっていると言われた。何年も使用していたけれど、うかつというか、ポイントが付くことは知らなかった。デパートのポイントは、レシートに記されているので利用できる。近所の商店のポイントは、カードの判を押してもらえるので、わかる。大体、交通系のカードでいつポイントが付くのか、知らない私が無知なのかと思って家族に聞くと、異なる交通系カードを持つ家族も知らなかった。インターネットで調べると、時間帯指定

ポイントとか、いくつか説明してあるけれど、そんなに利用したかな？と思うくらい。一番使うのは、長崎に行く時の空港バスなのかな、いやJRで奈良に行ったり、してるなとか考える、それが何年か知らないうちに溜まったのかなと思う、全く心許ない。金額が減ったわけではないけれど、見えないうちに使える金額が増えるというのも、私にはちょっと困惑の種になる。そこでもまだ、これは確かに私が利用したことに基づいたポイントなんだろうか、とも思う。何かの都合で他人のポイントが私のカードについていたりすることはないだろうか？……。こういうことは考え出すと切りがない。私のポイントだと思って使うしかない。もしかするといつか、私のカードの残高が他の人のカードに入るかも知れないし(?)と思うことにする。こういうシステムはブラックボックスとは言わないだろうか？私が分かっていないだけなんだろうか。

この話は交通系カードの残額の話だから、この程度で済むけれど、マイナンバーカードの問題になると簡単ではないような気がする。定期健診に行く歯科で、今年の12月には今の健康保険証が使用できなくなります、早めにマイナンバーカードを申請した方が良いでしょうよと言われた。きっと患者さんの中に私のようなマイナンバーカードについて良くわからない人が多いのかな、とも思った(政

府がワイワイ言っていることもあると思うけれど)。大体マイナ保険証のメリットというのが、よくわからない。診療情報が分かるというけれど、そういうことは、受診する本人が医師に告げれば良いことだろう、何かの間違いで、本来は守秘義務のある診療情報が、漏洩する危険性がないとは言えない。その方がよほど問題だろう。メリットの中で、そうかもしれないと思ったのは、医療費の限度額が区役所に申請に行かなくても、病院・医院で分かるというものだけれど、私は最近区役所で認定書をもたらってきたけれど、初めての経験だった。そんなによく使う制度なのだろうか？

マイナンバーカードの普及率が今年の3月時点で60%弱という時に、マイナ保険証への切り替えを急ぐのも良くわからない。しばらく前に、マイナポイントといって、TV等で騒いでいたけれど、ポイントがついても、取得する人はあまり増えなかったのだろうか？私のように、個人情報があれこれ紐づけられることへの不安が強い人が多いのだろうか。マイナンバーカードを普及させるためのマイナポイントというのもおかしな話だったと思う、便利なものなら、そんなことをしなくても人は持つだろう。なんだろう、このうさんくさは？と思わせるような進め方が目立つので余計に気になる。急ぐと手続きをする役所で人為的なミスが出るのは当たり前

だろう、落ち着いてカードの利用が当たり前になったら、保険証と一緒にする作業をしたら良いと思うけれど、なぜ政府は急いでいるのだろうか？システム構築のための会社との契約のため？遅れるとお金がかかるのかしら？なんだかよくわからない中で、せかされるのは余計不安をあおることになると思うけ

れど……。とにかく、手続きが見えてこないのは、大変にストレスになる。役所の仕事をもう少し見えやすくしてもらいたい。こういうのもブラックボックスというか疎外の状況だと思う。見えないことは不安を強くする、ということを考える役人はいないのか知らん、と思う。

# カウンセリングのお作法 第39回

CON

Counseling Office Nakajima

カウンセリングオフィス中島 中島(水鳥)弘美

## ～家族カウンセリングの関係機関 病院・学校～

今回は、家族面接二回目のすすめ方について話しました。今回は、前回のなかで少し触れた、家族カウンセリングの関係機関について話します。

### 関係機関からの紹介による家族カウンセリング

家族カウンセリングの相談に来られる方は、直接、希望をして申し込まれる方は少なく、どなたからかの紹介があって、来所されることが多いです。つまり、関係機関において家族カウンセリングが適していると判断され、効果的な支援であると説明を受けて、カウンセリングにつながります。

関係機関である医療機関は、おもに精神神経科クリニック、学校は、私立の小学中学高校、公立の学校です。

### 病院からの紹介

病院からの紹介は、医師から患者家族に通うようにすすめられます。

治療支援方針は、投薬による治療は医療機関が行い、家族カウンセリングは専門相談機関と、役割分担をして家族を支えるスタイルがあります。また、投薬治療等がひとくぎりつき、カウンセリングに集中することが適切と判断される場合、そして、投薬治療よりも、家族カウンセリングが適していると考えられる場合です。

以上のような場合は、医師の診療情報書類(=紹介状)が専門相談機関に提供されます。

紹介状は初回面接のときにご家族から受け取り、その内容を確認し、申し込みの時点でご家族から事前に聞いている情報とあわせて、希望を聞きつつ、支援の方向性を決めます。

初回面接が終了すると、担当の医師あてに、紹介礼状とともに来所時のメンバーと様子、今後、どのぐらいの間隔で面接をする予定であるかについて明記して、報告をします。このようなやり取りをして、医療機関との協力体制を構築していきます。

### 学校からの紹介

近年、在籍している学校でスクールカウンセリングを受けることができるようになりました。そのため、学外の相談機関に紹介することは少ないようです。しかし、継続して支援を受けることができないような場合、たとえば、学校のスクールカウンセラーが男性なので、なかなか話せない、話がしにくいと生徒さんが感じているため、女性のカウンセラーが適していると担当カウンセラーが判断した場合、また、学校内のカウンセリングよりも家族支援、家族全体の協力が必要であると考えられるような場合に、家族カウンセリングをすすめられて、相談に来られます。

学校からの紹介は、事前に教員や担当カウンセラーなどから、空き時間、費用等の確認や受け入れ可能かどうかなどの問い合わせがあることが多く、相談機関の様子を示した紹介用のパンフレットなどを案内します。そのうえで、学校側から家族に説明等があり紹介につながります。

### 学校訪問して協力体制づくり

家族が来所して、初回面接が終わると、カウンセラーは学校訪問の準備をします。

学校訪問とは、相談機関から子どもさんの所属する学校に連絡をとり、紹介者である教員、担当カウンセラー、クラス担任、学年主任、保健室の先生など、生徒さんとかかわりのある人とコンタクトをとるのです。

一方、ご家族側にも、学校の先生と協力をして支援することを伝え、学校関係者と連絡をとること、つまり、学校訪問や電話等などをするための了解を得ます。

このように、家族、学校、相談機関の三者が情報を共有し協力体制を整えて、生徒さんとそのご家族を支援する土台システムを作り上げていきます。

学校訪問の際には、いま課題をかかえている生徒さんとそのご家族の情報とともに、進級の条件等のルールなどを教えていただくこともあります。補講が必要な状態であるとか、カウンセリングに通うことが改善努力と認められ、配慮されるようなルールがあるなど、学校独自のルールを得ることができます。

また、教室内に入ることがむずかしい場合には、別室登校の可能性など、生徒さんが登校しやすい環境の確認など、登校の敷居を低くするアイデアなども意見交換することができます。

### 生徒さんと同じ通学路を歩いてみる

学校訪問は、学校関係者との連携を築く機会ですが、生徒さんやご家族が面接のときに話をしておられた内容、たとえば通学環境などについて実感することもできます。

「朝、通学路の急な坂道がづらい」とか、「駅から学校が遠すぎるので登下校で疲れる」などの話が語られると、夏の暑い時期や、冬の寒さの中での登校の負担の意味が、「このことだったのか」とわかり、学校の周囲の環境、通学から受ける影響など、生徒さんの話の理解を深めることができます。

「あの坂道はかなり急ですね」「駅から遠くてなかなか学校につかないね」などと、二回目の家族面接で話しながら、学校訪問に行ったという報告をご家族にします。

### 紹介者との関係

病院や学校などの関係機関との連携の重要さは以前から注目されています。

支援を考えると、面接室でご家族と向き合うためのスキルを磨いてゆくことももちろん欠かせないことです。しかし、目の前の支援だけでなく、関係機関との安心できる協力体制があって、初めて効果的な支援に結び付くと考えられます。

関係機関などというと、やや硬い表現になりましたが、関係機関に属しておられる紹介者の先生方、学校の先生方、カウンセラーと直接お会いしたり、連絡を密にとるつながりが、来所される家族との信頼関係に大きく影響してくると思います。

# 晩年

## D・A・N 通信

### No.8

2024.02.21～2024.05.20

### 団 士郎

晩年 DAN 通信を日誌部分と別の企画を併せた「マガジン内雑誌」形式に出来るなと思いついた。昔、雑誌「話の特集」に女性漫画家がそんな企画を連載していた。

ももとの DAN 通信は日誌と「マンガ木陰の物語」1編と連載記事を載せたミニコミ。第二期はトークライブ参加者へのお土産用8ページの仕事場 DAN 通信だったが形式はそのままだった。その形を再現をと思った。そこで今回は日誌と「連想映画館」の二本立て。

40年以上も前からミニコミ発行が好きだった。青焼きコピー誌「四人囃子」やひとこま漫画誌「ちよもるんま だん」、マンガ同人誌「ぼむ」、「おまけぼむ」など、いろいろ作ってきた。その趣味は今も変わらないので、社会インフラが大きく転換した現在、過去の発行時の手間、経費負担など大幅にカットされた状況で、対人援助学マガジンのように大部なモノが継続発行できている。だから楽しくて仕方がないわけだ。15年目に入ったのだが、飽きたり、面倒に思うところは全くない。まだまだ、いろいろな原稿作りを楽しめそうだ。興味のあるところだけ、ピックアップして読んでいただけたらいいので引き続きご愛読の程を。

2/21 三日ほど籠って片付けるべき作業を次々。その中に仕事場仮眠ゾーンの改良も。押し入れ上段に移動して寝てみたら寝台列車感覚でとてもいい。描いたり書いたりとは捗っていくのが快感。気分転換に「1秒先の彼女」を観てラストにうるっ。本の原稿は完了、最後にもう一度通読してから編集者に送信。

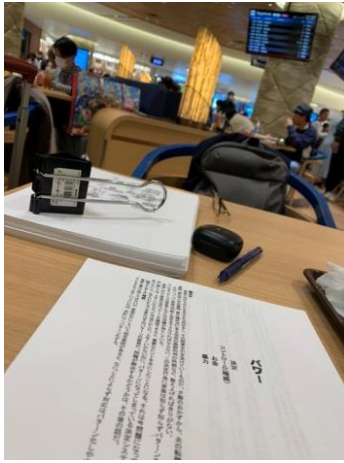


2/22 どこかで目にした誰かの言葉。それが引き金でこれが観られるのだから、ハズレが多くても辛抱。1日に一回しか上映していない。なのに結構な観客。物語が強い、

映像が作り込まれていて、面白くてあつという間に時が経つ。最近そんな映画、あまり観なかった。上映中、時間を忘れていました。



2/24 伊丹空港ロビーで飛行機を待ちながら新刊原稿最終チェック。楽しくて仕方がない。まだまだ細かいニュアンスを書き加えたがっている。キリがないから月末を区切りと決意して、そこまでに出来るところで納得する。その後は、ここで試みた方式で対人援助学マガジン新連載を目指す。したい事尽きず。



2/25 一日 WS を高知で。これはホテルの朝食。自分でお皿に取ったのだが、席で食べようとして、なかなか綺麗に並べてるなと思った。鮭、鶏と牛蒡の煮物、茄子の煮浸し、たまごやき、エビとイカのマリネ？、生ハム、練り物、シラス大根おろし、トマトサラダ、お味噌汁。ちょうど食べ切る量で美味。

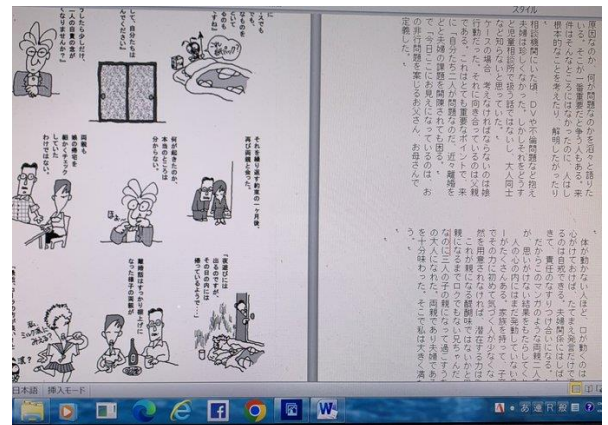


2/26 対人援助学マガジン 56 号の原稿が着々と届く。PDF 完成版の人は月末締め切りだからあと数日。能登、石川の被災地に暮らす執筆者が三人ある。みなさん無事で原稿も届くが、垣間見える日常はあの日を境に別世界。おだいに。

2/27 来月開催の漫画展の作品引き取り作業に、朝、自宅に三人の来客。みんな高齢組だが、それぞれ元気だ。奈良県広陵町図書館で 8 年目になるらしい。あっという間に 10 年になる勢い。作品を作り出すエネルギーがあって、観てくれる人があって、お世話してくれる人がいて、うまく循環できている。



2/28 歳とったからか、バカなのか分からないが、またやってしまった。最終校正したデータを、古いので上書きしてしまった。デスクトップ、USB、クラウドとかにデータがあるが、何やら分からん。消えたわけじゃないから、もう一回手を入れよう。2 月末完成をと決意したら、もう 1 日ある。ラッキー！



3/1 Amazon、二度目の返品事態。今回は全く間違った商品が送られてきた。開ける前に、こんな形状？と疑問に思ったが果たしてその通り、頼んでないよ！という結果に。返品、返金で、新たに注文しろってことなんだけど、伝票と商品が違うと手間取りますなんて警告が。そっちだろ、間違ったのは。



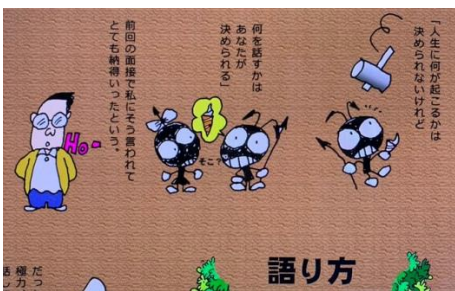
(ところが翌日、amazon から注文品が届いて、昨日のはナンダ？の事態になった。調べてみると、定期的に配送の扱いになっているプリンタのインク。そんな申し込みしたのは覚えていないが、使えるから良い)



3/2 毎月連載の新作漫画作成中。飽きたので気分転換にPCを触っていると昔の旅日記が出てきた。2008年とあるから16年も前か。クロアチアを二週間かけてバスで縦断ツアーの時の記録だ。妻は亡くなったが、私の記憶は細かいことまで再現できる。写真と記録が手元に出てきて補助してくれるのは良い。



3/4 今月号の新作はいい感じの出来になって完了。続いてぼむ展用掛軸の彩色仕上げ。近日中に掛け軸に加工してくれる業者に発注だ。マガジンの編集会議にはもう一日余裕があるが、原稿はほぼ集まっている。執筆者に能登半島地震被災者が複数あって、そこからの報告が原稿にある。ぜひご覧を。



3/6 雨、寒い。あれこれ作業が一区切りしたので、街中にぶらっと外出を考えてたけどやめた。仕事場で仕事しないで本を読む。近頃 audible 三昧なので、一冊読み終えるのは久々。だんだんと関心がコアなものだけになっていく実感あり。でも、寂しくはない。まあそういうものだろうなんて思っている。



3/7 昨晩は対人援助学マガジン 56号の編集会議。今回はいつにも増して原稿の揃いがよく、その場で速やかな作業。併せて能登地震被災に向けてマガジンができること的话题を。まあこれからだが。あれこれの作業が皆片付いたので夜中に未知だったこれをチラチラ。子育て期の身勝手だった自分を思い出す。



3/10 昨日は午後四時間の家族理解WSを奈良県広陵町でこじんまり実施。今日は午後から、漫画展を開催中の図書館で講演会。なので昨夜は天理市のホテルに一泊。チェックアウトを正午まで延ばして貰って、部屋でマガジンの編集と、2月末に書き終えた本の原稿、提出後第一回の読み直しをする。楽し!



3/10 このところ漫画展の中心は掛け軸になっている。運搬が簡単で展示も簡単だから当然なのだが。奈良、広陵町図書館展で久々にパネルも展示されているのを見ると、大きさはやっぱりいいなあと感心する。高さ調節やバランスなど少し面倒な展示作業になるのだが、高齢者には見やすく好評らしい。

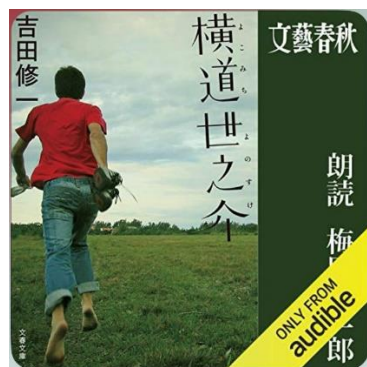


3/11 あの日の午後、仕事場で感じた揺れを思い出す  
3.11。さて次の掛軸漫画展は 20 日から姫路の専光寺  
で春季彼岸会。20 日の午後には一時間足らず、本堂で  
お話もさせてもらう。50 年来の友人で、マガジンに連載  
もしてくれている竹中尚文君のお寺だ。初めて訪問する。  
只今、発送準備完了で集荷待ち。



3/12 対人援助学マガジン 56 号の担当部分をひとまず  
発行所に送信。いろいろ細かい手違いや苦労はあるが、  
やれば片付くのが良いところ。今号は 338 ページ。ラス  
トに能登地震関連の号外を一ページ追加した。

3/15 audible の良いところは、縁がなかった本に触れる  
ことができること。これは長男が大好きだと言っていたの  
を覚えていたが、なんだか縁がなかった。そしてこの度、  
だったのだが一気に聴きである。えっ、えっどうなってしまっ  
たのと思いながら、誰の人生もそれぞれに時は過ぎてゆ  
くのだねと思った。



3/16 対人援助学マガジン 56 号がアップされました。ど  
なたでも読んでいただける無料の季刊雑誌です。今号は  
338 ページ。50 本以上の連載記事。雑誌名でキーワード  
検索してぜひご覧ください。能登震災後の現地からのレ  
ポートやユニークな被災地に向けた活動のお知らせなど  
も掲載されています。

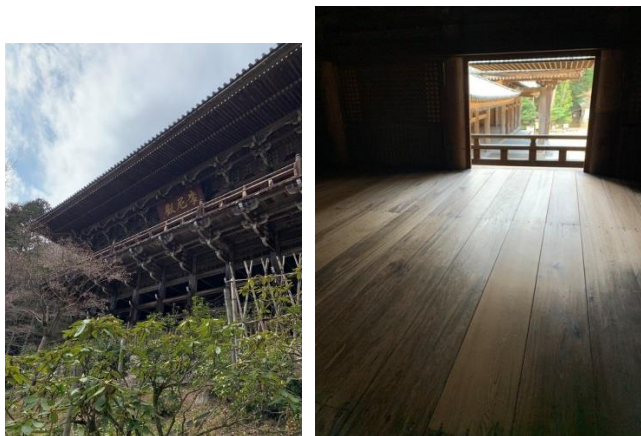
3/16 アレコレ終えて のんびりした夕刻、土曜の京都の  
雑踏にぶらり。食後のタリーズで下巻を読んでいたら、  
幼児育て真っ只中だった妻のことを思い出した。何も手  
助けしない最低の父親でも、夜泣きの記憶はある。こん  
な思いで抱っこしていたんだなあと心が揺れた。私は解  
るのがいつも遅い。



3/19 昨日は大阪でぼむの定例会。緊急入院で一人欠  
席。そういう歳だな。本日は JR 新快速で姫路に向かっ  
ている。京都から新幹線も使えるが、このまま乗って  
いても一時間半余り。読書にはちょうど良いのでそうする。明日の  
予定のための前ノリ。必要はないのだが姫路城以外  
に行くことは珍しいので。

3/19 そんなわけでここに。天台宗別格本山 書写山圓  
教寺。思ったよりも山の中で、最近、高野山の宿坊に泊ま

った話を聞いたばかりなので、ちょっとその空気がある場所だった。姫路駅から路線バス、ロープウェイ、マイクロバスを乗り継いだ。アクセスが良くしてお山をゆっくり散歩できた。ラストサムライのロケ地で有名になった場所だ。



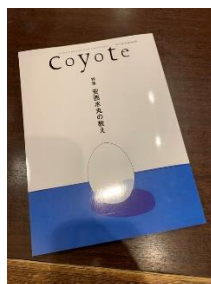
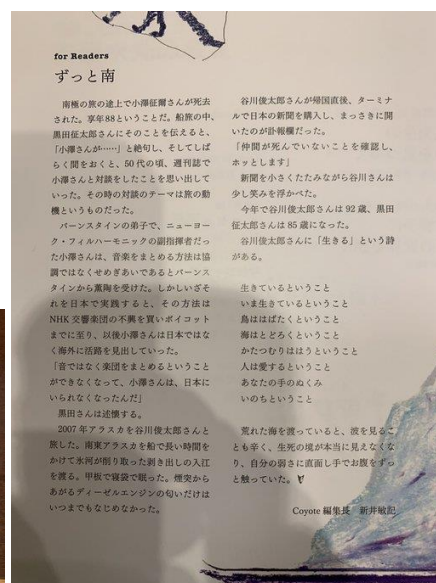
3/21 夜更かして遅めに起きたら窓外は雪！オイオイ、日本中この寒さなのか？ 昨日は姫路の専光寺本堂で漫画展とたくさん集まって下さっているところで50分話す。終了後、竹中君と神戸に出て、お薦めのトルコ料理を美味しく食べる。三宮の賑やかな路地飲食街など、随分長く来たことがなかった。



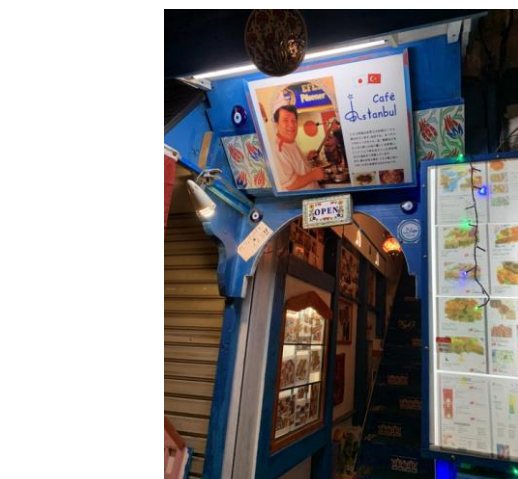
しませんが、恒例行事です。どうぞよろしく。来ていただきましたら、来客対応中でも、必ずお声掛け下さい。



3/23 ノルマを終えたので、新しいものの制作に取り掛かった。楽しい。帰路の書店でこれを見かけて購入。安西水丸さんとは一度、講義を聞いた後、数名でご飯を食べたことがあった。熱烈なファンのいる方だった。巻頭の文章の編集長新井敏記さんの仕事も本も結構見てきた。いろんな人と繋がっている。



3/24 政治家はだらしないが、社会の仕組みは円滑に進められている。今日は日曜だが正午から15時までの間に、宅配便が四件、時間指定で届いた。大津市からの高齢者配布商品券1万円。ネットで見た調理器具。漫画展から返送の掛軸。そして友人からサーモンの冷凍真空パック。夕飯はこの中の組み合わせ。

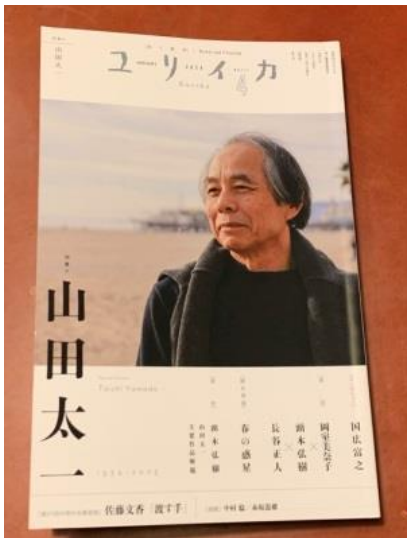


3/22 今年のぼむ展は4月2日火曜日から7日日曜までです。連日、14時過ぎからは在廊します。お時間あったら、遊びに来てください。バタバタすることもあるかも

(電子レンジ用調理器具なのに、焼き魚がガスのグリルよりも美味しく焼ける。焦げ目もつくし。)

3/26 10年ほど前まで、十年間くらい学会誌に連載していた連想映画館。読み返してみると、今では書けない文章である。50代から60代半ばの私の感性がこれか。再読しながらしまうまプリント版で作ろうかなんて気になっている。貯まった原稿をあれこれ私家本にするのは楽しい。(などと思っていたが、また配布範囲が限定されてしまうので、マガジンに掲載することを考えた。これならバックナンバーに残り続ける)

3/28 日々の暮らしの中で、いろいろなことにささやかに、しかし確かに影響を受け続けていたのが山田太一さん。TVドラマだけではなく、様々なことで学ぶところが大きかった人だ。大声で叫ばない、勇ましいことを言わない。分かり易すぎることに警戒心を持つ。そんな事をいつも教わってきた。合掌。



3/29 歩こう！と仕事場で思った。久々に太陽が眩しい。京都御苑の桜の周りは人の花盛り。久々に出町柳の名曲喫茶に入ったら、益々音を立てるな強化で、おしぼりの袋はハサミで切るよう指導された。静かに紙に漫画の下書きをしていたら、筆記具禁止と言われた。珈琲とアップルパイで2160円。面白い世界



3/30 モチベーションを色々工夫して、今回も完成させた。書くネタに困ってるのではなくて、描き始めのエンジンの掛かり具合が遅い。時間のゆとりが出来たせいだから悩ましい。第二百九十話。あと10回で300回目、連載25年だ。今回は「つまずきの石」について描いた。



3/31 歳をとったからだろう。登場人物の多い話は、誰だコレ？が頻出する。加えて、パンフレットを見たら、以前にいろんな映画で見ている役者がたくさん出ていたのに、ほとんど気づかなかった。まあ仕方ない。怖い映画だったが、私はあまり好きじゃないなあ。



4/1 例年ほどの元気がない気がする今年の我が家の白木蓮。今日はぼむマンガ展の搬入。明日から日曜日まで6日間の開催です。お時間あったら是非お越しください。私は連日、14時頃から18時過ぎまで在廊の予定です。来てくださったらお声掛けください。



4/3 昼前から高校の同級生とランチしながらあれこれ話す。一緒にぼむ展に来て、お茶をいっぱい。次々お客さんが来訪。うまいこと時間差訪問がありがたし。最後は約束していたM君と夕飯を食べながらのよもやま話。仕事場への帰路は夜桜である。外国人の人出が極めて多い京都の夜。



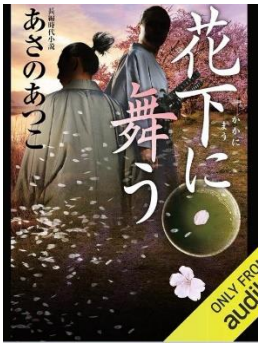
4/7 ぼむ展最終日まで皆勤で在廊。たくさんの久々の方達に会えた。今年のお品者7人。高齢化しているが、それぞれ事情を抱えつつ、また来年の3月中旬に同じ場所で集えますように。今年お休みだったK君の復活も祈念しておひらき。仕事場近く、桜満開の京都です。



4/4 ストレッチの後、画廊に。上手な時間差で本日も七人のお知り合いと面談。久々に会う方、毎年来てくれる人、25年ぶりにたまたま通りかかったと声をかけてくれた人。どれもこれも不思議なご縁だ。何もしてなければ再会する事なく過ぎただろうお互いの人生だ。動くことの大切さを感じる。



4/8 マンガ展を終えて、夜更かしして audible で時代物を。「連日、14時から18時まで在廊予定。来廊の時はお声掛けください」、こう案内していたから、来て下さった方とは話し込むことになる。その結果、6日で二十四人の久々の人とあれこれ。毎日、友人に四人会い続けることなどなかなかない。多謝。



4/8 気になっていた真田広之の SHOGUN 将軍が観たくて disney+ に。いろいろ加入していて、それも忘れていたり相変わらずだ。早速一話、二話を観たが、長編がまだ始まったところって感想。せっかくなので他も検索していたらこのアニメが目についた。ディズニーはアナ雪ぐらいしか観てないが面白い。

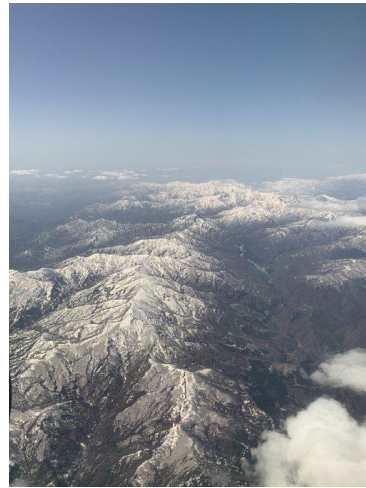


4/10 26 年目の草津家族療法勉強会。十八人の参加でスタート。世話人の W さんの尽力があつてのことだ。新旧のメンバーが集う。草津駅前の大垣書店はだだっ広いので面白い本が多い。探していたコレがあつたので購入。日本中の行ったところをチェックしてみよう。



4/13 今日はおそらく日本中が好天なのだろう。機窓から日本アルプスのどこか、雪の峰々が綺麗だ。山形空

港に着いたが暖かい。こんな日は滋賀も大阪も山形も気温は同じだ。航空機も定刻出発で 10 分も早く着陸した。



4/14 桜満開の山形でコロナあけ 5 年ぶりの家族理解 WS。会場の駐車場も、その向こうの堤？も綺麗だ。高齢者対応の参加者が多めなので、長寿社会の夫婦サブシステム、専門性と依存の二つのテーマで話す。喋り過ぎ、反省。現状一般論は未来を切り開けないし、個人的体験は普遍的でもあるという展開。

4/15 山寺立石寺にきた。「閑さや岩にしみ入蟬の声」と芭蕉が読んだ場所。しかし今日の老人に、石段 1000 段は苦行だ。何度も休みながら五百段手前でここまでにしよと思ったが、多くの人たちが登っているのに・・・と悔しさが勝り、思い直して奥の院まで。息がおさまるのに長時間。いいんだ急がない。



4/16 昨日訪れた山寺芭蕉記念館で見た、米倉齊加年の奥の細道のビデオが印象に残った。私と東北との縁は 50 才頃からのものだが、奥の細道の足跡を私も多く踏んでいることに気づく。二本松、松島、多賀城、平泉、

酒田、出羽三山他。展示の最後には、我が大津膳所の俳人への芭蕉の手紙があった。



《立石寺と芭蕉》平成2年(1990)  
坂田 燦作



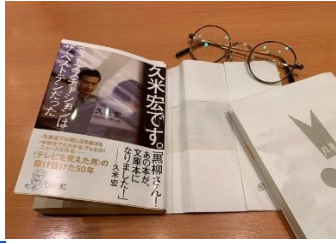
4/18 松ヶ崎の京都工芸繊維大学に初めて行った。名は昔から知っていたが出向く用がなかった。たまたま雑誌のコラムの下部にあったこの告知が目に入った。ピカソ、カッサンドルや A.フランソワのポスターにこころ動いたのだ。いいポスターがたくさんあって楽しめた。校内の美術工芸資料館で二百円。



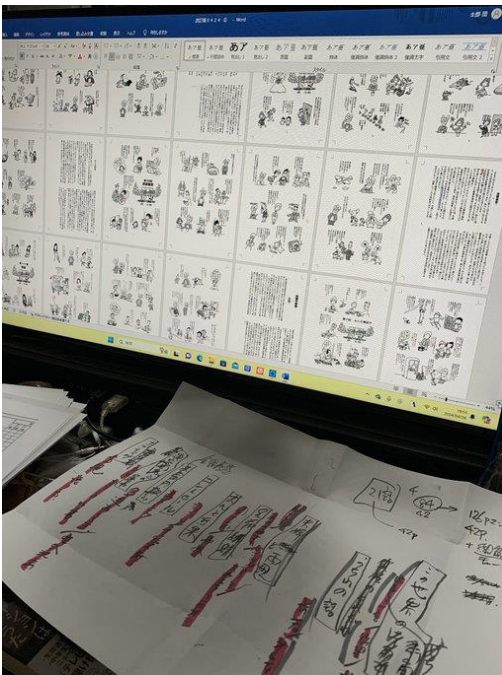
4/19 20 数年ぶりに養老天命反転地訪問。日帰り遠足仲間 N と早朝出発。ランチは待望の山盛りアサリうどんの「得」を大垣市の丸亀製麺で。その後、輪中館を見学。徳川幕府が命じた木曾三川の治水工事に、薩摩藩士が借り出され多数亡くなったり、莫大な費用を負担した史実。社会科授業の記憶にあった。



4/25 よく知らない花が自宅に咲いていたり。仕事場近くのおばざい屋に出かけたり。丸善で目についた文庫が面白かったり。このところの関心、自分が知っていることは何なのかという疑問の解明用の本をみる。そんな事をしてしていると楽しくて日々が過ぎる。気づいたら SNS 発信が滞っていた。元気です。



4/26 新刊の編集に関わってくれる人の声を受けて、大幅な構成改変に取り掛かった連休前。時間にゆとりがあるのも手伝って、思いがけず意欲的に修正に取り組んでいる。いろんな背景の人に読んで貰っての声はありがたい。専門と一般との架け橋をどう形にするかが今の作業だ。



4/27 注文したものが届いて、読み始めてあれ??と思った。本棚も自宅4ヶ所、仕事場2ヶ所と乱立しているから、探しても見つからなそうだなと思った。でもGWは暇だからと自宅の本棚1から見て回ったらすぐ見つかった。再読し始めたが面白い。ならばもう購入の必要はないのだが買うんだなあ。



4/28 掛軸漫画展のための発送準備。明日、集荷に来てもらう。5月はルキーナ金沢で三週間、豊中・刀根山医療センターで1ヶ月、大阪高槻市で1日展をする。見てくれる人が在るのは有難いし、その準備をしてくれる各地の人にも感謝だ。作業ついでに自宅壁面に、山本容子と篠原ユキオの作品を掛けてみた。



5/1 今年も年に4回、ブレイクアウトルームでの話し合いを多く含めた、zoom参加型のプログラムをやります。ぜひ、ご都合つけばご参加ください。第一回は5/15です。

## 【木陰の物語】で家族の構造理論を読み解く会vol.3

『木陰の物語』で家族の構造理論を読み解く会 vol.3

『木陰の物語』で  
家族の構造理論を読み解く会

オンライン講座  
STEP2!

家族の構造理論を「知る」段階から「分かる」「使う」の段階にステップアップしてもらうことを目的に「ステップ2」と位置付けたオンライン講座を、一昨年、昨年に引き続き、年4回（季節に1回）の設計でスタートします。誰でも参加が可能ですが、条件に近い制約があります。詳細は以下お読みください。

5/3 自宅にいるGW、動かないのはいけないので、ラジオ体操の後、ウォーキングマシンを。歳なんだろうが、10分もやると息が上がる。でも30分は我慢して頑張って、脈拍も120くらいまで上げる。しばらくやってると汗ばんできて、辛さはなくなる。それにしても年齢は正直なものだ。他に書くことがない。



## 金沢福祉用具 情報プラザ

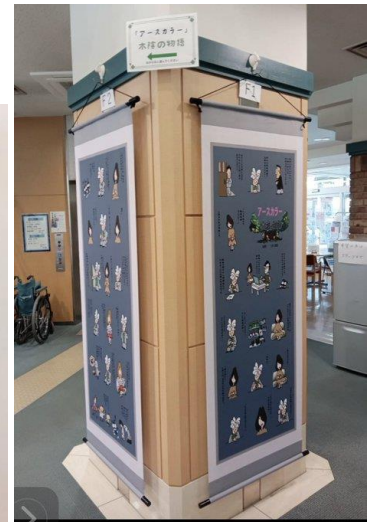


5/4 私には3日の深夜だが、4日の午前3時半。もう寝ようと思ってから、PC作業が捗り始めた。天邪鬼極まりないが、昼間ちっとも気持ちに乗ってこなかったのに今頃だ。でもこういう流れは良いものが生まれる気配。いつ起きても寝てもいい人生の巡り合わせになっているのだから、使わぬ手はない。

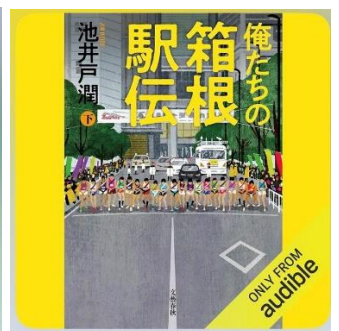
5/4 少し読んで、投げ出してしまった本の山の中で暮らしている。つまらなかったのではない。読み続ける根気がなかった。それに、ごく一部でも、納得の記述に出会えた。身の回りに色々なテーマの本が転がっているのが楽しい。読み切れていなくても、それを選んだ物語は記憶の中にある。



5/5 お知らせです。金沢福祉用具情報プラザで木陰の物語掛け軸マンガ展が始まります。3週間と長丁場です。これまで最多の10作品、掛け軸20本が展示されています。お近くの方、能登地震、被災地支援にお出かけの方、帰路などにぜひ機会を見つけてご覧ください。5月25日は会場で漫画トークも開催です。



5/8 駅伝の小説って、どういふシチュエーションで成立させるのかなあと、なんとなく読む前から見えているような気がしていた。しかし、なるほど、こういう手があるのかと感心をした。長時間、楽しく聴き切れた。夜は草津の家族療法勉強会。仕事終わりの参加者が熱心に集まってくる。



5/9 本日の立ち回り先。Dr.stretch 1h、hair salon HANDS 1h、TULLY'S COFFEE 3h おやおや横文字ばかりだ。長居したコーヒー店は新刊の構成をやり直して、校正に手をつけていたからだ。仕事場への帰路、筍ご飯とおでん、胡麻和えを購入。遅めの夕飯。



5/13 5月10日からスタートしたはずの漫画展の知らせがない。変だなと問い合わせると、管理者から政治的だとの理由で、1日で撤収させられ腹だいたいと世話人が言う。どこが政治的?とも思ったが、こんなこと近年ないなあと面白くなった。描いているものに少しはそんな空気があったのかと喜んでいる。



5/11 混雑した車中で、本の改稿作業に勤む。新幹線久しぶりだなあと手帖を見たら2月の東京WS以来だった。GWは京都にじっとしても街は大混雑だったが、その熱が少し治って私的的日常が戻ってきている。そんなわけで、あちこち遠征の日々も戻ってきたというところだ。



5/17 漫画展絡みの表現の自由問題?はまだよく分からないまま動いている。新刊のための大構成変更にかかりきっていたのが、おおかた仕上がった。クローズドのzoom勉強会2024がスタート。仕事場近くにこんな夕飯をとれる店がコロナを乗り切っている。おぼんざい定食をかやくご飯に変更、生姜焼きを+して2340円。外国人にばれていないようで、今のところゆっくり食事が出来る。

5/12 東京泊の翌日、横浜で暮らす娘の子に会う。公園に行きたいそうで、日産スタジアム周辺のスポーツ公園に。初めてだが、たくさんの親子がサッカー、スケボー、ドッグランなど楽しんでいる。都会のこういうインフラに感心する。楽しく過ごして帰路の車中ははまっているあさのあつこの時代物。



5/17 高校山岳スキー部から一緒だったSが亡くなった。妹の夫になっていたから義弟でもある。60年付き合いだった。家族だけで見送るつもりだったそうで、入院の様子を聞こうと電話したら、今晚お通夜だという。お葬式は行く

よと告げて今、見送ってきたところだ。身近な人が亡くなる  
ことが増えた。



5/18 自宅を早めに出て伊丹空港のラウンジで新刊の二  
稿仕上げに取り掛かると捗る。ANA で札幌に着いてホ  
テルのスタバで続き、おおかた完了する。夕食は、世話  
人と郷土料理を出す、昔ながらの居酒屋風の店に。ハッ  
カクの刺身と骨せんべい、初めて食べた。ルイベ、ホヤ、  
山菜天ぷら等々美味しくいただく。



5/19 札幌 WS、40 回目になるそうだ。気持ちいい5月  
の朝、会場に向かう途上は緑が美しい。プログラムは快  
調に話し、想像してもらいを繰り返す六時間。終了後、  
思いがけず明日 77 歳を迎えることを祝ってくださる。あり  
がたいことだ。



5/20 青池、十勝岳、富良野近郊で、あれこれ見たり食し  
たり。残雪と新緑、いい季節の北海道の知らないところ  
を案内してもらった。よき休日だな。



## 新連載

# 連想映画館

## Playback

2000年代から10年あまり、別のところで連載していて、ごくわずかのみにしか読んでいただく機会のなかった原稿の再掲です。

### ペパーミント・キャンディ

2000年公開 韓国映画

監督 イ・チャンドン

韓国/NHK 共同製作



#### 自殺

日本は先進国の中で突出した自殺多発社会である。原因も経過も様々だし、なにより多くは疾病の分類で語られる。それは承知した上で、でも人はそれまでの人生を生きてきて、そこに至っているのだからなと思う。

韓国映画「ペパーミント・キャンディ」の始まりは河原のピクニックである。昔働いていた会社の同僚達が、久しぶりの再会に歓声を上げる中に、明らかに浮いた男が一人いる。彼は懐かしい時代の記憶に、安心して一時浸れるような現在を確保できなかった。

「昔来た頃には……」と思ひ出話に花咲く河原で、旧知達のざわめきを耳にしながら、なぜ自分はこんなに遙か遠くに来てしまったのだろうと思う。するはずのなかったことを重ね、こんなは

ずではなかった時間を過ごさなければならない。もう一度あの頃に戻りたい。戻ることが出来たらきっと他の人生を選んだに違いない……そう思いながら一方で、何度やっても同じ人生しか選べないのかもしれないとも感じている。フラフラと河にかかっている鉄橋の上に出て、仲間達の語らいを見下ろしながら過去を思う。

列車がトンネルに入って暗くなり、出口が近づくと明るくなる。映画はこの繰り返して時間をさかのぼってゆく。そしてこの男が、韓国社会のありふれた青年の一人として、恋をし、二年間の兵役義務を果たし、又新しい仕事へと向かっていったことを観客は知る。

やがて鉄橋に列車がさしかかってくる。ひよつとすると子どもの頃、機関手に怒鳴られながら、直前で線路から飛び降りるような馬鹿な遊びもしていたかもしれない。そうだあの頃は、決心すれば何時だって飛び降りてしまえた。だってまだ何も始まっていない未来を考えると命は惜しかった。しかし今日、彼はその線路から飛び降りない。もう飛び降りて、やり直す人生などないのだと思ってしまった。そして、気づいた人たちが遠くで騒然とする気配を感じながら、「こんなはずではなかった……」、そんな眼差しと共に消えてしまう。男にとって、ありたかった人生とはいったいどんなものだったのだろう。

もし……

もしあの時、ああしていなかったら……、もしあの時、あの人の方に向かって歩み出していたら……、そんな分岐点は誰にもあるだろう。

『……(後でなら何とでも言える)』、そんな思いを胸に批判の矢面に立つこともある。浴びせられる言葉をその通りだと思ひながら、『(でも、その時には、そこまで考えられなかった……、あるいは俺は俺なりに精一杯頑張っていたんだ……)』と心の中でつぶやいている。そして、他の人はそうではないのだろうか……とも思う。

たいていの物事には時と共に明らかになる結果があつて、議論はしばしば、辿り着いた結末を前に繰り返される。それは仕方のないことであり、渦中にそれ程全体を見渡した判断など出来たはずもないことはみんな承知している。だからそんな正論は、後出しジャンケンの勝者のようにしか思えないし、今更強調されるまでもなく分かっている。

それにも関わらず、「こんなはずではなかった、どこで違ってしまったのだろう。俺は間違っていたのか……」、そんな男の声がずっと聞こえ続ける。

あまりにも多くの間違いをしてしまったために、彼にはもうどこにも行き場がない。誰に言っても仕方のないことだとは判っている。自業自得だと言われれば、そうだと思う。しかし、誰にも知られず、誰にもわからないこととして片づけられるのはあまりに悲しい。だから分かってもらいたいのではない。ただ、とにかく見ておいて欲しい。分からなくていいから、自分を見知らぬ誰かではなく、「あいつどうしたんだろう?」と、固有名詞で思っていて欲しい。

いろいろあった自分ではなく、まだ何も始まっていなかった自分を知っている旧知に、「どうしちゃったの?」と疑問形のまま、別れを告げたい。そんな思いでたどり着いた河原ではなかったのか。

## 時間

映画の時間は当然前に進んで行く。たとえ物語に回想シーンが含まれようと、時間はそこから前進している。男は自分の人生がその様に時を刻んできたことを拒否はしていない。しかし、なぜこんな所に自分は辿り着いてしまっているのかと考えると、選ばなかった人生や、選ぼうとしなかった誰かとの人生のことが、取りかえしのつかない過去として想起してくるのを抑え込むことができない。

かつてこの河原で、自分に思いを寄せてくれている女性に、青年期の気まぐれのように語った写真家の夢。それを彼女はずっと覚えていた。それは愛する男から、そっと自分だけに告げられた見果てぬ夢のように思われた。その実現のためにしてあげられることをと、コツコツ蓄えた貯金で彼女はカメラを買う。しかしその頃には、二人の人生はもう交わることのない歩みを始めていた。

手渡せぬまま時が過ぎる。結婚し、子どもももうけた彼女が余命幾ばくもない病に伏せていることを、探し当てて訪ねてきた夫から知らされ、病院に会いに行くことになる。そこで彼女が大事に持ち続けていたカメラを手渡される。これを受け取る資格も、心もない自分はたまたま寂しい。自分のことなどまだ何も分からない中で、たまたま口走っただけのこと。あえて言うなら、相手の関心をひくための口から出まかせに近い気まぐれだ。

それから長い時間があって男は思う。あのカメラが意味を持つ自分を生きられたら、今みたいな自分ではなかっただろう。大切に思い続けてもらう価値もない自分。そんな思いが生きる意欲を砕いてゆく。愚劣な人生だった。

## 美しい人生

兵役についてみて思いがけない自分の弱点に気づく。その

反動のような職業選択で警察勤務することになる。時代は大規模なデモや学生運動弾圧の渦中にある。公安警察に配属され、地下運動主謀者の取り調べで初めて拷問をする。「人生は美しい」、凄惨なシーンの中で、痛めつけられている男の口から出た言葉だ。

やがて時は過ぎ、時代のテーマも過去のものになり、人々も皆、それぞれの場所に散った。過ぎてしまった肉体的苦痛もやがて遠くなった。しかしそこにあった言葉の記憶は消えない。二人の男が再会するのは、何でもない町の焼き肉屋のトイレだった。もう忘れてしまっていたであろう男に彼が「人生は美しいか」と問いかける。テーブルには男の妻と子どもたちがいた。過去は過去として納めた男は、いま一人の家庭人として生きている。おそらく、もう人生は美しいなどとは語っていないだろう。

しかし彼は自分の家庭を安定して持つことができない。仕事も家族も、いやもっと根元的な意味で、誰かとの関係空間で自分として居る場所がない。

人生が美しくなるのは、その終末が見えて来たときではないだろうか。本当は限られた人生を、まるで無限であるかのように思っても、それ程大きな誤解として、傷つくことのない状態で、毎日が過ぎていく限り日常は限りなく些末な事の積み重ねだ。

それが突然、限りなく愛おしく思えたり、かけがえのない小ささだと思えたりするのは、もうそれを当たり前のもので持ち続ける鈍感さが許されなくなったときだろう。



主人公は気の小さい、それなりの能力は持った、多少思い上がりの強い小市民男だ。世の流れに身を委ねながら、自分らしくないと思うことも時にはこなしながら生きてきた。そんな男は韓国社会に五万という。彼にだけ特別なことが起きたわけではないのだろう。

しかし、しかしである。監督はインタビューで「出来れば二十

代の若者に見て欲しい」と語っている。まだ今から始まることばかりの人々に。その気持ちがとてもよく分かる。

多くの人は主張だけで暮らしを形作るわけにはいかない。「現実は何…」とか、「霞を食べて生きてはいけなから…」、「こういう時代だから…」、などと言い訳をつぶやきながら、既存世界のどこかに自分の居場所を探さなければならない。

それに、とりあえずだろうとなんだらうと、いったん見つかってしまうと、世の中はこれまでの並列平板な羅列ではなく、「そこから見える他の世界」という立体構図になる。それなりに分かったような気になるには都合のいい現象だ。しかしどこもがそうであるように、その世界にもきつと表があれば裏もある。

見つけたと思った世界が長居できるどころではなかったり、それまでの自分との大きな矛盾を内包することになったりすることも少なくない。その場に居続けるなら、精一杯の自己肯定も、生きるよすがとして受け容れられなくはない。しかしひとたびそこを離れてしまうと、かつて懸命に駆使していた自己弁護の言葉記憶も空しく、矛盾ばかりが己を責める。そして転がりだしてしまったものを、落ち着かせるのがいかに難しいかが実感される。

色が付き始めて走り出した人生は、かつてどんな色にも染めることができ、どこに向かって走り出しても良いように思えた時代が、もう自分の人生であったことさえ信じさせてはくれない。

## 思い出

軍務についていた時代、せつせと面会に来てくれていた彼女がそっと忍ばせてきたペパーミント・キャンディ。それを大切に保管していた自分。あの時、大切にしていたのはキャンディなんかじゃなかったのだと気づくのがあまりにも遅かった。

とにかく、何とも言いがたい感情がしばらく、自分の中に否応なく残ってしまう映画だった。内側に目を向けると、渦中に居ることで初めて見える事実にも出会う。そこで初めて、分かってからの決断が迫ってくる。

初めて触れた世界を天職だと簡単に感じてしまえる感性も、「これじゃない、これじゃない」をつぶやき続け、転職を繰り返す人生も、それほど上等なものには感じられない。これは誰もがどこかで考えたことがある、選べなかった方の人生への思いの物語でもある。

誰もがと書きながら、一点だけ違っているのは、多くの人たちは選んだ方の人生を補強する事実をたくさん手に入れたところ

で、こんな追憶作業に入るだろうということだ。

どこで間違ったのか分からないのに、間違っていた事実だけが実感されてしまうのは辛いだろう。「なぜ、こんな事になってしまったのか…」もう戻れないとわかってしまったから、「戻りたい…」と思ったのかもしれない。しかし、同窓会で懐かしい過去の感傷に浸るためには、確保できていなければならないものがあまりにも大きいことに気づいていなかった。

## キャンディ

私は子どもの頃からペパーミント・キャンディが好きではない。缶入りの「さくま式ドロップス」の中に、必ず少数だが入っていた真っ白な薄荷は、私にはトランプのジョーカーのように感じられた。いつまでも残ってしまうそれは、最後に缶の中でカラカラ音をたてる。ペパーミント・キャンディは私にとって音とセットされた記憶だ。

ではこの男のように、私の人生にとって重要な分岐点にあった物とはいったいなんだろう？ 私だけではない。あなたの人生にとって、もしその時、手を伸ばしていたら別の人生だったかもしれないペパーミント・キャンディーは何ですか？



# 57・この頃気になること…

原町幼稚園園長 鶴谷主一（静岡県沼津市）

「幼稚園の現場から」というタイトルなので、できるだけ「現場の具体的なこと」を心掛けて書いていますが、最近気になることが多くて、今回は心の内を吐露するだけに終わってしまいますが、最近幼稚園で感じていることをレポートします。

## ■子どもの発達のこと

いちばん気になるのが、最近の子どもたちの発達です。幼稚園なので、早くて満3歳からの入園となるので、2歳頃から入園の相談を受けて、受け付けていくのですが、いままで出会ったことのない様子の子どもたちに出会います。

おもな気になる点は、『食事、排泄、ことばの遅れ』。基本中の基本ですが「いったい、いままでどうやって育てられてきたの？」と疑問符のつく子どもたちの数が、数年前では考えられないくらい増えてきているように思います。園の職員が集まって雑談しているときに、この頃気になることについて話してもらいました。

## ■食事について

白米（ごはん）しか食べられません。  
逆に白米（ごはん）が食べられません。口に入ると涙目になって吐き出しそうです。でも海苔が巻いてあったり、味がついていれば食べられます。

揚げ物しか食べたことがありません。

野菜全般がダメです。繊維が口の中に残るのが嫌みたいです。

水が飲めません。ジュースやスポーツドリンクなら飲めます。

逆に水しか飲めません。

お菓子のおにぎりせんべいが噛みきれません。細かくすれば食べられます。

アンパンマンポテトすら噛みきれません。3歳ですが、離乳食程度の固さのものしか食べられません。

全般に固いものが苦手、汁物が苦手です。そういう子は一様に顎がほっそりしています。

スプーンもフォークも使えません、手づかみでしか食べられません。

コップ、ましてや水筒から飲むことができません、不器用でこぼしてしまいます。口の形をどうすれば飲めるのかわからないので、下唇を引っ張ってあげたりして練習しています。

自分で靴を履けません、履こうという意欲も見られません。どう力を入れたらよいのかわからないのです。

トイレの洗面所の蛇口をひねれません。指を差し出して待っています。お家ではセンサー付きの蛇口なのでしょうか？

ポンプ式の泡ソープのプッシュも自分でできません。力が入りません。

## ■排泄について

満3歳で入園してくるほとんど9割の子どもたちは、おしめ着用です。

おしめが取れている子どもは滅多におらず昨年一人居て皆が感心したものです。

「トイレでしたことがないんです」という声は珍しくなく、園でトイレに行かせるのに多少苦労しますが、保育者の誘導によって、早ければ初日からトイレに行くことができます。便器に座っても出ない子どもも一定数いますが、そんな子はおしめじゃないと排泄できないパターンになってしまっています。

それでも、幼稚園で練習して年少までにはほとんどの子どもがトイレでできるようになります。…が家庭ではおしめを着用したり、年長になっても就寝中おしめ着用は3割はいます。

「7月のお泊まり保育ではおしめをつけて寝かしません！」と宣言しているので、そこまで

にはなんとか取って！と努力してもらおうことにしています。

「幼稚園に入園するまでにおしめは取らなきゃね！」という話は20年以上前から消滅しています。こんな話を知っている人も今や祖母世代でしょうか。

## ■ことばの出ない子どもが増えましたねー

「あ」しか発音できない子もいました。こちらの言っている意味はある程度理解できるのですが、自分の意志を伝える手段は「あ」のバリエーションでやってきます。滑舌も悪いです。

まず入園前に、ことばが通じるか保育者が遊びながら話しかけたりするんですが、会話ができるとホッとします。きちんとキャッチボールができていなくても子どもなりの会話でよいのです、それができる子どもが少なくなっている気がします。

逆に、小学生が使うような言葉で言葉遣いが悪かったり、YouTubeで流行っているような言い回しでペラペラ喋る子どももいます。一般的に文字・数字はよく知っていて、読みには強い子も多く、アルファベットを読める子も以前より多いです。

\* \* \* \* \*

園の8割の子どもたちはすくすくと順調に育っていますが、気になる2割の子どもたちの割合が今後増えていきそうな勢いに、不安が広がっていきます。

コロナ・マスク生活で子どもの発達に阻害されたこともあるでしょうし、ICTの発達で生活様式が変わってきたこと、便利なものが増えたこと、価値観の多様化、新しい育児情報がブームのように広がったりすることなどいろんな要素がからまって現代の子どもたちの発達が気になる状態になってきているんだと思います。

あくまでも私見ですが「子育てのアウトソーシング」と「子どものペット化」が進んでいるような気がしてなりません。その中で子どもたちの「様々な生活の経験」が圧倒的に少なくなっており、画一的な経験しかしていないので発達そびれみたいなことになっている。いまどきの親が怠けているとは思いません。ながねん人類が積み上げてきた正しい子どもの発達の知識が新しい親たちに届かず、愛情のエネルギーが違う方向に向いてしまっているのではないかと気になっています。

「どう遊んだらよいか分からない」という声も最近耳にします。育児の方法が伝えられていないことも一因かなと思います。

気になる子どもたちも、保育者が適切に根気よく子どもと相対して保育を進めていくと「もっと早く入園できていればなあ…」というぐらいみるみる発達する子どもも何人もいます。子どもはポテンシャルを持っているんですが、やらせない。やってあげてしまうことで発揮できなくなっているのですね。それに気づき開放してあげるのが私たちの仕事でもあるんですが…。(^\_^;)ガンバロ！

## ■あそび

子どもたちのあそびの最近の傾向として、遊びが単一で稚拙。遊びの工夫がなく広がらない。戦い関係の遊び、武器を作る遊びが多いという話が出ました。

家での遊びを聞いてみると、スイッチでゲームをしている子どもの話が活発で、特に男の子は圧倒的に多いです。

家庭訪問で発覚したのですが、すでに四六時中スイッチやスマホのゲームから離れられず、止めさせようとするとき声を上げたりひっくり返ったりして暴れるので、親も手をこまねいているゲーム依存症の予備軍になっている子どもが2名おりました。年長の1人は家でのゲーム時間を制限するための取り組みを担任と始めました。

## ■保護者（お母さん）の傾向

として感じていることは、

子どものペースに合わせる親が多い気がします。子どもに「どうする？」と聞いているんなことを決めさせるかんじです。

自分の子どもを叱らない、お友だちにも謝らせない。

究極の話は、公園で出会った乳児の母子に「男の子さんですか？」と尋ねたところ「性別は子どもが決めますので」と言われて驚いたという話があります。（実話です）



「幼稚園の現場から」ラインナップ

- |                                 |  |
|---------------------------------|--|
| 第1号 エピソード (2010.06)             | 第31号 幼稚園の音楽教育<br>(その2・こどものうた) 2017.12        |
| 第2号 園児募集の時期 (2010.10)           | 第32号 幼稚園の音楽教育<br>(その3・コード奏法) 2018.03         |
| 第3号 幼保一体化 (2010.12)             | 第33号 (休載)                                    |
| 第4号 障害児の入園について (2011.03)        | 第34号 働き方改革・一つの指針 (2018.09)                   |
| 第5号 幼稚園の求活 (2011.06)            | 第35号 働き方改革って難しい (2018.12)                    |
| 第6号 幼稚園の夏休み (2011.09)           | 第36号 満3歳児保育について (2019.03)                    |
| 第7号 怪我の対応 (2011.12)             | 第37号 満3歳児保育・その2 (2019.06)                    |
| 第8号 どうする保護者会? (2012.03)         | 第38号 プールができなくなる!? (2019.09)                  |
| 第9号 おやこんぼ (2012.06)             | 第39号 跳び箱 (2019.12)                           |
| 第10号 これは、いじめ? (2012.09)         | 第40号 幼稚園にある便利な道具〈紙を切る〉<br>(2020.03)          |
| 第11号 イブニング保育 (2012.12)          | 第41号 コロナ休園 (2020.06)                         |
| 第12号 ことばのカリキュラム (2013.03)       | 第42号 コロナ休園から再開へ (2020.09)                    |
| 第13号 日除けの作り方 (2013.06)          | 第43号 ティーチャーチェンジ (2020.12)                    |
| 第14号 避難訓練 (2013.09)             | 第44号 除菌あれこれやってみた (2021.03)                   |
| 第15号 子ども子育て支援新制度を考える            | 第45号 マスクと表情 (2021.06)                        |
| 第16号 教育実習について (2014.03)         | 第46号 感染予防と情報発信 (2021.09)                     |
| 第17号 自由参観 (2014.06)             | 第47号 親子ソーラン節 (2021.12)                       |
| 第18号 保護者アナログゲーム大会 (2014.09)     | 第48号 親子コンサート (2022.03)                       |
| 第19号 こんな誕生会はいかが? (2014.12)      | 第49号 うんちでたー! (2022.06)                       |
| 第20号 ITと幼児教育 (2015.03)          | 第50号 子どもが育つ園庭・その1 木登りとブランコ<br>(2022.09)      |
| 第21号 楽しく運動能力アップ (2015.06)       | 第51号 子どもが育つ園庭・その2 砂場 (2022.12)               |
| 第22号 (休載)                       | 第52号 子どもが育つ園庭・その3 ストライダーと<br>Tonka (2023.03) |
| 第23号 大量に焼き芋を焼く (2015.12) 2019   | 第53号 リスクと安全・園庭編 (2023.06)                    |
| 第24号 お話あそび会その1 (発表会の意味)         | 第54号 夏の音楽会・動画 (2023.09)                      |
| 第25号 お話あそび会その2 (取り組み実践)         | 第55号 クリスマス劇・動画 (2023.12)                     |
| 第26号 お話あそび会その3 (保護者へ伝える)        | 第56号 こいのぼり製作 (2024.03)                       |
| 第27号 おもちゃのかえっこ (2016.12)        | 第57号 この頃、気になること (2024.06)                    |
| 第28号 月刊園便り「はらっば」 (2017.03)      |  |
| 第29号 石ころギャラリー (2017.06)         |  |
| 第30号 幼稚園の音楽教育 (その1・発表会) 2017.09 |  |

▶気になる記事・ご感想質問等ありましたら気軽に連絡ください。✉ [office@haramachi-ki.ed.jp](mailto:office@haramachi-ki.ed.jp)





福祉系

対人援助職養成の

現場から 57

西川 友理

### 社会人になる怖さ

社会人になるのが怖い、と言う学生がいます。何が怖いのか、と聞くと、

「責任ある立場になるのが何か怖い。」  
という答え。

「責任の何が怖いのかな。」

「んー 何か…なんやろ、なんか、怖い。

“～せねばならぬ”ということが増えそう。  
重そう。」

「重そう？」

「うん、なんか重そう。なんかわからんけど……そういや、そもそも責任って何やねんやろ？責任って、何ですか？」

…と改めて聞かれると、何と答えたらいいものか、少し考え込んでしまいます。

何か取り返しのつかないことをしてしまった役職の重い人が、「責任をとって辞任する」という事はよく耳にしますが、「責任を果たすために辞めない」という人もいます。続けることも責任、やめることも責任です。責任ある仕事を欲しがるといえば、責任ある仕事を嫌がる人もいます。「〇〇について、責任は感じているのか」と聞かれると、何か事の重大性をわかっていないと責められているような気がします。「責任感がない人」というと、ちょっと一緒に仕事をしたくないなと思ってしまいます。

責任とは、何なのでしょう。

### 責任とは

デジタル大辞泉によると、責任とは「1、

立場上当然負わなければならない任務や義務。2、自分のした事の結果について責めを負うこと。特に、失敗や損失による責めを負うこと。3、法律上の不利益または制裁を負わされること。特に、違法な行為をした者が法律上の制裁を受ける負担。」とあります。なるほど、当然「負う」もの、時には「負わされるもの」。そりゃ「重い」はずです。

### 英語で「責任」は…

ところで、責任は英語で何というでしょう。辞書で調べると、2つの単語が出てきました。

Responsibility と Accountability です。日本語ではどちらも「責任」ですが、この2つは明確に意味が違います。

response(返す) に、ability(～できること)をつけて、responsibility、です。つまり、responsibility と表す責任は「反応できる」こと。何かを担当する際にこれから発生する責任を指します。

これに対して accountability は account(説明)「ability(～できること)から成り、この言葉が表す責任は、「説明できること」。行ったこと、終わったことや結果についてこれまでであったことに対する責任を指します。

日本語で言う、責任を「負う」というのは、どちらかというところの「過去の後始末としての説明をせねばならない」という感覚がある accountability が強い印象を受けます。というか、それを将来的に引き受けるという事を先取りして「責任」と読んでいくように感じます。これに対して、責任

を「引き受ける」というのは、これから発生するあらゆることに自分が関係することだと引き受けようとする姿勢が感じられる responsibility が強い印象を受けます。

責任を負う、という言葉が重くのしかかるような印象を受けるのは、Accountability の印象が強く、responsibility の印象が弱いためではないでしょうか。

しかし、どちらの単語の意味も、「相手に対して、どう振舞うか」という事を示しています。反応するためには、まず、相手が何を言っているか、どうしてほしいと言っているのか、どういう様子でいるか、それを受け止めないとこれに応じた反応は出来ません。そう考えた上で、2つの単語の意味を合わせると、責任をとるとは「相手を“受け止めて”“反応”と“説明”ができる存在になるという立場を受け入れる」状態といえるかと思います。

支援者、保育者としての責任というのはまさにその利用者に対して「受け止め、反応と説明ができる私であることを受け入れる」ということではないでしょうか。

### 責任を負う？責任を引き受ける？

「…そういうことだったら、子どもに関わる現場に限らず、普段からしょっちゅうやってるでしょ。」

「？そうですか……？」

「子どもや保護者相手、もちろん上司でも、先輩でも、同僚でも、誰が相手でも、話を聞かない、どんな様子が見ない、思いを聞かない、反応しない、答えない、無視をす

る・・・そんな対応、したいと思いませんか？」

「いや、まさかそんなことしたいとは思わないです。」

「でしょ。だったらさ、今ボランティアや実習で、いや、家族や友人や、アルバイト先の人や大学で出会う人、その他、周囲の人に対してあなたがやっている、相手の様子を受け止め、反応し、説明できる私であるってことが、周囲の人に対して責任ある態度でいられている、ってことじゃないのかなあ」

「それが責任だって言われたら、確かに出来ているかも。・・・そっか、責任を負わされる、っていうのが嫌なだけで、私、普段から責任は引き受けてるっほい。」

「そうそう、誰かに負わされるものじゃなく、その部分の責任は私が引き受ける！って、そういう態度でいるといいと思いますよ。」

「うーん なんかそういわれたら、責任を引き受ける！ってかっこいい。面白いかも。」

「うん、責任はね、負わされるより、自分からガッと引き受けに行ったほうが、面白いことが増えると思うよ。」

### もう半歩、手を伸ばす

大阪にある「ゼロひゃく相談支援センター」の水流添真さんというソーシャルワーカーさんとお話していた時のことです。水流添さんは、“ゼロひゃく”の名前とおり、0歳から100歳まで、あらゆる人の支援について、地域を基盤に展開していくソーシャルワーカーとして、日々活躍していらっ

しゃいます。

現在、クライアントに対するソーシャルワークは一人の人、1つの事業所がすべて賄えるものではありません。地域の中で暮らしている人を対象にした支援は、あらゆる事業所、機関、施設、専門職、ボランティア、住民などによるネットワークで行われます。水流添さんは、自らクライアントを支援しつつ、関係するあらゆる人々のコーディネートも行っている方です。

「…そういう時にね、各方面に対していつも、あともうちょっと、あともう半歩だけ、手を伸ばして！って思うんです。」

と、水流添さんはおっしゃいます。

「例えばヘルパーさんが、あるお家に行きましょう、必要な食事の用意やら家事やら、決められた仕事をするじゃないですか。その時に、“最近どう？”とか、“この前、〇〇にお出かけされたんですね、どうでした？”とか、そういうたわいもない会話を、そういうところからでいいんです。たわいもない会話は決められた仕事じゃないですけど、単に決められた仕事をするだけじゃなく、もうちょっとだけ、クライアントさんを知りたいとか、近づきたいとか、理解したいとか、そういう気持ちから出てくるあとも半歩を、ネットワークにかかわるそれぞれの支援者が行うことで、より強固なネットワークが形成されて、その人に対する支援が豊かなものになるんです。」

「もしかすると、“責任の範疇を超えて、スタンドプレーをする”とか、“クライアントとなあなあの関係になる”という事を推奨しているように誤解されるかもしれないけれど、そうじゃないんです。」

「自分の仕事、自分の責任の範囲はここまでだから、それ以上はしない、じゃなくて、

自分の責任の範囲はこれだけとされているなら、じゃあその中で、このクライアントさんとその家族のために、どこまで自由に手を伸ばせるかな、どこまで自由にふるまえるかな、と考えるんです。その自由にふるまう部分は、自分が考えて、自分でやって決めちゃうんです。」

「そう考えると、出来ることはもっともっと、たくさんあるんです。クライアントさんに対して、そういう考え方の人が集まると、すごくいい支援ができるんです。」

相手を誠実に受け止めて応答する役割を引き受ける、その役割を担うぞ、と、腹をくくる。自分から責任を引き受けに行く支援職というのは、こういう人のことを指すと思うのです。

そして、このような支援職の方は大抵とてもイキイキとお仕事をされているようにお見受けします。

### **システムは明確に、運用は柔軟に。**

私はよく、「システムは明確に、運用は柔軟に」という言葉を使います。その活動について、それぞれの人、業務、役職、組織は、それぞれ何の役割を担い、どういう機能を持つものか、といったワク組みをきちんと整えることにより、本人も、関係者も、システムに沿って安心して、見通しを持って行動することが出来る。だから、システムは大切です。これは責任の所在を明らかにするためにも必要なことです。

しかし、特に対人援助職は人同士の仕事、人相手の仕事なのだから、実際にそのシステムを運用する時には、柔軟に、システムに縛られ過ぎないということを考えたいと

思うのです。先に挙げた水流添さんのように、「そのクライアントさんのために、どこまで手を伸ばせるかな、どこまで自由にふるまえるかな」と考えて、自分の出来る責任を多少喰い気味にでも、引き受けに行く。そのほうが、充実した支援が出来ると感じています。

### **押し付けられた責任感と、**

#### **内側から生まれる責任感**

「責任は私が取るからどんどん自由にやんなさい！」という上司の下で働く部下たちは、めったに失敗をしない、それどころか「自由にさせてもらえるなら、よし、これをやってみよう。やると決めたからには、頑張ろう。」と、むしろ責任感を持っていきいきと仕事をするようになる、と聞いたことがあります。

「責任をとれ」「責任をどう考えているのだ」と人から負わされる責任ではなく、「自分でやっていこう」という責任の面白さや楽しさに気付いた時から、仕事はがぜん楽しくなっていきます。そして、みんながそれと気づかず責任感を持って前向きに仕事をするから、トラブルは発生しにくく、働きやすい職場になる。

だからどうか、学生たちが、「責任は上にとるから、どんどんやんなさい！」と言われてもらえる職場に就職できますように！と願ってしまうのです。

# ああ、相談業務

## ～ 彩人くんの話 ～

かうんせりんぐるうむ かかし

17

河岸由里子（公認心理師/臨床心理士）

今回は非行について取り上げたいと思う。最近、非行は減って来た。少年院にはこどもたちが少なく、閉鎖になった少年院もあるくらいだ。このことについては最後に述べたいと思う。

### 家族

彩人君は中学2年生13歳。家族は母方祖母62歳、父親40歳、母親35歳、弟小学校5年生、妹小学校2年生の6人家族である。家は祖母の持ち物である一軒家。職業については、父親は土建業、母親はスナック勤務、祖母は清掃パートである。

北海道では、土建業の多くが冬場は除雪の仕事をしている。除雪は夜が多い。従って、子どもたちは夜祖母とともに過ごすことが多かった。

祖父とは母親が小学校低学年の時に離婚していて、音信不通である。父方祖父母は既に他界していた。

### 相談経過

彩人くん（以下本児）との出会いは6月の終わり、夏休みまで1か月を切ったところだった。北海道は初夏。町ではライラックが咲き乱れていた。

きっかけは学校での問題行動であった。とにかく学校での態度が悪いのだ。先生に対し、いちいち反抗的な言葉を吐き、授業妨害をする。弱い者いじめをするわけではないが、喧嘩も多い。そんな状況があって先生方も手を焼いていた。先生方とも話し合い、もしできたら一度相談室に連れてきてほしいと伝えていた。そんなある日、先生が本児を相談室に連れてきた。

先生と話すのも嫌がる子が、いきなりスクールカウンセラーと話せと言われて連れてこられたわけである。入ってくるなり、「なんでこんなところに来なくちゃいけないんだ！」と腹を立てて、文句を言う。「そうだよねえ、嫌だよね。来たくなかったよね。じゃ、授業に戻りたい？」と言うと「授業も面白かねえ、わかんねえし・・・」と

答えた。ここで「うるせえ！話しかけんな！」となった場合は、黙って見守るしかないし、物を蹴るとか何か暴力的なことが始まったら出て行ってもらおうのだが、本児の答えはそういう形ではなかった。内心ほっとした。

そこで「授業に戻りたくないなら、此处で時間つぶししてみるか」と誘って、座るよう促した。本児はしぶしぶ座り、そっぽを向いた。話などしたくないという意思表示である。態度は反抗的だが、顔を見るとあどけなく、可愛げのある感じがした。もっとひどい子もいるが、まだこの子はそこまで落ちていないと感じた。しばらく黙って様子を見ながら、どうやって関係づくりをしようかと考えていたが、まあ、思いつくことを聴いてみようと思い、「〇〇君（名字）はゲームする？」と聞いた。今の子は殆どの子がゲームをしているので、ゲームの話だと乗りやすい。今の時代ならフォートナイトと言うところだろうが、当時はPSやスイッチなどはない時代である。ファミコンのゲームが主だった。

本児はちょっと気持ちを緩めたようで、『する』と答えてくれた。（以下『』は本児）「何のゲームするの？」と聞くと『××』と答えた。答えてくれたからにはしっかりつないでいかねばならない。「××か。流行ってるよね。バトルロイヤルゲームだね。友達とやってるの？」と言うと、ちょっと気持ちがこっちに向いた。こんなおばさんがこのゲームを知っているのかと言う顔で筆者をみたのだ。そして短く『ああ』と言った。「ファミコンでやってるの？それともPCエンジン？」『PC』「君は仲間内では上手な方なの？」『まあね』「そうなんだ、すごいね。じゃあ仲間頼りにされちゃうね。下手な子いるとイラつく？」『ああ、だから、下手なやつとはやらない』「それは賢いね。上手い子何人くらいでやってるの？」『2・3人くらいかな。』・・・んな感じで話が少しずつ盛り上がっていった。ほかにどんなゲームをするのかとか、ゲーム以外にも好きなことはあるのかとか、ゲームの話から展開して繋げていった。本児の言葉数も少しずつ増えていく。

何とか授業時間一コマ分話をして、「また話しにおいでよ。君と話すの楽しいから」と言うと、『授業が面白くない時来るか』と言って帰って行った。

簡単に相談室での様子を先生に報告し、もし教室で授業妨害が酷くなったら、また相談室に送ってほしいと伝えた。その日はたまたま相談が少なかった。空いている時間を伝えておいた。

最初に来たのが2時間目だったが、給食後5時間目に再び送られてきた。

「あら、いらっしゃい。授業面白くなかったか」「『ああ、あの先公嫌いだから』」「え、誰？何の先生？」「『社会』」「△△先生か。ちょい口うるさいか」「『それ、イチイチうるさい。声は小さいし。俺一番後ろだから聞こえない。聞こえないから聞こえないっていうと、「お前がうるさいから聞こえないんだ」って言いやがって……。俺はしゃべってねえのによ』」「それは面白くなかったね。3、4時間目は大丈夫だったの？」「『3、4時間目は体育だったから。』」「体育は好きなの？」「『バスケットだったから』」「バスケットは得意？」「『小学校の時少年団入ってた』」「そっか。それじゃあうまいほうだね。」と、とっかかりの会話を繋げていき、少しずつ本題に入っていった。学校で反抗的になるのは何故かなどと聞いたって答えてくれる筈もないから、そういう話ではなく、家での様子を先に尋ねた。

「〇〇君は、家族って誰々いるの？」とか、「お父さんって何してるの？」とか「お父さん怖い？」「お母さんは？」などである。家族の情報をここで得ておこうと思ったからで、本児はこれらの質問についてはあまり抵抗せずに答えてくれた。そして、前述の家族のことがわかった。話の中で、父親が暴力的であること、母親はネグレクト気味であること、長男であるため、妹や弟の面倒を見させられること、祖母はいるが、足が悪く、十分なケアをして貰えてないことなどが分かった。家に帰ると食事の支度はしないが、それ以外のことを頼まれる。やらないと父親に殴られるので、やらざるを得ない。家にいたくないから、遅くまで友達とフラフラしているとも言っていた。そうい

う時の言い訳は「友達と勉強していた」だそうだ。父親も母親も中卒(高校中退)で学歴がないので、本児には高校に行けとうるさく言ってくるそうだ。

父親が殴るのは今では虐待なので、その話もしたが、もう少ししたら俺の方が勝てるから、それまで殴られないように上手く立ち回ろうと思っているという。中々頭は切れるようだ。

それでも殴られてよいわけではないから、もし殴られたら警察に行くのも一つだよとは伝えておいた。しかし、友達と町をふらついている関係で、警察と関わりたくはない様子だった。何か悪いこと、例えば万引きとかもしているのかもしれないと思った。そういう時はストレートに聴いてみるのも一つだ。早速聞いてみた。「友達と悪さもけっこうしているの？万引きとか？」『まあね』『よく捕まらないね』『そこは上手くやるさ』『頭いいんだね。でも、そういつも上手くはいかないよ。いつか捕まるかもね。お酒とたばこは？』『友達んち行くとやることはあるけど・・・これ、チクったりしねえよな？』『しないよ。でも酒、たばこ、薬は脳に悪いからね。知ってるよね？』『まあね』『未来のためには折角持ってる良い頭を悪くしないようにしないとね。まああなたの頭だからあなたの勝手ではあるけど・・・そういえば、将来なりたいものとかあるの？』『別に。』『そっか。好きなことで何か将来につながるものがあるといいね』『機械いじるのは好きだけど』『へえ、手器用なんだね。機械って車とかも？』『そう。車は親父の車、いじらしてもらおう』などと話してまたら時間目を終え、教室に戻っていった。

学校での問題行動だけではなく、外でもいろいろやっている様子がうかがえ、これは警察沙汰になるのも時間の問題かもしれないと先生方と情報を共有していた。問題行動のことで保護者にいくら話をして、保護者は余り関心がない様子だとのことだった。この話は先生方との集団守秘とすることで外部には洩らさないよう伝えた。それを守ってもらえないと、本児との関係性にひびが入ってしまうからである。そして、このままだと

捕まるのを待つ方が話が速いかもと話していた。

この後も、7月に2回ほど相談室に来させられたが、本児とは雑談をして過ごした。関係はそう悪くはなく、学校の外での生活、主には喧嘩などの武勇伝を話してくれたりした。筆者はただ聞いて、「強いんだね」とか「すごいね」と言いながら聞いていた。「でもこのままだと捕まるよ」とはいっておいた。本児も『うまく逃げるさ』と強がっていた。

その後、夏休みにはいり、本児は夜間徘徊で補導された。一度は家に戻されたが、その後町で夜中に高校生ともめて喧嘩になり、警察の世話になった。こうしたことが繰り返され、9月には児童相談所に警察から送致され、児童相談所措置として結局児童自立支援施設(旧教護院)に入ることになった。

北海道内には児童自立支援施設が三つある。一つは大沼学園と言って、道南大沼にある学園である。二つ目は北海道家庭学校と言って、道北、遠軽にある。この二つは男子のみである。女子は北広島市にある向陽学園一つである。家庭学校以外は道立の施設である。家庭学校は日本でも珍しい民間運営の施設で、キリスト教系。敷地を鉄格子や塀、柵などで閉鎖隔離しない「解放処遇」形態をとっている。また、寮には寮監がいて、寮監家族と一緒に住む形をとっている。

児童自立支援施設に措置になる子は、虞犯行為(注)をくりかえしていたり、このままだともっと大きな犯罪を犯しかねない18歳未満の子(主に小中学生)で家庭ではしっかり管理監督が出来るそうもない子等である。本児は、何度か補導され、虞犯行為を繰り返していたが、まだ13歳であったことから、児童相談所から北海道家庭学校措置となった。期間は中学卒業までであった。学業については、家庭学校には遠軽町が遠軽中学校分校と東小学校分校を設置しており、本児は家庭学校内で中学の教育を受けられる。卒業はもともと在籍している中学校から卒業証書が出されることになる。卒業式には出られなくても、先生が卒業証書を持って施設まで来て渡してくれることも



多い。

施設での生活は、本児にとって楽しいものではなかった。勉強をしたり慣れない農作業をしたり、共同生活でもあるので、揉め事が起きないわけではない。揉め事を起こしては、指導員に叱られたりなだめられたりを繰り返していた。

一か月ほどたったある日、本児は施設から逃げ出した。冬場だと雪が深くて逃げだすには難しい田舎だが、夏場であれば、距離はあっても逃げることは可能だ。もともと開放施設なので、時々逃げる子がいる。他の施設でも逃げる子はいなのだ。

児童相談所から市に施設から抜け出し、車を盗んで逃げたという話が入り、どこまで逃げたのか、早く捕まってくると良いねなどと言っていた。車の運転を中学生がしていたら、警察に捕まるのも時間の問題と思っていた。盗んだ車が見つかったのは、なんと小樽だった。さてここからどこへ行ったのか？児童相談所や警察が探しに探した。結局本児が見つかったのはなんと沖縄であった。

本児は小樽からフェリーに乗り、本州に渡り、そこから更に、車を盗んだりしながら西へ移動し、お金も盗んで、沖縄まで行ってしまったのだった。

児童相談所の職員が沖縄で補導された本児を迎えに行き、どのように沖縄に行ったかが分かったそうだ。後で聞いてびっくりした。

本児は児童相談所に戻され、少年院に入るのかと思ったが、家庭学校の指導員の先生が迎えに来て話し合いをし、もう一度家庭学校で頑張るといって戻っていった。その後は冬になったこともあり、抜け出すこともなく、3年生になった。夏場はまた逃げ出すかもしれないと、施設でも気を付けてみていたが、本児はそういうことは無く、結局卒業までその施設で頑張った。勉強をしっかり見てもらえたことで学力が付き、本児は高校に行きたいと思うようになった。車や機械が好きだし、手先もそこそこ器用だしということで、工業高校に進学することとなった。施設の指導員の方たちが、勧めてくれたこともあり、工業高校の方でも快く受け入れてくれた。

高校入学前に、筆者も本児と逢う機会があった。

顔つきも良く、精悍な感じになっていた。

高校に進学して、悪い仲間とまたつるんだらろくなことにならないのではと案じていた。案の定悪い仲間とつるんだりはしていた。その後5年ほど経って、20歳になっていた本児が喧嘩で傷害事件を起こして捕まったという記事を新聞で見かけた。地方紙の隅に載った小さな記事だった。残念に思ったが、その後は新聞記事になることもなく時が過ぎた。その時の事件では、保護観察処分になったそうだ。しばらくして、風の便りに、結婚して子どもが生まれたという話を聞いた。家庭を持ってからは今も真面目に働いている。

## まとめ

非行少年の全てが、何度もつかまって、最終的に、やくざやチンピラになっていくわけではない。いきがって、馬鹿なことを繰り返し、完璧に犯罪者となって落ちるところまで落ちる子もいるが、あるところで踏みとどまり、その後は何とか普通の生活をしていく子もいる。

少年院を出た子の中にも、更生し頑張っている子、犯罪を繰り返している子と二手に分かれる。その境目はいったい何だろうか？やはり、そこには人が絡む。本ケースのように、良い人と巡り会えたことで、結婚し、家庭を築き、家庭のために頑張れるようになる子もいる。一方で、施設や少年院を出た後も、人に恵まれず、結局は悪い仲間との関係を切れずにそのままずるずると悪の道に行ってしまう子もいるのだ。

先日関東で死体遺棄及び損壊の罪で捕まった元俳優は、小学校の頃から子役として活躍し、俳優としてもそこそこ売れていたのにも関わらず、いつの間にか、落ちるところまで落ちていた。

子どもが悪い道に行ってしまうかどうかは、基本的には家庭の問題が大きい。本ケースでも、父母の愛情が十分あれば、施設に行かなくても済んだだろう。施設から出てきたときに、家庭が暖かく迎え、サポートしてくれていたなら、その後の傷害事件にも結び付かなかったかもしれない。高校でよい友達に出会い、良い先生に出会い、きちん

と就職して、真面目に働くことで、彼女とも出会い、良い家庭を築く、という人生になれたかもしれない。本ケースでは、一度傷害事件を起こしてはしまったが、その後良い彼女に出会い、家庭を持ち、真面目に過ごせるようになったのは、何よりであった。彼女の力によるところは大きいだろう。スクールカウンセラーとして、出来ることは少しもなかったし、わずかな間の関りでしかなかったが、あどけなさの残った最初の出会いの時の彼の顔を今も時々思い出し、あの時何かできたことは無かったかと考える。出来るとしたら、父母に会って本児への関わり方を変えてもらうことだったかもしれない。しかし、非協力的な保護者が面談に来てくれることは期待できない。時と出会いが解決してくれることもある。本ケースの場合も、結局時とともに変化し、人との出会いで変わっていったケースだと思う。

注：虞犯行為とは、保護者の監督に服しない性癖（深夜徘徊や無断外泊）、正当な理由がなく家庭に寄り付かない（家出）、犯罪性のある人や不道徳な人と交際したりいかかわしい場所への出入り（暴走族、暴力団への加入）、或いは自己また

は他人の徳性を害する行為をする性癖がある（援助交際や風俗店勤務）のいずれか少なくとも一つに該当し、「将来、罪を犯しまたは刑罰法令に触れる恐れのある行為」のことである。

参考：

最近の少年院の入所者数について

2024年2月現在の日本全国の少年院総入所者数は1640人（男1482、女158）である。10年前2014年の2月では2873人（男2596、女277）であった。これが15年前だと3565人（男3181、女384）である。年々減ってきているのがわかると思う。筆者の住んでいる千歳市には、北海少年院と紫明女子学院の二つの少年院がある。北海少年院は男子のみで定員150名。おやし狩りなどが盛んだったころは満員だったが、今は今年の2月現在62名だけ収容されている。また、紫明女子学院は定員56名で同じく今年2月現在7名のみでの収容である。北海道には他に月形と帯広に少年院があったが、月形は2019年に、帯広は2022年に閉院となった。いずれも入所者が少なくなったからと老朽化が理由である。北海道のみならず、全国的に少子化と非行少年の減少に伴い閉院が進んでいる。

# 路上生活者の個人史

## 第11回

竹中尚文

長崎 恵龍 氏(仮名)1958年生

生まれは徳島県です。昭和33年の生まれですから、現在65歳です。家族は五人でした。祖父と両親、私が長男で妹と弟がいました。父親の仕事ですか？ウチは特殊でした。父親の仕事というより、ウチの仕事といった感じですし、仕事と表現しにくいのです。宗教関係ということにしておいてください。

小学校と中学校は地元で行きました。高校からは教団が持つ学校に入学しました。家から離れて寮生活でした。高校も大学も宗教に関係なく一般の人たちもたくさん通ってきていました。私のような宗教関係で入学してきた生徒の多くは寮生活でした。町の人たちも私たちの学

校に温かい目で見えてくれたので、心地よい学生生活でしたよ。とてもいい学生生活を送れたと思っています。

大学を卒業して実家に帰りました。父親はまだまだ元気でしたから、父親の助手のような立場でした。父親は真面目な人で、私は敬愛していました。それがいつの頃か、父親の上司のような立場の人とそりが合わなくなりました。教団という組織で父親の上位の人がいたのです。その人は、父親より若いのですが父親に高圧的な態度を示していました。父親が年を重ねるにつれて私の責任も次第に大きくなりました。私が五十代になると私が父親に代わって主な立場になりました。そうすると私に対する上司の圧力がドンド

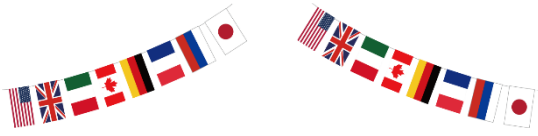
ンと強まりました。そこには私の父親に対する不満も込められていました。今でいうパワハラと言ってもいいかもしれません。

私たちの仕事は具体的な成果を出すわけではありません。生産高を示したり、営業成績を示したりすることはありません。心のつながりを重んずるのですから、そこでいじめのようなことを受けると本当につらいのです。信頼して心がつながっていてこそ成り立つ世界ですから、つらかったです。そんな中で、私の心がくじけたのです。どうしようもありませんでした。実家を出て、大阪に来ました。実家ですか？今は弟が守ってくれています。妹は嫁ぎましたので、弟は一人で実家を守ってくれています。弟はよく頑張っ

すし、弟には感謝しています。

私は六十歳を前に大阪に出てきて、とにかくお金を稼がないといけないので日雇いの仕事をしました。まだ若かったので肉体労働を続けることができました。寝るのはインターネットカフェでした。六十歳を越えるとそんなに続けて仕事があるわけでもないのです、今は野宿生活です。まったくの野宿生活です。ブルーシートやテントも持っていないのです。そのような物を持つと、保管場所が必要になるのです。それがなかなか高いのです。これからだんだん寒くなります。冬に向けて何らかの手を考えねばと思っているのです。

長崎氏に聞き取りをしたのは、昨秋でした。その頃の長崎氏の表情は硬かったように思いました。何か思い詰めたような顔でした。この半年ほどの間に、ホームレス生活に慣れてきたのか、仲間ができてきました。彼は人々のネットワークを作るのがとても上手です。彼が作る人の輪はとても温かく優しい関係です。そんな生活をするうちに、彼の表情がずいぶん穏やかになってきました。彼は家を失ったけれど、宗教家としての働きを取り戻したように思います。

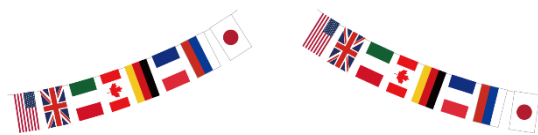


# スポーツおじいさんにないたい！①



『ヤングゼネレーション』

國友万裕



## 1. 近づいてくる老いと死

今年の2月のことである。

映画の途中でトイレに行きたくなって、トイレに行ったところ、出版社の社長から着信が入っていることに気づいた。ドキッ。

今ちょうど本のことでお世話になっている最中で、今回の本はあれこれ難航して、書き換えたりもしていたので、不安だった。何か最悪のこと。例えば、事情が変わって出せなくなったとか、そういう電話なのかと思ったのだった。

早速かけ直すと、社長の声。

「実は、〇〇が亡くなりまして、先生の本は私との約束ですので、出しますが、、、」

「え！」

亡くなった男性は、これまでも俺の出した本やテキストを編集してくれていた人だった。癌だということは聞いていたのだが、術後は良好で、病院にパソコンを持ち込んで仕事をなさっていると聞いていた。

何回かお会いしているのだが、彼も俺と同じ九州出身で、生まれた年も一緒。ただ、俺は2月、彼は11月なので、学年は俺の方が上である。俺は還暦になったばかりだが、彼はまだ59歳。若死にだ。

ちょうど映画を見ている最中だったので、電話で長話はせずすぐに席に戻ったが、その人のことが頭にかかって、映画を楽しむ気にはなれなかったのだった。

今は人生100年時代だと言われる。

とは言っても、100まで生きる人はそうそういるものじゃない。でも90まで生きる人は増えていて、九州にいる俺のおじいさんは、もう88歳のはずだが、まだそれなりに元気に生きている。

俺ももう 60 歳。もう若くはないし、このところ、もう死んでもいいかという気持ちになることはあるのだ。もう十分、人生を味わってきたし、別にそれほど思い残すことがあるわけでもない。ただ、死ぬのは怖いのである。

死んだらどこに行くのか。無になるのは怖い。だから、どこかに死後の世界があることを信じたい。

臨死体験をした人たちは、死ぬのは怖くないという人が多い。しかし、あくまでも臨死体験なわけで、実際に死んだわけじゃないのだから、どれもこれもはっきりした証拠があるわけではないのだ。

確かに、この世は解明されていない。そもそも人間はなぜ存在しているのか。最初に種を作ったのは誰なのか。そんなの誰にもわからないのだ。そして世の中には理屈では説明できないような摩訶不思議なことというのはたくさんある。死んだら、死後の世界に行って、その謎が解けるんじゃないかなあとぼんやり思っている。でも、それは死んでみないことにはわからないのだ。

年は確実にとっていくものなのだと思う。俺は結婚していないし、子供もいない。しかも、先生なので普段が若い子と接している。だから、普通の同年代の人に比べれば若いと言われてきたし、自分でもそうだと思っていた。しかし、鏡を見ていると確実に年はとっているのだ。

## 2. スポーツができなかった

60 歳になって、つくづく思うのは俺の人生の癌はスポーツだったということである。スポーツができなかったことは、俺にとっ

ては致命的だった。

俺は今でもスポーツに対するコンプレックスは抜けていない。今力を振りしぼってこの原稿を書いているが、本当は自分がスポーツ音痴だったことを書くのはつらいのである。

スポーツができなかったことで辛酸を舐めるような経験をしたことは数えきれないほどにあった。もし、スポーツが人並みにでもできていたら、俺はもっとエリートコースを歩めたんじゃないかと思う時もある。

俺は体育の授業が前日から憂鬱だった。体育の授業は週 3 日はあるから、週の半分は憂鬱だった。だから勉強にも熱中できなかった。中学になると体育の授業をサボり始めた。

子供の頃は勉強ができるやつよりもスポーツができるやつが覇権を握る。だから、俺はいつだってヒエラルキーの最下位の男子だったのである。

この頃になって、岡崎勝さんの『体育教師をブツとばせ』をじっくり再読した。体育教師は脳筋であり、何も考えずに自分の衝動のまま生きているのだということがわかった。だから、あれだけ理不尽なことを生徒に臆面もなく押し付けることができるのである。子供がそのまま大人になったような人。普通のモラルとは異なった枠組みで生きているのが体育教師なのである。

俺が今でも殴ってやりたいくらいに怒っている中学時代の体育教師は、地元の中学の校長まで上り詰めた。あんな懲戒免職にでもなった方が相応しいようなやつが校長だなんて俺は思っていたのだが、岡崎さんの本を読んでいると、校長になるのにも、あれこれ政治的な取引があって、ああいう

やつの方がむしろなりやすいのだろう。

俺はスポーツができないことで勉強にも熱中できず、常にクラスの最下位のヒエラルキーの男子だった。そういう毎日が、何年も続いたら、当然性格は卑屈になっていく。小学校の頃の1年間は大人になってからの1年間の10倍くらい長く感じられるものなのだ。

そんな俺に、中学の頃の担任の女の先生は、「体育なんて、高校までで、そのあとはないんだから」と言った。高校の時の担任の男の先生は、「パーフェクトな人間なんていないんだから」と言った。

大概の人はそう言うのだ。「人間なんて、誰でも欠点はあるんだから、体育ができないくらいは・・・」と。こういう台詞をきくたびに、こういう人たちはそういう問題で悩んだことが一度もないんだなと思って、自分の孤独と惨めさがますます深まったものだった。

それくらい、たいしたことじゃない! ???

じゃあ、なぜ、できない子に対してあんな酷い怒り方をするの? できないことなんて、たいしたことじゃないのだったら、なぜ、子供の人格を壊すような怒り方をするの??? 丁寧に教えてくれた上で怖いというのならばまだしも、何も教えようとはしないで、ただ怒鳴り、生徒の自尊心を傷つけるだけの体育教師たち。

俺の心は15歳の時についに壊れた。心はある日突然壊れるのだ。それまではかろうじて動いていた時計が、ある日突然、まったく動かなくなるように。俺の心はシャットダウンしてしまったのだった。

自分でも自分の心がわからない日々だっ

た。

不登校になったあと、市民会館で講座が行われるというので母と一緒に藁をも掴む思いで聞きに行った。この人は京都から啓発に来ている30ぐらいの人だった。講座の内容は、今流行りのポジティブシンキング。考え方次第で、思わぬ力を人間は発揮すると言う内容のものだった。

講座の翌日、個人的にアポイントメントをとって、この先生と母と3人で会った。

この人は他の人たちに比べればある程度はわかってくれた。この人自身も体育はできなかったとのことだった。

母がその先生に言った。

「体が大きいから、それくらいのことはできると誤解されるみたいで、なぜ、ボール投げくらいのことできないのかと先生から怒られるみたいなんです」

その先生は、「スポーツなんて、体が大きいからできるなんてものじゃないよね」と理解してくれた。

だけど、そのあと、この先生はこういうのだ。

「私もできなかった。でも、私は逃げませんでしたよ。みんなからカッコ悪いところを見られて、恥ずかしかったけど、頑張りました。」

これが、この先生の限界だったのだった。今の視点で考えるならば、できない子の自尊心を傷つける体育の先生の方を改めさせるべきなのであって、生徒の方の問題ではないのだ。

ところが、この時代の人、社会のあり方、教師のあり方、教育のあり方に対して疑問をもっていなかったため、こういう答えしかできなかったのだった。

どれだけつらくても、理不尽な要求をされても、自尊心を傷つけられても、他にもっと恵まれない人はいるんだから、頑張るんだというのが当時の平均的な日本人の考え方だったのである。サンドラ・ヘフェリンがいうように、日本は「根性論」と「同調圧力」の国なのだ。

儒教的と言ったらいいのだろうか。日本は、上下関係が厳しい。そのため、親や先生はそれだけで敬わなくてはならないんだという考えが強かった。其の伝統の上に胡座をかいていたのが、当時の教師たち、大人たちだったのだ。

人によって能力の違いはあるのに、その部分は考えずにできる子と同じ基準をできない子にも適用して、叱りつける彼ら。俺はあの頃、身体障害者になりたいと思ったこともあった。身障者だったら、体育ができなくても怒られることはない。むしろ同情の目で見てもらえるからだ。

俺はこの京都から来た先生にもう一度会ってそのことを話したいと、何度か名前を検索したものだ。この先生の名前は世の中に2人といえないような名前なので検索すれば出てきそうなのだが、出てこないのである。

おそらく、こういう啓発活動は辞められたのだと思う。

京都の大学を出られていることは確かなので、おそらく、雰囲気からすると立命館なのではないかとも思うのだが、今となっては調べる余地もないのだ。

痩せて、神経質そうな先生だったので、もう亡くなっているのかもしれない。

### 3. 京都踏水会の先生たちに会いたい。

俺は週に1度くらいの頻度でボクシングジムに通っている。もうかれこれ4年目である。全然上手くならないが、それはそれでいいかと思っている。俺は以前は近くのスポーツクラブにも通っていた。しかし、ここはもう辞めてしまった。別にそのスポーツクラブに不満があるわけではないのだが、どっちみち仕事が忙しいからそうそう行かない。行かないのに会費だけ払って、お金がもったいないのである。

ここを無理して続けていたのは、プールにたまには入っておかないと泳ぎ方を忘れるという危惧があったからだった。そのため月に一度はプールに入っていた。

ところが月に一度くらいの水泳だと、むしろ逆効果だということがわかってきた。下手な泳ぎ方の癖がついてしまうのだ。このスポーツクラブでは特定の時間帯以外インストラクターはついていないからである。

実は今年の春、水泳部の教え子と久しぶりに京都踏水会にいった。思えば、俺が水泳ができるようになったのはこのプールのおかげだった。ここは選手を養成するクラブなので、一般のお客さんでも相当泳がされる。20代、30代の時はここで週3日あるいはそれ以上泳いでいた。何よりもスポーツコンプレックスを解消したい、その一心だった。

それが30代の半ば過ぎて、極貧になり、ここに通うお金すらなくなった。そのためフリースイミングでたまに泳ぐ程度となった。40になって経済状態は少し持ち直しはしたものの、ちょうど近所に先述のスポーツクラブができたため、ここに乗り換える



ことになった。

京都踏水会は俺のところからだ自転車  
で30分、バスでも30分ぐらいかかる。近  
所の方がいいかと考えを変えたのだった。

それから早いものでもう18年ぐらい過  
ぎた。

それが、昨年、俺のクラスの男の子で俺に  
懐いてくれる子がいて、その子が水泳部で  
京都踏水会で泳いでいるという。その子と  
一緒に久しぶりに踏水会に行ったのだった。

さすがに20年行っていなかったの、雰  
囲気は変わっていた。

フリースイミングで2人で泳いだ。しば  
らく泳いでいなかったが、泳ぎは忘れてい  
なかった。一旦覚えたら忘れるものではな  
いんだ。改めてそれを実感した。

プールサイドの係の女性に見覚えがあっ  
た。おそらく、若い頃にここに通われていた  
女の子で、今は30か40歳くらいにはなら  
れているはずだ。

「私以前ここに通っていたのですが、D先  
生はまだいらっしゃるんですか」と俺。

「はい、来られています」

「息子さんの方じゃなくて、お父さんの方  
が？」

D先生は息子さんが2人いて、2人と  
もインストラクターになられたのである。

「はい」

「I先生は？」

「はい、来られています。ここは定年が75  
歳なんですよ」と彼女。

「A先生は？」

「はい、来られています」

A先生は確か俺と同じ年のはずだった。  
爽やかでいい先生だったのだ。この先生は  
20代くらいで結婚して子供をつくられた。

あの時、結婚祝いをみんなでするからと他  
の人たちから誘われたのだが、あの時はお  
金がなくて、それに参加することすらでき  
なかった。それにあの当時の俺は兵庫県の  
大学まで院に通っていて、20代後半になっ  
て学生をやっている、しかもバイトもして  
いないことに引け目を感じていたため、行  
くの抵抗があったのだった。飲み会とな  
れば、プライベートなこともある程度は話  
さなくてはならなくなる。

また会う日は来るだろうか。思えば、この  
20年間くらいはそれまでにも増して、月日  
の経つのが早かったのだ。また会いたいな  
あ。今度は一緒に飯でも食べて、対等に話を  
してみたいと思ったものだった。

泳いだ後、俺は教え子と2人で、近所  
のからふね屋に行って食事をした。ハンバー  
グをおごった。彼も満足してくれたみたい  
だった。あー、よかった。

俺はこういう体育系の子と男同士の付き  
合いをするのがすごく好きだ。それは俺が  
若い頃、体育会に入りたくても入る能力が  
なかったことから来ていることは明らか  
なのである。

俺は性格的には体育系なのかもしれない  
のだった。

#### 4. スポーツ問題は男子にとっては深刻

60歳にしてアメリカン・フットボールを  
初めて見た。

ここにきたのも、2年前に教えた体育会  
の男の子がチケットを手配してくれたおかげ  
である。

テレビなどで断片的に見たことはあるが、  
グラウンドで至近距離で見たのは今回が初

めてだった。アメフトをじっくり見て、アメリカのスポーツについて勉強したいとは以前から思っていた。

アメリカの4大スポーツは、アメフト、野球、バスケット、アイスホッケーである。映画なんか見ている、サッカーやラグビーがアメリカ映画で描かれることはほとんどない。ちなみにサッカーはアメリカでは女子のスポーツなのだそうである。

前にアメフト部の男子に聞いたのだが、アメフトは戦争のようなルールの試合なのだそうである。日本はそこまでないみたいだが、アメリカでは乱闘なども起きるし、そのことがルール違反とは見做されないらしい。

今回、アメフトの選手を間近で見たのだが、防具をつけているため、ガタイがものすごく大きく見える。アメリカ人だったらもっとマッチョに見えるのだろう。この辺りもアメリカでアメフトが受ける理由なのかもしれない。アメリカはマッチョ礼賛の伝統を持つ国なのである。

『スポーツジェンダー学への招待』(明石書店)と言う本によると、男性は強く、女性は美しくがスポーツのコンセンサスなのだそうである。実際、スポーツは男性らしさを構築する装置でもあるらしいのだ。男同士で力を合わせて、相手のチームと戦う。まさにチームスポーツは昭和の企業戦士と似ているし、男性性の構築のための装置だろう。

一方で、女子のスポーツはシンクロナイズドスイミング、新体操、フィギュアスケートなど、美しさを競うというイメージがある。女は男よりも外見が重視されることなのだろう。これはこれで大変だろうとは思いますが、強さを強いられる男も大変な

のである。

子供の頃からスポーツができなかった俺は、男性的な活動の全てから除外されることになったのだ。

スポーツができる子は、野球、サッカー、ラグビーなどのクラブに入って男性性を発揮できる。他の男たちと戦友的な友情を深めることもできる。結果として、日本の企業社会にもスムーズに入っていける。

しかし、これは、スポーツが全くできなかった俺にとっては過酷なイデオロギーだった。もし、俺がスポーツができていたら、もっと勉強にも熱中できていただろう。将来に対しても前向きになれていただろう。

これを言うと、スポーツだけじゃない、勉強だってできない子は辛いじゃないかと反論する人もいるのだが、勉強のできない人は塾に通うこともできる、家庭教師をつけることもできる。先生だって、体育以外の先生はできない子をそこまで罵倒したりはしない。確か小谷野敦さんが言っていたと思うが、かつての体育教師は職業差別したいくらい存在だったのである。

今だったら YouTube である程度はスポーツを学ぶこともできるのかもしれないが、あの当時はそんなものはない。体育の塾や家庭教師なんていない。どうする手立てもなかったのである。

その上に俺の親は忙しかった。俺はヤンキーなことをする子ではなかったのに、不良にはならないだろうからと成績が落ちてもほったらかしにされた結果、取り返しのつかない事態へと発展していったのだった。

スポーツ問題は、女性にはわからない部分がある。女性の場合はスポーツ能力があることが女性としての価値を高めることに

はならないからだ。かつて人気子役だったテイタム・オニールが主演した『がんばれ!ベアーズ』で女子がスポーツをすることを躊躇するセリフがある。女子の場合は、スポーツをし過ぎて、筋肉がついたりするとむしろ女性としてマイナスというイメージがあるため、スポーツがしたくても後退りしてしまう女子が多いのだろう。

言ってみれば、男にとってのスポーツは、女性にとっての化粧である。多くの男は自分の彼女がメイクを変えても気づかない。そんなのはどうでもいいからだ。それと同じで、女性の場合は、もちろんスポーツマンがかっこいいと思っている人は多いだろうが、そのことがそこまで男にとって深刻なことだとは思っていない。

俺は女の子からも相当いじめられ、悪口を言われてきたが、スポーツ問題でいじめられたことはないのである。むしろ、女子はスポーツ問題に関しては鈍感なので、スポーツができない男子に対して悪気もなく、無神経な台詞を言うことが多いように思う。

今から10年ほど前、ある女性のカウンセラーにスポーツができなくて、いじめられっ子だった過去を話したのだが、彼女からは「ドラえもののび太くんでも静香ちゃんと結婚できた」と言われてしまった。彼女からしてみれば、スポーツができないなんてたいしたことじゃないという意味で言ったつもりなのだろうが、俺はあの一言で彼女にキレてしまった。俺はあの時にやはり女性は、カウンセラーであっても男の表面下の葛藤には気づいていないのだということを知ったのだ。

一方で、男子の場合は、スポーツ問題に対

して敏感である。こいつはスポーツができないタイプだという目で見られると、露骨にバカにしたようなことを言われ、いじめられる。俺は、子供の頃から規範から大きく外れている子だったため、他の男子たちは、他のやつには負けても俺には勝っていると思っていた。

俺はスポーツのせいで、ヒエラルキーの最下位にしか入れなかったのである。俺はスポーツ教育の被害者なのだ。

5年ほど前だったと思う。あるトップランクの大学の学生から、「僕はスポーツが全然できないんです。小学校まではスポーツが全てじゃないですか。だから勉強ができて全然楽しくなんなかったですよ」と言われたことがある。

彼の言葉からすると今でもスポーツ偏重主義は日本の教育のなかに残っているのだろう。これを変えないことにはいつまでも男性は救われない。

その一方で、俺は昭和の教育を受けて、骨の髄までスポーツコンプレックスが染み込んでいるため、どこかでスポーツができるようになりたい。一人前の男になりたい。男の仲間に入りたいという思いを抱え込んでしまっている。

幸い、その後プールを長年やってきて、それからジムにも通ってきたので、今ではそんな鈍そうにも見られない。むしろ、体軀はでかいので、ラグビーとか柔道とかやっているようなふうに見られる。

今となっては俺の過去を知っている人もいない。俺は、昔ラグーマンだったと嘘をついても通るだろう。

ただ、如何せん、もう60歳である。今更スポーツマンを目指すのは遅いかもしれな

い。しかし、考えようによっては60代になって、普通の男性は体が老いていく頃だから、今だからこそ、スポーツおじいさんを目指してもいいのではないか。

そろそろ、体の健康のことも真剣に考えなくてはならない年齢だ。この連載では、俺のネタである映画のことも交えながら、自分の身体性のことを考えていこうと思う。

## 5. 『ヤングゼネレーション』(ピーター・イエーツ監督・1979)

母の日。出町座近くの鼓月で、母の日のお菓子が売られていたので、九州の母に送った。母は86歳になったがまだ元気だ。若い頃は人の何倍も苦労が多かった人だが、60歳過ぎてからはそれなりに順風で、今は悠々自適の生活をしている。

普通の老人に比べれば、友達も多いし、お金も持っているので、毎日料理などをつけて余生を楽しく生きているみたいだ。

俺は母には感謝している。俺が不登校になってから、長い、長い回復の道のりに付き合ってくれたのは母だったのである。

不登校だった頃、俺は映画だけが支えだった。今思えば、確かに俺は普通とはずれていた。中学生・高校生くらいと言えば、普通の子は友達が欲しい年齢なのだろう。だけど、俺は友達なんて欲しいとも思わなかったのである。

今にして思えば、これもスポーツのせい。スポーツのせいで、俺は普通の成長をしていないのである。スポーツができない子は、他の男の子仲間に入れなくなる。俺はいつだって、遠足や修学旅行のグループ作りが一番嫌だった。俺はどこにも入れなくて、結

局、どこかに押し込んでもらうような子だったからである。

だけど、俺は何も悪いことはしていない。男が自分の人生の責任を社会や他人のせいにするともっともないと言われるけれど、実際、何も悪いことをしていない人を排斥するのは社会の問題なのである。

あの当時映画だけをよすがに俺は3年間を生きた。俺としては、話題になった映画は全て見たいと思っていた。ところが、俺は地方都市にいたため、すべての映画が公開になるわけではないのだ。当時はまだレンタルがない時代。そのため、どれだけ見たくても見ることのできない映画は存在していた。

『ヤングゼネレーション』は、そういう映画だった。

俺はこの映画の公開当時16歳だった。普通ならば高校2年生。ところが俺は高校に入ってからすぐに不登校になってしまったため、1年休学し、それでも戻ることができず、通信制の高校に鞍替えしていた頃だった。

この映画、この年のアカデミー賞で候補になって、アメリカでは絶賛に染まっていた。しかし、俺の故郷ではなぜか公開にならないのだ。

それで俺は母にねだって遠いところまで見に連れて行っていくれないかと頼んだ。当時はまだレンタルがなく名画座の時代だったので、見逃してしまうとなかなか見ることができない。まして地方都市では見ることができない。実際、あの頃は熱心な映画ファンの人の中には映画を見るために夏休みには東京に出て名画座巡りをしたり、外国まで行く人すらいたのだ。今みたいに配信でレンタルできるような時代が来るなんて思いもしなかった頃のことなのである。

当時、叔母が広島に住んでいて、夏休みごろに神戸の映画館でこの映画をやっていたのである。

母と2人で広島の叔母のところに泊まり、日帰りで映画を見に行く計画だった。

思えば、2人で行き帰りの旅費がかかったわけだからお金も相当かかったのだ。しかし、悲しいことに、俺はあの時、心が乱れに乱れた。

せっかく遠方まで来たんだから映画を見なきゃいけない。だけど、心が揺れに揺れて映画に集中できない。ストーリーが頭に入ってくないのである。結局、最初だけ見て、映画館を飛び出した。母もついてきた。あの時のことを思うと本当につらかった。今思っても目眩がするほどのつらさだった。

しかし、それがあったことで、俺は一皮向け。帰りの新幹線では映画を十分に見れなかったことを洗い流してしまっていた。

母や叔母にも明るい顔ができた。1本、映画が見れなかったくらいで、映画ファンとして失格ではない。そう思えるようになったのだ。

その後数ヶ月後、故郷の映画館で、半年くらい遅れて『ヤングゼネレーション』が公開になった。

神様に感謝したものだ。きっと俺が神戸で見れなくても、明るくそれを思い直したから、神様がご褒美をくれたのだと思ったものだった。

『ヤングゼネレーション』は今はDVDも持っている。俺にとっては記念碑的な映画だ。これは大学に進学しない、アメリカ中西部の田舎町の男子高校生たちが自転車レースに参加する話である。

男の子たちの友情が微笑ましく、俺は心

から憧れたものだった。

しかし、悲しいかな。中学くらいの頃までは自分が同一化できる男子が俺の周りにはいなかった。というか、これも体育教育のせいで、スポーツが全然できなかった俺は、最初から男の一員にはなれなかったため、現実の世界で男の友情を味わうことはできないと小学校の頃から諦めていたのである。

そんな俺が少しずつ周囲の男子に同一化したいという欲求を持つようになっていったのは18歳。予備校に入ってからのことだった。同一化の欲望が芽生えた時期が遅過ぎたのである。

その後、俺は無事に大検に合格して、大学にも入った。

とはいうものの、その後、俺の人生は一進一退を繰り返した。大学に入ってもうまく行かず、毎日もがき続ける日々。大学では心無い女子学生たちからの白眼視と悪口。そして、卒業間際にして、指導教授からのアカハラ。

俺はまだ大学の頃のトラウマを振り切っていないのだ。あの人たちは何気ない気持ちでしたこと。俺だって知らず知らず誰かを傷つけてはきているのだろう。しかし、あの時の俺には、あの人たちのしたことは一生消えないトラウマとなったのである。

しかし、他の大学の大学院に進んで、少しずつ波はおさまっていった。

とは言っても、ついに大学で非常勤ができるようになったのが29歳。どうにか親にお金を無心しなくても生活できるようになったのが40歳である。そして、その後も権力のない非常勤生活。しかし、次第に心は落ち着き、生きることは楽になって行った。仕事も楽しくなって行った。本も出せた。学生

たちとの付き合いも楽しくなった。

あー、長かった。でも、今 60 歳になって、後悔はないのだ。

その間ずっと付き合ってくれた母には感謝だけど、その代わり、上の弟が 27 歳で亡くなった。そして、社会運動団体とのトラブル。人生って、本当にドラマだけれど、俺はどうか幸せなエンディングへと漕ぎ出そうとしている。

俺がラッキーだったのは、挫折の時期が早かったことである。そのため、俺の人生は、10 代<20 代<30 代<40 代<50 代と着々と充実度は増して行った。これから 60 代。50 代<60 代になってくれることを祈りつつ、日々をひたすら生きていきたいと思う。

これからは健康のことを考えて、アンチエイジングに、若々しいスポーティおじいさんになりたい。

そのプロセスをこの連載で綴っていきたいと思っています。

# 役場の対人援助論

(48)

岡崎 正明

(広島市)

## 安全と安心のはざま

### 変化

区役所から児童相談所への異動となって早3年。変化したことはいろいろある。残業もストレスも格段に増えたが、もうひとつ増えたのが「安心安全」という言葉を使う頻度だ。

それはおそらく両者の機能の違いからくるもので、区役所は児相のように子どもを保護したり施設に入れる権限は無く、保護者や子どもの地域生活を支える制度利用の案内や、そのお手伝いといった、原則「支援」をるところなのに対し、現代の児相は保護者や子どもの支援ももちろん行うが、虐待などの子どもの権利侵害に対しては、強制力を持って家庭に「介入」し、調査や保護、指導や入所措置などをする機関だからであろう。

だから当然のことだが、家族に対して子どもの権利侵害や安心や安全が脅かされているかいないか、脅かされているとすれば、どれくらいかといった話をしていく機会が増えて、

「今のままではご自宅が子どもさんにとって安心安全ではないとちは判断しています」

「家族みんなの安心安全が保たれるために、どうすればいいか一緒に考えていきましょう」  
みたいな発言をすることが多くなったというわけだ。

「安心安全」という言葉は、世間でもよく聞いて耳馴染みが良いし、そんなに難しい言葉ではないのでいろいろな保護者や子どもにも通じやすい（気がする）。それに、

「お宅は虐待がひどいから…」

「本人が怯えてますから…」

なんて言い方より、

「安心安全の面で心配があるので」

の方がこちらでも断然言いやすいし、少なくとも相手が感情的に反応することが少ない（気がする）。おかげでやたらと便利に「安心安全」を使っている日々である。

しかし、ある時ふと思った。

「安心」と「安全」って並べて使っているが、何が違うんだ？

似てる気はするが、ちょっと意味合いが違う気がする。よく考えると、それぞれどんな意味を持った言葉なんだろう。ちゃんと私は理解できているのだろうか。

そこで辞書を引いてみる。今はオンライン上でも調べられるからとても便利だ。そういえば昔は「電子辞書」ってなものがあり、大人のビジネスアイテムとして、お家の便利グッズとして、たまにテレビショッピングなんかでも扱われていたが、そういえば気づかないうちにめっきり見なくなった。生成AIまで出てきた時代に、もう電子辞書の居場所は無いのだろうか…。

脱線はともかく、辞書によると「安心」は

「気がかりなことがなく、心が落ち着き安んじること」

みたいな説明が書いてあり、「安全」のほうは、

「危険のないこと。平穏無事なこと」

と書いてあった。

なるほど。まったく異論はない。さすが辞書の説明は正しい。

そこで気づくのは、安心というのは「心」という字が使われているように、本人の気持ちや主観に寄った言葉であり、逆に安全は、気持ちというより客観的に危なくないという「事実」に寄った言葉だと思われることだ。

確かに工事現場には「安全第一」とは書いてあっても「安心第一」とは書いてない。工事現場のように危険を伴う場所では、気持ちの問題より、客観的にちゃんと危なくないという、事実の方が重要なのだ。納得である。

## 似て非なるもの

昨年11月、当対人援助学会の広島大会で印象に残る言葉に出会った。

発言者は白鳳短期大学の西川友理さん。学会の理事で、対人援助学マガジン執筆者仲間である。彼女は担当した企画「保育関係者による当事者研究」の中で、こんなことを述べたのだ（たぶん私の記憶では）。

『安心』と『安全』はいつもイコールとは限らないんで。例えば危険な冒険で『安全』じゃなくても、仲間と一緒になら『安心』して楽しめるってこと、ありますよね」

確かに言われてみればそうである。スリル満点のジェットコースターや、濁流を下るラフティングなど、合理的に安全面だけ考えれば、なにもそんな危険なところに参加する必要はないことでも、私たちは作った人や案内人への信頼や、仲間と一緒にいることで勇気づけられ、安心して楽しむということがある（私は絶対乗らないけど）。少なくともそういう選択をする人がいるのは事実である。

そう考えると、客観的に合理的に考えたら不合理で「安全」じゃないことも、私たちは趣味嗜好や人間関係やこだわりやその他いろんな理由から、つい主観的な「安心」とか心地よさで選んでしまう。そんなことが往々にしてある気がする。

たとえば「お酒を飲むこと」や「ギャンブルを楽しむこと」「タバコを吸うこと」など、健康面や合理性でいえば、あまり推奨されない、危険やリスクが伴うとされるこうした行為も、安全性だけでいえばしなかったり、少ない方がいいのだろうが、人間というのは「分かっちゃいるけど止められない」という生き物なわけで、快感やストレス発散などの主観的な欲求で、つい繰り返してしまうことがある。これもいうなれば、心の安定や充足を求めるとい



意味では、やってる本人は「安心」を求めているのと近いのかもしれない。

「私は酒もタバコもギャンブルもしないし…」という人だって、スマホゲームをついし過ぎてしまったり、先月は買物しすぎちゃったとか、健康のためにはダイエットしたほうがいいのに…とか。客観的科学的に正しいことを、楽しみとかやすらぎとかの主観的思いで、ついおざなりにしてしまうことって、誰にでもあるのではないだろうか。

「それと虐待やDVを一緒にするのは違うんじゃない？」

「虐待やDVには安全はもちろん、安心もないでしょうよ」

確かにそうなのだが、事はそんなに白黒はっきりできるほど単純でなく。もちろん虐待やDVは不法行為で権利侵害で、安全も安心も脅かすものだが、相手との関係性や生活環境というものは様々なわけで。DVのハネムーン期に代表されるように、一時の安心や幸福感を感じる瞬間があったり、親から虐待されていても、他の家族との関係にはやすらぎや喜びの瞬間があったり、学校や地域に救いの場があったり。そんな中で、虐待やDVの解決を図ろうとすると、ときに逃避や保護といった、今の環境や人との関わりをゴッソリ変えてしまう手法が取られることがあって。もちろんそれは必要なことなのだが、当然そこには強い葛藤が生じることがあるのだ。

そう思うと「安心安全のために…」と、一括りで話していくことにも、よくよく注意がいるなあと改めて思ったりする。もちろん子どもやパワーレス状態の人など、責任や判断にサポートがいる立場の人のことを考えるということは、本人の望む短期的な安心や要望を丸飲みにして済ませる（いわゆる「自己責任論」につながる）のではなく、より長期的視野に立ったり、権利擁護や病理の視点も欠かせないのだが。ただ「本人以上に本人のためを思って何がいいのかを考える」というスタンスは、ときに支援者側の独りよがりの危うさや、矛盾を抱えるテーマに思え、悩ましい。

## バランス

高齢者福祉の分野で働いていた時、ケアマネジャーのAさんからこんな話を聞いた。

Aさんが担当していたある在宅の男性高齢者は、周りから少し変わり者認定をされた人だった。別に悪い人ではないが、人付き合いも薄く、頼れる身内もない。1人で自分のこだわりを大事にずっと暮らしてきた人だったらしい。年齢を重ねて介護が必要となり、Aさんが関わることになったのだが、いろんな生活上のこだわりがあり、介護職が入るのも中々苦労が絶えなかったという。

中でも一番困ったのが排泄のこと。その男性高齢者は、大便をトイレではなく、床に新聞紙を敷いてそこにしゃがんでするのが習慣だったという。もちろんお尻は拭くし、衛生的にも問題ない形で処理するらしいのだが、足腰が弱ってきて失敗することも出てきたり、介護に入るヘルパーからの要望もあって、なんとかAさんは男性高齢者を説得し、新聞紙に大便をすることを止めてもらったのだそう。しかしその頃から男性高齢者は急激に活力を失い、それまで一度も入院したことが無かった人があつという間に入院して寝たきりとなり、亡くなられたとのことだった。

Aさんはその話をしながら私に、

「あの時あの排泄方法を止めさせてなかったら…と、いつも思うんですよ。もうちょっと話し合いをしっかりとって、いい方法を探れなかったかなあって…」

と語ってくれたのだった。

もちろんその男性高齢者が入院したことが、排泄方法の変更と直接関係があるのかは分からない。

そもそも床に新聞紙を敷いて排泄するという方法のメリットや合理性が、私たちには分からないし、なぜそんなことを男性高齢者が続けていたのか。その目的も思いもなかなか理解が難しい。

しかし、排泄とは人の尊厳にかかわる重要な要素である。世間的にも「下の世話にはなりたくない」「最後まで自力でトイレに行きたい」という声はよく聞くことだ。その男性高齢者にとっては、その排泄方法はおそらく何十年と続けてきた生活スタイルであり、安心感と安定を生活にもたらすものだったのだろう。他人から見れば全く理解不能だけれども。

だが、おそらく私たちにも、そこまで変わったこだわりではなくとも、それぞれのルーティンやクセや習慣・やり方があるのではないだろうか。決して合理的でも効率的でもないけれど、もっといい方法があるのかもしれないけれど、私はこのやり方が一番落ち着く。しっくりくる。そんなものがたくさん集まったのが、個々人の生活というものだと思う。

「安全と安心」の話に当てはめれば、トイレでちゃんと排泄するのが客観性と科学的根拠のある「安全」であり、個人のこだわりで新聞紙を敷いて大便をするのが、その人にとっての「安心」である。どちらをどれだけ大事にし、どのへんで折り合いをつけるのか。難しいところだ。

対人援助において、安全の視点はもちろん大事だが、安全のみの視点では息が詰まる。究極隕石が落ちてくるのを心配して、地下にこもることになりかねない。だがそれでは「いきがい」や「QOL」の視点からはアウトだろう。逆にストレスから健康を損なう心配もある。かといって、主観的な安心だけの視点では、ときに本人にとって良くないことになりかねない。このあたりが、不合理で矛盾した存在である「人間」を相手にすることの宿命的課題だと思う。

## おまけ

そんなことを考えながら「安心安全」についてググルと考えていたら、ふと、

（そういえば『安心安全』とは言うけど、『安全安心』とはうちの業界ではあんまり言わない気がする。でも世の中の的には『安全安心』も聞くよな…）

と思った。

それで今調べてみたら、「安心安全」で検索すると約660万件のヒット。「安全安心」で検索すると約418万件のヒットで、わずかだが「安心安全」の順番が優勢だった。フムフム。やっぱりそっちの順番の方が主流な気がする。

次に『安全安心』と『安心安全』の違いで検索すると、

「一般的にはどちらの表現も使われるが、自動車や交通関係の業界では『安全安心』が多く見られる」との回答が出てきた。

なるほど。対人援助業界と交通関係の業界では、やはり客観性と主観の優先度が違う。その辺りからくる順番の違いなのかもしれない。面白い。

# 臨床のきれはし

SHEET25

浅田 英輔

## Leap of consideration

カウンセリングとはなんだろうと日々考える。

・話を聞くこと？

→これは含まれているが、これだけではない

・よい助言をすること？

→当てはまることはあるが、本質的ではない

・クライアントの間違った考えを正すこと？

→これは明らかに違う

・話を聞いているだけが仕事？

→そう見えるかもしれないが、そうではない

・クライアントの考えを解釈すること？

→そういう一面がないとは言わないが、たぶん違う

一言で説明できる最終結論には至っていないのだが、たどり着いた一つの答えとして、「クライアントの考えを整理する手伝いをする」というものがある。

クライアント - 本人や周囲の人になんらかの困り事があって相談に来ている人 - には、そのクライアントの考え、思考過程がうまく動いていないことがほとんどである。多くの場合は、問題に追い詰められて視野が狭くなっていたり、「こうに違いない」という確信的な思いに囚われていたりする。はたから見れば、「なんでそんなことに思い悩んでいるのか」と見える場合もとても多い。

いやなことならやめればいいし、いやな人からは離ればいい。人とうまくいかないなら、一度考えを伝えた

り、話し合ったりすればいい。もちろん相手があることだと簡単にいかないこともあるが、「自分からいやなことに向かっていっている」ようにみえることも結構あるのだ。

相談にきてしまうくらいのレベルでの日常での困り事を抱える人たちは、どこかしら「はたから見れば簡単そうなこと」で困っていることがほとんどである。もちろん、安易な助言で行動が変わるわけではなく、まずはきちんと聞く必要がある。そして、その困っていることをきちんときいていくと、大抵の場合はどこかに思考のジャンプしていることが多い。

極端にいうとこんな感じ。

①母に嫌われている

だから、

世間の人みんな私のことがきらい

②あの先輩が高卒だと馬鹿にした

だから、

高卒はばかにされる存在だ

③今回の仕事はうまくいった

だから、

私は高く評価されるべきだ

④あの子は何回言ってもいうことを聞かない。

だから、

あの子はダメな子だ

こういう時に、ただ「傾聴」では役に立たない。話をしっかり聞きながら、「ん??」と疑問を持つアンテナを立てておかなければならない。

例えば、①ではまず「母に嫌われている」について「ん??」とひっかからなければならぬ。「子どものことを本当に嫌う母なんていない」なんて話は下の下の下の助言であり、傾聴から全くはずれたクソみたいなダメエ語りである。それはおいといて。「好き」「嫌い」という言葉は非常に曖昧なものであり、「大っ嫌いな人」もよく話すと意外と気の合うことがあったりして「あんたあの人のこと嫌いって言ってなかった？仲良いじゃん」みたいなことも起きる。「ずーっと好き」ということもなかなかないし、「全部なにもかも嫌い」ということも実はあまりない、ということ、我々は経験上知っているはずである。そして、大体の母は子どものことが好きだろうこともわかる。という前提のもと、「お母さんがあなたのこと嫌ってるって思うんだ？」と投げかけなければならぬ。「どういうところからそう思ったの？」と深めていかなければならぬ。何かしらエピソードがでてくることだろう。もしかしたら、肯定的な「母は自分のことを嫌っていないかもしれない」というエピソードもあるかもしれない。でも、そういういくつかのエピソードを聞いた上で「それで、あなたはお母さんに嫌われてるって思うんだ」とあらためて聞いてみる。「そうだ」なら「そうか」でよいし、「そんなに嫌われてないかもしれない」のこともあるかもしれない。

もう一つ、「母から嫌われている＝世間の人みんな自分のことがきらい」というところもちゃんと「ん??」と引っ掛からなければならぬ。ここでももちろん「そんなことないでしょ」なんて言葉は傾聴からかけはなれたクソ助言だ。クソリプと同じ無駄で有害な唾棄すべきものだ。

※あくまでもカウンセリング等の相談場面でのこと。私だって日常生活においてはクソみたいな助言をたくさんしている。

「母から嫌われている＝世間の人みんな自分のことがきらい」について、もう少し教えてくれる？と投げかけなければならぬ。ちゃんと聞いていくと、「母が私のことを嫌いなら、親以上に私のことを好きになる人なんていないわけだから、世間の人私のことを嫌いに違いない」という考えかもしれない。ああそうかー、そういうことでこんな考えになってるのねー、とわかるかもしれない。もしかしたら、「まてよ？中学校のときの友達はまだつきあってくれてるな。嫌われてはいないかもしれない」などと思いつつ「ん??」とひっかからなければならぬ。もしかしたら、「私のことを嫌いというほど、世間の人私に関心がない」となるかもしれない。

②だと、「あの先輩があなたのことをバカにしたのだ」ということはわかったが、それを全てに当てはめるのはおかしいな」とか「ほんとにバカにした言葉だったのかな」とか「そもそもバカにした意図はなんだ？」とか「ほかにもバカにされた経験があるのかな？」と思いつつ「ん??」とひっかからなければならぬ。

③だと、「一回うまくいったからってすぐに評価されなければならない」というのはちょっとへんだよな」と思いつつ、「仕事がうまくいったのは今回だけなのかな？」とか「うまくいったとはどういうことを指してるんだ？」とか「上司に評価されていると感じていないのかな？」とかを考えながら「ん??」とツッコミをいれなければならない。

④だと、「何回か言って聞かないのであれば、理解してないんじゃない？もしくは、いうこと聞きたくない理由があるんじゃない？」「一回もいうこと聞かないのかな」「どういう場面だときかないのかな」などと考えつつ「ん??」と話を深めて行かなければならぬ。

という感じに、クライアントの考えをきちんと聞いて、ひっかかったときやよくわからないときに「ん？」ときちんと引っかかり、「まってまって、わからなかった」とツツコミを入れることを重ねていくことで、クライアントが何をどう考えてそういう状態に至っているかを一緒に整理していくことができる。これって、自分で考えればよさそうな感じはするが、一人でやるのはなかなか難しく、「よい聞き手」がいるとうまく進むものである。それがカウンセリングの基本にあると考えている。

ほとんどの場合は、上の例のように「思考のジャンプ」がある。そういうときにちゃんとひっかかると、クライアントとともに意味のある対話ができると考えている。

ひっかかるべきところにきちんとひっかかって、対話を深めていくことが、クライアントの考えが整理されていくことにつながる。これをやることで問題が解決することはあまりないが、整理されることで見えるものが違ってくるということは起きる。上にあげた4つの例は、どれも内面的なことが問題になっているということもできる。クライアントは自分の考え方について悩んでいるという言い方でもよいだろう。それを否定するのではなく、どう考えているかを紐解いていくこと自体が治療的だよなあと思うのである。

これが、カウンセリングの役割のひとつであると考えているところである。はたからみると「話を聞いているだけ」に見えるかもしれないが、結構高度なことをしてたりするのだ。

いろいろ調べていたら、「思考のジャンプ」とは「発想を飛躍させる」というよい意味で使われているものが散見された。また、思考のジャンプではなく「論理の飛躍」という言葉も当てはまりそうに思えた。でも、「論理」というほど明確なものではないし、やはり「思考」なのだと思う。

「論理」をぐぐってみたら、

-----  
考えや議論などを進めていく筋道。思考や論証の組み立て。思考の妥当性が保証される法則や形式。  
-----

だそうだ。思考のほうが一次的な概念といえるのかな。また、「論理の飛躍」となると結構否定的なニュアンスが入っているように思う。思考のジャンプはあまりいいことではないが、誰にでも起きていることだし、考えを整理する手掛かりになるものであるし、それ自体が責められるものではない。また、「論理」となると客観性という意味合いも入ってくるのではないかと思う。今回の話は、客観的に正しいこと、間違いのないことを求めるものではない。クライアントとセラピストが「ああ、そういうことかあ」と共有できればよいのである。

だから、やはり「思考のジャンプ」がしっくりくる気がしている。

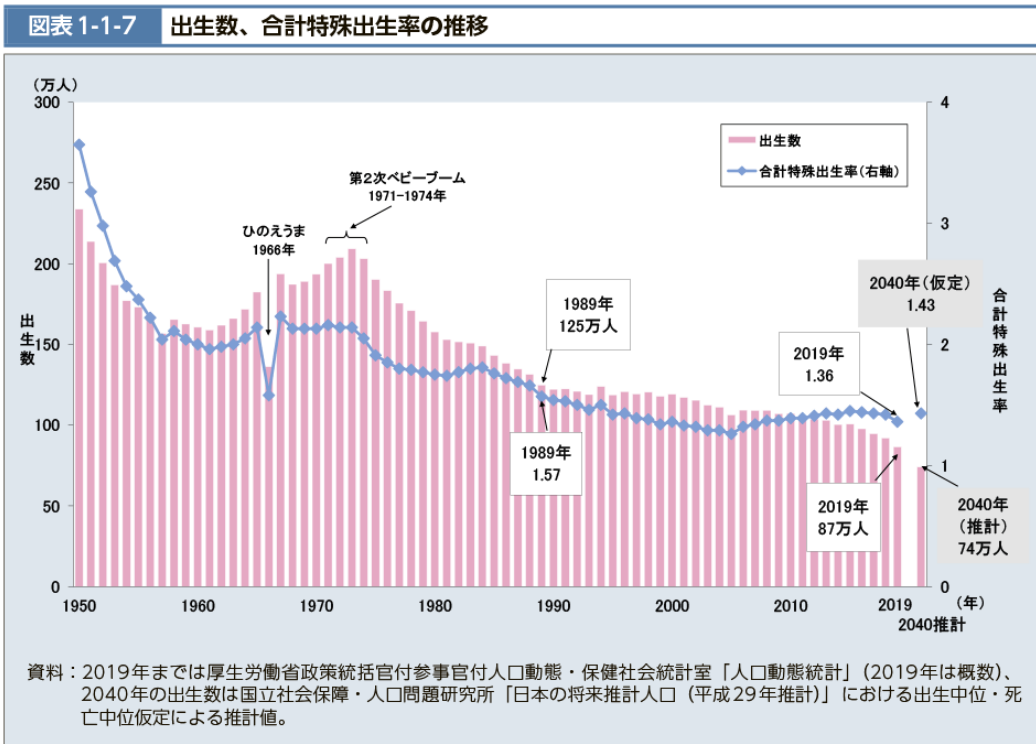
# 発達検査と対人援助学

## ⑯ 不確実さと不安の高まり

大谷多加志

先日、2024年1月から3月の出生数の速報値が出され、前年比で11673人減少して170804人（前年比6.4%減）であったことが発表されました。単純計算ですが、このペースだと年間出生数が70万人に届かない可能性があり、少子化が想定を超えるペースで加速度的に進行していることが明らかとなりました。下の図は厚生労働省のホームページに掲載されている出生数の推移のグラフです。驚くべきことに2040年の推計出生数は

74万人と想定されています。現状は数年前の状況認識よりも急激に悪化していると言わざるを得ないでしょう。大学での授業で、保育系の科目を担当していて、「家族」や「結婚」などをテーマに話す回があるのですが、その回の感想として、予想以上に多くの学生が「私は結婚するつもりも、子どもを産むつもりもありませんが…」と書いていることに衝撃を受けました。



厚生労働省（2024）令和2年版厚生労働白書

昭和生まれの私たちの世代でも、20代前半の頃はまだ家族を持つことも、子どもを持つこともまったく現実味がなく、「イメージが湧かない」という感覚はあったと思います。ですが、現代の若者はもっと明確な意思を持って「持たない」と言っているのだと感じました。

### 保護者の不安の高まり

長年、細々とですが子育て中のご家族と関わってきて感じているのは、年々子育て中の保護者の不安が高まってきているということです。これを裏返して考えてみれば、現代社会においては子どもを持つことに大きな不安や抵抗を感じる状況となっており、これも少子化の大きな背景要因なのではないかと思っています。

運動発達の遅れや言葉の遅れなど、具体的に発達面に心配な状態があって、それを不安に思っておられるというケースももちろんあるのですが、それ以上に、どういう風に寝かしつけたらいいか、離乳食はいつからがいいか、どんな風に遊んであげたらいいか…など、ご心配ごとの種類と程度は想像以上に多様です。関わりのある幼稚園の先生が半分は笑い話、半分は深刻さを持ってお話くださったのが、保護者の方から「うちの子、青いおしっこが出ないんですけど…」と相談されたというエピソードでした。テレビで流れるオムツのCMでは、吸収力のすごさを示すためにオムツに液体をかけて吸収させるという映像を流します。この時にかける液体は、たいてい青色です。おそらく、CM的にはあまりリアルな色にすると不快感を覚える方がいるだろう、という配慮なのだと思うのですが、どうやらこの

保護者の方はCMの映像から「赤ちゃんのおしっこは青らしい」と思ってしまったようです。“そんな勘違いをする人はまれなのだから、その人の問題だろう”と言ってしまえば、それは間違いではないのかもしれませんが。一方で、これは今という時代を象徴しているようにも感じられます。つまり、情報だけはあふれかえり、意識しなくても流れ込んでくる状況の中、何が正しく、何が有用な情報なのかの判別が困難なのは、子育て中の方に限らず、どの世代の人にも起こっているのではないかということです。一見して陰謀論とわかるものから、ディープフェイクのように説明されてもウソと見抜くことが難しいようなものまで、情報はあふれかえっていますし、それぞれ信じる人もいれば信じない人もいるというのが現在です。そんなわけで、次に挙げる「遊び」に関するお話も、最初は「何が正しいか」ということが焦点になるお話のかな、と思っていました。

### どんな遊びをするのがいいですか？

時々ですが、『どんな遊びをするのがいいですか？』『どんな風に遊んであげたらいいですか？』と質問されることがあります。保護者さんからのご質問である場合もありますし、子どもと関わる専門職の方からである場合もあります。たかだか遊びのこと…と思う人もいるかもしれませんが、保護者さんによっては、“遊んであげたいけど全然楽しい気持ちになれない”と気持ちがついていけないことに罪悪感を覚えておられる場合もあり、相談のトーンは相応に深刻です。

当初はHow to的発想、つまり“正しい遊び方”があるという意識なのかなと思ったり、あるいは時間を割くからには成果を挙

げたいというタイプ・コスパみたいな発想があるのかなと思ったりして、実際そういう感じの人もいたのですが、相談される表情やトーンから、もっと根深い不安や悲壮感のようなものが感じられました。

今も昔も、子育て中の親が子どもの成長を願うのはある意味自然なことで、数十年も前であれば「受験戦争」などという言葉も普通に使われていました。今の保護者から感じるのは、そういう「競争を勝ち抜くため」とか「学歴やスキルを身につけさせるため」などと少し違うものです。「競争」や「学歴」を前提とした願いは、まだそれらに「意味」や「価値」があると信じているからこそ成り立ちますが、良くも悪くも、そのような確かさは失われているように思います。紛争や災害などが世界各地で多発し、不確実性が増加し、明るい見通しが持ちにくい時代の中で、“少しでも子どものために何かしたい”、“せめて子どもに何かひとつでも持たせてあげたい”という親の切実な思いがあるように感じられます。

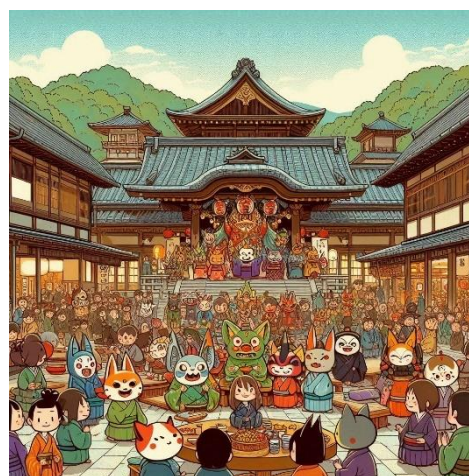
### 不確実な時代の中で

もちろん、これまでももっと不確実性が高い時代はあったと思います。一方で、経済的豊かさの追求や技術の進歩が、必ずしも人々の幸せにつながらず、発展を遂げた社会が、長期的な人口減と衰退のサイクルに入ることが明らかとなった現代社会の中で、信じるものを失われ不確実性が高まっていることは、ある種の絶望に似た不安を人々の中に喚起しているように感じます。

では、このように不確実性が高まった社会の中で、子どもたちに育んでおきたい力とは何でしょうか。質問されたとすれば、今

の私は「好奇心」と「人とつながる力」を挙げると思います。10年後、20年後の社会が見通せないとすれば、“将来的に役に立ちそうな何かを先に授けておく”と考えるのは、基本的に無理がありそうです。そうであるならば、未知を怖がるだけでなく、未知を楽しむ心を子どもの中に育みたいですし、一人で行き詰らずに誰かとつながって進んでいける選択肢も自分の中に持っておいてほしいと思います。

では、そのために大人には何ができるのでしょうか。確かな答えかはわかりませんが、少なくとも大人自身も好奇心を持って、人とつながる姿を子どもに見せておくことは大事なかなと思っています。「現実的には…」「どうせ結局は…」としかつぶやかない大人から、何かを学ぼうと思ったり、未来への希望を感じることは少ないでしょう。新しいものに触れたり、学んだりすることが少し億劫に感じられるようになってきた中年期。少し意識して、新しいものへの拒否感を保留してみたり、自分なりに関わってみる機会を持つようにしないといけないなと自戒しています。



※CoPilot で生成した AI イラストです。

秋の京都での対人援助学会の賑わいを願って！



# 講演会 & ライブ な日々 ③9

古川 秀明

## 『労働者としてのスクールカウンセラー』

スクールカウンセラーとして働きだして30年近くなる。

その間、「労働者としてのスクールカウンセラー（以下SC）」という内容で講演や研修会を合計5回実施した。

単年度雇用（毎年採用試験を受けなければならない）、昇給なし、ボーナスなし、雇用保険等の社会保障なし、各種福利厚生なし、月給ではなく時給計算で支払われる給料、年間の勤務日数制限あり。

30年前も現在も同じ給料の仕事はそんなにないだろう。

5回も声を大にして訴えても、反応はほとんどない。

SC以外の方は、SCの過酷な現状に驚き、当のSCのみなさんは深く共感はしてくれるが、動かさない現状を変えようとまでは思わない。

心理士会の幹部の方はほとんど大学で働いてらっしゃる先生なので、別にSCの仕事を手放しても食べてはいける。

大学の先生方は臨床心理学の研究対象としてS Cを考える事には長けておられる。

しかし、労働者としてのS Cのことまでは考えて下さらなかった。

特に若いS Cにとって、この雇用条件は厳しい。

住宅ローンもなかなか通らないだろう。

こんな不安定な雇用条件のままだと、若者のS C離れが加速し、いつか職業として成立しなくなる可能性もある。

そんな状況が続くなか、東京都で事件が勃発した。

(以下東京ニュースより引用)

## 16年間も働いたのに突然、雇い止め… 「就職氷河期世代が切り捨てられた」 スクールカウンセラーの嘆き

東京都の非正規公務員として働くスクールカウンセラーが3月末で「雇い止め」に遭うとして労働組合に相談が相次いでいる問題で、2024年度も継続して働くことを希望し公募試験を受けた都スクールカウンセラーのうち、2割を超える250人が採用されないことがわかった。

採用者からも「明日はわが身」などと採用基準を詳しく明らかにするよう都教委に求める声が上がっている。

◆「非正規でも家族はいるし、生活して人生を歩んでいる」

労働組合「心理職ユニオン」(東京都豊島区)が実施した調査(回答数728人)

では、補欠に当たる「補充任用」や不合格だった人の割合が40代は21.5%、50代は32.6%と20代以下の16.7%より高かった。

調査結果を知った男性は「公正に審査して経験年数が長い人が若い世代より本当にダメだったのか」と選考基準に疑念を抱く。

男性は、若い世代のために雇用の機会をつくることは必要だと感じているが、「現役の40、50代を犠牲にしたことに憤りを感じる。非正規でも家族はいるし、生活して人生を歩んでいる。職員を大事にするなら、数カ月前に切ることはしない」と話した。

同じく就職氷河期世代の女性（52）は試験の結果、補欠だった。「損な世代。不景気のあおりを受けて親の住宅ローンを支払った。人生設計も立てられず、他の世代より社会の支援を受けられていないと感じる」と話す。

1月下旬に雇い止めに遭ったが、3月25日になって繰り上げでの採用の通知を受け取った。

23年度に担当した学校とは別の学校への配属だった。

熟考の末、辞退した。

「本当は、もう一度頑張りたかった。でも1月の首切りで尊厳を踏みにじられ、経済的にも精神的にもダメージが大きかった」と話す。

（以上東京ニュース）

東京で雇止めを受けたS Cは実力のあるベテランの人も多いと聞く。

突然の雇止めにプライドも自信もアイデンティティーも傷つけられ、理不尽な対応に怒りのコメントがずらりと並んだのも無理はない。

都内で会見した都スクールカウンセラーは「部品を外して新しいのと換えるような理不尽な雇い止めを行政が率先している」と批判。

東京公務公共一般労働組合の原田仁希氏は「これだけ一気に非正規公務員の雇い止めが起きたのはおそらく全国初ではないか」と述べている。

このような現状を変えるには、S Cを教師や養護教諭のように、常勤として正式に公務員として採用するしかない。

常勤化すると、S Cとしての外部性や公平性に欠け、また学校の中のヒエラルキーに巻き込まれるのではないかという懸念もある。

しかし、それは工夫すれば何とかなるだろうが、職業として成立せず、誰もS Cをやらなかつたら元も子もない話になる。

そんなに現状が変わらないのであれば、さっさと他の仕事を探すという手もある。

実際、そうする人もたくさんおられた。

それでは、なぜ私はこの仕事を続けているのだろう・・・。

その答えはきつとこの仕事が好きだからであろう。

他に適当な理由が見つからない。

というわけで、そのうち良い風も吹いて来るだろうと鷹揚に構えている。

若い時は血気盛んに、なんとかS Cの現状を変えたいと躍起になっていたが、こんな風に穏やかに考えられるようになったのは、きっと加齢のせいだろう。

シンガーソングカウンセラー  
ふるかわひであき

# 立場が変わると何が見える



～その9 子どもの自立と養育者の関わり～

坂口 伊都

## はじめに

新年度が始まり、あれよあれよという間にゴールデンウィークも過ぎてしまいました。そして、この前まで雪が舞っていたかと思ったら一転して汗ばむ陽気、1日の気温差が10℃以上あたりと寒暖差に身体がついていけません。私は倦怠感を乗り越えるために気合を入れて身体を動かしています。皆さんは、お元気でお過ごしでしょうか。

この春に女子会旅をしました。子どもが保育園時代からのつきあいの家族で、母と娘ペアの4人で広島旅行。ここの家族とは、兄も妹も同じ年で、家族ぐるみでキャンプに行ったり、飲み会をしたり、京都国際社会福祉センターで家族療法を習っている時に「健康家族」として家族面接に駆けつけてくれたこともありました。子どもが成人したので、女性軍だけで旅行をしようとなりました。小さい頃からのつきあいなので、お互いに気をつかわずに過ごせます。

娘たちは、美味しそうなものをいっぱいみつけて牡蠣に広島焼、いちごパフェ、パンケーキと、まだ食べるの？とこちらが驚くペースで食べていました。若い人の胃袋は、たくましい。

食べているだけでなく、美術館や国立原爆死没者追悼平和祈念館に行き、

## 「暁部隊 劫火へ向カハリ ー特攻少年兵たちのヒロシマー」

太平洋戦争末期、陸軍の「特別幹部候補生」として船舶司令部(通称「暁部隊」)に配属され、江田島に集められた少年兵たちは、①(マルシ)と呼ばれた一人乗りのベニヤ板製モーターボートで敵艦を撃沈させる特攻訓練を受けていました。

しかし、死を覚悟していた彼らを待ち受けていたのは特攻ではなく、1945年8月6日の原爆投下でした。「本務を捨てても広島市の救護に立て」との命令を受け、急行した彼らが死の街広島で何を見て、何を感じたのか。彼らの心情に迫ります。

[企画展 | 国立広島原爆死没者追悼平和祈念館 \(hiro-tsuitokinenkan.go.jp\)](http://hiro-tsuitokinenkan.go.jp) より抜粋

ここで上映されているものは、授業では教えていない広島の人々の物語です。そこに触れたことで娘たちの気持ちが動き、被爆後の焼野原写真の中で、建ち続けていた鳥居に行きたいと言い出しました。親は子どもに連れられながら護国神社に向き、被爆樹木にも出会えました。

この旅行で、親に甘えて好きなものを食べたり、犬がいたり嬉しそうに撫でに行ったり、無邪気な一面を見せつつ、大人の顔になって行動する姿を見せてくれました。これからの娘たちの成長や生き方を隣で見ていることが楽しみです。

今回は、親、養育里親、児童養護施設に関わった経験から見えてきたことを書きました。今回は、子どもが自立しようとする時に大人はどう関わっていけるのか、関わっていく意味について考えていきたいと思います。どうぞ、最後までお付き合いください。



## 子どもが大人になっていく過程で

人を援助していく際、最初の介入の手掛かりをどうしたらいいか悩むことがあります。特にその方に所属がないとアプローチが難しくなります。スクールソーシャルワーカーの時は、在学中に子どもとの関係を築きながら、卒業後も社会資源とつながっていけることを大事にしました。

子どもとの関係は、置かれた環境で変化するものです。養育里親、児童養護施設、学校という場所や立場でつながる関わりだと、子どもがそこに所属しなくなると手を差し伸べる根拠を失います。児童養護施設等には、子どもが退所した後のアフターケア事業があります。それも、新生活に問題がなければいずれ終結していきます。退所してから子どもが施設に顔を見せに来てくれることもあります。見知った職員が退職していたり、日々の業務で忙しいことを知っているから頻回に訪れることは難しい。子どもの人権が叫ばれていますが、子どもが卒業や退所してからも大人を頼り続けていいというメッセージを出せずにいるのが今の社会ではないでしょうか。

実親であれば、離婚して子どもと離れて暮らすことになっても「親」という事実は消えず、子どもと会う会わないに関わらず、親子関係は消えません。消えない関係だから、心情的に複雑さを増します。

私には実子が2人います。娘はいろいろな話をしてくれ、家にも度々帰ってきますが、息子の方はめったに連絡をくれません。どうしているのかとメッセージを送っても返事がないのは日常茶飯事です。必要最低限の返事だけで、帰ると言いながら帰ってこない息子です。親や実家が気にならないのかと寂しくもなりますが、息子にも思いがあるのでしょうか。

自身の事言えば、父親とは一緒に暮らした経験がありません。子どもの頃は、母親から会いに行きなさいと言い渡され、たまに出会うおじさんという印象で、会うことを楽しみにしたことはなかったで

す。それは大人になってからも続き、何となく憂鬱でした。親子の縁は存在し続けますが、親に遠慮や敬遠が先に立っていました。

養育里親をしていた元里子とは、社会的養護の場を自立した今も交流が続いています。別れて暮らすようになってからは、ボランティアとして関わらせていただきました。今は、何でしょうね、友人？知人？どちらもしっかりきません。感覚的には「家族」が一番近い。そうですね、「法的根拠を持たない家族」と言ったところでしょうか。いつも何の権限も持たない己を忘れずに元里子と関わっています。成人しているのですから、必要とされることもあまりありません。

元里子から健康保険のことで相談されても、一緒に動きようがないもどかしさを感じます。誰に相談したらいいのかを考えることはできるので、そこを一緒に話しています。一人で決めようとせず、相談できる相手を持ち続けて欲しいと願っています。

ここぞというような大事な事柄に関わることは難しいですが、会う約束の日に

元里子「自転車のチェーン外れた」

元里母「ガチャガチャって、いっぱい変速変えた？」

元里子「えー、してないよ」

元里父「チェーン外れてからペダル漕いだやろ」

元里子「うん、直るかなって思って」

元里父「完全に外れてるやんけ」

元里母「チェーン外れたの今日で、良かったね」

元里子「うん」

ほくそ笑む元里母と子、そして手を黒くしながら奮闘する父

一緒にご飯を食べたり、釣りに行ったりという程度の関わりは続いています。一緒に外出し、そろそろ帰ろうかという頃に元里子が、

「明日の昼ごはんいるねん」と言い出しました。

「明日、仕事なの？」

「ううん、休み」

「それは、明日のお昼ごはん買ってということだね(笑)」

「お昼ごはん、買って～」と言い直す。

ほんまに可愛いことを言ってくれるようになりました。

ということで、スーパーへ。何を買うのかなと思いながら見ていると、里兄が好きなカップ麺と里姉が好きなグミを選んでカゴに入れる姿に笑ってしまいました。

息子も娘も同じようにスーパーに行くと、食料品や日用品を何も言わずにカゴの中に放り込むので、



どの子も同じだと感じます。これが、ひよこだった子どもに羽が生えて飛び立とうとしている時期の甘え方の一つなのかも知れません。お金の余裕もない時ですから、日用品を買ってもらえると懐があったまって、嬉しくなるのもわかります。

一人暮らしを始めた頃は、自由を謳歌しながらもどこかに寂しさを感じる時期です。親と一緒に暮らしのための準備をしたり、生活の仕方を教えてもらいながら安心感を得ようとするのでしょう。アフターケアは、どの子にとっても社会に飛び込む助走の手助けとして必要なものだ実感します。

## 大人でも上手にできなくていい

社会的養護の場で、養育者や生活の場所が変わらないで続くことを保障していくことをパーマナンスーと言いますが、実際に保障していくことは難しかったです。里子が自立するまで何とか我が家だと願っていましたが、それは叶わなかった。離れる時は、元里子の自立時期に関われるとは思っていませんでした。

そして、社会的養護の時代が終わり、自立していく中で、頼りにできる人がいることは大事です。息子や娘も同様で、何かあれば駆け込める場所が「父母」になっています。助けてを言うのが上手な娘と下手な息子たちという差はありますが。

子どもは身体も小さく、財力もないので大人、特に養育者の力を必要とします。大人になっても、若いうちは薄給ですが、したいことや欲しいモノはけっこうあり、生活を回していくことに苦労することが多く苛立ったりすることも度々起きます。その時は、愚痴を聞いてもらえる相手が欲しくなり、転職、結婚、離婚等、生きていく中で大きく生活が変化する場面には相談相手が、子育てをしていければ助けてくれる手が欲しくなります。人は群れて生きる生き物ですから、大人になっても頼れる人がいます。それが、養育者である必要はありませんが、子どもの間に大人に頼ったら何とかなるという経験することが必要です。

子育てをしていると時間的余裕や養育者自身の気持ちの余裕がなくなり、子どもに優しい気持ちを向けられなくなる時もあります。その時に養育者が、誰かに助けを求めることも非常に大切なことです。子どもは、養育者の姿をよく見ています。養育者自身の行動を見て、子どもに言っていることが違うと感じると不信感を抱きます。養育者が、完璧な姿を見せる必要はないし、失敗しても人の助けを借りて立て直す姿を見せられる方が子どものためになります。

私の母は、子どもの私によく、「あなたは、私の言う通りにしたら間違えないから」と言っていました。昭和という時代背景もあったのだと思いますが、完璧な親でありたかったのかもしれない。親は良かれと思っていたのですが、子どもは自身で立て直せる術があることを学ばず、マイナスに作用していました。



遠い先まで見通せる力があるかと問われれば、3年後に自分がどうなっているか正確に答えられる人はいません。手前の現実から判断せざるを得ない。今の自分の努力が将来報われるかどうか、誰にもわからない不確かさの中で生活しているのだと感じます。

人は強くもないし、賢くもないようです。上手くいってもいかなくても、迷い続けているところがあるようです。

## 子どもに伝えたいこと

子どもが大人になり、パートナーを連れてくる日もあるでしょう。その時、子どもが連れてきたパートナーをできるだけ受け入れようと努力する方が多いのではないのでしょうか。反対したところで、親の言うことを聞くとは思えないですし、なかなか結婚しようとしないう時代の若者が、婚姻を結ぼうとしていることに安堵を感じるかも知れません。

また、法的には認められていませんが、ドラマ等で同性婚が社会から祝福されている描写を見かけるようになりました。時代の変化と共に親が子どもの婚姻相手を選ぼうと思わなくなっています。仮に、息子や娘が同性のパートナーを連れてきても、その事実を受け止めようとするだろうと感じます。そのシーンに出会ってはいないので、実際どうなるかは今後のお楽しみです。

子育てを終えて、子ども達はどのように母親を受けとめてきたのか私にはわかりません。ただ、どの子どもも可愛いと感じています。もう知らんと怒ったこともあります。自分の事より先に子どものことを案じ続け、その感覚は身体に沁み込んでいます。

そして、学校や施設、面接等で出会い、向き合ってきた子どもや親のことも一所懸命に考えました。多くの出会いや貴重な経験から改めて生きていくために知っておくといふことがあると気づきました。それは、

簡単に人生は終わったりしない。終わったように思えても、芽は出てくるし、新たな物語が先に待っているもので、

同じ出来事でも、自分の捉え方で景色が全く変わる。あなたの人生は、人のせいにならんとせず、あなた自身が責任を持ちなさい。

そして、誰かに助けてを言える人になってね。

子どもも大人も、宿り木になれる人が必要です。子ども達には、大事な人との関係を自分でちゃんと考えようとする人になって欲しいと思っています。



## 周辺からの記憶 43

### 2021 年度シンポジウム

#### 「被災と復興の証人 11 年の足跡とこれから」

村本邦子(立命館大学)

4月21日、十三にあるシアターセブンに、母子避難をテーマにしたドキュメンタリー『決断』を観に行った。いつも ZOOM の研究会で一緒にいる森松明希子さんも映画に登場し、舞台トークがあるということで、リアルで会えるのを楽しみにしていた。とても良い映画だった。キッパリと命を最優先することを選んだ女たちの成長の物語でもある。状況を変えるためには自ら動かなければならない。結果はどうあれ、選挙に出たり裁判に立ったりしながら、声を上げ、大きな流れに抗う人々の軌跡を残すことで次世代への責任を果たそうとしておられた。きちんと情報提示されたなかで 1 人 1 人が総合的に判断すれば当然さまざまな選択があるだろう。正しい判断、間違った判断があるわけではない。ただし、前提となる情報は自ら求めていかなければならない世の中だ。いつ誰の身にも降りかかり得ることとして多くの人に観て欲しいし、自分自身のあり方を突き付けられる。

そして、驚いたことに、森松さんと一緒に登壇したもう 1 人の女性は、なんと 2014 年に東日本家族応援プロジェクトで講師にお招きしたことのある川崎あやかさんだった（周辺からの記憶 17「2014 年福島のこと」158 頁参照）。当時、夫の理解を得られないまま母子避難し、長男が新しい学校に馴染めず戻ってしまったという苦しい胸の内を語ってくれた。「子どもが病気の場合は、その子のために家族が団結できるが、災害の場合は、家族だけで家族を守れない。社会を変えなければと思うようになった」とおっしゃっていたが、現在は母子避難京都原告になっているとのこと、とても凛々しかった。素晴らしい女性たちの存在は誇らしく、とてもエンパワーされた。

長く続けていくと、いろいろなことがつながっていく。



## 最終年度のシンポジウム

### 被災と復興の証人 11年の足跡とこれから

毎年、東北4県を訪れ、現地の人々と顔の見える関係を結び、その声に耳を傾け、被災と復興の証人になろうと東日本・家族応援プロジェクトを立ち上げた。当初、十年プロジェクトとしてスタートしたが、最終年度となる2020年、コロナ禍のためにオンラインでのプロジェクトとなり、最終年度を2021年度にした。結果として11年、それぞれの土地の豊かさとともに、被災がもたらした影響、それを生き抜く人々の知恵と力について多くを教わってきた。最終年度のまとめとしてのシンポジウムでは、プロジェクトに関わりのあった人々が集い、それぞれの立場からその足跡を確認し、あらたな出会いと次の一歩が生まれることを願って「被災と復興の証人 11年の足跡とこれから」を企画した。

## 第一部 11年目の証人たち

第一部では「11年目の証人たち」として、今年度、プロジェクトに参加した院生たちの報告から始まった。まずは、むつチームである。



## むつチーム

この地域は他の地域と比べると震災と関連付けられることが少ない地域になっているが、地震、津波の影響を受けた被災、またあまりよく知られていないが、下北半島には原発関連施設がたくさんあり、原発事故の影響も受けている。8月のプロジェクトはリモートで行い、10月にフィールドワークを行った。

リモートのプロジェクトでは3つのイベントを行ったが、院生も参加した「支援者支援座談会」について報告する。これは、これまでむつの地域のさまざまな支援者が集まって行ってきた支援者支援セミナーの成果を振り返る形のものだった。

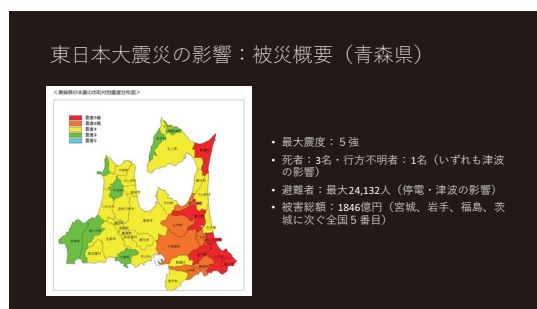
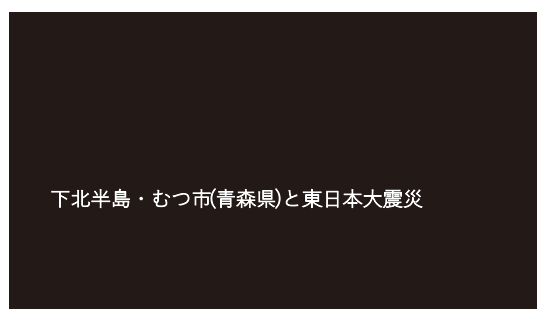
ひとつめに印象に残っているのは、むつ児相の真手さんが何度も語られていた「関係者主体から家族主体へ」ということである。関係者、いわゆる専門家や専門機関が家族の問題を解決するのではなく、また、専門家や専門機関が単独で動くのではなく、家族に関心を持って理解し、地域全体で家族を支えていくということを意味している。家族主体の支援を阻むような組織や専門家の縦割りに横串を刺すきっかけになっていた。立命館とむつの二人三脚で蓄積されてきた10年の経験がこのような「理論」として結実する瞬間に、私たち院生も立ち合わせてもらったような気がした。

もうひとつ大きな学びとなったのは、続けることの意味である。村本先生の「十年やるよ」という約束で始まったプロジェクト。「やること」ではなく「つづけること」が先にあることで、さまざまな課題とその解決策を共に探る協働関係がつくられていった。

また、「非日常」も続けることで「日常」となる。行政の中では特異的とも言える多職種連携の場も、繰り返されることで受け入れられていった。それから、「出会い」が重なり「繋がり」となるということ。立場の異なる人々が、年々顔見知りになり、信頼関係が深まっていった。震災直後になされた不確実な状況下での「十年続ける」という宣言、「十年続けてきた」経験の分かち合い、続けてきたことを「これからも続けていく」という決意が成されたということ、それを見届ける場に私たちがいるという事実への深い驚きがあった。

最後にフィールドワークについて簡単に報告する。10月15日から3日間、むつ児相の杉浦さんご夫妻にキャンピングカーで案内頂く形で、1日目には、①七戸十和田駅(集合場所)②六ヶ所原燃 PR センター(六ヶ所村)/③尻屋崎/④むつ来さまい館(むつ市)、2日目には、①恐山/②川内ダム/③三上幸太郎記念館/④あさこハウス/⑤大間崎/⑥北通り総合文化センターウイング/⑦八戸みろく横丁、3日目には、①館鼻朝市/②みなと体験学習館/③蕪嶋神社/④三陸復興⑤国立公園/⑥是川縄文館を訪れた。

そこで見たものをあえて一言で言うなら、下北半島の豊かな文化と自然、それに対する無表情な人工物、つまり下北半島が抱える軍事施設や原発関連施設だった。これは大きな矛盾として私たちの前に立ちはだかった。そんな矛盾のなかをたくましく生きていかれるむつの人たちの姿に知恵と大きな力を得た。プロジェクトは一区切りとなるが、ここで得たものを繰り返し語り継ぐことで、この知恵を紡いでいこうと思う。



「東日本・家族応援プロジェクト in むつ 2021@リモート」

8月27日  
 ・ 支援者支援セミナー座談会 (14:30～16:00)  
 「家族の笑顔を支えるむつの力」  
 →東日本大震災復興プロジェクトの10年とこれからを語る。

・ お父さん応援セミナー (18:30～20:00)  
 講師：中村正先生  
 「家族の中のお父さんのあり方や地域に貢献する男は誰について考えるセミナー」

8月28日  
 ・ 団士郎漫画トーク (10:30～12:00)  
 「家族の小さな物語を通して、活動最前線の今の気持ちを語る」



下北半島フィールドワーク

10月15日(金) 1日目  
 ①七戸十和田駅(集合場所)②穴ヶ所  
 産物センター(六ヶ所村)③浜  
 屋崎④むつ赤まい橋(むつ市)

10月16日(土) 2日目  
 ①忍山②川内ダム③三上本郷記  
 念館④あさこハウス⑤大間崎⑥  
 北通り総合文化センターウイング/  
 ⑦八戸みらく横丁

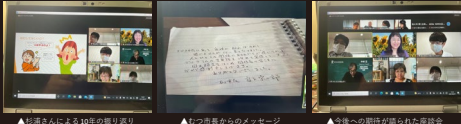
10月17日(日) 3日目  
 ①雄勝町市なみなと体験学習館③  
 南鏡神社④三陸復興⑤国立公園⑥  
 豊川郷文庫



支援者支援セミナー座談会

・ 例年むつで行われていた、地域のさまざまな対人援助による事例検討の場、「支援者支援セミナー」の成果を振り返り、今後に向けた展望を話し合う。

・ むつ市庁舎相談所から、杉浦さん(現在はご退職)、真手課長、板庭さん、立命館から村本孝子先生、中村正先生が参加。



▲杉浦さんによる10年の振り返り ▲むつ市長からのメッセージ ▲今後への期待が語られた座談会



下北半島の豊かな文化と自然、対する 無表情な人工物。



関係者=専門家による家族の「問題」解決  
 専門家・専門機関による単独行動  
 ↓  
 ・「家族全体」に興味を持ち、理解する  
 ・地域力を引出し、地域全体で家族を支える

\*「地域全体での家族主体の支援」を阻む縦割りに、横断を創す「きっかけ」としての「支援者支援セミナー」

立命館とむつの二人三脚で蓄積されてきた10年の経験がこのような「契機」として結実する瞬間に、私たち関係者も立ち会わせてもらったような気がした。




支援者支援セミナー座談会に出席された、むつ市災害援助所職員の方へ、10年間の取り組みを振り返っていただく決意が伝わりました。

11年の歩みの末に出会った、人々の力、土地の力。


座談会での学び：  
 「つづけること」：“約束”がひろく対人援助

・ 「やること」ではなく、「つづけること」  
 ・ さまざまな課題とその解決策を共に探る協働関係がつけられていった

・ 「非日常」も続けることで「日常」となる  
 ・ 特異的だった多職種連携の場も、繰り返されることで受け入れられていった

・ 「出会い」が重なり「繋がり」となる  
 ・ 立場の異なる人々が、年々顔見知りになり、信頼関係が深まっていた

震災直後になされた「10年続ける」という宣言、「10年続けてきた」経験の力がある含み、続けられたことを「これからも続けていく」という決意、それを見届ける場に私たちがいるという事実への驚き



### 多賀城千ーム

宮城県、多賀城市の概要はスライドの通り。宮城県公式HPによれば、推定人口は約6万4千人減少しているとのこと。多賀城市は奈良時代に東北地方を統治するための役所「多賀城」が置かれて、政治・文化・軍事の中心地としての役割を果たした歴史ある町で、文化財が豊富にある。東日本大震災では高い津波によって町の34%が浸水し、十年間の復興計画が策定された。現地での再建を基本とし、さまざまな対策が講じられ、多重防御を行うことで、

プロジェクトの紹介

▷フィールドワーク：10月15日～17日

仮に同規模の津波がきても、市内の居住可能地域の津波の浸水深を2m未満に抑えるように設計された。2メートルを越えると建物が大幅に流出し、死亡率が高くなると報告されたからだ。

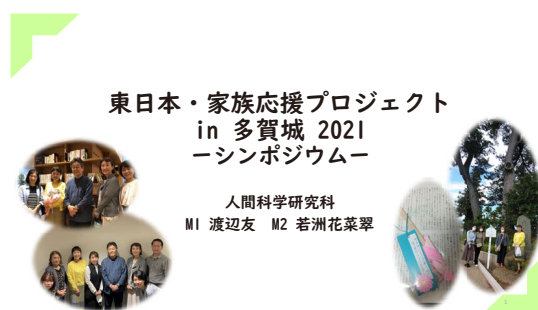
現地でのプロジェクトはスライドのようなスケジュールで行われた。多賀城市立図書館でのイベントは、多賀城民話の会の方の民話語り、おおぞら保育園の歌や遊び、午後は団士郎先生の漫画トークが行われた。東北弁が優しく響く空間で、民話に耳を傾ける時間歌や手遊びを生き活きと楽しむ子供と、温かく見守る大人の姿が印象的だった。

夜は上山先生、モリス先生のお宅を訪問し、おいしい豚汁を頂きながら、被災当時の多賀城の様子や防災の備えについてのお話を伺った。多賀城にも川伝いに黒い津波が押し寄せ、多くの方が亡くなられた。臨床心理士である上山先生は被災者でありながらも、支援に関わられた。被災時、支援者が他者を支援するためには、日頃から家を片付け備えておく必要があるとのこと、支援者としても強い覚悟を感じた。

翌日は、震災遺構である仙台市立荒浜小学校を訪れた。荒浜小学校は海岸から700mに位置しており、地震が起きた70分後に、2階まで(高さ4.6m)津波が、押し寄せた。津波の圧力で曲がった2階の金属フェンスを見て、体で津波の恐ろしさを感じた。小学校周辺には集落が広がっていたが、災害危険区域に指定されたため集団移転がなされたため、荒浜小学校がポツンと建っていた。

次に復興を支える民話活動について報告する。1970年代より民話を採取し残そうとする活動がみやぎ民話の会を中心に始まった。民話は、人々が「生き抜いてきた激しい現実」に根がある。震災体験を語り聞く活動や、町民の被災証言をまとめた本の出版を行われてきた。本プロジェクトには、2014年より協力をして頂いている。今年のみやぎ民話の会の小野和子さん、加藤恵子さん、島津信子さん、目黒とみ子さんの4名の方と対談させてもらった。ある人に物語を語ってもらい、聴き、残すことは、民話、歴史の継承であり、その人が生きてきた現実と立ち会う、大切にすることだった。

プロジェクトの学びについて報告する。まずは、同じ熱量で継続することの大切さである。たくさんの方の現地にプロジェクトが受け入れられ、今後も繋がりたいと思ってくれるのもそのゆえだと感じた。また、2年続けて参加したことで、少しずつ1つ1つのものが繋がっていく中で自分事として考えられることが増える感覚があり、プロジェクトに関わり続けている方には見えているものがまだ見えていないなあと感じたのである。



## 宮城県の概要



推定人口：2,282,142人（令和3年8月1日現在）  
面積：7,282,29km<sup>2</sup>（令和3年4月1日現在）  
県庁所在地：仙台市  
観光：



## 多賀城市立図書館でのイベント

団先生の漫画トーク

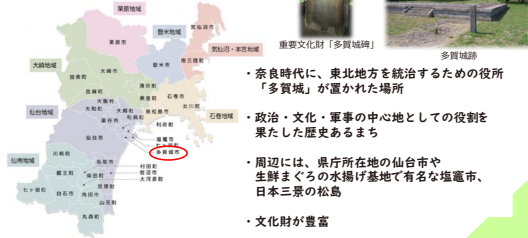
「Doors」  
単身赴任で週末のみ家に帰るお父さんが、子どもが部屋に引きこもって出てこない相談に来る。家をリフォームしては？という提案を聞いて、子供部屋の扉を外して子どもと一緒にドアを捨てに行くお話。



「3 on 3」  
不登校の中学生の息子の相談に来た両親に、生活のパターンを変えるように提案して、父は息子と毎週ドライブに行くようになる。息子は街のバスケットでプレイするようになり、学校を転校する。

実は同じ家族の物語。提案を聞くこと、状況を変えてみるための行動を起こすことが大切。

## 多賀城の概要



- ・奈良時代に、東北地方を統治するための役所「多賀城」が置かれた場所
- ・政治・文化・軍事の中心地としての役割を果たした歴史あるまち
- ・周辺には、県庁所在地の仙台市や生鮮まぐろの水揚げ基地で有名な塩釜市、日本三景の松島
- ・文化財が豊富

## 災害と向き合う（人の力）



- 【上山先生とモリス先生のお宅訪問】
- ・被災当時の多賀城の様子、防災の備えについてお話を伺う。
- ・多賀城にも川底に黒い津波が押し寄せた。
- ・被災時、支援者が他者を支援するためには、日頃から家を片付け備えておく必要がある。

## 多賀城市の震災復興計画



- 【土地利用方針】
- ・多重防壁を行うことで、市内の居住可能地域の津波の浸水深を2m未満に抑える
- ・現地での再建を基本とする

## 災害と向き合う（モノの力）



- 【震災遺構 仙台市立荒浜小学校】
- ・海岸から700mに位置しており、地震が起きた70分後に、2階まで(高さ4.6m)津波が、押し寄せた。
- ・津波の圧力で曲がった2階の金属フェンスを見て、津波の恐ろしさを感じた。

## プロジェクトのスケジュール

<p>10月1日(金)</p> <p>15:00～16:30 都市型津波を学ぶ 3.11震災語り部ツアー →台風接近のため中止に…</p> <p>18:00～ 支援者交流会</p>	<p>10月2日(土)</p> <p>10:00～11:30 ワークショップ ①「うたとおはなしと伝承遊びをたのしもう」 ②「絵本とペーパーアート」 ③「お手玉のうたと遊び」</p> <p>14:00～15:30 団士の漫画トーク</p> <p>18:00頃～ 上山先生、モリス先生のお宅に訪問</p>	<p>10月3日(日)</p> <p>9:30～10:20 震災遺構 仙台市立荒浜小学校</p> <p>13:00～15:00 民話 声の図書館 宮城民話の会さまとのプログラム</p>
--	---	--

## 復興を支える民話の力

- ・1970年代より民話を採取し残そうとする活動が始まった。
- ・民話は、人々が「生き抜いてきた激しい現実」に根がある。
- ・震災体験を語り聞く活動や、町民の被災証言をまとめた本の出版を行われてきた。
- ・本プロジェクトには、2014年より協力をして頂いている。
- ・今年のみやぎ民話の会、小野和子さん、加藤恵子さん、島津信子さん、目黒とみ子さんと対談。
- ・ある人に物語を語ってもらい、聴き、残すこと  
→民話・歴史・継承  
その人が生きてきた現実に立ち会う・大切にす



## 多賀城市立図書館でのイベント

<p>10:00～10:30 「ふるさとの民話と手遊びうた」 多賀城民話の会の皆様 民話「おずみのもも」 「とんぼとからす」 手遊び「かっぱ」「いわしのひらさ」</p>	<p>10:30～11:00 「絵本とペーパーアート」 おそろ保育園の保育士の方々 「はらこおあむし」の読み聞かせ ペーパーアートを使った 「どんな色が好き」歌遊び</p>
<p>11:00～11:30 「お手玉のうたと遊び」 園長 黒川先生、小林さん お手玉の歴史の紹介 「あなたがどこまで、都後さ」のお手玉遊び 牛乳パックの工作</p>	

東北弁が優しく響く空間で、民話に耳を傾ける時間  
歌や手遊びを活き活きと楽しむ子供と、温かく見守る大人の姿

## プロジェクトとしての学び

- ◎「同じ熱量で継続すること」の大切さ  
言葉の重みと人を惹きつける力に変わる  
↓  
たくさんの方の現地の方にプロジェクトが受け入れられ、今後も繋がりが続いていってくださる
- ◎オンラインの去年と現地での本年  
自身の変化  
2年間参加し少しずつ1つ1つのものが繋がっていく中で、自分事として考えられることが増える感覚  
↓  
プロジェクトに関わり続けている方には見えているものがまだ見えていないなあと感じる感覚



## 石巻チーム

### 参考文献

- 宮城県公式サイト「宮城県推定人口(月報)(最終閲覧日2021年8月31日)」  
<https://www.pref.miyagi.jp/soshiki/toukei/suiketop.html>
- 国土交通省国土院「令和3年 全国都道府県市区町村別面積調(4月1日時点)」  
(最終閲覧日2021年8月31日)  
<https://www.ssi.go.jp/KOKUJYOHO/MENCHO/backnumber/G00nseki20210401.pdf>
- 多賀城市ホームページ「市の規模」(最終閲覧日2021年9月1日)  
<https://www.city.togajo.miyagi.jp/koho/shise/gaiyo/profile/titotitokei.html>
- 多賀城市ホームページ「多賀城市/市長室へようこそ!」(最終閲覧日2021年9月2日)  
<https://www.city.togajo.miyagi.jp/hisho/shise/gaiyo/yokoso/index.html>
- 多賀城市ホームページ「多賀城市の文化財/特別史跡多賀城跡附寺跡」(最終閲覧日2021年9月9日)  
<https://www.city.togajo.miyagi.jp/bunkazai/shiseki/bunkazai/shitebunkazai/kunishite/teroto.html>
- 塩竈市ホームページ「まぐろのはなしあれこれ」(最終閲覧日2022年9月9日)  
<https://www.city.shiogama.miyagi.jp/soshiki/15/1960.html>
- 多賀城市における東日本大震災の被害状況概要(平成30年8月1日更新)(最終閲覧日2022年1月23日)  
<https://www.city.togajo.miyagi.jp/bosai/curashi/daisinsai/documents/h3008higaigaiyou.pdf>

### 参考文献

- たがじょう見聞帳 史部・多賀城 防災・減災アーカイブ「復興計画」(最終閲覧日2022年1月24日)  
<http://togajo.irdes.tohoku.ac.jp/contents/special/NE538E4A9E8283838E8A888E79448B>

### 引用写真

- じゃらんnet「宮城のご当地グルメニューランキングTOP10」(最終閲覧日2021年8月31日)  
<https://www.jalan.net/gourmet/040000/mnu/?screenId=0011701&infIus&km=0>
- じゃらんnet「宮城のお土産ランキングTOP10」(最終閲覧日2021年8月31日)  
<https://www.jalan.net/onyage/040000/?screenId=0011706>
- 楽天トラベル「宮城観光20選!デートや雨の日におすすめのスポットも」  
(最終閲覧日2021年9月31日)  
<https://travel.rakuten.co.jp/mytrip/ranking/spot/miyagi>
- 宮城県公式サイト「宮城県地域マップ」(最終閲覧日2021年9月1日)  
<https://www.pref.miyagi.jp/site/access/ken.html>
- 多賀城市ホームページ「多賀城市の文化財/特別史跡多賀城跡附寺跡」(最終閲覧日2021年9月1日)  
<https://www.city.togajo.miyagi.jp/bunkazai/shiseki/bunkazai/shitebunkazai/kunishite/teroto.html>
- 多賀城市ホームページ「多賀城市の文化財/重要文化財「多賀城跡」(たがじょうじ)」  
(最終閲覧日2021年1月13日)  
<https://www.city.togajo.miyagi.jp/bunkazai/shiseki/bunkazai/shitebunkazai/kunishite/togajohi.html>

### 引用写真

- たがじょう見聞帳 史部・多賀城 防災・減災アーカイブ「復興計画」(最終閲覧日2022年1月24日)  
<http://togajo.irdes.tohoku.ac.jp/contents/special/NE538E4A9E8283838E8A888E79448B>
- 朝日新聞デジタル「世界で最も「はらぺこ」なおおし。実は日本で制作」(2021年5月27日)  
<https://www.asahi.com/articles/ASPSA00P5UTFL005.html>(最終閲覧日2021年10月14日)
- minne「どんな色が好き?ペーパーアート」  
<https://minne.com/items/2158315A>(最終閲覧日2021年10月14日)
- 34°11」にもわずかにためてセンターしゃんときじ「多賀城市町観望点の様子(2011年4月)」  
(最終閲覧日2022年2月4日)  
<https://recorder311.smt.jp/blog/46186/>
- 宮城県復興支援 伝承課「みやぎ・復興の歩み10」3-4 東日本大震災の概況(最終閲覧日2022年2月4日)  
<https://www.fukukoniyoji.jp/woradress/wmontent/uploads/2021/03/2fe594387c16cee2387ee924b0a0b4ee.pdf>

### 引用写真

- たがじょう見聞帳 史部・多賀城 防災・減災アーカイブ「復旧・復興ビフォーアフター映像集」(最終閲覧日2022年2月17日)  
<http://togajo.irdes.tohoku.ac.jp/contents/special/NE538E4A9E8283838E8A888E79448B>
- みやぎ復興情報ポータルサイト「東日本大震災の概況」(最終閲覧日2022年2月17日)  
<https://www.fukukoniyoji.jp/outline/>
- 「震災遺構 仙台市立荒浜小学校」パンフレット(最終閲覧日2022年2月17日)  
<https://www.city.sendai.jp/kankyo/shisetsu/documents/brochure202004.pdf>

まず、「見えないものを見る」というテーマで報告したい。1日目には関係者で入念な準備を行った。何年も続けて来た方々の思いを知り、証人になるとは何かを考える時間となった。2日目は絵本読み合わせ活動を行い、牡鹿半島、女川、石巻南浜復興祈念公園を訪れた。3日目には日和山公園や大川小学校を訪れた。

大川小学校では多くのことを考えさせられた。たくさんの方が亡くなり、訴訟11年の時を経て訴訟の判決が確定し、震災遺構として残すことも決まった。でもそれで終わりなのだろうか。時計は15時37分で止まっている。遺族の心の時間はここから進んでいるのか。震災の起こった時間とのずれ。

女川に同行頂いた木村正さんは「女川は俺の育った街だ。でも、俺の知っている女川は一つもない。すべてなくなった」とおっしゃった。眼に見える復興とギャップを感じた。木村さんは、「復興した場所で癌合っているのは俺の仲間だ。街はなくなったが仲間たちが復興を続けている」と続けられた。それが誇りとなって木村さんを支えていると感じた。

同じく同行頂いた阿部さんは多くを語りすぎりげなく支えてくれた。教えるのではなく感じることで、知性ではなく感性で大切にしていく。つなげることで、続けること、見えないものに感化されたそんな時間だった。

次に「それぞれの物語」に触れる。イベントを行ったが、会話の合間に「このビルに逃げたのよ」など震災の時の話が語られ



る瞬間があった。一見関係のない話のなかにも震災が顔を出す。それぞれの人生と震災の体験が溶け合って今の自分がいるという印象を受けた。

人々の体験した震災は同じようで違う。震災なしでは自分の人生も今の生活も語ることはできない。だからこそ全く関係ないところからでも震災の記憶につながることもある。人の暮らしは長い時間をかけて引き継がれている。街が発展しても、時間が進んでも、残しておきたいものがある。見えない物語にも、知らない物語にも想いを馳せられるようになりたい。

2021.10.2.(2日目)

行程

- ①絵本の読み合わせ活動
- ②牡鹿半島へ
- ③女川町へ(道の駅)
- ④石巻南浜復興記念公園
- ⑤復興まちづくり情報交流館 中央館
- ⑥島料理「友福丸」にて夕食

3日目(2021.10.3)

行程

- 3日目(2021.10.3)
- ①日和山公園
- ②大川小学校
- ③昼食(石巻やきそば)
- ④みうら海産物店
- ⑤MEET館

石巻市 門脇地区

### チーム石巻

対人援助学領域 M1: 小笹大進  
対人援助学領域 M2: 伊野充代  
対人援助学領域 M2: 藤田幸世  
心理学領域 M1: 重田均央  
心理学領域 M1: 田中優希奈

石巻市立大川小学校

11年のときを経て訴訟の判決が確定した。震災遺構として残すことも決まった。でも...

見えないものを感じる

プレゼンター: 小笹大進

木村正

「女川は俺の育った街だ。でも、俺の知っている女川は一つもない。すべてなくなった」

2021.10.1(1日目)

ミーティング(顔合わせ・自己紹介・明日以降の活動について)

参加者

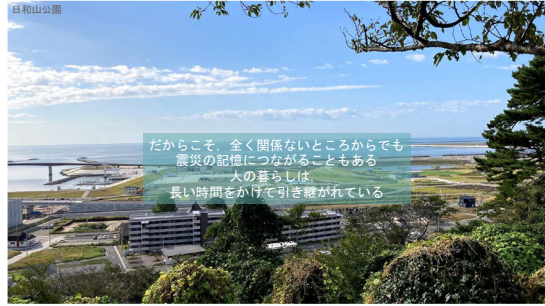
- 立命館大学大学院学生5名(小笹・伊野・藤田・重田・田中)
- 修了生: 内田さん・平井さん
- ピアノ奏者: 村田さん
- 石巻ライオンズクラブ 阿部さん
- 立命館大学大学院教授 増田先生

石巻市立大川小学校

田女川交

「でも、復興した場所で頑張ってるのは、俺の仲間」

石巻SSU流地蔵 MEET門協



## 宮古チーム

宮古では高齢者福祉施設が窓口となっていることもあり、現地に行ったうえで、プロジェクトはリモートで行い、フィールドワークを実施した。

リモートでのプロジェクトは、漫画トークと座談会「宮古震災から十年」を行った。若竹会・スキップの鷺田敦子さんは、被災当時を振り返り、「障害を持っている人がいることを地域の人に知って欲しい」とおっしゃっていた。団士郎漫画展は、10月25日～11月14日、イーストピアみやこ（宮



古市市民交流センター)で開催された。ここは市役所・市民交流センター・保健センターが一体となった施設で、コロナワクチン会場ともなっており、ワクチン接種に訪れた多くの市民が見てくれたそうだ。

その後、三陸鉄道に乗って田老を訪れ、宮古市企画部田老総合事務所所長の斎藤清志さんから、「田老の今・これから」というテーマでお話を聞いた。防潮堤は今後想定される100年に1度の津波は耐えられるが、東日本のような1000年に1度は耐えられない。防潮堤は逃げるまでの時間稼ぎであり、防潮堤があると津波が来ていることがわからないと言うが、わかってからでは遅い。人命を守るために、高台に家を建てる。防潮堤が全て守ってくれると過信はいけませんが、それでも田老に防潮堤は必要だと思うということだった。2011年の東日本大震災のとき93歳で、二度の津波を乗り越えたというおサヨさんについて書かれた『田老の町で生き抜いて』を頂いた。

最終日は田老の学ぶ防災ツアーに参加した。宮古では、過去にも大きな津波があり、津波とともに生きてきた街だった。1933年、昭和三陸大津波を受け、高さ10mのX型の巨大防潮堤を建設し、津波防災の象徴としてチリ大震災津波では大きな被害がなく住民を守った歴史がある。しかし、東日本大震災では最大16mの津波が到達、万里の長城と言われる防潮堤は破壊された。

学ぶ防災ガイドの佐々木純子さんによれば、宮古では、防潮堤の外側(海側)で1人、内側(陸側)で180人が亡くなった。佐々木さんは、「防潮堤はあくまでも時間稼ぎ」と繰り返し強調され、この町に住むことは、津波とともに暮らすことであり「つなみて

んでんこ」の教えの重要性を語った。たろう観光ホテルで観た映像は言葉も出ない衝撃的なものだった。「避難して笑われても、遅れたら命がない」と言っていた。この日は快晴で海がきれいだったが、防潮堤は巨大なコンクリートの壁だった。

フィールドワークでは、喫茶震災前以前から宮古市の三陸海岸でカフェ異人館を営むマスターにお話を伺ったが、防潮堤が建設される前、店の前には海が広がりとても美しかった。震災では1階はすべて流され、骨組みだけが残ったと1枚の写真を見せてくれた。マスターは「綺麗でしょ。誰かが片付けたんじゃないって全部津波にもってかれた」と言った。被災当時、マスターは消防隊員として水門を締める活動途中で津波にのまれ何度も黒い水を飲んだ。生死を彷徨い何とか一命をとりとめた。防潮堤についてマスターは「三陸海岸で生活すると人生で3回は津波がくる。この防潮堤だって想定されてる津波の高さは越えてくるんだ。だからこんなの作っても意味ない」と語った。マスターは防潮堤建設に反対し、最後まで着工されなかった場所の1つだったという。

午後は遠野の町を訪れた。遠野は沿岸部と内陸各地を結ぶことから東日本大震災では後方支援拠点となり、プロジェクトの初年度は遠野で行われたという。遠野市は山に囲まれた馬と人と民話が生きる土地で、遠野物語には河童や座敷童子が登場する。私たちは大平悦子さんのお宅を訪れ、実際に遠野物語を聴いた。方言、間合いから感じられる遠野物語は非日常な空間を味わい、遠野物語を通して昔の人たちの教訓・想いを受け継ぐ体験となった。

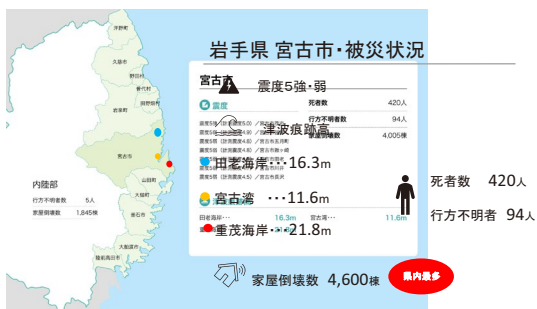
宮古の復興は津波とともに暮らすことを

「伝承」し続けることであり、「証人」になることは震災を「知る」ことから始まると学んだ。



大平悦子さん  
遠野物語

非日常な空間  
遠野の方言・間合い  
遠野物語を通して  
昔の人たちの  
教訓・想いを受け継ぐ体験



津波と生きる町・津波田老

2021.11/5~7 @ 宮古

2 day

- 漫画トーク zoom
- 座談会「宮古震災から10年」  
藤田 敦子 様 若竹 貴之 様  
「職責を背負っている人が地域に  
いることを知ってほしい」
- 講和「田老の今・これから」  
斎藤 清志 様 宮古市企業部田老総合事務所 所長

3 day

- 学ぶ防災ツアー  
佐々木 純子 様  
一般社団法人宮古観光文化交流協  
協会学ぶ防災ツアー防災ガイド
- 遠野市博物館 見学  
前川 さおり 様
- 大平 悦子 様 訪問「遠野物語」

### 宮古の津波の歴史

明治三陸地震	昭和三陸地震	チリ地震(チリ南部)
1896年(明治29年) マグニチュード8.2 宮古:14.6m	1933年(昭和8年) マグニチュード8.1	1960年(昭和35年) マグニチュード9.5 三陸海岸に8mの高さ

沿岸被災地域の 後方支援拠点

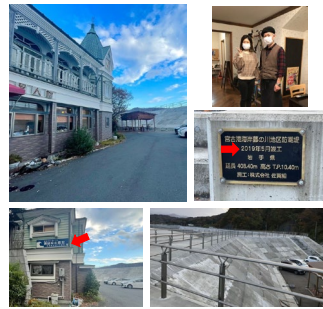
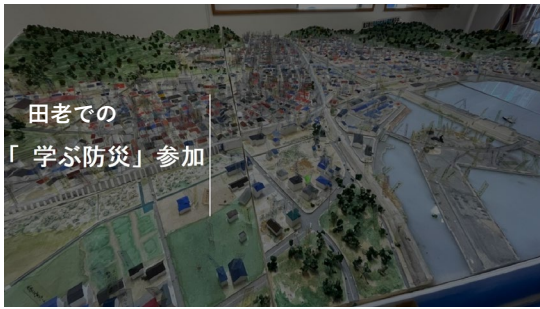
**遠野市**は地震・津波災害では、後方支援拠点として活躍。  
遠野市は、山に囲まれた馬と人と民話が生きる土地の歴史  
河童・座敷童子が登場する**遠野物語の舞台**  
今でも継承されるあたたかい町

過去にも大きな津波があったこと  
津波とともに生きてきた街であること

田老の「万里の長城」

1933年 昭和三陸大津波を受け  
**X型の巨大防潮堤を建設**  
津波防災の象徴としてチリ大震災津波では大きな被害がなく住民を守った。  
東日本大震災では 最大16mの津波到達 **破壊**される

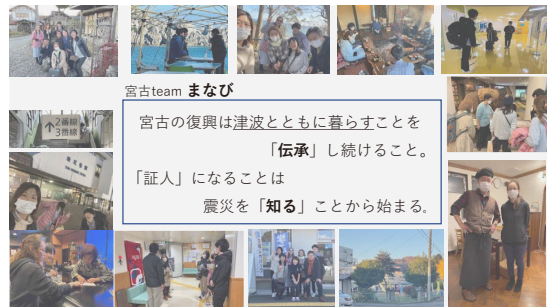
津波でんでんこ 津波から逃げて助かるために、親・兄弟でも人のことに構わず、でんでんばらんに素早く逃げなさい。



喫茶「異人館」

宮古では人生の中で3回は津波にあう。

津波は特別なことではない。



## 福島チーム

福島チームは、1日目、福島市でふくしま連携復興センター「福島は今、そしてこれから」を聞き、「みんなの家@ふくしま&みんなの家セカンド」で交流夕食会に参加した。2日目は、白河市にあるマイタウン白河で、団士郎家族漫画展、「カプラに挑戦しよう」、団士郎の漫画トーク、「クリスマスカレンダーを作ろう」のプログラムを実施し、EMANON で交流反省会を行った。それからいわき市湯本に異動し、それぞれ夜の街を散策した。3日目は古滝屋のFスタディーツアーに参加し、檜葉町伝言館、富岡駅周辺、夜ノ森駅周辺、久ノ浜沿岸部など視察した後、各自でいわき震災伝承みらい館やいわき駅前散策などを行った。この行程を動画で紹介した。



### 講話「田老の今・これから」

宮古市企画部田老総合事務所  
所長・齋藤清志氏



2011年の東日本大震災のとき93歳だったおサヨさんの一生の物語。おサヨさんは二度の津波を乗り越えました。



田老で暮らし、宮古で働く。田老の人は田老に親しみをもつ。

今後想定される100年に1度の津波は耐えられる。でも、東日本のような1000年に1度は耐えられない。防潮堤は逃げるまでの時間稼ぎ。防潮堤があると津波が来ていることがわからないというがわかってからでは遅い。人命を守るために、高台に家を建てる。防潮堤が全て守ってくれると過信はいけないがそれでも**田老に防潮堤は必要**

2011年3月 あれから、もうすぐ11年。  
福島は復興していると言えるのだろうか。

震災直後、福島市は「放射線は大丈夫」と聞いていた。ラジオでもそう流れていたしかし、実際は……。 (放射線地図と震災直後いわき市の放射線量グラフ)

男性は言う。「あの時、水を汲みに行く時、子どもを連れて外に出てしまった。体に影響が出るのは数十年後。子どもに何かあったら。ずっと後悔の念を抱いている……」。

そうして、福島の子どもたちは外に出ず過ごすことになる。砂場などの子どもの遊び場が屋内に作られ、公園の利用時間も制限された。

あれから十年、復興は進んだと思っていた。

2021年12月、衝撃の光景を見た。線路を隔てた西側には人の生活があるが、東側には誰も住んでいない。それはたった一本の線で分断されていた。線路の東側には音がなかった。本来なら聞こえてくる子どもの声、家族の笑い声、近所の人たちとの挨拶、すべてがなかった。寄せ書きが余計に寂しさを際立たせた。この地に立った時、自然に涙が流れ出た。その場に立たないとわからない感情に襲われた。

でも、「世界一同情された街」から「世界一感謝にあふれた街」「あこがれの街へ」。そうやって立ち上がった人たちと沢山出会った。

- ・チーム福島 pay it forward (恩送り) 知らない人同士をつなぐ
- ・ビーンズふくしま、みんなの家 福島に避難してきた人、避難して戻って来た人をつなぐ
- ・未来の準備室 EMANON 高校生と福島

をつなぐ

- ・おひさま広場 家族の絆をつなぐ
- ・古滝屋当主 あらゆるサービスを金で買う社会で忘れ去られているものがある。「今、起こっていること」を語り継ぐ

原子炉と大自然の対比は私たちに何を伝えるのだろうか。大きな自然の力の前では人は時として無力である。

でも、人の思いと笑顔が分断されたものをつないでいく姿をたくさん見た。その姿に新たな思いが湧いてくる。そして私たちがやることがわかった。証人の1人として、この事実を一人でも多くの方々につないでいく。明日へ……

福島からの学びである。

- ・線を引くことの意味を考えさせられた。帰属意識などを高めるという意味で良い部分もあれば、分断を起こしてしまうこともある。だからこそ、その場所・人とかかわり続けることが大事だということを学んだ。
- ・ふるさとを奪われる理不尽な状況を知り証人として胸を痛めている。誰かの大切な場所を守るように、自分に出来ることを考え、行動したい。
- ・人と人とが繋がりあうことで地域ができあがっていくということを強く実感できたことがある。震災・復興ということばかりは見えない地域の力や人とのつながりを感じることができた。
- ・終わらない被災の時間の中で、福島の水や大地が汚されて行くことは、人々の心の世界が壊されて行くことにもつながるのではないだろうか。今だからこそ、そのような状態を生き抜く福島の人々の姿を長く伝

え続け、自分のできる事は何かを問うていきたい。

・10年前に避難していた浪江住民の全く先が見えない喪失感に声をかけられず。そして10年たって子どもたちの未来を奪った原発事故。福島の怒りに何ができるのか。私なりに行動は続けていきたい。

・震災を歴史的事実として伝承し、そしてこれまでと同じように伝承していく人々から多くを学ぶことができた。これからも「証人」のひとりであり続けたいと思う。

・福島で出会った、ひとりひとりの物語。大きな出来事の奥にある小さな声を聴くこと、見ること、思いを巡らせること、関心を持つこと。対人支援で大事なことを学んだ。

・福島で体験したことを、自分のフィールドで伝え、またそこで対話を繰り返していきたいです。原発事故を自分事として捉える人が増え、連帯していければと思います。

福島で暮らすさまざまな物語があった。

・福島から日本を元気にしたい。  
・困っている人がいたらできることをするだけ。

・「福島を忘れてほしくない。まだ終わってないんだよ」原発内見学ツアーに参加された饅頭屋さんの言葉。

東日本・家族応援プロジェクトで力をもらったのは私たちの方。一緒に学んだ院生メンバー、11年続けてこられた先生方、出会った方々に感謝する。

「福島を忘れてほしくない

まだ終わってないんだよ」



チーム福島：  
小笹、渡邊、大谷、北口、郷間、佐野、前田、河野

### ふくしまプロジェクトの概要 (2021年12月3,4,5日)

<b>&lt;1日目&gt; 福島市</b> 各自：BLTカフェで昼食 合同：ふくしま連携復興センター「福島の今、そしてこれから」についてお聞きする 各自：みんなの家@ふくしま みんなの家セカンド 各自：福島の方との交流夕食会	<b>&lt;2日目&gt; 白河市</b> 合同：マイタウン白河 ① 田士郎の家族漫画展 ② カプラに挑戦しよう ③ 田士郎の漫画トーク ④ クリスマスカレンダーを作ろう 合同：EMANONで交流反省会 各自：いわき湯本 夜の街 散策	<b>&lt;3日目&gt; いわき市</b> 合同：フスティーツアー 楢葉町伝言館、富岡駅周辺、夜ノ森駅周辺、久ノ浜沿岸部 各自：いわき震災伝承みらい館 いわき駅前散策 など
---	---	--



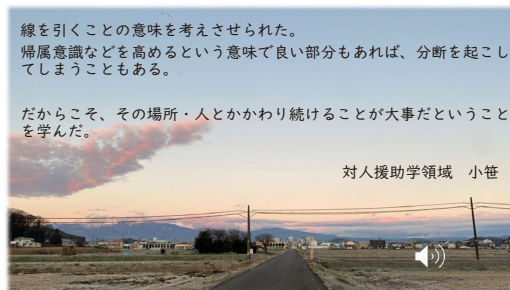
### ふくしまからの学び



線を引くことの意味を考えさせられた。  
帰属意識などを高めるという意味で良い部分もあれば、分断を起こしてしまうこともある。


だからこそ、その場所・人とかわり続けることが大事だということ  
を学んだ。

対人援助学領域 小笹




ふるさとを奪われる理不尽な状況を知り証人として胸を痛めている。  
誰かの大切な場所を守れるように、自分に出来ることを考え、行動したい。

臨床心理学領域 渡邊




福島で出会った、ひとりひとりの物語。  
大きな出来事の奥にある小さな声を聴くこと、見ること、  
思いを巡らせること、関心を持つこと。  
対人支援で大事なことを学んだ。

対人援助学領域 前田




人と人が繋がらうことで地域ができあがっていくということ  
を強く実感できたことがある。  
震災・復興ということばかりは見えない地域の力や人とのつながり  
を感じることができた。

臨床心理学領域 大谷




福島で体験したことを、自分のフィールドで伝え、またそこで対  
話を繰り返していきたいです。  
原発事故を自分事として捉える人が増え、連帯していければと思  
います

博士後期課程 河野



終わらない被災の時間の中で、福島の水や大地が汚されて行くことは、  
人々の心の世界が壊されて行くことにもつながるのではないだろうか。  
今だからこそ、そのような状態を生き抜く福島の人々の姿を長く伝え  
続け、自分のできる事は何かを問うていきたい。

対人援助学領域 北口



**福島で暮らす さまざまな物語**




福島から日本を  
元気にしたい

困っている人がいたら  
できることをするだけ

この地で今後も  
商売を続けていく


10年前に避難していた浪江住民の全く先が見えない喪失感に声を  
かけられず。  
そして10年たって子どもたちの未来を奪った原発事故。  
福島の怒りに何ができるのか。  
私なりに行動は続けていきたい。

対人援助学領域 郷間



**「福島を忘れてほしくない  
まだ終わってないんだよ」**

原発内見学ツアーに参加された、  
饅頭屋さんの言葉



震災を歴史的事実として『伝承』し、  
そしてこれまでと同じように『伝承』  
していく人々から多くを学ぶことがで  
きた。  
これからも『証人』のひとり  
であり続けたいと思う。

対人援助学領域 佐野



**東日本・家族応援プロジェクトで  
力をもらったのは私たちの方**



一緒に学んだ院生メンバー  
11年続けてこられた先生方、  
出会った方々に感謝



## 各地のみなさまからのメッセージ「来訪者を受け入れて」

お世話になった現地の方々からメッセージを頂いた。

阿部浩さん（ライオンズクラブ国際協会石巻中央ライオンズクラブ会長）からは、11年という長い時間を経て活動して頂いていることに感謝する。大学から来てもらったみなさんが何を見て何を学べるか考えながらサポートさせてもらってきた。災害はどこでも起きるし、我々と背中合わせで抱えているものだが、学んだことを自分事と捉えてふだんの学習に活かして欲しい。他の形でも関わってくれている方々も出てきていて、プロジェクトから横つながりで拡がっている。

中鉢博之さん（NPO法人ビーンズふくしま 常務理事事務局長）からは、2011年の12月に始まって11年のおつきあいをしてきた。プロジェクトは、現場に入って地域の実情に触れてということをして11年続けてきたことがすごいことである。院生が入れ替わっても、繋がりと積み重ねの上にさきほどの報告にあったような学びがある。実際、仮設住宅に入って子どもや住民と関わったり、冬の寒い時だったが、我々のNPOで借り上げている仮設住宅に宿泊してもらって、一緒に鍋をしたりしたことなど思い出深い。福島は原子力災害が特徴で、まだ終わっていない。まだ帰れない人々もいれば、復興に向けて力強く歩んでいる人もいて一様ではない。プロジェクトが一区切りしても、この縁をつないでいけたらと思う。

大平悦子さん（岩手県遠野市語り部、日本民話の会会員）からは、毎年11月、沿

岸部を訪ねた後、必ず遠野を訪ねて来てくださった。みなさんにお話を聞いてもらったが、意識して遠野物語99話や娘のしゃれこうべなど、震災にまつわる話を聞いて頂いた。みなさんとても熱心に聞いてくださった。東北から見ると東京でも遠いのに、京都というさらにはるかに遠いところから十年にわたって訪ねてくださることをとてもとてもありがたく思い、毎年11月が楽しみだった。プロジェクトが終わっても、折あれば是非遠野に寄ってほしい。

上山真知子さん（東北大学災害科学国際研究所特任教授）からは、被災地という地名はないが、災害ど真ん中にいて感謝申し上げる。ここからは辛口のコメントになる。日本は世界一リスクの高い地域と国連に認められている。大変だと言うだけでなく、みなさんの暮らす西日本でもいつ何時災害が起こるかわからない。どこか遠い話だと思っているのではないかと発表を聞いていて思った。我が事だと思ってもう少し考えてもらいたい。協働とは具体的には何だったのか、東北弁とひとくくりにしない、地元の力、防潮堤のこと、防災はありえず減災しかありえない、福島は人災、国、政治的システムの問題であり、自分たちのことである。すばらしい取り組みではあるが、是非、東北のこととしてだけでなく自分のこととして考えてもらいたい。そうでなければ、こんな体験をして仇討ちができないという気持ちが強い。covid19でも同じことだと思う。自分事として考えていくということを学んでもらいたい。

休憩時間には、院生が作成してくれたムービー「思い出の写真」を流した。

## 第2部 証人になるとは、いかなることだったのか？

### 教員たちにとって

第2部の「証人になるとは、いかなることだったのか？」では、最初にプロジェクトを率いて来た教員から話題提供し、プロジェクトに参加したメンバーによるフォトボイスを共有した。

村本の方からは、スタートする時点で目的を「被災と復興の証人になる」とした。長く臨床をするなかで、専門家にできることはごくわずかだが、できることは証人になるということだと学んできた。

現地に入ることに許可を得て、被災と復興のプロセスをほんの少し共有させてもらえたらと考えた。人々と顔の見える関係を結び、それぞれが生きてきた人生の豊かさとともに、被災とその後を生きる今を記憶する。それを自分たちの日常に持ち帰り、地域をつなぐ回路を開くことで、地続きの揺れを経験した同じ大地に生きる者として、復興の物語をつくることに参加したいと考えた。

それで、東北4県を毎年訪れ、受け入れ機関と一緒にコミュニティに向けたプログラムを実施、街を歩き、人々と出会い、土地のものを食べ、同じ空気を吸う。そこで体験したこと、見聞したこと、考えたことを記録し、振り返り、記述し、発信する。被災地への関心を持ち続け、アンテナを張って情報を集め、次の訪問を心待ちにする。ということをやってきた。距離があるから、1年に1度だからこそ見えるものがある。

十年とは、コミットメントの決意と宣言だった。偶然や出会いに開かれる空き容量

が重要である。場に身体を曝すことで、自分の身体に土地の記憶が刻み込まれ、その土地に自分の足跡を残す。当事者性と他者性とは、距離があるから見えるものがあり、繰り返し訪れることで見えなくなっていくものもあることを、初めて行く院生たちから気づく。侵入者によって照射される異質なものと融合、繰り返しが日常をつくり、非日常を日常に含み込む力となる。東北の十年は、私の人生を支える重要な構成部分となり、世界観を変えた。私にとっての証人になるということはそういうことだった。

### 証人になるとはいかなることだったか？

村本 邦子

#### 被災と復興の証人になる

長くトラウマの臨床に関わってきて、専門家にできることはごく僅かではなく、それでもできることは、証人 (witness) になること

現地に入ることに許可を得て、被災と復興のプロセスをほんの少し共有させてもらえたら、人々と顔の見える関係を結び、それぞれが生きてきた人生の豊かさとともに、被災とその後を生きる今を記憶する。それを自分たちの日常に持ち帰り、地域をつなぐ回路を開く。

地続きの揺れを経験した同じ大地に生きる者として、復興の物語をつくることに参加したい。

#### 同じ時期、同じ場所へ、細く長く十年・・・

- ①東北4県を毎年訪れ、受け入れ機関と一緒にコミュニティに向けたプログラムを実施、街を歩き、人々と出会い、土地のものを食べ、同じ空気を吸う。
- ②そこで体験したこと、見聞したこと、考えたことを記録し、振り返り、記述し、発信する。
- ③被災地への関心を持ち続け、アンテナを張って情報を集め、次の訪問を心待ちにする。

距離があるから、1年に1度だからこそ見えるものがある  
(もちろん見えないものはたくさん)

## 振り返って

- ・十年とは、コミットメントの決意と宣言
- ・偶然や出会いに開かれる空き容量が重要
- ・場に身体を曝すことで、自分の身体に土地の記憶が刻み込まれ、その土地に自分の足跡を残す
- ・当事者性と他者性
- ・侵入者によって照射される異質なものと融合
- ・繰り返しで日常をつくり、非日常を日常に含み込む力となる
- ・東北の十年は、私の人生を支える重要な構成部分となり、世界観を変えた



団さんからは、自分にとっては、漫画展と冊子の配布をして、漫画を被災地に伴走させたという感じだった。ここでまず漫画をひとつ見てもらう。現地でも取り上げたことがあるが、ずいぶん前に大阪であった食中毒の時の話。木陰の物語を描き始めて22年、なぜこんなことを続けてきたのかという答えがようやく見えてきたのが、この証人になるというプロジェクトの最終年である11年目だった。

大きな災害物語に対して、それぞれの人たちが前から持っていた小さな物語の回復が力を持つということに気づかされた。大きな事件に上書きされて圧倒されることはありがたいが、それを回復させるのはその人のなかにある物語なのだとクリアにわかった。これは被災地だけのことでなく、今日の日本社会に生きていて、さまざまなことに遭遇し、未来に向けて進んでいかなければならない時に、個別の物語を確かに行うことが重要である。その時、他人の物語が触媒になる。誰かの中にある小さな物語に他者が触れることで、それが共鳴共振して人が未来に向けて進むための力になり得る物語を想起させる。

漫画家であることと家族療法家であることが自分の中で統合された。そういうことをする自分だからこその私の責任がある

と、時間をかけて腑に落ちていったのが私にとっての証人になるということだった。

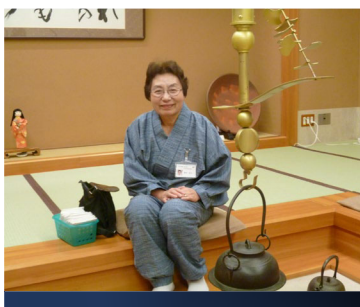
鶴野さんからは、2013年に立命館大学に赴任して、懇親会で大学時代の同級生だった村本との再会があってプロジェクトに参加することになった。子どもの民俗文化を研究しているので、2014年にみやぎ民話の会とつながり、その時の8月に第八回民話の学校に参加し、村本はその時に大平さんと同じ部屋で寝物語を聞いたということだった。そこでたくさんの人々と出会い、人はなぜ歌うのか、物語るのかをあらためて考えるようになった。そのことと証人になるということが関係しているのだと最近考えるようになった。

鷺田清一さんの言葉。「・・・苦しみに埋没し、あっぷあっぷしているじぶんをじぶんから引き剝がし、疎隔化して、だれか別の人のことのように語りだすこと・・・<語り>なるものの<話>のこうした整えには、だから、他人という立会人、証言者がいる。相づちを打つことで<語り>が起動する瞬間を支えるのである。さらにそのためには、<語り>が拓かれる場は、ここでは何を言っても咎められない、撥ねつけられないという安心感に満ちた場であることが求められる」。

東北に出かけて行って話を聞くということは、このような語りの整えに立ち会うということだったのではないかと。どこまで達成できたかとなると不十分だと思うことも当然あるが、自分にとって証人となることとは何かという問いに対して、現時点で感じているひとつの答えであり、こうありたいと思っていることです。

## フォトボイス

プロジェクト参加したメンバーの写真と声による11年の振り返りをフォトボイスの形で紹介した。



語り部：  
奥寺恭子さん

2011年 11月4日

@岩手県遠野市

(撮影：尾上明代)



① おおぞら保育園 2012年10月5日 宮城県多賀城市 / 藤原佳世



② 保育士さんたちとグループトーク 2012年10月7日 宮城県多賀城市 / 藤原佳世

①カーナビが示す場所

2011年11月4日 16:32:20  
陸前高田市  
渡邊佳代



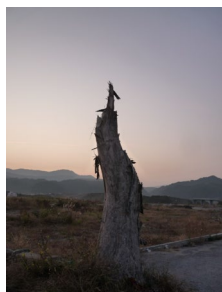
②どんな表情で？！

2011年11月4日 16:35:38  
陸前高田市  
渡邊佳代



③ねじ切れた先

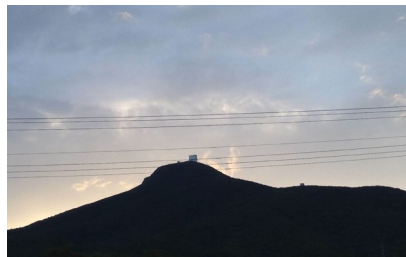
2011年11月4日  
陸前高田市  
渡邊佳代



③ クローバー保育園 2012年10月7日 宮城県多賀城市 / 藤原佳世



2013.9.5 六ヶ所原燃PRセンターにて 洪潤和



2013.9.6 むつ市中央公民館にて 洪潤和



2013.9.6 むつ市中央公民館にて 洪潤和



2022.1.6 石巻ことぶき町通り 石巻市観光ボランティア協会、斎藤さん (宮下薫)

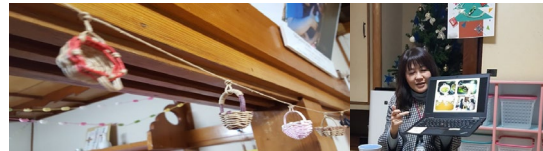
二本松市の朝の風景  
2014年11月16日 二本松市市民交流センター



磯井 知子



①2017年12月1日福島



今日の放射線量  
2014年11月16日 二本松市市民交流センター



磯井 知子



ビーンズふくしま  
フリースクール  
②2017年12月1日

様々な思いを持ちながらも..  
2014年11月16日 二本松市市民交流センター



磯井 知子



③2017年12月3日 福島浪江

浪江役場/団士郎 家族漫画展

浪江町

大平山

請戸小学校



2016.11.5 石巻市公民館にて 高校3年生の及川さん、お祖母さまと (宮下薫)

道中の津波の痕跡

人間科学研究科修士生 有馬祐美子



多賀城市, 2018年10月5日

災害レジリエンスと古文書レスキュー活動



多賀城市, 2018年10月6日



写真①張  
タイトル: 未来  
撮影年月日:  
2018/11/4  
場所: 岩手県田老町  
説明や思い: ローカル視点からの復興の進捗だ

被災者だからこそ伝えられる、期待される支援者像



石巻市, 2018年10月7日



写真②張  
タイトル: 日本なのに  
撮影年月日:  
2018/11/29  
場所: 福島県三春町  
説明や思い: コミュニタンで衝撃を受けた



写真1場  
タイトル: 当事者が語る震災後の生活  
撮影年月日:  
2018/11/3  
場所: 岩手、宮古市



写真③張  
タイトル: 次のタネは撒くべきか  
撮影年月日: 2019/12/08  
場所: 福島県飯館村  
説明や思い: 福島が抱えている複雑な状況伝えるべきだ



写真2場  
タイトル: 津波の威力  
撮影年月日:  
2018/11/4  
場所: 岩手、宮古市

第3部 明日に繋ぐ～それぞれの継承

被災と復興に終わりはない。第三部は院生による進行で、現地の協力者や修了生たちの振り返りと今後に向けた取り組みについて話題提供してもらった。



写真3場  
タイトル: 電車の窓から見る岩手の秋  
イベント  
逸野物語  
撮影年月日:  
2018/11/2  
場所: 岩手、盛岡市

眞手忍さん（青森県むつ児童相談所こども相談課課長）から。私はむつ児相に赴任してからプロジェクトには6回参加した。むつ市は被害は大きくなかったが、家族支援をコンセプトに、むつ市の支援機関が協働して支援者支援セミナー、お父さん応援セミナー、団士郎漫画展、漫画トークの四

本立てでやってきた。むつ市では、要対協など月1回以上集まりがあるが、どうしても支援者の思いが中心になってしまいがちななかで、支援者支援セミナーは家族主体の支援を考えるというものだった。参加者が家族に興味を持って見るということが支援になるということ学んだ。

子どもの最善の利益を目指して家族主体の支援を地域に根差して続けていくために、市町村に受け継いでもらうために、このような形のセミナーを毎年、児相主催で続けていきたいと考えている。

丸山隆さん（多賀城市教育委員会生涯学習課副主幹）から。このプロジェクトには、多賀城市立図書館の館長をしている時に出会い、最初は漫画や民話がどこにつながっていくのかと少し不思議に思いつつ、「十年間やる」という言葉に感動して、取り組み始めた。仕事上の立場が変わっても関わり続けている。家族応援だが、一人一人への寄り添いプロジェクトだと思っていたが、つながりが深くなり、歳を重ねるにつれて、血がつながってなくても家族になっていくことを感じるようになっていった。多賀城家族とか宮古家族とかむつ家族とか、家族をあちこちで作りながらここまでできた。点と点ではなく線としてつながっていく。「十年やる」と言い切ることのすごさとやり続けたことのすごさを感じ、学ばせてもらった。誰もが、いつ何時にも被災者になり得る。被災したのは一瞬で、その後が大変だが、そこから一歩進めばもう被災者ではないと思う。自分自身は生き証人として歩いていくのだと自分に言い聞かせている。ここまで続けてきたプロジェクトがこれで終わってしまうのは寂しいと思

い、せっかく結びつけてもらったものを、関係者のみなさまと多賀城で新東日本家族応援プロジェクトとして継続させていきたいと思っている。

新谷真貴子さん（修了生、NPO 法人家族・子育てを応援する会理事長）から。地域で子育て支援をやっているが、このプロジェクトを経験して、つながる、継続、共に、発信というモットーができた。広陵町で生まれ育ち、30年間教員をし、地域の子どもたちのために何かしたいと大学院に入り、このプロジェクトには8年間継続して関わらせてもらい多くを学んだ。2016年3月、団先生に背中を押してもらって形で漫画展・講演会を開催し、そこから私たちの活動がスタートした。

団先生から「続けることやで」と言われ、6年の時を重ねて行政や住民の協力が得られるようになり、参加親子も増えた。コロナの中でも、電話したりお便りを出したり、ZOOMで親子広場をしたりなど工夫を重ねて続けてきた。子育てしやすい町を目指し、町長とのタウンミーティングもやった。人と土地に寄り添い、丁寧につながるということをプロジェクトから学んできた。今ではこれまで参加してくれてきたお母さんが「私たちもお返ししていきたい」と自分たちで活動を始めた。こうして次世代にもつながっていくはず。先日は、地域で家庭や子どもを支える全国31の機関として表彰された。これからも活動を続け、次世代につなげられる体制を確立していきたい。

内田一樹さん（修了生、自由の森学園中学高等学校社会科教諭）から。2015年、

初めてプロジェクトに参加し、増田先生とともに石巻を3回訪れた。大川小学校は教師としての原風景となっている。自分にとって印象に残っているのは、初めて石巻を訪れた翌年、2016年熊本地震が起こった。実家が熊本で被災した。石巻と熊本の風景を見た自分に何ができるかを考えた。その年は石巻には行けなかったが、東京で増田先生のイベントに参加した時に、阿部さんに再会し、黙って抱きしめて頂いたことは忘れられない体験になっている。

政治学者であるジョアン・トロントが言っている「私たちすべてがケアを提供するだけでなく、受け取る者である」という言葉を実感する。石巻で頂いたものをどのようにお返しするかを考えている。自分が社会科教諭であることから、子どもたちが多様な声をどのように自分のこととして聞けるかが課題である。自分の物語と子どもたちの物語をつなげられないか。来年からは自分自身が東日本と関わるプロジェクトを始めたいと考えている。子どもたちにケアする、ケアされるということを学んでもらいたい。これが自分にとっての継承である。

河野暁子さん（人間科学研究科 D3、岩手県立大学宮古短期大学部准教授）から。関東出身で、当時、原発事故に大きな衝撃を受けた。自分たちの使っている電力がどこで作られているのかをそれまで知らなかった。最初は所属機関から岩手県に入り、所属を何度か変えながら岩手に暮らしている。初めは「心のケアをするぞ」と思っていたが、だんだん土地の人々の持つ力に眼が開かれていった。村本先生とは20年前から知り合いで、東北でも何度か会ってき

たが、2018年に大学院博士課程に入り、プロジェクトに参加するようになった。

そこで学んだことは、災厄を生きる人たちとの出会い、土地の歴史・風土・文化の重みや力強さ、回復・収束へ向かう大きな物語があり、そこから取りこぼされているひとりひとりの小さな物語があるということ。誰もが安心して暮らせるのはどういうことだろうというのを考え続けてきた。これは自分の人生のテーマにもなった。こういったテーマを持ちながら多くの人と対話を続けたい。教員として、最近、当時小学生だった人たちと話す機会があり、今後は震災の時に生まれていなかった人たちも増えていくだろう。そういう人たちとも対話を続けながら考えていきたいと考えている。

村本から。11年でプロジェクトは一区切りとなるが、まだとても区切れないのが福島で、何らかの形で活動を続けていきたいと考えている。双葉出身の目黒とみ子さん（東日本大震災時は双葉町民、現在茨城在住/みやぎ民話の会）に双葉の状況をお聞きしたいが、今日の都合が悪いので動画の形で紹介する。目黒さんとは、2014年に民話の学校で始めて出会い、たくさんのことを教えて頂いている。目黒さんは、これからを担っている双葉の子どもたちのことを知って欲しいということだった。福島の子どもたちは全国に散らばっている。子どもたちと関わり、今後も関わっていくかもしれない大学院生に知って欲しいとのことだった。

目黒さんから。震災の時に双葉町は全町避難となり、子どもたちは親の後をついていくことしかできなかった。あの時の子ど



もたちの気持ちを聞いて欲しい。「小学6年生、僕の夢は競輪選手になってオリンピックに出ること。夢をかなえるために、今、陸上で体を鍛え勉強も頑張っています。今やらなければならないことをきちんとやり、努力していきたい。」「中学3年生、現在の自分とこれからの願い。震災が起きて3年4ヶ月。この4年間にたくさんの経験をしてきた。あちこちに避難を繰り返し転校した。最初は人とうまく話せず辛かったけど、サッカーを通じて友達もできた。中学では人間関係でうまくいかず学校に行けなくなった。

高校に行きたいから、中3から双葉中学校に通う決心をした。陸上大会では悔しい思いをしたが、向上心も高まった。一人だけの教室は心細い時もあるけれど、今は目標に向かって頑張りたい。」双葉町では小中一貫校を作ったが、そこに行ったのは彼一人だった。

「高校3年生、約束の日。郡山工業高校で高校野球を闘っていた。序盤から思うようにいかず敗れ、悔しさでうつむきながら球場を出ると、大勢の人が拍手で出迎えてくれた。そのなかに避難先に学生ボランティアで来ていた彼がいた。自分も野球をしていた、高校でも野球やれよ、必ず応援に行くからと見送ってくれた。その約束の日だった。いいところを見せられなくてと言うと、頑張ったじゃないか、また大きくなったなと肩を抱いてくれた。

こうして自分を思い続けてくれた人や支えてくれた人がいたことにあらためて気づき、感謝でいっぱいです。まもなく進路を決める時期がくる。故郷の復興に役立ちたいと工業高校に進学したが、地元に戻れる展望はない。進路が決まって落ち着いた

ら、今度は僕が彼を訪ねたい。」みなさん、遠く離れています、双葉の子どもたちにもどうぞ思いを寄せてください。

村本より、福島にはまだまだ聴かなければならないこのような小さな物語がたくさんあると思う。もちろん他の地域にもまだまだたくさんあるはず。プロジェクトを一区切りしても、また別の形で今後も小さな物語に耳を傾けることを続けていきたい。現地でも、修了生たちも、それぞれの形で見つけていく。私も細々ながら継続しつつ、できれば、こういう形で年に1回、ZOOMで関係者をつなげたらと考えている。コロナは大変だったが、コロナもたらしてくれたものでもある。

加藤恵子さん（みやぎ民話の会）から。十年を振り返りながら、ありがたい気持ちでいっぱいだった。なぜ民話と震災なのかと思ったみなさんもいたと思うが、実は私自身がそうだった。それを教えてくれたのがみやぎ民話の会の小野和子さんで、目黒さんとの出会いもそこだった。

目黒さんが何も持ち出せなかったが、唯一持っていたのが胸の中にあった小太郎狐の民話だったという。初めて会った時にも学校に行かなくなった女の子の話を聞かせてくれた。ずっと子どもたちのことを心配して紹介してくださっている。

録画をした日は、仙台で「ゆうわ座」という民話のイベントがあった日で、村本先生も参加してくれた。その時聞いた目黒さんの話は、伝承館での語りとは違っていた。先ほど張さんも言っていたが、伝承館では語れる内容が限定されていて、原発の爆発の話などは、こういう小さな会でしか語れないことがあるんだなと思いながら聞

いていた。だからこそ小さい会が大事なんだなと思った。自分も大変な経験をしているのに、自分を語らずに子どもたちのことを心配している。続けること、語り続けること、聞き続けること以外に防災さいとか滅殺などない。それが一番大事なのだと今日はあらためて感じた。これからもみんなで頑張っていきましょう。

荒木穂積先生（立命館大学元プロジェクトメンバー）より。ご苦労さまでした。私は二本松でプロジェクトをしていたが、受け入れが難しくなり、定年退職で打ち切りになった。二本松は放射能の汚染地域であると同時に浪江町の受け入れ先でもあった。二本松の市役所が浪江町の役場を受け入れていて、ふたつの自治体の人たちとおつきあひした。浪江町の人が言っていたが、期間困難地域がある限り、我々の復興の入り口にも到達していない。それは今も変わっていないと思う。村本先生が規模を小さくしても福島プロジェクトを続けていきたいと聞いて、心強く思った。できればまた自分も行きたいと思うし、みなさんにも関心を持ち続けて欲しい。

杉浦裕子さん（元むつ市児童相談所）より。11年間ありがとうございました。実害はほとんどなかったむつで、団先生にメールしたのがきっかけで、私の思惑とは違うところでこんなことに発展して感謝している。去年退職した。当初の目的は、かつて児童相談所に配属されて、何をやればいいのか真暗な時、団先生の本に出会い、ワークショップに通い、たくさんの問題を抱えた家族に出会い、団先生の漫画に触れてもらえたら何かヒントになるのではないかと

と思っただけだった。家族というだけでなく、そういう家族に手を差し伸べる地域の力も大事だと思って支援者支援をお願いした。官民の垣根を超えて、児童や高齢者とか障害者とか垣根を超えてひとつの家庭について考えることで協働が続いてきた。これで終わりにしたくないと思っていたら、後任の真手さんが「これから兎相でやります」と言ってくれた。大きなお荷物だけれど、大きな財産なので大事にしてください。

上山真知子先生（東北大学）より、いろいろ思い出すことが多い。村本先生と出合って、すごいパワーで「十年通いたい」と言われて断れなかった。あの頃、学会では、「自分たちがどれだけ頑張ってきたか、大変だったか」ばかり、こころのケアばかりで、大きな不満だった。なぜ一夜で被災したみんなが病人にされなければならないのかと。そういう思いに呼応するように村本先生が現れた。

今は、東北大学で文化遺産のことをやっている。ユネスコの関係団体でローマに本拠地のあるイクロム文化遺産研究所の人たちと世界中の文化が持っている宝を大事にしようと、ハンドブック作成などの仕事をしている。地元が持っている小さな遺産、大事な宝、これを救援することになっている。地元の文化遺産こそ被災地復旧と復興を支える。

民話の会には参加できていないが、立命館大学チームの資源、地域の力を活用することには、ただただ感嘆する。先ほど辛口のことを言ったが、まずは地元の力を見れるようになってほしい。

災害直後、仮設の避難場で子どもの遊び

場を作った。子どもが元気になったら大人も元気になる。そんな場面がいくつかあった。振り返ると、やはりレジリエンスが発動した。涙なしに語れるにはずいぶん時間がかかったと思った。今日は一日みなさんの話を聞きながら、ようやく一枚の絵のように捉えられるようになった。つくづく流れて来た歳月の力、これが今後生きて行く力になっていくだろう。若い人たちには、是非忘れないで欲しい。必ず大きな力になっていくから。

最後に村本より、「初めに万華鏡のようにと言ったが、少しずつみなさんの小さな声が重なり合って、本当に万華鏡のように見えた。みなさんにはそれぞれ、どんな美しい模様が見えたでしょうか。11年、あつという間のようでいて、実は長い。動画を見ながら、始めた頃は何て若かったのかも思いました。今後もそれぞれがそれぞれの場所で、このプロジェクトから受け取ったものを続けてくれること、今後もこのような形で結集して繋がり続ける場を開いていきたいと思いました」と締めた。終了後、時間の許す人たちで、ブレイクアウトルームに分かれて交流会を持った。

つづく

## 精神科医の思うこと③③

### 『ごはんの話』

松村 奈奈子

数年前の話、パニック障害で通院していた女子大生。心理的虐待を家族から受け、逃げるように実家から遠い大学に進学し、下宿生活をしていました。なんだか顔色もよくないし、お肌もカサカサです。ふと「どんなごはん食べてるの?」と聞くと「キムチとゆで卵と白米」「考えるのめんどくさいし、いつも同じ」「野菜とタンパク質あるし、これでいいかなって」と笑って話します。「まじっ、それはあかんぞ」と思わずつつこんでしまいました。

「ごはん」は身体的に大切なのはもちろん、心理的にも大事な影響を与えると、私は考えています。なので、診察室で気になる患者さんには「どんな、ごはん食べてるの?」と聞いてみる事にしています。「ごはん」から見えてくる「家族との関係」「生活」や「自分を大切にしている思い」などがあるからです。「ごはん」の話には思うことがあるので、今回は「ごはんの話」

児童相談所で一時保護所に入所している子どもの診察を時々します。初めて会う子どもの診察では「ごはん」の話題から、診察を始めることが多いです。「朝ごはん食べた?」「何食べたの?」「美味しかった?」からスタートです。「ごはん」の話は、誰にでも答えられるし、初めての診察で緊張した子どもにとって負担の少ない質問でジョイニングには、とってもいい話題だと私は考えています。この質問を続けているうちに、京都府管轄の一時保護所はいくつかあるのですが、どこの保護所のご飯が美味しくて、どこが評判がよくないか、わかっちゃいました。なので、そんな情報から「その保護所、みんな美味いって言うわー」「そうなの?ほかの子も美味いって言うんだー」と話題が広がることもあります。

また、家族との関係を知るにも「ごはん」の話をヒントにする事も多いです。家族とどんなとこに外食行くのかも、よく聞く質問です。「スシローみたいなの、家族で行くの?何が好き?」と聞いて、「近所のはま寿司によく行く。僕、マグロが好き」と言える子どもは、そこそこ家族で行動する関係なんだー、経済的にも余裕があるのかな?なんて想像できます。

数年前「お母さんと行くけど、僕は5皿しかあかんねん。ゆうこと聞かへんし。お母さんは8皿と

かたくさん食べて、デザートもお母さんだけ食べる」と淡々と答えた小学生がいました。「いやーマジきついなー」と思わず言ってしまいました。本人も「ほんま、キツイわ」と返事します。「ごはん」の場面から、親子の生活状況が見えるエピソードでした。続けて、生活の詳細を聞くとそれはそれは、子供にとってシンドイ状態でした。その子供が診察の最後に、ほっとした表情で「ここ(一時保護所)が、ほんまええわ」とため息のようにつぶやいたのが、今でも忘れられません。「ごはん」の話から、家族関係が見えてくる事、多いです。

一時保護所の「ごはん」が美味しいか、美味しくないか問題。実は、病院の食事でも「美味しいか」「美味しくないか」問題あります。入院施設を持った病院では、夜間に1人以上当直医師が泊りでいます。当直医師は検食として、患者さんと同じ晩御飯をいただきます。この当直、たいがい若い医師が交代ですることが多く、若い時は当直してよく検食を食べました。いろいろ病院食を食べると、やはり「美味しい」「美味しくない」の感想、あります。若い医師が集まると、どの病院の「ごはん」が美味しいかが話題となり、密かに順位をつけたりしていました。この病院食の順位、「患者さんを大事にしているなあ」「いい病院だなあ」と私が感じる病院の順位とほぼあってたりします。入院中は、「ごはん」が本当に楽しみ。栄養士さんが計算しているので、栄養的にはみな同じなんだと思いますが、美味しくするためにひと手間かけるかかけないかが、患者さんを思う病院の姿勢に表れているんだと思います。

で、前述の女子大生。とりあえず身体が心配で、「ごはん」の健康的な指導をすると「先生がいろんな色の食べ物を食べろというから、キュウリをポリポリしたり、ミニトマト食べてるで」と微妙な変化。「とにかくバランスよく、口に入ったらいいんでしょ」と話します。一方で、サークルの友達も心配しているようで「宴会で、いつもしっかり食べなあかんって言われる」とも話します。「ええ友達やな、やっぱ友達も、心配してるんやで」と思わず言ってしまいました。

この女子大生、はじめは販売業などのバイトをしていたのですが、短時間なので職場の対人関係がほとんどない職場でした。いろんな他人に支えてもらう事が、治療的にも彼女のこれからの人生にも大切だと考えていたので、もっと対人交流が濃いアルバイトを試みるよう繰り返し助言をしていました。「えー、めんどくさい」と言いながら、ある日、下宿の近所の居酒屋にバイトの募集を見つけ、バイトを始める事になりました。そこは60代と70代の女性が経営する大阪下町の小さな居酒屋で、お客は常連さんが中心と彼女は話します。

バイトをしてしばらくたった時、さずが人生経験豊かな経営者の女性、彼女の何か欠けているものに気づいたようで「あんた、どんなご飯食べてるの？」てな感じで、突っ込まれたといいます。彼女の「ごはん」内容を聞くとすぐ、「ほな、栄養のあるまかないつくるわ」と、その後は手の込んだまかないを出してくれ、さらに持って帰るように、おかずを持たせてくれる様になったといいます。そしてまたしばらくすると高齢の女性経営者は「これまで、何があったんや？」と彼女のこれまでの人生を心配してくれます。彼女が淡々と幼いころからの家族からの心理的な虐待の話をする、高齢の女性経営者は涙を流して聞いてくれたと、彼女から聞きました。本

人は「聞かれたから話したけど、泣いてくれる人がいるんや」と、キョトンとして話します。その後、常連のおじさん達にも心配され「このまえ、常連さんがイタリアンのフルコースに連れて行ってくれた」「ただ、ご飯食べただけ」「他のおじさんからも、食べるものよくらう」と、話します。

この話を聞いた時、「まだ、大阪の街に、人の温かさが残っていたんかー！」「なんか、ありがたいなあ」と私がものすごく感動しました。この健康的なお節介、私がまさにアルバイト先で彼女が出会えばいいなあと願っていたものでした。診察室だけではできない、友人や彼女を大事に思う大人のサポーターを増やすことが、一番の薬だと、私は思っています。

このアルバイトを始めてから少しずつ、女子大生のパニック発作は消失していきました。人にたくさん大事にされる事で、精神は安定するんだなあと思います。

被虐待の子供たち、「ごはん」に楽しい思い出が無い事が多いです。健康的な家族では、「ごはん」を一緒に食べながら、楽しくお話しするのが定番です。しかし、「ごはん」の時に、誰も学校での出来事や友達のことなど聞いてくれず、怒鳴ったり怒られたり無視されたりすると、「ごはん」や「ご飯の時間」そのものが、大切に思えなくなっていくんだと思います。前述の女子大生も、「ごはんに楽しい思い出は無かった」と話していました。高校生になると、自室で独りで「ごはん」を食べていたと言います。

相手の事を大切に思うと、相手には健康でいて欲しいし、健康でいるためには何を食べるかはとても気になる事です。「ごはん」を「楽しく」「美味しく」食べることは、本当に大事だと思います。

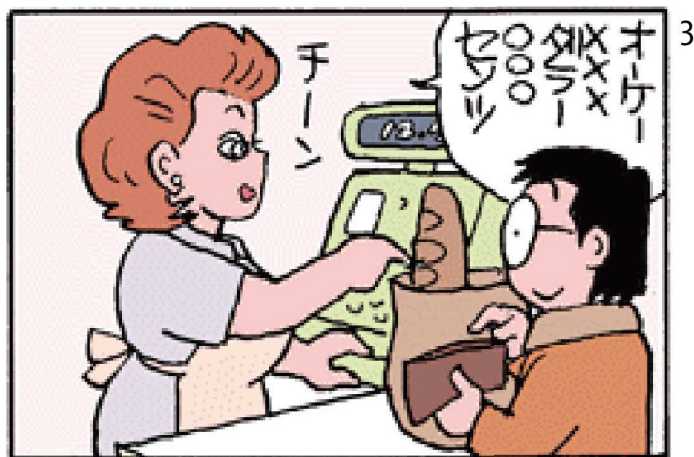
この「なにわ人情」にあふれるエピソード、私はとっても感動して、誰かに伝えたくなったので、彼女が大学を卒業する時に「対人援助マガジン」の話をして、この話を掲載する事に同意を得ました。「そんな面白い話なんかなあ」と彼女はキョトンとしますが、ほんまにええ話です。精神科の治療は、健康的なお節介な人々に助けられています。精神科の治療だけでなく、我々自身の人生もまた、健康的なお節介な人々に支えられているんじゃないかと思います。

# 番外やぶにらみ日記・アメリカ編

絵と文 柳たかを

1979年、20代最後の年、1ヶ月間の予定でアメリカニューヨークに行きました。  
当時の為替レート 1ドル→¥240位。  
前年に14日間のスリランカ&インドツアーに参加し、団体から分かれ1人で渡ったインドでは5日間インド南東部の海岸都市マドラスで一泊¥150の安宿に宿泊しました。  
英語辞書を握りしめブロークイングリッシュでピリピリの緊張と感動の5日間でした。  
一歩外国に行くとな頼りになる言語は英語。飛行機の予約、ホテルの予約、タクシー運転手との値段交渉や行先を伝えるため英語は不可欠、英語がほとんどできない若造の日本人旅行者には1人の海外旅行はかなり負担多くしんどい冒険旅

行だった。でも、1人で外国を覗いてみたいとの好奇心が後ろ向きの弱気を乗り越えました。  
緊張の海外体験が忘れられず、再び1人で日本を出たのがこのニューヨーク旅行でした。  
どうせ行くなら西海岸ロスアンゼルスからバスでアメリカ大陸を東に横断してやろうと。  
バス内で2泊するらしい、出発前のロスのバス停で僕の後ろから日本語で話しかけて来たのが同世代の画家K氏。バス内では日本語で話せる安心感から氏の身の上話や旅行目的に聞き入り意気投合。  
そんな出会いでスタートした我がニューヨーク旅行の記憶を2回に分けてご紹介します。



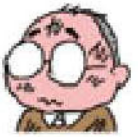
# やぶお日記

アメリカ(4)



# やぶお日記

アメリカ(5)







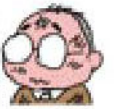
# やぶにらみ日記

アメリカ(8)



# やぶにらみ日記

アメリカ(9)



# やぶにらみ日記



アメリカ (10)



# やぶにらみ日記



アメリカ (11)



# やぶにらみ日記



## アメリカ (12)



# やぶにらみ日記



## アメリカ (13)



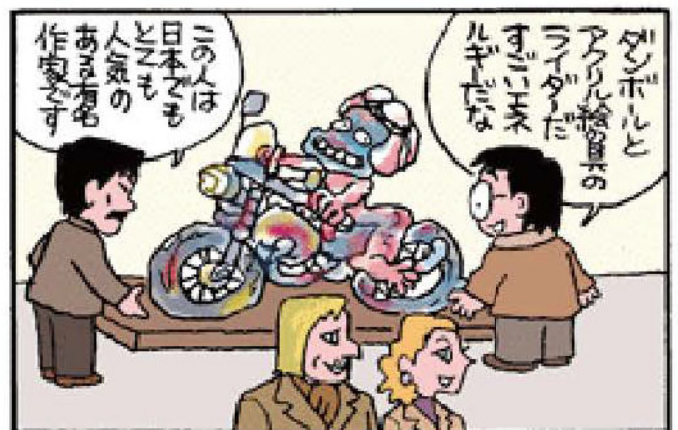
# やぶにらみ日記

## アメリカ (14)



# やぶにらみ日記

## アメリカ (15)



# やぶにらみ日記



アメリカ(18)



# やぶにらみ日記



アメリカ(19)



# 心理コーディネーターになるために Vol.14

山下桂永子

## ☆相談員が電話を取る。

電話がプルルルルッと鳴る。1コールが終わるやいなや隣の相談員 A 先生が「はい、〇〇市教育センター A です」と電話に出た。A 先生は慣れた様子で、「はい、ICT の件ですね。担当 B 先生におつなぎしますので少々お待ちください」と言って電話を保留し、「B 先生、C 小学校の D 先生からお電話です」と B 先生にスムーズにつないでいく。

「あれ？」何か違和感を感じた私は A 先生に声をかける。「A 先生、今自分の名前名乗った？知り合いの先生とか？」すると A 先生は「あ、まずかったですか？こないだ校長先生からの電話をつないだら、なんで名乗らないんだってクレームが入ったらしくて。。。と申し訳なさそうに言う。私「いや、まずくはないんだけど。。。えーと、その校長先生からクレーム受けた指導主事の先生に確認するね」

指導主事の先生に確認したところによると、昨今のご時勢で、学校の先生も市役所の職員も電話に出るときは名乗るようにとのお達しがあり、名乗らないのは良くないと思われるのだろうとのこと。なるほど。役所は連絡系統が複雑である。責任の所在をはっきりさせるために、この内容の情報はこの役職の人がこの役職の人に伝えるべき、というところまで決まっている。役所の窓口や現場の先生だといろいろそれでトラブルになることもあるのだろう。指導主事の先生が「江戸時代みたいですよ。上の階級の人に話しかけちゃいけないみたいな」と笑って言っていたことがまさに言いえて妙。大変だなあ公務員、と思いつつ、相談員が電話で名乗らなかったことについて、指摘した校長先生に謝ってくださった指導主事の先生にお礼を述べて一旦席に戻る。

しかしだ。それがお役所のルールで、ここが教育委員会の部署だからと言ってそのまま相談員が名前を名乗ることは、教育相談としていいものか？相談員が電話で名乗るのにいろいろリスクはあるよなあ、だからこれまで名乗ってなかったんだしと考え込んでしまった。



## ☆相談員も電話を取る

私が週4日勤める教育センターには毎日いろいろな電話がかかってくる。教育相談の内容もあればそうでないこともある。むしろ教育相談に関わる内容の方が少ないので、相談員が電話を取った場合は、教育相談以外の担当の方におつなぎすることが圧倒的に多い。市町村によってかなり違うと思われるが、私が勤める教育センターでは様々な担当がいて、相談員含め30人以上の職員がいる。

業務内容として公表しているのは「教育相談、教職員研修、情報教育、調査研究、適応指導、児童生徒の指導支援、学校園の安全対策」など。ざっとこんな感じなのだが、それぞれの単語を見ても具体的に何をやっているのかイメージはつきにくい。



そもそも教育委員会の中にもたくさんの課があり、教育センターも1つの課に過ぎない。結局他の課も含め「なんか学校に関してのことで教育委員会と話がしたい」という人がまずかけてくるのが「教育センター」となる場合も多いので、地域の方から他府県の教育委員会、営業の業者の方までさまざまな人からの電話がかかってくることになる。

## ☆相談員が電話を取るということの意義

ではなぜ教育相談以外の電話が多いのに相談員が電話を取る必要があるのか？それは「相談員が電話取るの、教育相談としてもめっちゃメリットあるよね」と私が感じたからである(このあたりの経緯を詳しく知りたい方は対人援助マガジン 46号『心理コディネーターになるために Vol.4』をご参照ください)。

スクールカウンセラーがその学校全体をコミュニティとして理解し見立て、援助の対象とするのと同じように、市町村の教育相談は、その地域の気候や歴史や文化、その学校や管理職、教員の雰囲気を感じ取りながら援助の対象としていく。教育相談以外の電話を取ることで、教育委員会の中のみならず、地域の学校とのそれぞれの関係性や教育界隈の最新のトピックスが見えてくる。その中で固い古いと言われるお役所のルールも、電話を取りながら「なぜそのような構造にならざるを得ないのか」ということが見えてくることもある。その気づきは教育相談の中で、保護者や子どもとの面談だけでなく、学校や福祉、医療との連携でもとても生かされているのを実感している。

私が心理指導員になった10年前に比べると、週4日勤務で自分の席と電話がある相談員も増え、今や私が電話を取ろうとする前に、我真っ先にと他の相談員、事務職員、指導主事の方々が電話を取ってくださっている。もはや電話1コール争奪戦である。中には秘書検定を持っている猛者もいるので、電話を取った後の対応もエレガントかつスムーズなつなぎを完璧に行っている。



教育センターに電話をくださる方は、電話相談にしろ、学校現場の先生からにしろ、何かしら困っているからかけてくるわけであるから、ほがらかに、笑顔が伝わる電話対応で少しでも気持ちが優しくゆるんでいくと良いと思う今日この頃である。



## ☆相談員の名前名乗る？名乗らない？問題のその後

その後、他の相談員の先生とも相談したりしながら、結論としては「うん。相談員が名乗るのは違うな。これは違う。教育相談としての心理的援助の枠組みを優先すべきだ。やっぱり名乗らないほうがいい」となったので、それを所長、副所長に相談しに行くことになった。

概ね伝えたことは次のようなことである。

①普段から教育相談では、相談員は担当のクライアント以外にあまり自分から名乗ることをしていないし、通所してきた自分以外のクライアントに不必要に関わることはしていないこと。それは、教育相談では、相談に来ていることを知られたくない人もいるし、自分の秘密が学校や他の人にばらされる不安を持っている人もいるからである。②電話相談などでも誰が次に対応できるかわからないことや守秘義務、匿名性、クライアントとの関係性などいろいろな心理的な枠組みも考慮して、基本的には名乗っていない。③以上の①



②の理由から、相談員に関しては、これからは電話に出るときには基本名乗らないでいきたいと思っていることをご了承いただきたい。である。

実は①に関しては、毎年の年度初めに同じような内容の文書を教育センターの全職員に文書で配っている。そこでは、相談員であるないに関わらず、不特定多数の市民が出入りする教育センターで教育相談が行われることについて、対面、電話に関わらず、個人情報

を事務所で話す時には十分留意してもらうこと、通所するクライアントが知り合いであったとしても、挨拶程度にとどめていただくことをお願いと、それが教育相談のセラピーや適応指導教室での活動の安全性を確保するために必要であることなどを伝えている。

そのせいか、所長、副所長からは相談員が電話で名乗らないことについてはあっさりとして了解を得る事ができた。校長先生からのクレームを直接聞いた指導主事の先生も「なるほど、それはそうですよね。謝る必要なかったっすね！笑。またあの校長先生に会うときにちゃんと説明しときますね」と言ってくださった。

## ☆相談員が電話を取ると起きる問題

教育委員会や学校現場の「学校ではこうしてる」とか「学校ではこのように運用されている」というルールをそのまま教育センターで相談員が適応する事が、教育相談としての、心理的な援助の枠組みをおびやかすことがある。相談員が電話を出すことは、教育相談としての援助には役立つものである一方、電話で名乗ることは様々なリスクが生じるのである。リスクが生じるから電話に出るのをやめればいいのかと言えばそれも違う。やはりお互いの立場を理解しあい、出来る範囲でリスクを抑える方法を模索すべきだ。

こういうことが起きると、その都度、他の相談員の先生方と相談しながら対応を決めて、私が上司と話しあっていくことになる。そのときに「学校現場ではどうしているのか」「それはどうしてそうなっているのか」「それを教育相談であてはめるときのリスクはどうか」など喧々諤々と話あっていく。時には上司と一触即発になることもないではないが、それが今の私の役割である。

悩んだり怒ったりすることもあるが、少なくともその話し合いの中で、私は学校現場のシステムや先生方の思いに気付かされることも多いし、心理学的、援助的な見立てを伝えることもできる。とてもありがたい対話の場になっている。



# 先人の知恵から

## 44

かうんせりんぐるうむ かかし

河岸 由里子

44回、よくまあ続けていると我ながらあきれられる。同じような諺を載せないようにと過去の諺を振り返り、気を付けつつ、最後まで行きたいと思っている。

今回は「ツ行、テ行」から以下の10個。

- 罪を憎んで人を憎まず
- 泥中の<sup>はちす</sup>違
- 敵に味方あり、味方に敵あり
- 鉄は熱いうちに打て
- 寺から出れば坊主
- 出る杭は打たれる
- 天知る地知る我知る人知る
- 天に<sup>つば</sup>唾す
- 天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らず
- 天網恢恢疎にして漏らさず

### <罪を憎んで人を憎まず>

犯した罪は憎むべきであるが、その罪を犯すに至るまでにはそれなりの事情もあるわけだから、罪を犯した人そのものを憎んではいけないという教え。「其の罪を憎んで其の人を憎まず」ともいう。「憎む」は「悪（にく）む」とも書く。

出典 <sup>くそうし</sup>孔叢子

この諺は子育てに関する、色々な場面で使える。例えば学校では、いじめの問題が起こることがある。そんな時、スクールカウンセラーとしては、被害者も加害者もカウンセリングを受けさせたいと思う。しかし、大抵は、被害者中心で、加害者までとすることは少ない。勿論、被害者優先はよいのだが、加害者にも様々な問題があることが多い。ただ注意や叱責、指導だけでは解決に至らないことが多いのだ。A君が加害者だとして、A君は過去にいじめにあっていたかも

しれない。家で虐待されているかもしれない。B君から命令されていたかもしれない。子どもは未熟である。まだ成長途上である。それなのに、時々、「Aはだめだ。あいつは見込みない」と見捨ててしまう教師がいる。どんなに悪いと言われている子でも、良いところは必ずある。行動が間違っているとしても、行動は修正できる。しかしその子本人を否定してしまったら、その子は立ち直ることができなくなる。

罪は罪、問題行動は問題行動として認め、それをしっかり理解させること、償わせることは必要だが、子ども本人にも何らかの事情はある。そこもしっかり理解し、受け止めた上で、本人は立ち直れるのだと信じて話すことがいかに大事かを、この諺を使いながら伝えている。

これは保護者たちに対しても同様である。発達障害の子どもたちも、問題行動をおこしてしまうことはある。しかしその問題行動も、その前に何かきっかけがある。起こった行動だけに目を向けてしまうと、本人否定になりがちである。「この子のせいで・・・」「この子は見込みない」「この子生まなきゃよかった」そんな言葉が漏れることさえある。だから同様に話す。問題行動の陰に隠れた子どもの不安やフラストレーションに目をしっかり向けること、それを受けての行動修正、それが何より大事だが、そのためには、その子に変えられる力があると信じる必要があるのだ。

### <泥中の蓮>

周囲の悪い環境に染まらずに、心の清らかさを保って正しく生きるさまのたとえ。

汚い泥沼の中でも、蓮は清らかな花を咲かせることから。「泥の中の蓮」ともいう。

また、「蓮」は「はす」とも読む。「<sup>でい</sup>涅すれども<sup>くろ</sup>縊まず」も同義。

出典 <sup>ゆいまきょう</sup>維摩經

周りの環境に流されるということは子どもの場合多い。子どもは保護者、家族や周りの大人をモデルにして育っていくことが多いからだ。教え、導くべき保護者が、良い見本を見せてくれれば、子どもたちも見本を見習って育っていくだろう。しかし、どこにあっても、例外的に周りに染まらない子はいる。周りが良いから必ず良い子になるとは限らないかもしれない。同様に、周りがいかに劣悪な環境であっても、まっすぐに、優しく、素敵な子に育っている子も見かけるのは事実だ。「掃き溜めに鶴」も同様の意で使われている。

実際、犯罪者の集団のような家庭にあって、一人だけ、真面目で素直な良い子に出会ったことがある。この子は決して犯罪や一般的に悪いことをしなかった。周囲の家族員を反面教師として自分だけはこうならないと思ったのか、それとも、周りとは全く関係なく我が道を通したのかは謎だが、そういう子ができることも事実である。

周りの人や家族のせいにはばかりする子や保護者に出会うと、私はこの例を挙げながらこの諺を伝えている。要は本人次第で、その泥沼から抜け出したいと思うなら助けてくれる人はいくらでもいると知っていてほしいし、泥沼にあっても蓮の花のように大輪の、素敵な花を咲かせて欲しいと思うから。

### <敵に味方あり、味方に敵あり>

対立する立場の人の中にも、自分をよく理解したり、自分に同情したりしてくれる者がいるかもしれない反面、味方だと思って安心している者たちの中にも、隙を伺っている油断のできないものがあるかもしれないということ。

この諺は使い方に注意が必要である。人を信じられない人に、この諺を伝えたら、「やっぱり人は信じられない」となってしまう。敵と思っている味方になってくれる人が居るといくら伝えても、「敵は敵」と思っているところへ、「味方にも敵がいる」と言うわけだから、「それでは誰も信じられないではないか」となるのである。

この諺は、前述のように、敵は全く信じず、味方は完全に信じてしまうような、そして敵と味方を完全に分けてしまうような、極端な人間関係を作っている人に丁寧に伝えるようにしている。

その人の人間関係を振り返ってみてもらい、友人として信じていた人に裏切られた経験や、苦手だとか嫌いだとか思っていた人が実はとても良い人だとわかり、関係が上手く築け、良い友達になった経験などを思い出してもらうのである。

そういうことは大抵一回や二回経験しているもので、理解してもらいやすい。そういう経験がなかった人には、最初から人を嫌えば、その人の良いところは見えなくなるので、まずはその人の良い面を見るようにしてみてもどうかと伝える。そして一つでも良い面を見つければ、その人をそこまで嫌わなくてよくなるし、そうなるとその人との関係もそこまで悪くはならないだろ

うと伝えるのだ。また、仲良しに裏切られることがあったとしても、仲良しが本当に信じられる人だったかどうかを再検討していくと、人の悪口をよく言う人だったとか、その人の信用できないと思われる言動がわかったりするの、そのこと指摘して、もともと信用できない人だったことを理解してもらおう。子どもの場合、誰かの悪口でつながる関係性と言うものも多い。人の悪口ばかり言う人は大体信用できないと思った方が良い。

人を信じるということは、中々難しい。だから、あからさまにすべてをさらけ出すのは得策ではないという結論になる。そういう意味でも、この諺を伝えている。

英語では・・・

It is better to have an open foe than a dissembling friend. (偽りの友を持つよりも、あからさまな敵をもつほうがよい)

### <鉄は熱いうちに打て>

鉄は真っ赤に焼けているうちは柔らかいので、打っていろいろな形のものを作れるように、人間も純粋な精神を失わない若いうちに十分に鍛えることが大切であるということ。また、新しいことを始める時、関係者の熱意が盛り上がっているうちに実行しないと、成功しにくいということ。何事にも時機を逃してはならないという教え。イギリスの諺の訳語。

この諺は有名なもので、昭和の人であれば大抵知っているだろう。若いうち、柔軟なうちに、しっかり鍛えるのが良いということ

で、子どもや若者の教育などの際によく使われてきた。しかし、勘違いする人もいる。

「打て」というのは、鉄を鍛える時には確かに叩くが、人を叩けと言っているわけではない。叩いたりしたら今なら虐待で通報される。また、「鍛える」と言う言葉も、昭和であれば、星一徹のような鍛え方を想像してしまう人がいる。体罰や暴言を肯定しているのと勘違いしてしまうひとがいるのだ。

そういうことではない。最初に述べたように、若く、柔らかな精神、或いは頭脳にとっては、いろいろなことが素直に吸収しやすいが、歳をとってしまくと、体と同様に精神や頭脳にも柔軟性が減って、吸収力も衰える。だから若いうちがよいのだということだ。若いうちが適切な時期ということである。

そして、意味のところでも述べられているように、何事にも時機があり、それを逸すると物事は上手くいかない。

子どもを育てる時、子どもだから、スポンジのように何でも吸収するし、教え甲斐もある。子どもが興味を持てば猶更吸収しやすくなる。興味を持った時が、ちょうどよい時期となる。そんな風にこの諺を伝えている。

英語では・・・

Strike while the iron is hot.

### ＜寺から出れば坊主＞

物事を大雑把に分類したり早とちりの判断をしたりすることのたとえ。また、その様に判断されても仕方がないという意味でも用いる。寺から出てきた人は、すべて僧侶と

みなしてしまうという意から。

この諺は、子どもたちに使うことが多い。ある子が、小学校低学年の子だが、友達関係の話をするときに、「AちゃんはBちゃんと一緒にいたから、Bちゃんの仲間だし、CちゃんもBちゃんと話していたからBちゃんの仲間、Bちゃん嫌いだからAちゃんもCちゃんも嫌い。」と言ったとする。そんな子にこの諺を出して考えてもらう。「寺から出てきたらみんな坊主かな?」「警察から出てきたらみんな警察官かな?」もちろんその子は「違う」という。「そうだよ。じゃあ、AちゃんやCちゃんは本当にBちゃんの仲間なのかな?たまたま話をしていただけかもしれないし、そばにいただけかもしれない。仲間なのかどうかは、確認してみなくちゃわからないね」と伝えるとわかってくれる。

保護者の場合でも、同様のことが無いわけではない。幼稚園や小学校の子どもの友達付き合いに口をはさむ親は結構いる。その中でも、保護者同士の仲が悪いと、子どもたち同士の関係にもひびが入ることが多い。親は親、子は子のはずなのだが、「あの子とは付き合わないで」とか「あの家の子は親が親だからろくなもんじゃない」などと言う保護者がいる。そんな保護者に、この諺や、前述の「泥中の蓮」を出して伝える。自分が遊ぶ仲間を決めるのは本人自身であり、そこに口を挟むのはやめよう、相手の子を偏見のない目で見てみよう。但し、年齢が上がって、中高生にもなると、相手の子自身の行動に問題があれば、そこは意見をしても良いだろう。

### ＜出る杭は打たれる＞

優れて頭角を現す人は、人に妬まれたり憎まれたりしやすいことのため。また、出過ぎた振る舞いをすると、とかく非難されるというため。杭が並んでいる場合、一本だけ高ければ、ほかの杭にそろそろ打ち込まれるということから。「差しでる杭は打たれる」「出る釘は打たれる」ともいう。

出過ぎた真似をして非難されるというのはわかるが、優れて頭角を現すことで人に妬まれたり憎まれたりするというのは悲しいことだと思う。しかし現実、学校では、百点ばかり取ると目立つからわざといくつか間違える子や、答えがわかっているのに拳手をしない子などがいる。目立つといじめのターゲットにされるからというのだ。ひたすら自分の能力を隠し、目立たないようにしていることで、透明人間化している。自己の存在感をなるべく消しているという。

人付き合いが苦手だからと、一人で居れば「ボッチ」（ちょっと古い言葉だが）と言われ、こういう子はトイレで弁当を食べていたりする。それはそれで目立つ。いじめの対象になることもある。

友達が多く、明るく、元気な子は、友達作りが苦手な子から憧れられるが、その上成績もよになると、同じように友達が多く、人気のある子から妬まれることもある。どっちが上か、どっちがかわいいか、どっちが優秀か、どっちが足が速いか等、一つ一つで競争がある。その競争に巻き込まれるのが嫌な子は、可愛くても、成績が良くても、スポーツが出来ても、出る杭は打たれるからと自分の能力を抑える。

人を認め合えることができるようになれ

ば良いのだが、まだまだそれには時間がかかりそうである。出る杭が打たれない世界になってほしいという思いを込めてこの諺をあげた。

英語では・・・

Envy is the companion of honor. (嫉妬は名声につきまとう友である)

### ＜天知る地知る我知る人知る＞

誰も知らないと思っても、天と地と自分と相手の四者が知っているから、悪事や不正は必ず発覚するものだといひませぬ。

「四知（しち）」ともいう。

出典 後漢書

どんなに秘密にしている、いつかは他人に漏れてしまう。「人の口には戸が立てられない」なども同様に、秘密といっても守られるとは限らないという戒めである。秘密を洩らしたという話は、どの世界でも聞かれる。マル秘文書の漏洩が社会でも見られるのだから、子どもの世界での秘密漏洩は日常茶飯事である。AちゃんからBちゃんへ「二人だけの秘密だよ」と伝えたとしても、BちゃんからCくんへ「秘密だよ」と言ってAちゃんの話が伝わっていくのだ。アツという間にAちゃんの話はクラス中に伝わっていたなどということもある。

一般的に秘密は守られないものと考えればよいという意味でこの諺を伝える。但し我々医師や心理師、弁護士等の守秘義務が課せられる人々の間では、違法なこと以外は守秘が守られねばならないのはいうまでもない。

英語では・・・

The day has eyes, the night has ears.  
(昼に目あり、夜に耳あり)

### <天に唾す>

人に害を与えようとして、自分がひどい目にあうことのたとえ。空を仰いで唾を吐いても天を汚すことはできず、自分の顔に降りかかってくることから。「唾」は「つばき」とも読む。「天に向かって唾を吐く」「天を仰いで唾する」「仰いで唾を吐く」ともいう。「お天道様に石」も類語。

出典 四十二章経

子どもたちにこの諺を伝えるのは、誰かの悪口を言っている子に対してが多い。他人のことを悪く言えばいずれ自分が悪く言われるようになる。

ある子が誰かの悪口を言っていると、それを聞いた子が、悪口を言われている子に伝える。悪口を言われた子は、最初に言った子の悪口を言う。それを聞いた子がまたその悪口を最初に言った子に伝える。つまりまわりまわって自分に返ってくるのである。だから人の悪口は言わないようにしようと伝えている。

英語では・・・

The stone you throw will fall on your own head. (投げた石は自らの頭上に落ちる)

### <天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らず>

人間は生まれた時からすべて平等であって身分の上下などなく、貧富・家柄・職業などによって差別されるべきではないということ。福沢諭吉の「学問のすすめ」にあることは。「彼も人なり、<sup>われ</sup>予も人なり」は類語。出典 学問のすすめ

福沢諭吉の有名な言葉であり、大好きな言葉の一つである。職業差別をする人を見ると、嫌悪感すら出てしまう。弱い人、自分より下と感じた人には横柄な態度をとり、偉い人には平身低頭で、おべっかばかり使っているような人を見ると腹が立つ。だからというわけではないが、人はみんな平等であるという考え方を子どもたちには持ってほしい。

時々会社の社員寮等で、上司と部下が同じアパートに住んでいると、上司の奥様は、部下の奥様より上、上司の子どもも、部下の子どもより上と言う上下関係を言う人がいる。なんと人間が小さいのかと思う。上司の奥様も、部下の奥様も、或いはその子どもたちも、全く別に考えるべきだろう。差別されたり区別されたりして、辛い思いをしているのは部下の方である。そんな理不尽な話はない。いやな思いをしている子どもや保護者に対して、この諺をだして、媚び諂う必要などなく、堂々としていようと伝えている。

### <天網恢恢疎にして漏らさず>

天罰を逃れることはできないということのたとえ。天が張り巡らした網の目は粗い



が、悪いことをした人は一人も漏らすことなく処罰する。天道は厳正であって、悪いことをすればいつかは必ず報いがあるという意。「天網恢恢疎にして失わず」ともいう。恢恢とは広く大きいさま。疎とは目が粗いこと。 出典 老子

この諺も大好きな諺の一つで、悪いことはいずればれてしまうということで、子どもたちに伝えている。この言葉自体は難しいので、かみ砕いて説明をする。小さな事であっても、悪いことはみつかのだから、最初からしない方が良く、嘘を付けば、その嘘もいずればれてしまうので付かない方が良い。完全犯罪はあり得ないし、罪を犯せば必ずつかまり、漏れることなく罰をうけるのだから。

#### 出典説明

##### 孔叢子・・・一巻二十一編

中国、孔子8世の孫。漢の孔鮒（字は子魚）の撰と伝えられる書。講師及びその代々の子孫の言行を載せる。

##### 維摩経・・・

大乘仏教経典の一つ。別名「不可思議解脱経」。サンスクリット原典とチベット語訳、三種の漢訳が残存する。旧来の仏教の

固定性を批判し在家者の立場から大乘仏教の軸たる「空思想」を高揚する。内容は中インド、ヴァイシャリーの長者ヴィマラキールティにまつわる物語。

##### 後漢書・・・百二十巻

中国の正史の一つ。南朝、宋の范曄と西晋の司馬彪の撰。後漢一代の歴史を記したもので、本紀（帝王の伝記）・列伝（臣下などの伝記）は范曄の撰に唐の李賢が注を加え、志（社会・文化など）の部分は梁の劉昭が司馬彪の『続漢書』から取ったもので注も加えている。志の「東夷伝」には日本のついで記述がある。

##### 四十二章経・・・四十二章

仏教最初の漢訳経典とされる。後漢のとき、仏教を初めて中国に伝えた中インドの僧迦葉摩騰・竺法蘭が訳した。後漢末から三国時代には成立していたものと推定されるが、伝世の経の内容は南朝の南齊から梁にかけて成立したとされる。

##### 学問のすゝめ・・・

福沢諭吉の著書の一つで代表作。幕末・維新期の日本人に多大な影響を与え、日本の近代化を促進した西洋文明入門書。西洋の先端的技術や社会制度など、日本の近代化に必要な情報と知識を、自らの渡米・渡欧体験をもとに、わかりやすく体系的に紹介している。

# うたとかたりの対人援助学

## 第29回「ニコラ・グロウブ編《ストーリーテリング・特別支援・障害》を読む」

鶺野 祐介

### はじめに

本連載の前々回(第27回、2023/12/15 配信)の中でニコラ・グロウブについて紹介したが、今回は、彼女が2022年に編集・出版した『ストーリーテリング・特別支援・障害—子どもや大人への実践的アプローチ— *Storytelling, Special Needs and Disabilities: Practical Approaches for Children and Adults*』(2022)を取り上げる。

昨年(2023)11月の日本発達障害学会第58回研究大会の自主シンポジウム「障害者の世界を広げるストーリーテリング」に指定討論者として参加したのをきっかけに、高野美由紀、有働真理子、光藤由美子、各氏との交流を通して、グロウブが提唱する「マルチセンソリー・ストーリーテリング」の理念や実践に関心を持つようになった。その入門書となるのがこの本だと教えていただき、入手した。

現時点では、裏表紙の紹介文や目次そしてグロウブ執筆の序章(introduction)に目を通しただけだが、とても興味深い内容である。日本語訳はまだ出版されていないようなので、今回のエッセイの中で、本書のエッセンスを紹介できればと思う。そして、共感の声が多く挙がるようであれば、ぜひ全文の翻訳を手掛けてみたいと考えている。

### ニコラ・グロウブのプロフィール

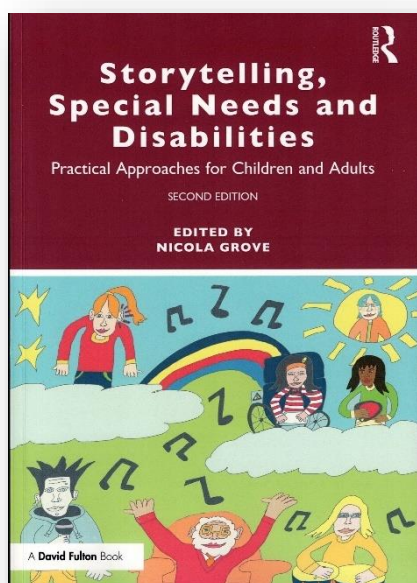
グロウブ(2022)の裏表紙に掲載された、彼女のプロフィールは次の通り(拙訳)。

ニコラ・グロウブは、英語教師・言語聴覚療法士・大学講師の職歴を持つ。「チャリティ・オープンストーリーテラー」や「ストーリーシェアリング・アプローチ」という団体を発足させた。また現在は、独立した形での相談員・研究者として活動している。知的障害者のための、オルタナティブなコミュニケーションや文学やストーリーテリングに関する出版物を発行するとともに、多くのストーリーテラーや教育者や療法士たちと共に国際的な活動をしてきた。2020年、学習障害者の「パンデミック・ストーリー」を収集するウェブサイトを開設した。王立言語聴覚療法士大学名誉研究員、オープンユニバーシティ学習障害社会史研究会会員。

### 本書の概要

本書は、2012年に出版された『ストーリーテリングを用いて子どもや大人に特別支援を—一語ることを通して生活を変える— *Using Storytelling to Support Children and Adults with Special Needs: Transforming Lives through Telling Tales*』の増補版で、いずれもグロウブの編集、ルートレッジ社からの発行である。

本書の裏表紙に、概要が次のように記されている。



理論と実践の両方をバランスよく示しながら、本書の著者たちは、包摂的な(インクルーシヴ)ストーリーテリングに対するそれぞれのアプローチについて定義し、自身の実践の土台となる原則や理論について記述し、尚且つ、自身の仕事の中心に喜びがあることを語っている。

本書には、「療法(セラピー)としてのストーリーテリング」「言語とコミュニケーション」「相互的で多感覚的なストーリーテリング」「テクノロジーと語り」などのトピックスが取り上げられている。

各章には具体的事例が示され、自身の仕事の中で物語を使ってみたいと考えている実践者にとって、さらなるステップを踏んでいくための道しるべが示される。これによって、本書は多様な特性や障害を持つ学習者とともにストーリーテリングを実践するための、要を得た、分かりやすいガイドブックとなっている。

## 目次

本書は、グロウプの執筆による序章の後、全 25 章の論文と、参考資料「ストーリーテリング関連団体・機関のリスト」および索引から構成されている。

1. Therapeutic storytelling with children in need (特別支援を必要とする子どもとの療法的なストーリーテリング) Janet Dowling
2. Feelings are funny things: Using storytelling with Children Looked After and their carers (感じることは楽しいこと —ストーリーテリングを使って子どもとこれまでのことを振り返る—) Steve Killick
3. Healing stories with children at risk: The StoryBuilding™ approach (危機に立っている子どもを癒す物語 —「物語を組み立てる」《トレードマーク》アプローチ—) Sue Jennings
4. What can teachers learn from the stories children tell?: The nurturing, evaluation and interpretation of storytelling by children with language and learning difficulties (教師は子どもが語る物語から何を学ぶことができるか? 言語機能障害の子どもや学習困難な子どもにとってストーリーテリングが持つ養育的意味・評価・解釈について) Beth McCarffrey
5. Lis' n Tell: live inclusive storytelling: Therapeutic education motivating children and adults to listen and tell (聞き・語る —包摂的なストーリーテリングを生きる —子どもや大人を、聞き・語ることへと動機付けする療法的教育—) Louise Coigley
6. Interactive storytelling (相互作用的故事りテリング) Keith Park
7. Speaking and Listening Through Narrative (物語ることを通じての話すことと聞くこと) Bec Shanks
8. Using narratives to enhance the language, communication and social participation of children and young people with speech, language, and communication needs (話すことや言語やコミュニケーションに特別支援を要する子どもや若者に、物語ることを用いて言語やコミュニケーションや社会的参加の能力を向上させる) Victoria Joffe
9. Creative use of digital storytelling (デジタル・ストーリーテリングの創造的活用) David Messer and Valerie Critten
10. Storytelling in sign language for deaf children (聴覚障害児のための手話言語を用いたストーリーテリング) Rachel Sutton-Spence
11. Literature and legends: Working with diverse abilities and needs (文学と伝説 —多様な能力や支援を用いた活動—) Nicola Grove and Maureen Phillip
12. Storytelling with all our senses: mehr-Sinn® Geschichten (我々の感覚すべてを用いたストーリーテリング —もっと意味のある物語—) Barbara Fornfeld
13. Multi-sensory story-packs (多感覚的な物語 ひと包み) Chris Fuller
14. Storytelling with nurturing touch: The Story Massage Programme (養育的な触れ合いを持つストーリーテリング —物語のメッセージ・プログラム—) Mary Atkinson
15. Rich inclusion through sensory stories: Stories from science (感覚的な物語を通じての豊かな包摂性—科学から物語へ—) Joanna Grace

16. Describing and evaluating the storytelling experience: A conceptual framework (ストーリーテリング体験の記述と評価 ―概念的枠組―)  
Tuula Pulli
17. Sensitive stories: Tackling challenges for people with profound intellectual disabilities through multi-sensory storytelling (傷つきやすい物語―重度の知的障害者への多感覚的なストーリーテリングを用いたチャレンジを試みる―)  
Loretto Lambe, Jenny Miller and Maureen Phillip
18. Social Stories™ (社会的な物語《トレードマーク》)  
Carol Gray
19. Storysharing® : Personal narratives for identity and community (物語を共有すること―アイデンティティとコミュニティのための個人的な語り―) Nicola Grove and Jane Harwood
20. Personal storytelling with deafblind individuals (盲ろう者との個人的なストーリーテリング) Gunnar Vege and Anne Nefstad
21. Personal storytelling for children who use augmentative and alternative communication (たくさんの別な形でのコミュニケーションを用いる子どもに対する個人的なストーリーテリング)  
Annalu Waller and Rolf Black
22. Self-created film and AAC technologies (自主制作映画と AAC テクノロジー)  
Mascha Legel and Christopher Norrie
23. Learning to tell: Teaching skills for community storytelling (語るための学び ―コミュニティ・ストーリーテリングのための技法を教える―)  
Nicola Grove and Jem Dick
24. The autistic storyteller: Sharing the experience of otherness (自閉症のストーリーテラー ―他者性の体験を共有する―)  
Justine de Mierre
25. Tales from the heart: Testimonies from storytellers with learning disabilities (心からの語り ―学習障害を持つストーリーテラーからの証言―) Sayaka Kobayashi, The Arts End of Somewhere and Openstorytellers

## お話を語ること (序章より)

お話を語ることは、地球上で最もシンプルで楽しくて、人を変えていく営みの一つである。家庭で、教室で、美術館や博物館で、福利厚生施設で、特別支援を必要とする障害を持つ子どもや大人と触れ合い、彼らの生活に関心を持つすべての人びとに、自信を持って、楽しく創造的で力を与えるようなやり方で物語を語ってほしいと、この本とともにエールを送りたいと思う。

私たちは知っている。たくさん子どもたちが言語に関するスキルをわずかしか持たないで学校に入り、読み書きや話す能力も低いレベルのまま卒業し、その後の人生にも大きな影響を与えていることを。そしてその状況は、近年になっても好転していない。

地球上全体の人口の約 10 パーセントは言語に関わる障害を持って生きていると言われている。アメリカ合衆国では学齢期の子どもの 14 パーセントが該当し、イギリスでは学齢期の子どもの約 20 パーセントが特別な教育的支援を必要としているとされる (SENDS)。

5 歳から 7 歳までの要支援児のうちの半数が、話すことや読むことに困難を持つと認められる。こうした問題は連鎖反応を持つ。低学年の子どもが上の学年になると、様々な面でリテラシー [読み書き能力] の難しさが目立ってくる。そして思春期になると、振る舞いの困難さが顕著になる (ICAN/RCSLT, 2018)。

この年の調査とその後の調査によれば、特別支援児の達成度は、予想よりも遙かに低い水準が続いており、学校を離れた後のさらなる学習機会やキャリアを得るのにも不利である。

地球規模のパンデミックの出現は、健康面での不平等性や、人びとの間の強いストレスを増加させ、特に障害者や特別支援を必要とする子どもとその家族に対して悪影響を与えた (APPG, 2001)。けれども、それと同時に、私たちは皆、こうした困難な時期を生き延びるために、私たちの物語を共有することが助けとなると気づかされたのである。(by Nicola Grove)

## おわりに

今回、この原稿に取り組む時間が十分に取れず、裏表紙の概説、目次、序章の冒頭部しか紹介できなかった。翻訳の推敲も不十分で、誤訳した箇所や、日本語の文章としてこなれていない箇所がたくさんあるのでは?と案じているが、本書の内容の意義深さを少しでもお伝えできていたら嬉しい。

次回以降も、不定期になるかもしれないが、継続して本書について紹介していきたい。ご感想やご意見をぜひお寄せください。

# ああ、 結婚！

—婚活日記—

第30回

黒田長宏

<2024年2月1日>

2度めのカテーテル処置まであと6回勤務することになっているが、昨日は定時まで勤務できたのだが、昨日も夕方15分くらいあったのだが、今日は午前中に1時間くらい、背中中の左側が痛くなってしまい、恥ずかしいような屈辱のような変な気持ちながらも、背に腹は代えられないと、仕事を引き継いでもらって早退した。職場も病院ではあるが、心臓のカテーテル措置はしていない。車で15分ほど離れた、手術した心筋梗塞緊急対応の病院で検査。原因不明。気持ちは、このまま緊急手

術のほうがもう一つ残っていて、2月13日にカテーテルで広げる血管を、このまま処置してもらったほうが楽かなと思っていたが、CT、心電図、血液に異常が見当たらなかった。仕方がない。同僚に頼まざるを得なかった。こうした時の感情。劣等感のような。これは何なのかを広く考えなければいけないのだろうと思っていた。しかし、まったく結婚難問題とどうつながる話なのか。これは。外来の特別時間外出費は痛かったが、安心を得た。

<3月21日>

前回書いたのはあの日だったかと思うほど月日は経過し、ステントが2つに増えてから、職場は少し作業量を減らしてもらい、病院も手術のところから、かかりつけの医院に変更された。年をとり、そして心臓の病気となり、結婚難の立場はさらに悪化した。ここからでさえ、どう立ち向かっていこうか。どうすればいいのだろう。

職場の作業も数日前から病気になる前と同じ内容まで戻された。背中の原因不明の痛みも出なくなったが。しかし、テーマである、結婚難問題に関して、社会的にも、本当の目的のはずの、自分自身の状況も、いつまでたってもなんの変化も生み出せないままだ。56歳という年齢と、急性心筋梗塞という病気と。さらに難しく、遠のくばかりの問題に思える。この現実をどうすればいいのか。この調子では、こうした同じ文章を繰り返すことしか出来ないのではないか。この停滞こそ多くの人も陥っているのではないか。どうにもできず同じような日々。ここに発表する事との矛盾があるのだと思う。発表する事、提出して公表される事は、同じ事や停滞ではなかなか発表されな

いのだと思う。結婚難にしても停滞した永遠のような毎日が続いているのみで、逆に発表される物には起伏や変化が注目されるどころだからだ。そういう人は関心を持たれないだろう。ましてや結婚相手の候補者たちにも。

※以下、日付が前後して複雑になってしまったが、このところトピックスが私に生じて来なくて、もう58号に提出しようとしていたところ、突発的にトピックが生じ、急遽57号に間に合わせようとしたためである。修正していくと臨場感が減ったり、微細な面が加工されてしまうと思ったので、前後しているのである。

<5月2日>

勤務先で最近、病気前の業務に戻してもいいでしょうと言われ受けた。以前の痛みや、息切れや動悸なども無く出来ているようである。私自身の高齢化や大病で時間が更に過ぎてしまったが、結婚難問題は自身も含めて停滞、難航のまま。冴えない文章が続く。

出版物や提出して読んでもらう文章は9割以上、ほとんどが面白かったり、起伏があったり、ドラマ性を伴う日々の記述なのではないだろうか。だが、現実は違う。小説家でも脚本家でも学者でもない、しかも結婚もしてもらえないような、能力のない人物にとって、その日記などは、本当は、今日も同じ、今日も同じ、今日も同じというだけの繰り返しなのだ。やりようがない。どう変化していいかわからない。変化がやってくることもない。そういう意味で世からまわってくる文章などは相当脚色されたものか、変化を出せない、結婚もできないでしまう人物にとっては、別世界なのだ。この私の文章だって、提出物という意識から無

理に脚色され続ける。本当は、今日も結婚できない。今日も結婚できない。今日も結婚できない。という文章だけが、50回も100回も、コピー&ペーストで後から付け足せばいいだけの事なのだ。むしろそのほうが真実なのである。

なんて、書いておきながら、だけど前段のほう我真実だとは思ふ。だけど、昨日は15年も同じ勤務先の異性なのに、私のYouTubeなどに匿名でいいし、馬鹿野郎とだけ書いてもいいかなんか書いてくれなどとしゃべってみたが、なんだか馬鹿みたいである。他でも言ってきたことだが、異性に器用さやエネルギーが出せない人には、昔の見合い結婚のほうによほど有難く、家族を持って生きられるシステムだったと思う。ところが現在は、恋愛結婚したくせに離婚している悪い意味での『個人主義社会』になってしまっている。なんだかんだ言ってもエゴイズムに過ぎないから二人の間でさえ信用が続かない。裏では略奪で表向き離婚して再婚とか、そんな世の中で信頼なんか生まれるかい。

<5月3日>

結婚難問題があまりに日々変化を出せず、今回も58号分記載に期待しようと思いに57回の原稿を送ってしまったのだが、今朝、茨城新聞を眺めると、結婚成就とは違う話題だが、私としては、結婚そのものが難しくなった場合もテーマだが、明治生まれの曾祖母にも育てられたからか、代々受け継いできた遺伝子の存続というのも関心があり、それを私でストップすることも考えてしまうのだったが、このことも以前にここにも書いたことがあっただろうか。

今朝の新聞記事というのは、15日に開始するということか、プライベートケアクリニック東京という医療機関が非匿名限定での精子提供を募集開始するということである。担当者は、伊藤ひろみさんという女性で、この人は以前にも茨城新聞に出ていたのだと思うが、精子提供関係のスタッフをしているのを見たことがあるのを思い出した。その時はスルーしてしまったのだが、今回は、匿名だと私的な精子売買が行われていたり、倫理的にもプライバシーからの事後的な背景などから躊躇していた面を、非匿名限定にすることにより、そうした問題に改善をはかるということらしく、私自身もかなりの年の差婚は相手もいることであり、かなり難しく停滞してしまうため、先祖代々の遺伝子のことならば、精子提供というのは私の心残りを終わらせるのではないかも思い、それに、遺伝子存続の問題を別でできれば、年齢の近い、子供が出産しづらくなった年齢の人とも結婚対象の可能性が、私のように考えてしまう思考の持ち主でも幅が広げられるのかも知れない。

ただ、こうした少数の件は、倫理的、法的にも賛否出ることでもあり、それでもこれなら実行できるのではと読んだところ、まだ私の場合にはネックが残っていた。それは今回の募集年齢が上限45歳というのだった。また私には急性心筋梗塞発症後という特殊性もある。

それで、プライベートケアクリニックに今朝、さっそくメールした。私信ではあるが、特に問題は無いと思い、そのままコピー&ペーストして、対人援助学会にもここで通知したいと思った。もちろん私のYouTube(婚難救助隊)にもこれから発言する。

(医療機関に送った内容)

私は結婚難で子供が出来ず、先祖から受け継いだ遺伝子のつながりを私がストップさせてしまうことが悩みで、精子バンク提供があるのは知っていましたが、社会がなかなか認知しないようだし、56歳という年齢もあり躊躇していましたが、精子の運動の検査もあるならば、もしこの年齢でも検査で問題がなければ、今回の条件でなくてもよいところがあれば匿名でも非匿名でも、ドナー提供しておきたく、もしかしたら私の先祖からのつながりができるかもしれないという期待から、そうしておきたいのですが。あまり高いと困りますが、精子提供に私のほうからお金を支払ってでもバンクしておきたい気がします。

そうすれば、高齢結婚を目指しても、子供が出来ない年齢になった同世代以上の女性とも結婚を、出産と関係なく選択できるかも知れないと思いました。

個人的な特殊性として、今年の1月に急性心筋梗塞を発症してしまいましたが、助かり、食事や運動で血液検査も良くなったようです。仕事も以前の作業量に戻りました。体調も悪くならないようです。

YouTubeで結婚難問題を憂慮して、『婚難救助隊』というパフォーマンスを続けて、現在登録者が515名いてくれます。

勇気がなく、男性としても子供が出来ない難しさに直面し、現実的に精子バンクに精子提供をすることが、高齢男性にとつ

ても遺伝子をつなぐ有力な方法だと思いません。

私は献血を100回以上やってきました。精子の提供も命の提供だと思えます。なんとか考慮をお願いします。

(以上)

私は、結婚難問題があまりに進展できず、雑誌などに発表できる話題ではない、進展のない日々こそ真実があるのではないか。記述物だけでは真実が振り分けられるのではないかというようなことを最近ここで書いてみたが、矛盾するようだが、この、精子提供というあまり話題にされない方法論は、倫理面も含め、結婚難高齢男性の生きがいについて、なんらかの示唆になるのかも知れないと思ひ、社会への反抗的な意味もなく、真面目に考える。

<5月5日>

再々送し、加筆させていただく。茨城新聞には私と同じ56歳で無職だという人が投稿していて、朝の5時頃から起きて歩いたり走ったりして気持ちを強くして歩んでいこうという内容だった。抽象的、思索的な内容で、社会的に不器用な人なのかなと思ったが、一寸先は闇だが、

私のほうは15年以上勤務させてもらっているところを継続していて、無職だったらプレッシャーが

あったかも知れないと思ったりしたが、若い時には職場を変えるという勇ましさも戸惑うこともなく出来たのに、老いというのは魂を沈ませる。松本清張の歴史短編では私より3つ年上を、時代が違うとは言え、老人と記されてい

た。

今日はこどもの日。私は57号で加筆しようとしたわけは、昨日医療機関にメールした、精子バンクの事をもっと調べてみるべきではないかと思っているからである。卵子バンクもそうである。

その考えについては、SNSなどにアップした文章をそのまま掲載するが、このまま埋もれて死ぬだけかと思うと、死んだかも知れないのに助けられた命でもあるものの、ベーシック・インカムや脱原発など、私が思うことは為されないのが嫌な予感もするが、米紛は社会的に浸透されようとしているようにも感じるが、精子凍結、卵子凍結は、失った希望を取り返す科学技術なのかも知れないと思ってきた。

社会に意識付けならば、微々たる力を加えることが出来るのではないだろうか。対人援助にもなるはずだ。精子凍結、卵子凍結から心が助かる人もあろうと想像するのだ。58号には、

そういう面での動きが果たして書けるだろうか。書くのは私自身だろうかよ。

(SNSにアップした文章)

倫理面は思案中だが、結婚してもらえず先祖から子孫存続という希望を絶たれる男女にとって、見放されても希望を取り戻す方法は、科学技術の時代ならば卵子凍結と精子凍結だと思ってきた。それは既にある。高齢卵子と高齢精子が保存されれば科学の発達で可能性が高まるのを社会にふっかけようかと思う。

<2024年5月9日>



58号で提出しようと思っていたのだが、精子提供の逆説のような案が閃いて、行動もしたので、私のような急性心筋梗塞で命拾いした者は、3ヶ月の間に何があるかわからない、待ってられないと思い、今回は再提出が多くなって申し訳ないのだが、やる気がないよりは悪くないと思い、(やる気がない時期も悪くはないのかも知れないが)

これ以下の部分を付記させていただく。

<2024年5月2日>

思わぬ急性心筋梗塞発症事件から3か月が経過し、出直しせねばならない。そのため、早めに57回の原稿を提出し、58回分の出来事に向けて再稼働である。(原発のせいで嫌なイメージの単語になってしまったが。)

<5月3日>

58回めも記述の日が空くのかなと半ば忘れていたところ、茨城新聞に東京の医療機関が非匿名の精子提供を募集するとあり、私自身の先祖代々の遺伝子のバトンを私でストップする罰の悪い気持ちを、まだ工夫できるかも知れないと思い、ただ45歳までの募集なので、年齢制限について医療機関にメールした。思えば結婚難だって、年齢制限で困難な面がある。適齢期はあるのも事実だが、限界にはまだなっていない場合も限界とされてしまう場合があるかも知れない。でも適齢期が一番適齢なのは当然だとも思うが。

<5月8日>

新聞を隔々見ていたのは良かったかも知れない。今回の東京の医療機関の担当の女性は自らがご主人の了解を得て、精子提供を受けて子供を持たれた経験者だと記事に書いてあったが、丁寧な返信を2度くれた。年齢制限のルールがあるので、すぐに決着は付かなかったが、もし将来的に高齢者でも精子提供が出来るようななったなら連絡をくれるとのことで、私のほうも、積年思ってきた結婚難周辺の事々を殴り書きして訴えた。久しぶりにアクションを仕掛けたような気もする。望みを捨てなければ、可能性はまだやってくると信じてみたい。

<5月9日>

起床して着想が閃き、しつこいようだが、非匿名の精子提供を15日から開始するという医療機関の担当者にメールを重ねた。その着想は、精子提供するような男性は、社会的に優秀とされていたり、当然若さがあつたり、妻帯者であつたり、将来妻帯できる男性ではないか。すると配偶者からの子供と、精子提供した子供との異母兄弟姉妹間の結婚が生じるのではないか。異母兄弟の結婚は遺伝子が近い配偶者だと遺伝病の生じる可能性から結婚は禁じられているが、精子提供からそうしたことを減らすためには、結婚出来ず孤独死するような結婚難男性の精子提供ならばどうなのかという逆説のような事を提供したのだ。私自身の結婚難高齢化により、以前よりやる気は色々な面で減少してしまっているが、久しぶりに活動しているような気がした。他の面からも、高齢結婚難男性が救われる方法論、広げられれば女性も救われる方法論をもっと意識してインプットアウトプットしなければいけないはずだったのだが、きっかけがないと行為できない。今回は新聞を隔々眺

めていたことからの着想と実践だと思う。茨城新聞にもこの事を伝える営業をしてみようかなと思う。

これを書いた後、早速茨城新聞にメールした。内容を添える。

(茨城新聞に送った内容)

5月2日か3日頃だと思いますが、プライベートクリニック東京という医療機関の精子提供の記事を読み、私自身が結婚難で子供がいなくて、罪悪感のようなものを持っていたので、精子提供によって罪悪感が解消すると思い、担当者の伊藤さんにメールしたところ、丁寧な返事をいただき、私は56歳ですが、45歳の年齢制限があるということで残念でした。しかし、将来年齢制限が緩和、撤廃など生じれば連絡をくださるとのことでした。

さらに、伊藤さんに、生涯未婚だった男性のほうが、精子提供による異母兄弟間の出産の遺伝病の面について、生涯未婚だった男性のほうが、若さや社会的に優秀とされる遺伝子よりも有利な面ではないかという、聞いたことのない説を提出しました。民法で兄弟姉妹間の結婚を禁じているのに、精子提供だとそれがスルーされる可能性が考えられます。

独自すぎて理解されないかも知れませんが、マスメディアに通知しておくことで、ユニークかつ有効な動きを茨城県から将来の日本を動かしていこうと思い、メール差し上げた次第です。

あの記事の提供をありがとうございました。

〔PBLの風と土 第29回〕

## 担い手を理論がつなぎ方法論でつなげる

山口 洋典（立命館大学共通教育推進機構教授・立命館大学サービスラーニングセンター長）

### 【前回までのおさらい】

筆者は2017年度にデンマークのオールボー大学（AAU）で学外研究の機会を得ました。AAUでは1974年の開学当初から全学でのPBL（Problem-Based Learning）の導入で知られており、現地から本連載を始めました。

連載2年目はアイルランドで刊行されたPBLの書籍をもとにAAU以外での知見を紐解きました。連載3年目からはサービス・ラーニングとの比較を重ね、4年目はコロナ禍での立命館大学の科目への影響を、5年目からは米国での大学・地域連携の教育に関わる理論を解題し、8年目となる2024年度は再び筆者の教育実践を紹介します。

### 1. 現地のために現地とともに

本稿は2024年1月1日に発生した令和6年能登半島地震から5ヶ月を迎える中で執筆している。過去の災害復興過程の記録に目を向けるなら、阪神・淡路大震災から5ヶ月を迎えた頃は神戸市以外（伊丹・宝塚・尼崎・芦屋）の避難所が閉鎖され、災害復興住宅の初募集がなされている<sup>1</sup>。当時、大学生だった筆者は、春休み期間には神戸まで頻繁に通ったものの、授業が再開となった4月以降は大阪市淀川区の十八条仮設住宅を先輩と共に訪問した記憶がある。このように、阪神・淡路大震災は大都市である神戸や震源地の淡路島のみならず、大阪市内も含めて広域に被害がわたったものだが、改めて阪神・淡路大震災の年表を見返し、発災5ヶ月で仮設住宅ではなく災害復興住宅の募集が始まっていた等の記録に触れると、兵庫県が当初から「創造的復興」と掲げて復興の計画を推進していた影響を垣間見ることができそうである。

無論、過去の災害の復旧・復興の歩みと単純な比較のもとで「遅れている」などと指摘するつもりはなく、そのような指摘をしたところで急速な進展が図られることもない。ただ、学生たちの春休み終了直前となる3月末と5月の大型連休に輪島市町野町地区でのボランティア活動に参加し、学生たちと共に訪れて抱いた素朴な印象は「遅れている」というよりは「進んでいない」である。そして、1月1日の発災以降、未だに多くの家屋からの被災物の運び出しに向き合っている現地の方々の気持ちを伺うと、何と



写真1：石川県輪島市町野町地区での活動の様子（筆者撮影、2024年3月28日）

もいたたまれない思いに浸ってきた。何より、言葉にできない思いも無数にあることを想像すれば、外部支援者が安易に共感的な理解を示すことが被災された方々とのあいだに気持ちの隔たりを生むことさえあるという点を、筆者はいくつかのまちとの継続的な関わりの中で学ばせていただいている。被災された方々のために支えになりたい、ということであれば、そうした方々と共に時間を過ごす必要があることは、例えば東日本大震災から2週間後の2011年3月25日、大阪大学の平成22年度卒業式・修了式で鷺田清一総長による式辞が気づかせてくれるだろう<sup>2</sup>。

このような大規模災害に対し、この10年あまり、教養教育の中でもボランティア学習を組み込んだ「サービスラーニング科目」を担当している者として、何より学生時代の災害ボランティア活動を通じて現在の仕事や暮らしにつながる学びと成長の機会を得た者として、ささや

かでも距離を越えて心を寄せていきたい、と筆者は思案を続けている。筆者の専門は社会心理学でもグループ・ダイナミックスのため、例えば新潟県中越地震の復興過程では、外部支援者が現地の方々と共に過ごす中で「現場に生きた言葉を見出す」（山口・渥美・関，2019，p.139）ことに努めてきた。言わば、復興に向けた合い言葉を共に創り出す、という具合である<sup>3</sup>。逆に言えば、仮に現地で復興の進捗を案じている人々がいるのなら、言葉の力で地域を動かす、という観点から、現場発の力強い言葉が紡ぎ上げられることを願ってやまない。

そこで前回の結語での予告のとおり、今回からは筆者が関わってきた教育実践を取り上げ、どのようにして活動の担い手と現場が変容していく方向へと向かうかについて接近するにあたり、今回は災害復興をテーマとしたサービス・ラーニングがどのように立ち上がり、展開されていったかについて取り上げる。既に本連載では第14回で東日本大震災直後の動きと継続的な科目展開の背景を紹介し、第17回で在学中にサービスラーニング科目の履修を経て福島県楢葉町に携わった上で卒業後には現地の住民となって各種の取り組みにあたっている3名をゲストに迎えたオンラインシンポジウムの内容を紹介した。これら学習者の学びの成長に関心を向けてきた過去の回とは異なり、今回は活動の具体的な内容よりも、災害復興というテーマを正課科目の授業計画にどう組み込んでいったのか、いわゆるカリキュラムデザインに焦点を当てる。あわせて、令和6年能登半島地震の支援に際して実施してきた活動も紹介することで、カリキュラム以外で展開するサービス・ラーニングのあり方についても紹介する。

## 2. ソーシャル・リアクションの実践

災害復興支援は、言わばソーシャル・リアクションの実践である。大仰な言い方だが、文字通り、災害が発生してからしか災害復興支援は始動できない。筆者が阪神・淡路大震災の際に現地に駆けつけるきっかけになったのは、東日本大震災の後に行われた座談会でも確認したように（谷内ら，2012）、立命館大学内での教職員や友人からの呼びかけに応えたためである。

1995年が「ボランティア元年」と呼ばれたことは広く知られているが、立命館大学のように大学内での情報交流が積極的に行われていなくとも、さらには現在のようにSNSがなかった時代であっても、例えばラジオから頻繁にボランティアへの参加が呼びかけられており、それが人づてに広がり、ボランティアの輪が広がっていったことは想像に難くないだろう<sup>4</sup>。

「ボランティア元年」から16年、東日本大震災の際は、文部科学省からの通知がボランティア活動への後押しとなった。3月11日の発災以降、TwitterをはじめとしたSNSでは多彩な情報が行き交っていたものの、大規模・広域・複合型の災害ゆえ、まずは地震と津波による遺体捜索に続き基幹道路等の復旧が進められていった。そして、地域は限定的ではあるものの、公的機関またはNPO等による現地拠点の有する形での被災者支援ボランティアの活動が進められていく中で、文部科学副大臣により4月1日付で「東北地方太平洋沖地震に伴う学生のボランティア活動について」が全国の大学・短期大学・高等専門学校に通知された。この通知はインターネットでも公開されており、実際に立命館大学でも自己の活動に対する授業配慮や単位

付与を求める学生からの相談が、各学部、学生部、サービ斯拉ーニングセンターに寄せられたと、4月19日のサービ斯拉ーニングセンター会議および教学部会議の文書に記されている。

そこで4月25日、大学全体の教育内容を審議する「教学対策会議」（当時）にて「東日本大震災被災地域における本学学生のボランティア活動に対する教学的取り扱いについて」と題したガイドラインが策定された。そこでは文部科学省からの通知内容を踏まえ、「震災関連ボランティアに参加する学生の授業配慮について」は基本的には課外活動に位置づけられることから公欠・授業配慮の対象とはしないこと、「震災関連ボランティアに参加する学生の休学について」は従来と同様基準のもとでの面談等により「積極的事由」による休学の可否を判断すること、とした。ただし、「被災地域でのボランティア活動に対する単位付与、関連科目の開設について」として「これまでと同様、学生による個別のボランティア活動に対する単位付与は行わない」が「今次の大震災に伴う学生のボランティアに対する意識・意欲の高まりや、教育機関としての役割を果たす観点から、今年度後期に震災関連ボランティアをテーマとした科目の開設を検討する」と示した。これにより、第14回で紹介したサービ斯拉ーニング科目「地域活性化ボランティア」において「FUKKO+R～震災×学びプロジェクト」（略称：震災P）が開設されるに至った、という具合である。

「震災P」は科目の新設ではなく、既存科目に対するクラスの増設によって開講に至っている。これは年度途中で検討が始まったために新規科目の開設は困難であること、また当時は2012年度からの新たな教養教育の展開に向けたカリキュラム全般の見直しの中でも科目の精選が主要な論点の一つだったこと、当時の13学部（衣笠キャンパス：6学部、びわこ・くさつキャンパス：7学部）の全学生に対して等しく学習機会を創出する必要があること、これらを考慮した上での策であった。当時の立命館大学は既に前期・後期の2セメスター制が導入されていたものの、受講登録は春の段階で前期・後期とも登録し、秋には後期セメスターの履修予定科目の登録修正を行うという運用であった

め、その修正期間を事実上の登録期間として位置づけて開講準備が進められていった。<sup>5</sup>

このように授業としての開講に際しては、文部科学省の通知へのリアクションとして既存の枠組みを活用することによって枠組みが整えられる中、第14回でも記したとおり、筆者は学校法人立命館の災害復興支援室の設立・運営にも携わりつつ、震災Pの授業担当者として内容面の具体化を図っていった。そして図2のとおり、立命館大学による学生主体の震災救援と復興支援に関する企画調整と推進に参加することを軸として、開講期間中は、京都・滋賀等（被災地以外）での学習活動を中心とするものの、現地との関係構築を経て、受講生の授業に支障の無い範囲で現地活動を行うことも想定内とした。図2では「経験→省察→概念化→実践」という学習過程が2サイクル展開されていることが明示されているが、これは本連載第21回で少し触れたデイヴィッド・コルブによる「体験学習の循環過程」（Peterson & David, 1984）を踏まえることで、サービス・ラーニングやボランティア学習について知識や認識が及ばない場合にも否定的に受け止められないようにするための工夫であった。その上で開講前となる夏期休暇中から現地での災害ボランティア活動への参加を促し、遠隔地での活動経験がキャンパス内や関西圏での活動への手がかりとなるように、課外活動での個々の体験を授業内で言語化していくカリキュラムとして設計した。

### 3. 課外活動と併行する正課科目として「震災P」において授業との積極的な連動を図ることを前提とした課外活動が、第14回でも

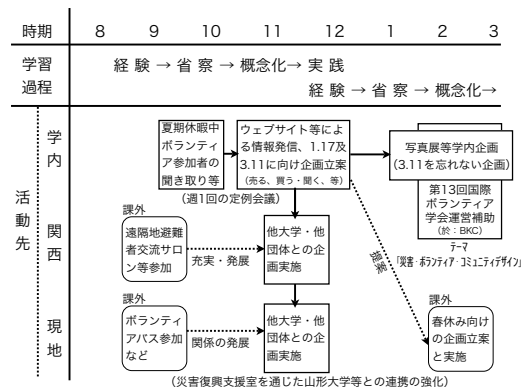


図2：2011年度「震災P」の展開案（筆者作成、2011年7月1日）

触れた「いわてGINGA-NETプロジェクト」であった。これは学生主体で運営されていた岩手県立大学の学生ボランティアセンターが中心になって立ち上げられた実行委員会形式による災害ボランティア活動かつ大学とNPOとのネットワークの機会でもあった。具体的には地震と津波で大きな被害を受けた沿岸部に近い岩手県住田町の五葉築地区公民館・体育館を拠点に、1週間ごとに学生たちが入れ替わりながら、仮設住宅での世代間交流や子どもたちの学び場や遊び場づくりがなされていった。立命館大学は「きょうと学生ボランティアセンター」を前身とするNPO法人ユースビジョンとの調整のもと、9月7日から13日の第7期と9月14日から20日の第8期に参加する機会を得た。報告書によると2011年の夏は第8期まで活動がなされ、146校・1,086人の学生が参加したという<sup>6</sup>。

こうして所属や学年を横断した教養科目で、課外活動との積極的な連動を図り、現場での活動にあたっては所蔵大学も活動地域も越境的に展開したことで、当初の枠組みのもとで、多彩な活動と学習の機会が創出された。毎週木曜5限には衣笠キャンパスにて「コアタイム」と称した部活動のような時間が設けられ、科目担当者である筆者の講義、ドキュメンタリー映像の鑑賞、またゲストによる話題提供などが行われ、知識の獲得と共に学生の自主活動の奨励と促進の機会とした。例えば、10月25日には筆者と共に立命館大学ボランティア情報交流センターの代表を務めた谷内博史・七尾市企画政策部企画経営課地域づくり協働推進室まちづくりコーディネーターを招聘し、阪神・淡路大震災の復興過程との相違点を確認し、翌日10月26日には合宿も実施して現地に行かなくてもでき

る支援の方法について骨格が定められた。具体的な活動としては、立命館学園全体で公募されていたコンテストに応募し、学内にある生協のレジ脇に募金箱を設置してお釣りの寄付を募り、それらを原資としてキャンドルナイトをする企画を提案した他、富士フィルム株式会社の協力を得て宮城県気仙沼市の小学生を対象に現地の今をレンズ付フィルム「写ルンです」で楽しく記録する写真教室を現地で計3回実施すると共に、立命館大学内を含む関西圏の2箇所写真展が開催された。さらに1月17日には阪神・淡路大震災追悼のつどいに有志の学生が参加した他、衣笠キャンパスでの地域防災イベントでの炊き出し担当、国際ボランティア学会の運営補助、春休み期間中に夏の「いわてGINGA-NET」での活動先の再訪、独自の報告会の開催など、文字通り活動は多岐にわたった。

サービス・ラーニングは正課科目として、つまりは授業として取り込まれる以外に、米国では正課併行型 (cocurricular service-learning) としても導入されており、そこでは「確立された学習成果、出席が必須の打ち合わせや課題、単位、成績など」の通常の授業であれば最終的に組み込まれている各種の内容を享受することができないことを踏まえたプログラムの運営が求められるという (Jacoby, 2004, p.123)。このcocurricularという観点は、日本でも徐々に着目されてきており、2020年1月22日に中央教育審議会大学分科会がまとめた「[教学マネジメント指針](#)」では授業以外での学習機会を「正課外活動」と位置づけており、さらに「大学の教育的な意図等に基づいて教職員が主体的に関与する正課外活動をco-curricular activities、それ以外の正課外活動をextra-curricular activities」と注記にて区別している<sup>7</sup>。その点で言えば「震災P」は「いわてGINGA-NET」での活動を踏まえたco-curricularなサービス・ラーニングとしても捉えられるだろう。しかしながら「震災P」はカリキュラムの設計当初から正課外活動である「いわてGINGA-NET」と併行した授業として、言わば「大学の教育的な意図等に基づいて学生が主体的に関与する正課科目」であった。

そのため、「震災P」は正課科目である以上、シラバスが作成され、成績評価方法と到達

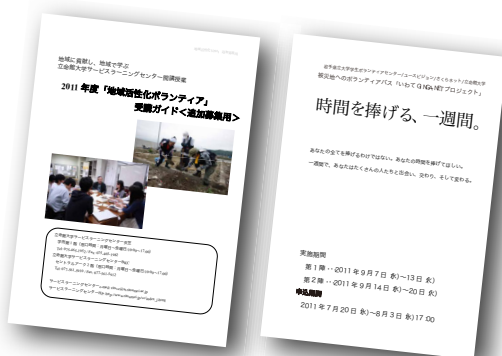


図3：震災Pの受講ガイドと課外プログラムの参加案内

目標も事前に掲げられていた。到達目標は未曾有の災害の後を生きる者として、今後どんな知恵を継承していくか体感的に学ぶ、他大学・団体を含めた多くの実践者の姿に触れ、多様なキャリア形成の意欲が喚起される、物理的な距離の中でも精神的な距離を縮める実践があることを自らの行動を通じて知る、の3点であった。当初の受講生は26名であったが、過度に受講生の自主性・自発性・積極性・継続性を期待したこともあり、相当の負荷を感じて受講を辞退する学生、またいわゆるドロップアウトをする学生を生み出してしまったことは今もなお反省している点である。その一方で、通常はガイダンスの実施や保険加入の徹底に加えて、学生の活動先となる団体と立命館大学とのあいだでは覚書を締結してリスクマネジメントを徹底しているものの、「震災P」では立命館大学サービスラーニングセンター内での直接的なコーディネートのもとでの取り組みとして位置づけたため、契約者甲・乙とも同一法人内の組織となることから省略して実施したことで、正課外活動との連動を重視したプロジェクトや、学内を活動先としたサービス・ラーニングの充実が図られることへの契機となったことは、現在にも続く副次的な効果として位置づけられる。

#### 4. 脱・パッケージ型での支援の模索を

今回、改めて2011年当時を振り返り、「ソーシャル・リアクション」という観点から、東日本大震災という未曾有の災害に対してサービスラーニングセンターではどのように応えたかを整理してみた。先にドロップアウトした学生を複数人出してしまったことの後悔を記したのは、受講生の選考に際して、受講当初は現地のために何らかの貢献をしたいという思いを確かに抱いていたためである。ある種の試行錯誤の繰り返しの中で受講生の自主性・自発性・積極性・継続性で成立した「震災P」は、第14回でも記したとおり、翌年度の2012年度からは神戸と新潟での活動も織り交ぜることで、被災地間のリレーを通じて復興への洞察力を高めることを重視し、未だ被災経験のない「未災者」も過去の災害を追体験することで未来の災害時に被害が減るように「減災×学びプロジェクト

(略称：減災P)」として拡充が図られた。残念ながらコロナ禍を経て2019年度をもって「減災P」は大幅に形を変え、2021年度からは「平和人権フィールドスタディ」という科目において「減災まちづくりプログラム」として新生「減災P」が開講されている。

「ボランティア元年」から30年を数える今、東日本大震災の災害ボランティアに駆けつけた学生たちの調査結果から図4に示した「災害ボランティアでの振る舞い」に着目してみたい。これは朝日新聞社の田村隆昭記者らによって取り組まれた「東日本大震災 大学生ボランティア意識調査」で、筆者が大阪大学の渥美公秀教授を通じて協力依頼を受けたものである。101大学から445人、立命館大学からは47人が回答した結果と分析は2012年1月13日の紙面にて公表された。分析では前掲の渥美教授のコメントが紹介されており、寝泊まりの場所や食事が「パッケージ」となっている「ボランティアバス」が高く評価されていることを受け、支援の「形」が定着と整理しつつ、参加者の「根底にある価値観に違い」がある場合には現場に「効率性」と「個別性」の二極化が顕在化することが指摘されている。ここで災害ボランティア活動は発災後に開始されることを鑑みれば、何をどう始め、続けていくか、その動態を探る鍵がボランティアの現場での振る舞いを巡る2つの価値観の違いから見てとることができる。

既に国や自治体では「事前復興」や「復興事前準備」といった名称で取り組まれているように、平時の防災活動を積み重ねることや、過去の災害救援の経験から教訓を紡ぎ出すことは、将来の災害への備えになる。こうした事前復興計画の準備について、室崎（2008）は「災害

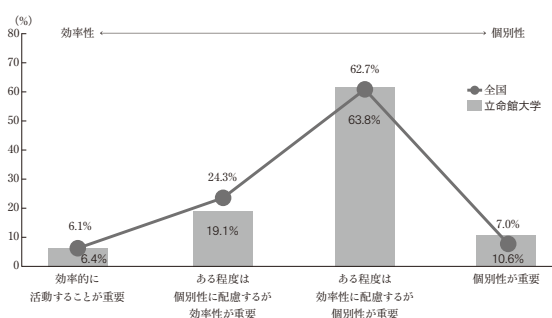


図4：災害ボランティアでの振る舞いについて  
 (朝日新聞による調査、全国N=445、立命館大学N=47)  
 2012年4月立命館土曜講座講演録 (p.19)より転載

を転機として社会変革を目指す」という意味で「災害転機論」と整理した上で、それは決して「災害待機論あるいは災害待望論」ではなく、大規模災害の発生時に避けることの出来ない「多くの犠牲に対する思いやり」が欠かせない、と指摘する。つまり、未来の災害に備える上では発災時には多くの犠牲が生じることに思いを馳せることが欠かせない<sup>8</sup>。形を変えつつも「震災P」の後継のカリキュラム「減災P」を継続している筆者の思いにも通じる点である。

令和6年能登半島地震の支援が「進んでいない」は、過度に効率性が重視された結果ではなからうか。ならば個別性の重視で徹底して非効率な方向に舵取りすることがソーシャル・リアクションとして求められるだろう。それは即戦力が重視される社会に抗う挑戦でもある。次回は京都の三大祭の一つである「時代祭」でのサービス・ラーニングの事例から、日常と非日常をつなぐ学びと成長の場づくりの実践知に迫ることとする。(gucci@fc.ritsumei.ac.jp)

#### 【引用文献】

- Jacoby, B. 2014 *Service-Learning Essentials: Questions, Answers, and Lessons Learned*. Jossey-Bass
- Peterson, K. & David, K. 1984. *Experiential Learning: Experience as the Source of Learning and development*. Prentice-Hall. (中野真由美(訳) 2018 *最強の経験学習*. 辰巳出版.)
- 中林一樹.1999. *都市の地震災害に対する事前復興計画の考察：東京都の震災復興戦略と事前準備の考え方を事例に*. 総合都市研究,68 141-164.
- 栗花落光. 1995. ボランティア情報に大きな反響 (FM802) . 日本民間放送連盟音声放送委員会 (編) *阪神大震災とラジオ：震災放送の検証と提言*. 日本民間放送連盟音声放送委員会 28-31
- 谷内博史・高見良一・赤澤清孝・山口洋典・松井かおり・甲賀光秀・齋藤重. 2012. *座談会「阪神・淡路大震災」と学生ボランティア活動*. 立命館百年史紀要 20, 141-209.
- 山口洋典・渥美公秀・関嘉寛. 2019. *メタファーを通じた災害復興支援における越境的対話の促進：新潟県小千谷市塩谷集落・復興10年のアクションリサーチから*. 質的心理学研究 18, 124-142

#### 【注】

- <sup>1</sup> これらの記録は内閣府の防災情報ページ内にある「阪神・淡路大震災教訓情報資料集震災後の主な動き（年表）」によった。  
[https://www.bousai.go.jp/kyoiku/kyokun/hanshin\\_awaji/nenpyo/index.html](https://www.bousai.go.jp/kyoiku/kyokun/hanshin_awaji/nenpyo/index.html)
- <sup>2</sup> 引用としては長文となるが、[公開されている式辞](#)の文章から、以下の部分を記して、復興への気持ちを寄せることとした。「被災地のひとたちと、被災の全貌を知ることができずに遠くから案じるだけのわたしたちのあいだには、どうしようもない隔たりがあります。被災の現場に行き、被災者の方々にインタビューする放送記者の人たちと被災者のあいだには、おそらくもっと大きな隔たりがあるかもしれません。それはちょうど、介護施設でスタッフが食事のお世話をしながら「おいしい？」と訊ねることと、ユニットケアの施設でスタッフが入所者の人たちと同じ食べ物をともに口にしながら「おいしいね」と囁きあうこととのあいだの落差のようなものだと思うのです。」
- <sup>3</sup> そうしたグループ・ダイナミックスの観点での令和6年能登半島地震に対するボランティアについての議論に「『災害ボランティアの自由』至上主義者」と批判する[宮下祥子氏の議論](#)がある。本稿執筆時点では先行公開中のため、後日取り扱う。
- <sup>4</sup> ボランティア情報を積極的に呼びかけていたラジオ局として、若者向けの番組編成を意識したFM802が挙げられる。当時の様子について、栗花落（1995）による記録の他、UNN関西学生報道連盟による「僕たちの阪神大震災ノート」と題した「震災写真〔調べ学習〕プロジェクト」による2009年4月29日の取材記事 (<http://1995kobe.d.dooo.jp/photo08.html>) にて、当時は立命館大学の学内新聞「NEWS立命」でカメラマン兼記者をしていた白石辰士さんによる証言「FM802でボランティアなどの呼びかけをしていることなどを報じました」が記されている。
- <sup>5</sup> 一連の開講準備は当時、サービスラーニングセンターの事務局を担当していた奈良英久さん、富田沙樹さん、井上泰夫さんの丁寧な対応により遺漏なく進められた。また、運営経費は共通教育課の真田睦浩課長（当時）のとりまとめで「東日本大震災復興のための『私たちの提案』—教職員の取り組み(第1次募集)」により1,538,000円の支援を得た。記して謝意を表したい。
- <sup>6</sup> 報告書は実行委員会の構成団体の1つであるユースビジョンにより提供されている。既にユースビジョンは解散されているが、本稿執筆時点では <https://blog.canpan.info/youthvisionweb/archive/299> よりPDFにアクセス可能である。
- <sup>7</sup> この「教学マネジメント」のとりまとめに際し、2019年11月21日の中央教育審議会大学分科会教学マネジメント特別委員会(第11回)の資料では「大学が一定の教育的な意図を持って取り組む活動」を指して「準正課活動」という表記もみられる。
- <sup>8</sup> 室崎（2008）の全文は、著者自身のウェブサイトに転載され、閲覧できる。<http://www.murosaki.jp/extracts8.html> その中で、事前復興計画は東京都が率先して策定している点に触れ、「災害転機論」は「災害待望論」ではないと注意を向ける。この議論の後、東日本大震災が発生したことは言うまでもない。なお、東京都の事前復興は中林（1999）が参考になる。





**〔28〕 寺田接骨院 寺田弘志**

**「歯科医院に心理学も接骨院も入ってた」**

JR茨木駅近くの接骨院が、私の職場です。

毎日、患者さんから、いろんな痛みの訴えがあります。

いや、たまに、訴えないということもあります。

「今日は、どんな具合ですか？」

「大丈夫です。あまり痛いところないです」

「えっ、そうなんですか？」

「予約したときは痛かったのですが、今は痛みがありません」

「でもせっかく来ていただいたので、触ってみて痛いところがあれば、施術していきますね」

「はい、お願いします・・・あっ、痛い！・・・そこは大丈夫・・・あっ、そっちも痛い！・・・」

「やっぱり、触ってみると痛いところがありますね」

「あっ、そこも痛い！・・・そこは平気です・・・あっ、いたたた・・・」

痛いところを確認した後、縮みすぎたところを伸ばし、伸びすぎたところを縮めると、触って痛いところはなくなりました。

「なんだかスッキリしました。いつもスッキリして帰るんですけど、またしばらくしたら、必ず痛みが出てくるんです」

「痛みがとりきれず、申し訳ありません」

「いえいえ。助かっています。でね、予約をして先生のところに来る日になると、なぜか痛くないんです」

「あっ、他にもそういう患者さんがいらっしゃいます」

「安心するんですかね」

「せっかく来たのに、痛くなくなって残念だって」

「でも、触ってもらったら必ずあちこちが痛いんですよ」

「圧痛がいちばん敏感に現れますけど、触らなければ、本人に自覚されないことが多いんです。じっとしていても痛いというときには、触って痛いところがいっぱいあったりします」

このように、接骨院に来ると痛みが消えるとか、どう痛いかわからなくなる、痛みがうまく説明できないといった患者さんがいらっしゃいます。

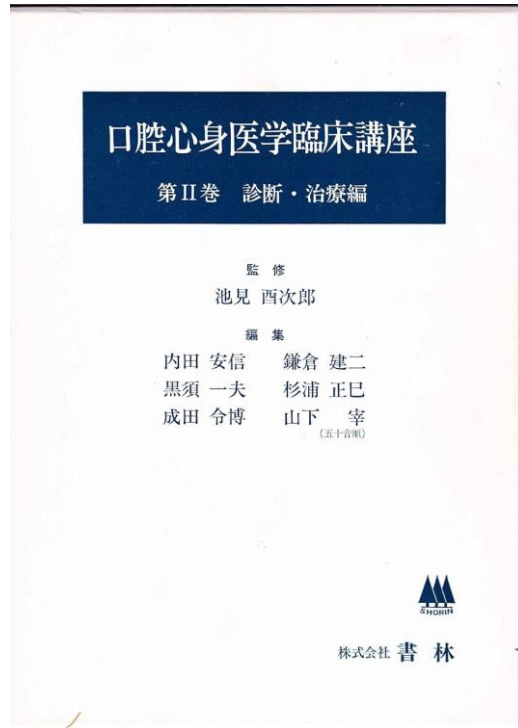
通院の前になると、「何かあってもなんとかしてもらえらわと安心すると、つい無理してしまいます」とおっしゃる患者さんもいます。

おそらく心理的な要因が、痛みの閾値を上げたり下げたりしているのでしょう。

前の号「常識を疑え」で、歯科医院に心理学的なアプローチを取り入れられていた山下宰先生のことを紹介しました。

今回は、常識とは違う方向に伸ばしたり縮めたりする「パラドキシカル・ストレッチング」と「パラドキシカル・コントラクティング」について書く予定でしたが、それはまた次回にして、山下宰先生のお話をもう少し補足します。

立命館大学の齋藤稔正先生の ASC 研究会で何度もお目にかかった歯科医師の故・山下宰先生は「歯科領域における心因性疼痛症」という稿に次のような話を書かれています。  
(池見西次郎監修・山下宰他編集『口腔心身医学臨床講座 第Ⅱ巻 診断・治療編』株式会社書林 1989)



「不安が心身の緊張と痛みを生むような例は極めて多い。筆者の体験だが、交通事故を起こしてしまった大工見習、裁判所へ出頭を命じられた家主、税務署の査察をうけそうな商店主など、いずれも従来の身体医学的な理解では不可解な歯痛を訴えている。もっと日常的な例として、大抵の臨床歯科医は連休日やその前日に限って歯痛を訴える急患に悩まされた経験があるだろう。明日は休日で診て貰えないかもしれない、と恐れるだけでも緊張と痛みが生じる」

冒頭に書いた「予約をして先生のところにくる日になると、なぜか痛くない」という寺田接骨院の患者さんの話も、山下先生の話から考えると、そのメカニズムが推理できます。

接骨院で施術を受けると楽になるけれど、徐々に効果が薄れてきて、体が持つかないと恐れる。すると緊張と痛みが生じる。

痛みを感じるので予約を入れるが、予約日の前日くらいになると安心できて緊張が解け、当日には痛みが消える。

もともと何らかの身体的な問題があるところに、心理的な影響が加わって、緊張したり、痛みを感じやすくなったりする—それは歯科医院や接骨院も同じなのでしょう。

山下先生は、次のような事例も紹介されています。

「電気器具商、60歳、男性。・・・この患者はここ数年にわたり、ほぼ3カ月毎に来院しているが、その時期はだいたい手形期日の切迫したころに当っており、同部位の歯肉膿瘍の再発に悩まされ、恒例化している。その期間を乗り越えると炎症は消退し、動揺は治まり、機能的な不自由は感じない。・・・一時は抜歯を考えたことあったが、・・・心身のバランスをとるためには完治させないほうがよいと判断したため、抜歯を思いとどまり、病気と共存することを本人も納得している。このケース、狭義の心身症と考えることもできるが、それよりも内面的な "あせり" の発生とその身体化が、条件反射となって癖化していることに注意したい」

「自動車セールス、30歳、男性。歯および歯肉の知覚過敏。・・・冷温刺激による激痛および咬合痛。口腔粘膜全域にわずかの発赤と熱感。| 5 ~ | 7支台は無髓歯。X-rayによる綿密な観察によっても、とくに異常は認められない。・・・局部麻酔処置および笑気鎮静はともに奏功せず、おおげさに泣き声をあげるので、精神安定剤を含む鎮痛剤の連続投与によって、当面をしのぐことにした。・・・本人の愁訴は、多面的、情緒的なところが目立つ。訴えの中から患者が仕事の面でゆき詰まっていることが窺われ、さらにそれと符合するように後頸部、肩腕部の凝り、便秘、腰痛、不整脈などの瘀血（おけつ）症状（漢方用語＝局所的な血行障害）が見られた。上半身の体操を主とする療養指導や漢方の投薬をしばらく続けたが、本人がこちらの指示にうわの空のせいか、あまり効果はみられない。休養の診断証明をほしがること、その他の言動からして、彼が事

態から逃れようとしていることが推測された。・・・カウンセリングの結果、・・・上記の運動療法に加え、自律訓練法を教示するとともに、自信回復の暗示を加えるなど、心療的処置を中心に指導した結果、ほどなく回復することができた」

事例から山下先生が、西洋医学的な歯科治療や鎮痛処置を施すだけでなく、漢方も処方し、体操（おそらく緊張を和らげるため）も指導し、カウンセリング、自律訓練法、暗示（おそらく催眠を用いて）などの心理療法的なアプローチをされていたということがわかります。

まさに「歯科医院に心理学を入れてみた」なのです。

それだけではありません。

先生は歯痛に関する問診をするだけでなく、他の疼痛症の既往や、神経症、心身症の既往、自律神経失調傾向、過敏性体質とアレルギー、性格なども聴取されていました。もちろん局所の精密検査をされるのは言うまでもありません。

また、必要に応じて、心理テスト、血液検査、電気生理学的検査なども行なわれていました。

さらに続きます。

「筆者は、通常、漢方診断にならい脈診、舌診を実施するように心がけている。そのほか背後から、頸部（とくに完骨、風池などのツボ）、肩腕部などの凝り、ときには頭頂部、腰部、膝部などの圧痛の存在を確かめたり、腹診として胸脇苦満、季肋部圧痛、左右腹直筋下部の圧痛、腹鳴などをストレス性症候として診断の資としている。愁訴に関連する局部に触れ、撫ぜ、押すなどのスキンシップを伴う診断行為は、同時にリラックスによる治療効果をもたらすものとして推奨される」

これを読んだときはたまげました。

「歯科医院に心理学も東洋医学も接骨院も入ってた！」

前の号で書きましたが、接骨院を開業する前に、こんな立派な先生に向かって「体も心もみられるようになりたい」なんてほざいたことがありました。

私は開業したら、自律訓練や漸進的筋弛緩法、催眠療法などを患者さんに提供してみたいと考えていました。

接骨院で心理療法もやるなんて、いいアイデアだと悦に入っていました。が、山下先生こそ心身両面を診る先駆者でした。

しかも私は、心理学的な考えを施術に取り入れてはいるものの、いまだに心理療法的なメニューを提供できていません。

「足元にも及ばない」「釈迦に説法」とはまさに私のことで、お恥ずかしいかぎりです。

山下先生は、歯科領域における心身医学的な配慮が必要な疼痛症状を、2つに分類されています。

(1) 局所に器質的な異常があるために発生した痛みであるが・・・二次的に心因が影響して、その症状が増強されたり、固着したりするもの。

(2) 器質的な異常がみられないのに、精神的な要因や情緒的なストレスからきた精神生理的反応が、歯科領域に投影されたことからくる痛みであって、さらにその経過に性格的なものの影響が加わったもの(ヒステリー性歯痛など)。

そして、痛みのコントロールを主訴として来院した100例を吟味して、そのうち21例が特別な心身医学的な配慮が必要だった。その他は注意の喚起、暗示的取扱い、またはツボ刺激療法、向精神薬の投与くらいですますことが多く、また恐ろしくて手をつけないでいるケースもあると書かれています。

他にも先生の稿には、心因性痛を疑うポイントや、痛みを起こす患者心理（退行、贖罪、自己罰、喪失、離別、寂しさ、自我同一性の危機、倒錯的な快感情、同一化、同一視、逃避、幻覚、疾病利得）、心因性痛のタイプの鑑別、気温や季節、バイオリズム、地域、時代、文化の影響の考慮など、興味深い考察がたくさんあります。

関心のある方はぜひご一読ください。

少し長くなりますが、山下先生の締めくくりの文章を引用させていただきます。先生の優しいお人柄が伝わってきて、「患者さんの心を忘れないようにしよう」「身体因を探ることに全力をつくそう」と思えました。

「臨床の間では歯痛を始め、痛みを主訴とする病態は日常的に見られる。それらにはふつう、炎症や潰瘍など、身体の実質的な障害の形で現れるために、われわれはついその症状に目を奪われて、それを病んでいる彼の心のことを忘れがちになる。

いつでも誰でもというわけではないが、人が痛みを訴えるのは、実は彼の心の中にある耐え切れない憤満、くやしさを、寂しさなどを他人（医師を含めて）に訴えようとしていることがわかるだろうか？

日頃から患者の言動を、心身医学的に注意しながら観察する習慣をつけていると、彼らの現在の症状に、精神的な要素がかかわっているだろう……ということを見分けるのは、そう難しいことではない。それよりも医師は、未知の、あるいは隠された身体因を探ることに全力をつくすべきかもしれない。

しかしそれとは反対に、明らかに心理的な影響が強いと思われるようなケースに、行きすぎた精神主義を警戒するあまり、苦悩する患者に長時間の身体的な検査やペーパーテストを重ねて、いたずらに介護の機会を遅らすことがないようにしたい。

もともと、痛みというものはストレスに対する心身両面にわたる反応なのであるから、痛みを訴える患者さんに対しては、心因関与のいかんにかかわらず、いつでも心身医

学的な対応をするべきものであって、どちらを優先させるか？ などを、悩むことではない」



# 現代社会を『関係性』という観点から考える

## ⑳「選べない日々」を過ごす人々への「まなざし」

更生保護官署職員 三浦恵子（社会福祉士・精神保健福祉士）

### 1 はじめに

連載 14 では『「開く」ことと「閉じる」こと』と題して私見を述べさせていただき、それに続くかたちで、連載 15 では『つながりが支えるところ』と題し、我意を通し続けた結果「閉じる」生活となり社会的孤立に至り心身状態の悪化を招いた高齢者（単身生活者）の事例を紹介しました。連載 16 では、連載 14、15 の流れを引き継ぐかたちで、『「見える」ことと「見えない」こと』という切り口で、現代社会を関係性という観点から見直してみました。それを受けるかたちで連載 17 では、これまでの連載を踏まえ、「地域社会」との「関わり方」を考えると題して、まさに「地域社会」との「関わり方」を私なりに考察してみました。

つまり、本連載では「地域社会」で生きるということについて考えてきたともいえます。まさに現代社会においては、（望まない）「孤立」「孤独」が問題となっています。支援機関とつながらないまま命を落としてしまうような事態になったり、拡大自殺的な事件が発生する例もあまたあります。家族介護が行き詰ってしまった上での介護殺人、子育てに悩んだ末の子殺しなどがその例であると言えます。こうした点について連載 19 では「自分は誰かとつながっている」という感覚があるかということと題して問題提起をさせていただき、続く連載 19 回では「自分は誰かとつながっている」という感覚を持つために私が必要だと痛感している『関係性』をメンテナンスをする～「当たり前」と思うことの陥穽について、連載 20 では、『関係性』をメンテナンスをする～「当たり前」と思うことの陥穽について、それぞれコロナ禍の中を生きていくうえでの関係性について私見を述べさせていただき、連載 21 では、Society から Home へ矮小化していく社会について私見を述べさせていただきました。

本連載も5年を超え、コロナ禍はじめ連載開始時と社会情勢は大きく変化しています。私自身も専門性の殻に閉じこもることなく、業務上・業務外での連携において学んだことや様々な関わりの中で学びまた考えさせられたことを連載原稿に落とし込んでいきたいと考えています。

連載 23 では「自助、共助、公助」の他に、制度が既存のものとして含んでいる「家族助」について、地域包括ケアシステムの在り方について私見を述べさせていただきました。連載 24 ではすこし角度を変え、自分が「知っている」だけの世界で生きることの危うさと題し、私自身が実際に直面したり間接的に関わったことをベースに、「知っている」ことだけの生活で生きるということに含まれる一種の「危うさ」、「知らない」ことが「意識しない排他性」につながるなどについて、引き続き連載 25 では「知らないことが不安や排除につながる」ということというテーマでそれぞれ私見を述べさせていただきました。連載 26 では、大学生に刑事政策と司法あるいは更生保護について

話をする機会に感じたことをベースに「今の社会」に対する若者の不安に、大人としてどう向き合うのか」というテーマで私見を述べさせていただき、続く連載 27 では、私が昨今感じている「理想とされる家族は今や『描かれるもの』の中にあるものか」ということにつき、課題提起の意味合いをこめ私見を述べさせていただいた。その後の連載 28（連載 29 と記載していますが 28 に修正します）では「自分には支えてくれる人がいる」「まだできることがある」と誰もが感じることができる社会へと題して、「愛と仕事」（フロイト）及び「居場所と出番」（犯罪対策閣僚会議）に言及しました。

今回は、「選べない日々」を過ごす人々への「まなざし」と題して、様々な境遇のただなかにある人を「社会がどう見るか」という点について、私見を述べさせていただきたいと思います。紹介するエピソードについては、個人が特定されないよう、主旨に影響がない程度の改変を加えたり、複数の事例をあわせたものであることを申し添えます。

連載原稿として一定の一貫性は保持したいと考えており、連載 14 以降では、これまでの連載をまとめる短い文章を記載していることを御了解ください。

## 2 「選べない日々」

これは、対人援助学マガジンの読者の方々には御馴染みであろう「家族の練習問題」（ホンブロック）の一卷目収録の、団先生の名作のタイトルです。弟妹たちが相続をする代わりに郷里を出て自由な人生を生きるなか、祖先伝来の家と土地、そして両親を守るため地元に残り、市役所に勤務し独身のまま過ごし両親を介護することになった長男の物語です。

様々な思いを飲み込んで黙々と働く長男が、母いて続いて父が倒れた時、「自分のことは自分でできるように」と父に厳しく接したことが結果的に「虐待」とケアマネからも弟妹からも責められてしまう（もちろん私も介護場面の虐待は防ぐべきことと考えています）というものです。初めて拝読した際、やりきれない思いがするとともに「わかってもらえることとの少ない、選べなかった日々を過ごす人もたくさんあるに違いない」「そういう人たちがみんな今日も黙って働いている」という最後の結びに、団先生の「まなざし」の暖かさを感じました。

「長男だから」「長女だから」という、まさに「選べない」きょうだい間の生まれ順ゆえに役割を課されたり、「だって親なんだからあたりまえ」という道徳観を押し付けられたりたり、あるいは「偉いね」という一見「誉める」ような言葉でその人の人生を縛ってしまうということは、団先生がこの作品を初めて世に出されてから随分時代を経ても、いまだこの現代社会には存在すると私は実感しています。

昨今になってようやく「ヤングケアラー」という言葉が人口に膾炙しつつあり、その支援策も打ち出されるようになりました。それでもなお、「そうした立場からどうして逃げないのか」というトーンでの批判がなされることもままあると思います。「かわいそう」という言葉も、批判に比べればまだ「いい人」が発するもののように一見感じられるかもしれませんが、これもまた、具体的な支援なくただ同情されたり憐れまれることが人の自尊心を傷つけるものであるという想像力に欠けたものだと思っております。

現代社会ではまだ自己責任論が根強く残っている一面があり、介護その他「選べない日々」「選べない状況」にぎりぎりの状態で踏みとどまっている人を、「自分で選んだ立場だろう」と平然と突き放す冷たさもあると思っております。

令和元年10月、「面倒を見てもらったんだから当然だ」という理由で、実親や親戚から祖母の介護を一身に背負わされた女性が、仕事（くしくも彼女も保育士という対人援助職でした）と介護の両立に疲れ果てた結果、祖母を殺めてしまう事件が発生しました（注1）。社会人になって間もない若い女性が睡眠時間をはじめ心身を削り周囲の理解のないなかで介護を続けた結果発生したこの事例は、殺人という結果の重大性だけ見れば非難されるものかもしれませんが。しかし「大切な人」であるのであれば、そこに至るまでなぜ親族が関わらなかったのかと感じた人も少なくなかったのではないのでしょうか。この女性は、実親や親族から幼少時養育を放棄されただけではなく、判決後は「厳罰を求める」とまで言われ、その後の支援もなされなかったことにより、更なる外傷体験を重ねたのではないかと私は考えます。

注1：R1.10 神戸市須磨区で発生した事件。R2.9.18の神戸地裁の裁判員裁判では、被告である女性に懲役3年執行猶予5年（求刑懲役4年）を言い渡された。被告は犯行前夜自殺未遂を起こしており、精神鑑定をした医師は、被告は犯行当時はストレスによる適応障害だったと述べている。神戸地裁裁判長はR2.9.18、「当時21歳で社会経験に乏しかったことなどに照らせば、被告人が介護負担軽減策をとることは実際上困難だったと考えられる」と指摘している（神戸新聞等の報道による）。

私自身もある時、同胞やその配偶者が早々と逃げ出してしまった困難な家族介護に踏みどまっている唯一の子ども世代に対して、逃げ出した同胞の一人が「俺は早々と逃げたのにお前は逃げ遅れた」「お前は昔から要領が悪い」という言葉を浴びせる場面に居合わせたことがあります。「言った方」は一見「要領の良さ」を誇るような態度をとりつつも、その反面で「後ろめたさ」や「自分が親不幸だと非難されるのではないか」という一種の「虚勢」や「怯え」が強く感じられました。

親族の懇談の場は一瞬静まり返りましたが、その直後、怒りを抑えている「言われた方」を宥めるようにしていた方の配偶者が、「今の御発言は、御自身が早々に逃げ出したことを誇らしく思っておられることを表明される趣旨だと理解いたしました。しかし、そうした御自身の主張をこうした親族が集まる場でなさることで、あなた様は一体誰に何を認めてほしいのでしょうか」「御自身の主張を容易に受け入れて下さるであろう同じ価値観の御友人同士の酒席の場などで話になることはままあることでしょうし、当方もそこまで関知はいたしません」「しかしここは御親族の集まる場です。御自身の後ろめたさを、なすべきことをしている者への侮辱で埋めようとなさる行為は、私の家族を貶めるものでもあり、また、この国の介護が依然として家族介護に大きく依拠している現状から見ても、到底看過できません」「あなた様の御発言がエビデンスに基づくものであれば私も拝聴いたします。ただしあらゆるエビデンスを持ってこの場で反論させていただきます。その御覚悟をもって持論を論理的に御呈示ください」と発言されました。

終始冷静で理路整然とした口調でしたが、感情で発せられたものではなく、実務と研究の双方をなさっている方ならではの迫力のあるものでした。一瞬の静寂を置いて、年長の親族の方々から「お前、逃げ出したことがそれほど誇らしいか」「この場で一体何を自慢したいんや」「やることやってないもんが偉そうにいうな」などの指摘が続き、「言った方」はその後親族の場に出られることはなくなったのでした。

介護に踏みとどまっている側の子ども世代は、そのことを声高に喧伝されるわけではなく、まさに「選べない日々」を綱渡りで生きておられるような状況でした。しかしこ

の一件以来、これまで以上に気遣いや励ましが年長の親族からなされるようになったことにより、「選べない日々」を生きている状況そのものは変わらなくても、「孤立していないし支えられている」という心強さをより感じられるようになったことを、この一件の後に知りました。

誤解のないように申し添えますが、これは「選べない日々」を送る人が「理解と支えがあればなんとかなります」といった、小奇麗なエピソードではありません（そう理解されれば、介護の社会化も画餅となってしまう、介護家族は無限のやりがい搾取に陥るリスクがあってしまいます）。

いふなればもっと深い部分、直近の連載でも述べさせていただいた、「自分には支えてくれる人がある」と気付くこと、更には、この社会は「選べない日々」を生きる人々を見過ごしにしない社会であるという、まさに自らの生きる社会への信頼（この場合は、国レベルの社会保障といった広いものではなく、自身が身近に感じる地域社会や親族レベルでの社会）を確認できることであったのではないかと考えています。

### 3 「選べない日々」を生きる人々への「まなざし」

私自身、更生保護官署職員として業務を行う傍らで、依存症家族支援や社会的養護などのボランティア活動の端に関わらせていただきました。そうしたなかで実感するのは、世の中には無限の選択肢や可能性があるように見えながらも、「選べない日々」を生きる人々が実は多く存在するということです。「無限の選択肢や可能性があるように見える社会」ということが実は難しいところなのです。

実際にはそうした選択肢や可能性をつかみ取るためには、それを得るための親世代から子世代への教育への「投資」（かつては教育費と呼ばれているものでしたが、昨今の状況を見ると、そうした用語を用いることもやむなしと考えています。塾などの特別講義を依頼することなどを「課金」と称するといったことも聞いています）や環境（様々な情報へのアクセスビリティ、良い大人との出会いなど）が重要であり、そうしたものを得る機会が少ないままで、幼少期を過ごし社会に出なければならない人がまだまだ多いという現実があります。学習塾が母体となって運営する「学童保育のような場」では充実したメニューが用意され、通常の学童保育よりも遅い時間まで子どもを預かってくれますが、もちろん利用するには高額な費用がかかります。「そうした場に通わせるか、塾などに任せるか。子どもたちの放課後は、お金を出して買うようなものになっているのが現状なんですよ」という話を子育て世代の同僚からも聞きました。

そして、現代社会にいまだ根強い自己責任論を覆すことができない状況で生まれた言葉が「●●ガチャ」（例：親ガチャ）であると私は感じます。人生をくじ引きになぞらえるようなこの言葉を、自虐的だと感じる方もおられるかもしれませんが、品がないと眉を顰めるきもあろうかと思えます。ただ、ワーディングのレベルで留まる批評はあまりにも表層的ではないでしょうか。この「親ガチャ」という言葉には、自虐よりも社会への諦観を私は強く感じています。それは「選べない日々」を生きる人々への「まなざし」が生んだものではないかと考えています。

往々にして声をあげにくい貧困問題に焦点を当てたドラマ「サイレント・プア」（大阪府豊中市社会福祉協議会のコミュニティソーシャルワーカー勝部麗子氏の取組がベースになったもの）が放映されたのは、社会福祉協議会 100 年の節目の年である平成 26 年でした。平成 23 年 3 月に発生した東日本大震災以後「絆」や「つながろう」という

言葉が世に溢れた余韻がまだ残っている時期の放映でもあり、相応の反響があったものと記憶しています。私自身は豊中市社会福祉協議会が編纂している「セーフティ・ネット」を愛読していたこともあり、1つ1つのエピソードをそのなかから拾い上げなら鑑賞していました。

しかしその後、新幹線内での放火や殺人事件、著名なアニメーション会社やクリニックでの放火事件が続き、その被害が甚大であったがゆえに、その背景にある社会課題ではなく個人の問題性に対して「まなざし」がより向きやすくなったように感じました。

そして令和2年に襲ったコロナ禍では、「つながり」「集い」の場が自粛されるだけではなく、子どもたちの義務教育の場、大人たちの生計を維持する就労の場にも大きな打撃を与えました。新型コロナウイルス感染症の恐ろしさは、生命に対する危険だけではなく、「誰が自分に感染させたか」という犯人捜しや排除に容易に転ずることにあると考えています。医療従事者や介護その他でやむをえず帰省をされた県外の方への差別に関する報道も少なくありませんでした。私自身、県を跨いで親族の介護等をしなければならない時期であり、1回1回感染していないか検査を受けながら、身が縮むような思いで介護帰省を繰り返していました。一方で、子ども食堂等を運営する団体や生活困窮者の団体のなかには、パントリーや密にならない工夫がなされた食料配布などが行われるなどして、ぎりぎりのセーフティネットが維持されていました。私自身は地域外であるためそこに入ることはできず、金銭的な支援に留まりましたが、まずリクエストされたのが「非接触型体温計」であったことを今でも忘れられません。もちろん職場でも整備が必要とされた物品でしたが、最初に耳にした時、脳内で漢字変換できませんでした。「非接触型」の「体温計」に馴染みがあるのは、まさに今「子育て世代」の職員の方でした。

そして今、コロナが五類となって1年、外国からの観光客数などは活況を取り戻しているところもある反面、コロナ禍の際に受けたダメージから皆が回復したわけではありません。物価の急激な上昇で、炊き出しの列に並ぶ人の急増が報じられることも珍しくありません。

平成期に人々のつながりの質を変えたのが「携帯電話の登場」であるとするならば、令和期のそれは「コロナ禍」であるといっても過言ではないと考えるのは私だけではないでしょう。

バブルがはじけ景気が悪化しても、伝統的な「家族助」（家族相互の支え合い）によってなんとか成り立っていた（と思われていた）社会の実相が実は脆いものであったこと、根強い恥の意識から自らの貧困を告白できなかった人々がぎりぎりの状況で支援を求めることによってその存在が可視化され、実は「貧困」は身近な社会課題であったこと、人と人とのつながりは自然に醸成されるのではなく何らかの仕掛け・声掛けが必要であるということに、「気付かない」「気づいているけれども見ないふりをする」ことができなくなったということでもあります。

大規模なインフラ、物価、社会保障といった「大きなもの」を変えていくことはすぐにはできません。ただ、「誰かがなんとかしてくれる」という傍観こそが「困っている人」を追い詰めていくことで起きてきた悲劇を繰り返さないためには、私たち一人一人の意識を変えていくことからできるのではないかと改めて考えています。

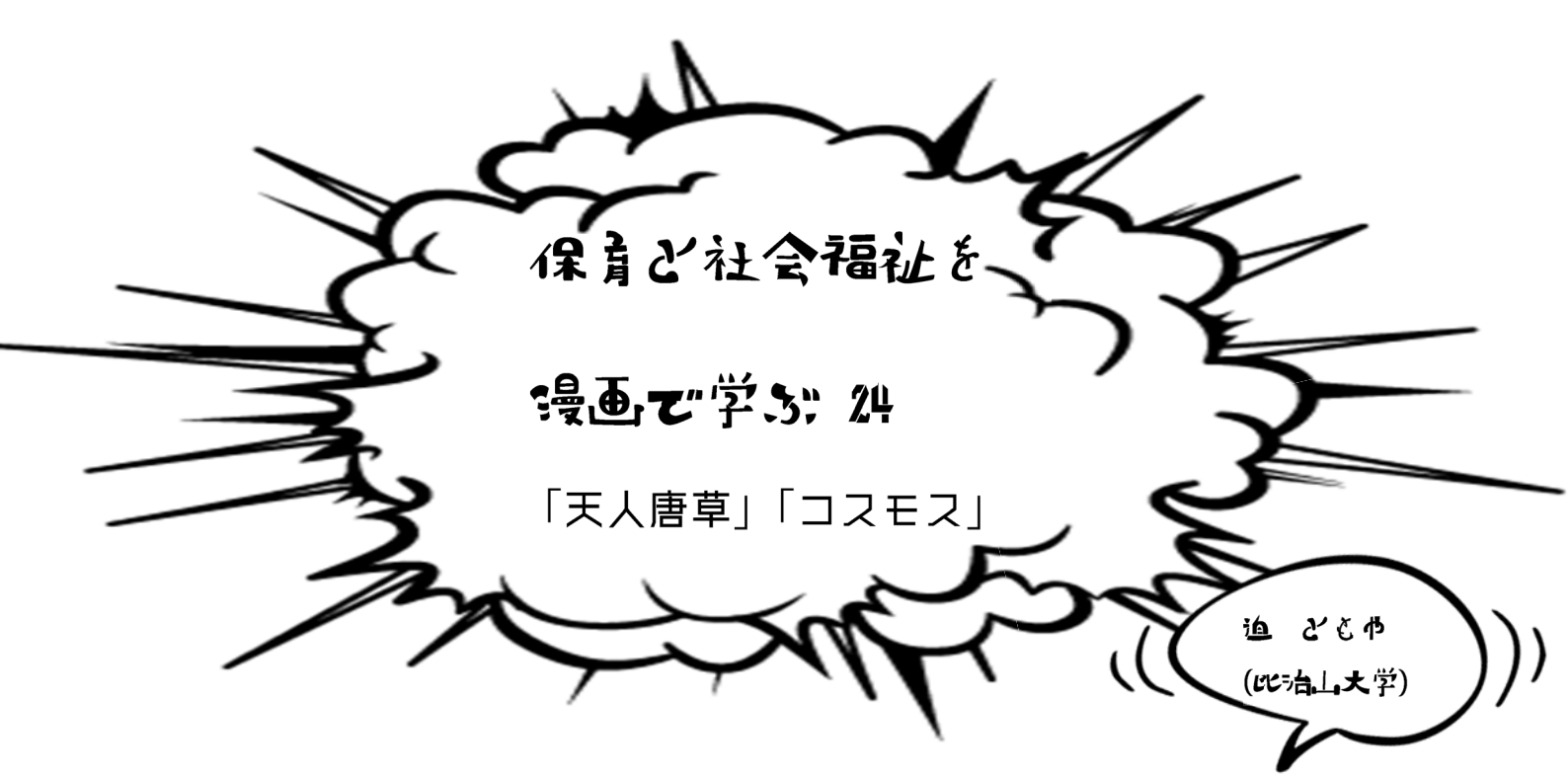
平成7年の阪神・淡路大震災の被災地で精神科医師として活躍され、「心の傷を癒すということ」という名著を残して夭折された安克昌氏は、その著作のなかで「これまで

日本の社会は、人間の『力強さ』や『傷つかない心』を当然としてきた。しかし今後、傷ついた人が心を癒すことができる社会を選ぶのか、それとも切り捨てて厳しい社会を選ぶのか」という言葉を残されたことは、前回の本マガジン執筆者短信で言及しました。まさにそうしたことが今求められているといえます。

通勤・通学経路で具合の悪そうな方がおられれば声をかける、近所の子どもたちの安全に目配りをする、クラスや職場で気になる仲間がいれば助け合う、そうした「当たり前」のことから初めていかなければいけないのではないのでしょうか。

大学時代、社会病理学を専攻していた私は、恩師から「まなごしの地獄」（見田宗介氏）を強く勧められました。永山則夫元死刑囚の事件と当時の社会構造を考察した著名な論文です。壮絶な養育環境から希望に燃えて上京した少年が、出自で差別する社会から排除されているく構造は、コロナ禍後再読すると恐ろしいほど現代社会と近いものがあります。

繰り返しの記載となりますが、「社会は心的外傷に満ちている」と言い残した精神科医師の安克昌氏（「心の傷を癒すということ」）は、今後の社会の在り様について、傷ついた人や異質（と判断された人）を排除するのではなく包摂していく社会を望んでおられたと今も強く思いますし、当時のこの著作のもととなった新聞連載が「被害者から届いたメッセージ」と評されていたことに倣うならば、安氏のこの言葉は、令和という今を生きる私たちへのメッセージでもあると考えます。



保育と社会福祉を

漫画で学ぶ 24

「天人唐草」「コスモス」

迫 ともゆ  
(比治山大学)

山岸涼子さんの短編ホラー漫画から、親子関係の歪みについて学べる作品を紹介します。  
父親と娘の問題を描いた『天人唐草』（1979）、母親と息子の問題を描いた『コスモス』（1987）です。

#### 『天人唐草』

オオバコ科の越年草に「イヌフグリ」という植物があります。春先にピンクの小さな花をつけるのですが、果実の形が犬の睾丸に似ているらしく、この名前がついています。

古武士的な気難しさを持つ厳格な父親から「女性はこうあるべき」と厳しくしつけられた響子。小学生の頃、友達がイヌフグリの名前を笑ったのにその理由を教えてくれず、不思議に思って母に尋ねた。母は「その花は天人唐草とも呼ばれているからそっちの名前の方がいいわよ」と教えるが、響子は納得できない。「テンニンカラクサ」？ 変なの なんてわざわざそう呼ぶの？ イヌフグリがおかしいから？」

すると父は「女の子がそんな言葉を口にするもんじゃない！」と一喝する。有無を言わせない父の態度。やがて響子は失敗を恐れてやり直すことを怖がる子どもになった。父の言う「正しさ」は響子の理解を超えるものであり、とにかく従わざるを得ないのだった。

中学生になった響子は、父に似て気難しく、まじめな男子生徒に恋心を抱いた。響子は彼の下駄箱にラブレターを入れたが、彼の母親から自宅に電話がかかり「こういうことはまだ早い」とたしなめられる。響子の母親が電話を取ったため、このことは父にも伝わり「お父さんはお前を、もう少しつつしみのある女性に育てたつもりだが、こんなにもませているとは」と響子を叱りつける。父の言葉は響子に強い罪悪感を与えた。男性に対する自然な感情は、響子の中でブレーキをかけられてしまった。

物語の冒頭では、響子の両親は娘思いの良い父親と母親のようです。古風な父親に、母親は三步下がって従うようにしています。父親は、自分のルールを説明しません。「なぜこうすべきなのか」を言わず、子どもは親に従うもの、女性は男性に従うもの、という信念があるようです。強い信念をもつ人のそばにいて、その人の言うことが絶対のようになると、人は自分の頭で考えることをしなくなります。

響子は父親の強い掟の中で生活するようになります。父親の枠に過剰に適応しようとする、現実の男性との関わりが持ちづらくなってしまいます。高校生になった響子は教科書を忘れて、隣の男子生徒が見せてやろうとするのに拒絶します。意識しすぎて、挙動不審な様子になっています。厳格な父親が望む「女子のあるべき像」は、響子の言動や感情を縛りつけ、ぎこちなくさせてしまうのです。

父親の紹介で役所勤めを始めた響子は、上司からのちょっとした注意を真に受けすぎていちいち落ち込み、はれ物扱いされることに。ただ、同僚の男性、遊び人風の佐藤だけは響子の本質を感じ取っているようです。

「あの子、やりにくいよねー」。上司の陰口を聞いて涙ぐみながら帰途に就く響子は、街なかで偶然、佐藤に呼び止められる。「送ってってやるよ」と勝手についてきた佐藤は、笑いながら「あんたさあ、みえっぱりだよなあ」と言う。響子は驚きと怒りがまじり、強い口調で返す。「みえっぱり？ あたしのどこが！ あたし、みえっぱりな女にはなるまいと心がけて来たはずです。あなたみたいな人に何がわかるの！」「だれもあたしのことなんか分かってくれない。お茶ひとつ満足にいれられない女だって…あたしは一生懸命やってるのに。子どもにでも簡単にできることがあたしにはできない。その苦しみが、あなたなんかにはわかってたまるもんですか！」

響子の気持ちは、いつも抑えつけられていました。理不尽な評価をされたように感じて、思わず反発したことがきっかけで、響子の感情はあふれ出します。このような、思わず感情があふれ出した言葉には大きな意味がある場合があります。言葉を発しながら、自分が言った言葉が大きな気づきをもたらすこともあります。響子が感情をぶつけたかった相手は、本当は誰なのでしょう。

佐藤は響子を落ち着かせ、「なんでもうまくやれる素晴らしい女だって、あんた言われたいんだよね。誰かにそう見てもらいたい。それが“みえ”なんだよ。他人の目を気にしすぎるんだよ」と指摘します。

響子は自分ではなく、身近な他人の軸で生きています。家族は、身近すぎると他人の軸だと気づかないものです。佐藤の指摘は響子にとって、自分を見つめなおすターニングポイントになるはずでした。しかし以前、母から「送ってくれた人は家まで連れてきなさい。お礼を言うから」と教えられていた響子は、佐藤を自宅まで連れて行きます。玄関から出てきたのは父でした。佐藤の軽薄な挨拶を見た父は、響子に「ああいった若者は好かん」と言ってしまう、響子は佐藤の評価を下げてしまいます。つまりところ響子は、すぐに身近な他人の軸に戻ってしまったのです。

母が亡くなったために、響子は仕事を辞めて家事手伝いになります。見合いもしますが、響子は素直に自分を出すことができずに断られ続け、父から「お前はおとなしすぎる」と言われます。響子は、従順で出しゃばらないことを女性らしさだと信じ込み、その反面で自分を出さなくてよい状態に甘えているようです。しかしもはや、響子を守っているのは父親の強い掟だけです。

父が出張先で倒れたという連絡が入り、響子は急いでかけつけるが、響子が着いたときには、父はすでにこと切れていた。父が倒れたことを知らせたのは、派手な服装で化粧の濃い女性だった。「お父さまにはもう10年近くもお世話になっています」。その口ぶりから、この女性は母の生前から父と関係を持ち続けていたことがわかった。娘にはこうあってはならないと言いながら、父が男として望んだ女は正反



対だった。響子は信じていた父親の価値観が揺らぎ、愕然として路上をさまよひ、見知らぬ男に暴行されてしまう。打ちひしがれた様子に付け込まれたのだ。身も心も傷つけられた響子は路上に座りこみ、「わかってくれる わかってくれるわ きっと…あの人は…」と一人つぶやく。しだいに響子は精神のバランスを崩していく…。

「父親の娘」問題というものがあります。支配的な父親が愛する娘の人生を支配してしまうというものです。父親の強い価値観に従う娘は従順であればあるほど、父親の願う家庭的な女性であり続け、婚期を逃してまで親の世話をし続けることがあります。女性自身もそれを望んでいる様子があるために、周囲から口をはさむことが難しくなります。

父親-娘関係が緊密になりすぎると、父親の強い価値観を疑うことができなくなってしまうのかもしれませんが。響子のように身近な他人の軸で生きれば、自分の力で人生を切り開くチャレンジは必要ありません。従順で出しゃばらないことを女性らしさと信じ、父親のような価値観の男性と結ばれば、響子は幸せを感じられたのでしょうか。

厳格な道徳家のように見える人物が、人に言えない裏の顔を持っていることは、実際にはよくあるように思われます。理想が高ければ、満足できない欲求もあるはずですが。本人は裏の顔を誰にも見られなければバランスが取れています。ですが、信じていた父親から裏切られ続けてきたことに直面させられた響子は、父の裏の顔を見てよりどころを失い、誰にも守ってもらえない状態になります。父親の虚像が崩れ落ち、無防備にさらけ出された響子。「あの人はわかってくれる」という「あの人」とは誰なのでしょう。それは響子にとって実際の父親ではなく、理想化された父親の幻なのかもしれません。

一方、『コスモス』（1987）では「母親と息子」のパターンが描かれています。

## 『コスモス』

「ぼく、秋がキライ」とつぶやく少年、裕太は、すきま風の音を聞くとドキッとする。喘息のある裕太は、自分の胸も同じ音がすると思う。家族は、裕太をかがいがいしく支えるママと、疎遠になってしまったパパの三人。パパは普段から帰宅が遅く、裕太の喘息がひどくなると、ママはパパの会社に電話する。

ある晩、雨戸が音を立てるほどの強い風が吹き、ママは裕太に心配そうに声をかける。「嫌ねえこの風。裕太ちゃん、胸、大丈夫？」。ママが不安そうに見ている。風の音とママの表情が裕太の喘息をひどいものにした。

裕太の喘息が苦しいとき、ママが電話してようやくパパが車で病院に連れて行ってくれるのです。裕太は「パパは僕が苦しい時だけやって来る」と思います。ぜんそくの発作で寝込む裕太の顔を見てママは「代わってあげたいわ」「裕太ちゃん可哀想に」と言います。

実はパパには別の女性がいるのですが、ママは「絶対に別れない」と強く思っています。

クリスマスの日、ママは七面鳥を焼いた料理を作り、「大成功なのよ」と得意顔。しかし、パパはやはり帰ってこない。仕方がないので裕太とママだけで食べはじめますが、裕太はまずいと感じてしまう。香辛料が多く、大人向けの味付けだったからだ。

ママは悲しそうな顔で、無言で立ち上がり、せっかく焼いた七面鳥を裕太の目の前でゴミ箱に捨ててしまう。涙ぐむママを見て、裕太は自分が泣かせてしまったと慌てる。「その夜は僕もママも泣いて、クリスマスはメチャクチャだった」…。

パパは年末にも帰ってこない。喘息に苦しむ裕太を寝かしつけ、ママは会社に電話をかける。「年末だからといってる場合ではないでしょう。裕太が苦しんでいるんですよ。わたし一人じゃあの子を病院にだって連れてゆけませんわ」。

パパと別れたくないママにとって裕太の発作は、パパの会社に電話をかけて「帰ってきて」と言い立てるのにとっても都合がいいのです。裕太を顧みないパパを、ママは責め続けます。「あなたはそれでも人の子の親なの！」と。

喘息の発作などで、周囲の気を引きつけるのに都合がいい場合に起こるものがあります。幼い子どもを例に考えてみましょう。弟や妹が生まれたとき、下の子に親の気持ちが向いてしまいます。そのとき、きょうだいの上の子が無意識的に喘息発作のような咳を繰り返して、親の気を引こうとする場合があります。本人はわざとしているとは思っていません。ですが、結果的に親の気持ちを自分の方に向けられることができると、発作は収まります。

病気になった方にメリットがあるとき、人は「自分から病気になる」ことがあります。疾病利得と呼ばれています。幼い子どもなら赤ちゃん返りがあります。小学生くらいの子でも、裕太のように気持ちの影響から発作を起こすことがあります。

疾病利得の裏側には、家族や友人の注目を浴びたい、愛情を受けたいという願望があります。「自分から病気になること」なら構造は単純ですが、第三者の目を意識する作為が複雑になると、「家族の誰かを病人に仕立てて世話をする行為」が生まれます。被害者の飲食物に薬物を混ぜるなど、こっそり虐待したうえで、体調不良の家族を介助している様子を見せて第三者の注目を集めるのです。このような状態には「代理性ミュンヒハウゼン症候群」という難しい名前がついています。ミュンヒハウゼンとは、ほら吹き男爵のこと。演技的な状態を生き続けることを「ミュンヒハウゼン症候群」、身近な人を病人などに仕立て上げることを「代理」と呼んでいます。

裕太のママが、裕太をわざと喘息に仕立てているのかどうか、確定的ではありません。しかし裕太が喘息を利用して、パパの行動をコントロールしようとしていることは読み取れます。母親の思いのままに喘息発作を起こしてしまう裕太は、自分の力で人生を生きる力を奪われ続け、母親に依存させられ続けます。

夏から秋の季節の変わり目に喘息がひどくなり、ママが心配そうに言葉をかけるから、裕太は「秋が嫌い」です。タイトルの「コスモス」は、ここから付けられたのでしょうか。しかしもしかすると彼は、どの季節も嫌いになるかもしれません。

『天人唐草』と『コスモス』、二つの作品を読み比べると、父親と娘、母親と息子の病理のパターンを見ることができます。典型的には言葉による直接的な支配と、感情による間接的な支配のように思われます。こうした親子関係のゆがみから抜け出すきっかけはどこにあるのでしょうか。『天人唐草』では、

響子が同僚の佐藤から「みえっぱり」と言われた場面、そして深刻な被害を受けた暴行の場面であり、『コスモス』では作品に描かれてはいませんが、やがて裕太に訪れる思春期がそれにあたるでしょう。

「僕はどうしてママが心配するたびに喘息になるんだろう？」 裕太が自力で答えを見出すためには、親子の密着した安全圏から抜け出す必要があります。『天人唐草』の響子は、そのタイミングを逃したのかもしれませんが。彼女が自力で立ち上がり、他者の軸にすぎらなくてもよい状態になるには、時間がかかるように思われます。

紹介作品：

山岸涼子（1994）「天人唐草」『天人唐草 自選作品集』文春文庫ビジュアル版（初出：1979）

山岸涼子（2003）「コスモス」『パイド・パイパー』メディアファクトリー（初出：1987）

※本エッセイで紹介した作品中のセリフなどは、読みやすくするために、意図を損なわない程度に改変している場合があります。

※ご感想・ご意見などは筆者のメールアドレスまでお寄せください。⇒ [sakotomoya@gmail.com](mailto:sakotomoya@gmail.com)

# 『余地』

～相談業務を楽しむ方法 26～

## ＜アンパンと牛乳＞

杉江 太郎

### ～よく見る光景～

警察官が張り込みをするときに、欠かせないものと言え、アンパンと牛乳である。張り込みをしているときに、遅れてきた同僚がアンパンと牛乳を差し入れするという光景はテレビドラマではよく見る光景である。グーグルで「アンパン、牛乳」で検索すると、そのことを考察する記事もある。警察官が実際に張り込みをしているのかどうかは知らないが、仮にしているとしても、その最中にアンパンを食べて牛乳で流し込むことはないだろう。それこそドラマの見過ぎである。福祉の現場でも、張り込みとまでは言わないとしても、例えば、誰かの帰宅を待つときや、長期間出会えていないような家族に出会うために、家の近くで様子を伺うことはある。今回は、張り込みについて、さらに実際に張り込みをするにあたって、アンパンと牛乳が相応しいものなのか個人的な体験も交えて書いていきたい。

### ～張り込み方を思案する～

張り込みの方法について、警察のマニ

ュアルがあるのかどうかはわからない。とある法律事務所のホームページでは、張り込みについて「複数人のチーム制で行う」「目的を達成するまで続ける」というようなことが書かれていた。福祉の現場では、そこまですることはないだろうが、やはりいくつか気にしておくポイントはあるように思う。まず、何処で張り込むのかということである。ドラマの中では、近くのビルの屋上や、車の中などで張り込みをする場合が多い。まずは、車を利用しない場合について考えたい。実際のところ、私有地に入って張り込みをすることは、不法侵入などの犯罪になる可能性があるのではいけない。警察は、管理者に許可を得ているのかもしれないが、福祉の立場でそのような許可を得ることは難しいだろう。そうすると、私有地ではなく、公道を利用する必要がある。当然、家の目の前にいるわけにはいかないので、家の玄関等が見える、誰かの所有地ではない、相手からも見つかりにくい場所を見つける必要がある。良く電柱の陰から見張りをするということがあがるが、

そのあたりが理由であろう。そのときに気をつけなければいけないのが、日当たりである。ただでさえ怪しいのに、日傘をさしながら待機するわけにはいかない。仕事なら我慢しろよと言われるかもしれないが、夏の日差しを受けながら外にいることは熱中症に繋がる。ある程度影がある場所を探したい。ただ、一箇所にとどまり続けると、周囲から見たときの怪しさが増してしまう。複数の場所があると少しは怪しさが紛らわせるかもしれないがそんなにうまくいくことはないだろう。次に、車の中で待機する場合である。これも前記した通りだが、私有地に停車することは絶対にしてはいけない。理想は、学校や市役所などの公的機関に許可を得た上で停めて、ちょうどそこから目的の場所が見えるというのが理想ではあるが、そんなにうまくいくことはない。家が見渡せる公道に停めることが望ましいが、家が見渡せるということは、相手からも見られる可能性があるということである。また、車を利用する場合、エンジンをどうするかという問題もある。エコのことや、騒音のことを考えると、エンジンを切るほうが良いだろうが、これもまた気温との戦いである。暑い車内で長時間過ごすことは命にも影響する。とは言え、同じ場所でエンジンを掛け続けることの弊害も大きい。車で張り込みを行う場合、ある程度、車を停めるポイントを確保しつつも、移動を繰り返しながら行うほうが良いの

かもしれない。ただ、どちらにしても、怪しいということに変わりはない。近隣から通報される可能性も否めないのも、そのときのために、本人確認ができる職員証は常に携帯しておく必要がある。怪しまれない工夫という点で言えば、例えばテレビなどでは、警察が宅配便の格好をしてチャイムを鳴らす場面があるが、怪しさを軽減するために、業者を装いたくなる気持ちもわからなくもない。私が考えたオススメは、作業服にヘルメットで電気工事の人を装う格好である。実際にしたことはないが、その格好ならば、家の周りを歩いている、電線の方を見るなどしておけば、その地域に溶け込めるかもしれない。(するかしないかは自己責任で)

## ～アンパンについて～

張り込みは数分で終わることもあれば、その目的によって、数時間に及ぶこともあるだろう。当然、お腹が空くこともあると思う。そんなときにお腹を満たすのにアンパンが適しているのか考えていきたい。例えば、これがクリームパンだとどうだろうか。張り込みをしている際に対象としている人が家から出てきたとする。後をつける等の行動が必要になった場面で、クリームパンを食べていたとしたら、そのクリームパンを急いで食べたり、袋にしまってポケットに入れたりという作業が必要になる。その際、クリームパンの

中身が飛び出してしまうかもしれない。また急いで食べることで、口の周りにクリームが付いてしまう可能性だってある。その点、アンパンは、クリームパンと比べると、中身の流動性がマシなため、食べやすいのではないだろうか。では、ジャムパンはどうか。ジャムパンもアンパンと比べると、食べた際の口の周りのベタつきやすさなどがあるので、食べにくいのではないだろうか。そんなことを考えると、アンパンが最も適したパンのように思えてくる。傷みやすさ、カロリー、お腹への溜まり具合、疲れたときの甘みなど考えたときに、アンパンにまさるものはあるだろうか。カレーパンはもっての外である。口にカレーがつくし、服にもカレーがつくかもしれない。カレーは刺激物なので、お腹の具合にも影響しやすい。やはり、適したパンはアンパンである。

### ～では牛乳は？～

上記のアンパンの考察で言えば、牛乳は、お腹を下す可能性があり、傷みやすさもあり、さらに一度開けると、蓋が出来ないという点で、外で飲むには適しているとは言えない。では、適した飲み物は何か。形状で言えば、ペットボトルなどの蓋が出来ることが望ましいだろう。また、トイレに行ける環境なのかにもよるが、もしすぐに行ける環境がないのであれば、利尿作用の高い飲み物は避けるほうが良い。ただ、熱中症のことを考えると、ある程度

の水分は必要である。お茶、スポーツ飲料水、コーヒーなどがまだ適していると言えるのではないかな。

### ～電柱の下のタバコ～

警察が電柱の影で張り込みをしているときに、タバコを吸いながら、その吸い殻が足元に溜まっているという、それだけの時間を張り込みに要したという表現なのか、そうしたシチュエーションがドラマなどではある。当然、法律に遵守して行う必要があるため、路上喫煙や、ポイ捨ての観点からそのようなことは、するべきではない。というかしてはいけない。

### ～くだらない思考だけど～

ここまで、読まれた方の大半は、くだらないことを書いているなど思われているのではないだろうか。まさにそう、くだらないことを書いているのである。私の職場は、福祉機関と言いながらも、司法対応や危機介入が求められるようになってきた。その中で、いわゆる張り込みをしなければいけないこともあった。しかし、張り込みをする前提で職員の配置はされておらず、そのことをするだけのノウハウや積み上げもない。求められることは日々変化しており、今までにあった前提だけで職務をこなし続けられるような状況でもなくなりつつあるが、そうした中でも、目的のために最善の一手を考え、目の前の安全のためにしなければいけな

いことがある。そうしたときのために、アンパンと牛乳のように、くだらない思考をであったとしても、巡らせておくことが柔軟性を生み、選択肢の幅をもたせるのではないだろうか。



## 原田牧場 Note

page 17

牧場の母さんが担当してきた子牛のお世話（ミルクやり）を私が引き継ぐ時代になりました。こんな日がくるとは！ 牧場の根幹だけに誰にも触らせなかった部門です。母さんにしかやれない目分量や加減。哺乳の勉強会で知識は頭に入っているけど、私にはまだ無理とっていました。が、その時は急に訪れるのですね。引き継ぎとして母さんから教わったのは、

「その子牛（個体）と相談しながら」というシンプルなもの。寒さ暑さ、ミルクの量、健康状態、寝床の掃除、全てが間に合っているか？ を

「その子牛と相談して」と。観察眼なら誰にも負けない自信があるので、やってやるぞ（やるしかない）という気持ちになりました。

分娩後母牛から搾る一回めの乳を初乳といいます。初乳に含まれる母牛の抗体を摂取することで子牛は免疫力が高まり病気から守られます。しかし、抗体を吸収できる能力は出生後 時間とともに低下、6時間経つと50%、24時間でほぼ消失します。初乳に含まれる免疫物質も時間とともに少なくなっていくので、分娩後は速やかに搾乳し、2時間以内に子牛に飲ませることが強い子牛を育てる第一歩となります。分娩が夜中の場合もあるし、早朝生まれていた、ということもあるので気が抜けない日々になりました。安産でホッとしても、搾って見たら初乳の免疫成分が低かった＝足りない！ 泌乳自体が初めての初産牛だとちょびっとしか出なかった＝足りない！ 生まれてみないとわからないアクシデントに対応しながら、免疫獲得タイムレースを走っていきます。成功させるには子牛との協力が必須。生まれたてびしょびしょの体は藁で拭いてやってヒーターで温めます。冷えてぶるぶるしている間は初乳を飲みません。臍の消毒もすぐやります。

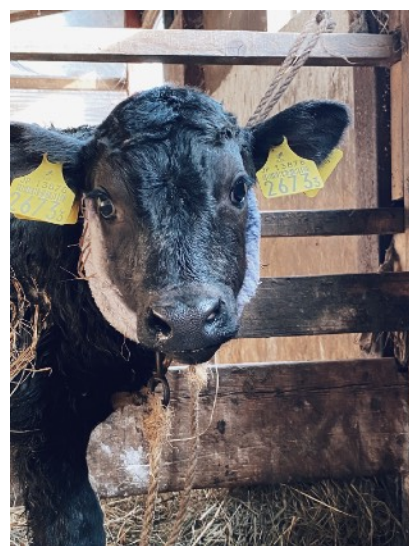


苦労して出てきた子は誤嚥気味でゲホゲホしている場合もあるし、元気そうに見えても飲み方がわからずボーッとしている子もいます。「子牛と相談して」が始まります。子牛は母牛に舐められると血流が良くなりマッサージ効果でリラックスし飲むようになると聞いていたので、タオルで体を強めに撫でて（母牛の舌はザラザラなんです）、急いで飲ませたい気持ちを一旦置き子牛が温まるのを待ちます。子牛はそれぞれ個性が違うので毎回新しい二人三脚です。狭い産道を抜けやっとのことで生まれてみたら、必死の形相の代理母に急かされてる…なんだこれは！と子牛もびっくりでしょう。どこで勉強してきたのか不思議なくらいすんなり初乳を飲んでくれる子もいて、ぐいぐい吸う力から命の始まりを感じつつゴールできた日は最高です。

2日目はお腹の下まできちんと体が乾いているかチェック。床からの冷気に弱いので冬はベストやマフラーを着せます。立ち上がっている姿勢を見て四肢に異常がないか？を確認。下痢はしていないか？目に力があるか？鼻は乾いてないか？風邪をひいてないか？元気であれば、ミルクやりへ。子牛が機嫌よく飲む量だけやります。飲みながら尻尾をリズムカルにふりふりしてくれたら機嫌がいい証拠です。おいしい～♪と体で表現してくれます。これを見たらみんな、なまらめんこい！って言ってしまわず。母牛から搾ったミルクはパステライザーを使い60度で30分低温殺菌したあと40度くらいまで冷まして与えています。子牛があまりにも喜んで飲むので味見したら想像以上に美味しかったです。自宅で飲む時は沸騰直前まで高温で殺菌するので風味が違いました。子牛の気持ちになって考えるを習慣に、寝藁が湿気っていたら交換、寒くても換気は大事、時には呼びかけて撫でてやり人馴れの練習。（可愛がりすぎには注意。子牛でも遊びで突進されたら危険）この時に培った、人との信頼関係は一生物。イイ距離感を保ちます。ホルスタインの♀は我が家に残りますが、ホルスタインの♂、ホル×和牛の交雑種、授精卵移植で生まれる和牛、は一週間ちょっとで市場へ出て行き、肉牛肥育農家へ移動します。

酪農家は乳製品だけでなく牛肉食品すべての源流だというプライドをかけて、我が家に残らない子もしっかり丈夫に栄養満点に育て、市場に送り出しています。肥育農家も餌の高騰などで業界厳しく、市場でついた価格が500円だった時期もあります。朝も夜もなく働いてこの評価…とガックリしてしまいそうになりますが、市場価格＝私の評価ではない。と思い直し命の始まりから面倒を見た子牛たちが、とびきり元気に出ていけた日は自分に最高評価をつけています。そんな背景を知っていただき、

皆さんには、国産国消（国民が必要とし消費する食料はできるだけ自国で生産する考え方）をよろしくお願いします。



筆者 原田 希

1973年 大阪府吹田市生まれ

2006年 酪農家との結婚を機に北海道標茶町へ

2017年 北海道農業士に認定 北海道指導農業士の夫とともに

新規就農者の支援や女性農業者向けの勉強会のお世話係を担当

<連載>

# ザイコロジー

⑤

そだちと臨床研究会

川畑 隆

## 児童相談所に就職してから

就職してから、障害のあるかたが書いた詞に曲を付けて歌う「やすらぎ音楽祭」のボランティアをやり始めたので（有名な「わたぼうし音楽祭」とは別物です）、自分で歌詞を書く機会が減って書いた数は多くありません。それに書くために書いた無理やり感があって、⑤⑥に載せるのはそれが比較的薄いものです。そういう意味では、高校・大学時代が一番ストレートに歌詞が作れたと言えるんでしょう。

学生時代を引きずっているようなものを3つ続けます。

### やさしい人

やさしいと言われるのが嫌だ  
そう思いながら やさしい人になっている  
やさしいという言葉に疑いを持ちながら  
やさしさに終わってしまっている  
そんな日々にくるまれながら  
殻を破れない

自分の中に激しさがある  
その激しさを加速させる無鉄砲さもある  
突き進んでゆく激しさに身を任せたあと  
その影響が確かに自分に迫ってくる  
衣を脱ぎ捨てた潔さと 冷たい風と

自分の激しさを讃えている自分がある  
でも ふと放心している自分も見つける  
激しさの代償が不安になって  
心の片隅で暗さに突き進んでゆく  
やさしい人であることの安全さが  
足を引っ張っているのだろう

自分に起こる様々な波風を  
ごく日常の生きる鼓動と受けとめたい  
けっして鈍感になって何も感じない  
そんなことを望んでいるのではなく  
自分に起こっていることを  
楽しめるようになりたい

そして そんなふうになれば  
殻破りは確実に進んでいるのだと思う  
ひとつひとつの積み上げは  
こだわりと激しさと

### G式

G式ってなかなか解けないもの  
G式ってなかなかやっかいなもの

足せば足すほど動きはつかなくなるし  
引けば引くほどめちゃくちゃになるし  
括弧で括っても何もかわらないし  
無限大に途方に暮れる  
ああ G式は自分ひとりで  
やらなきゃいけないし  
G式は誰も手伝ってくれない

G式というやっかいなしるものを  
引っ張り出すのもすなわちG式

かければ立派にできそうな気がして  
割れば割るほどわからなくなるし  
因数分解すれば残るのは半端な数字  
集合ではうごめく記号の氾濫  
ああ G式がなかったら困ったもんだし  
G式にとらわれても困ったもんだ  
G式をどうかしようなんて  
さらにG式を面倒にするだけ

ああ G式っていう目障りな奴だけど  
嫌々つきあってやるしかない  
G式ってなかなか解けないもの  
G式ってなかなかやっかいなもの

#### ほっといてよ

あたし 何も悪いことしてないよ  
だからさあ そんなお説教はやめてよ  
あんたの思いどおりには 私  
生きたくないし 生きられないよ  
みんな いろんな人生あるんだから  
ほっといてよ 悪いことしてないんだから

あたし 何も悪いことしてないよ  
だからさあ 冷ややかに見ないでよ  
そりゃ あんたは幸せかもね  
でも あんたの幸せを押し付けないでよ  
あたしは あたしのところで生きてゆくよ  
ほっといてよ 悪いことしてないんだから

あたし 何も悪いことしてないよ  
あたしの勝手して どこが悪いのよ  
あたし 自分のことは自分で守ってゆくよ  
空っぽじゃないんだから

そりゃ あたしだって温かさはほしいよ  
でも温かさって冷たいんだよ  
ほっといてよ 悪いことしてないんだから

#### コンサート

職場の人たちの協力で、自分の歌のコンサートを年1回、4回ほどやりました。5回目は「みんなで歌おう」みたいな集まりにしたと思います。その第1回のために作ってオープニングで歌った『僕のコンサート』です。

#### 僕のコンサート

春の陽ざしはおだやかに溢れて  
残り雪を少しずつ溶かしてゆくね  
春の陽ざしはやさしく肩たたき  
眠りこけた動物たちを起こしてくれるね

僕のコンサートが 今はじまるのだから  
思いのままに 歌いたいように

僕の心は大きく息をして  
張り詰めた糸を少しずつほぐしてゆくよ  
僕の心はもうすぐ動き出しそう  
その動きを待っている  
人たちの前で

僕のコンサートが 今はじまるのだから  
感じたままに 踊るように

ギターをつまびきはあの時の寂しさ  
僕の歌声はあの時の嬉しさ  
僕の心はこの世にただひとつ  
だから今こうして幕があこうとする

僕のコンサートが 今はじまるのだから

こころのままに こころをこめて

### 京都児相マンスリー…

コンサートといい、『京都児相マンスリー』といい、好きなことをやらせてもらっていました。自分の所属する児童相談所と京都府の他の児童相談所の職員に向けた勝手な広報紙で、私個人が発行責任者でした。

その第6号に載せた記事です。その頃流行っていたTVドラマの題名を貰いました。

### 男女6人旅物語

～石垣・西表・竹富三島めぐり～

#### 13日の金曜日とはこのことだったのだ

朝6時30分、京都駅八条口アバンティ前空港バス乗場にゆくと、所長が両手でX印をついている。何のXだろう。オレ以外はまだ誰も来てへんということなのか、バスの発車時刻は45分だから私が遅刻したということでもなからうし…バスがXだったのだ。係員が説明している。「名神で事故がありまして不通となっております。バスは運休ですのでJRで新大阪までおいでください。」最初からケチがついたという否定的評価や、いや、これで不吉さをパスしたという肯定的評価がとびかったが、飛行機も飛ばなかったらどっか別のところへ行こうかなんて言いながら、6人の「家族旅行」はJRからはじまったのである。

#### まだパッチを脱ぐほどじゃない

ホラ！と所長がズボンの裾をまくりあげて野口さんに見せたのがパッチ。JALで那覇空港に着いて南西航空のロビーへ。気温は24度。JALの中からさっそくセーターを脱いでシャツの袖をまくりあげた「順応的」な団さんは、ホラや

っぱり暑いと沖縄の温度を無理に上げているようだったが、所長はまだパッチを脱ぐほどじゃなかったみたい。石垣島は28度との南西航空の機内アナウンス。いつ所長がパッチを脱いだか、それは取材しそこねたが、ズボンを脱いでパッチ一枚であっちこっち見て回ったというようなことはなかったので、申し添えておきたい。

#### おフネはこんなに速く走るもんじゃない

とにかく凄かったんだから。あれを暴走族と言わずして何と言おうか。石垣島から西表島まで約1時間、時速40キロから50キロでおフネが走るのだ。おまけに、風速13メートル以上になると欠航するらしいのだが、この日はすれすれ11メートル。50人も乗れば満席になるぐらいの小さなおフネの窓は大波に洗われ、許されないくらいに揺れてくれる。最初は楽しい気分で歌を口ずさんでいたが、だんだん心地好くない内臓的感觉に襲われてくるのを拒絶するために、歌うために歌うことになってくる。前部のギャル客が係員に連れられてきて私の横に座り、袋を口にあてゲーゲーやりだした。後部の方がましなのだろう。こういうギャルはそばにいてほしくない。何故なんだ。何故そんなに私を攻めるのだ。新幹線なんかで横にギャルが座ってくれたためしなどないのに、何故私はこういう理不尽な状況におかれるのか。

#### 運転手さんは天然記念物

西表島といえば、イリオモテヤマネコ。でも夜行性ということもあって、なかなかお目にかかれならしい。そんな話もしてくれた観光バスのガイド兼運転手さん、なかなかの話し上手でみんな大笑い。昔、「悲惨な戦い」という、相撲取りのまわしがとれてどうのこうのという歌を歌ってた、なぎら健彦にどこか感じの似てる御仁。その運転手さんの話してくれたのは、何年か前まで紅白歌合戦はVTRで正月にしか見

られなかったこと、西表の人口は1800くらいで「牛口」は2500くらいだということ、医者がおらずに急患が出たらヘリで石垣まで運ぶこと、西表に住んでいただけるのなら土地をタダでさしあげる、メインストリート沿いでも坪1200円、京都から中学生が単身で転校してきていること…。帰って女房に話すと、働かなくても暮らしていけるだけの資産があって、具体的には今度の9000万円のジャンボ宝くじに当たって、医者がいてハブがいなければ移り住んでもいいとのこと。ごもつとも。

#### 御ハブ様はお現れにならなかった、よかった

マングローブ林の間を縫って流れる西表の浦内川。遊覧船で中流までさかのぼり、そこからマリウドの滝、カンピラの滝に至る細い山道。遊覧船のガイドはハブに気をつけなさいとか、ハブのことは一言も口にしなかった。口にすると客が怖くて歩を前に進めることができないからじゃないか。ハブが出てきたらどうしよう。団さんが先頭を歩いててオレは2番目。2番目が危ないとよく聞く。かまれたらどうなるのか。30分の内に血清をうたないと死んでしまう。俺をかっついで一番早くフネまで運んでくれるのは誰だろう。でも到底30分以内では事は進まない。それならこの川の急流に流されてゆけばどうか。それでも間に合わないだろう。ああ、妻と娘の顔が浮かぶ。こんなところへ来たばっかりに、もっと普通の職場で普通の旅行をするところに異動しとけばよかった。あっ、あの木のうしろに石が積んである。ハブに噛まれて死んだ人たちの慰霊碑だったら、もう決定的だ…滝を見てフネに帰り着いた時、飯野さんの小柄な姿が目飛び込んだ。涙がひとすじ流れた。

#### 久木山さん、あわや神の国へ

あっ！久木山さん！しっかりせいとかかえあげ、怪我は怪我はござらぬか。カンピラの滝

が信光さんを飲み込もうとしたのも、今になってみれば笑い話。なんて言うてみたいが、何のことはない、岩の上でちょっと滑っただけ。みんなの心配をよそに、久木山さんが一番ショックだったのは缶ビールを滝に流してしまったこと。フネに帰ってきて、「缶ビール、流れ着いたらんか」だと。世の中そんなにうまいこといくか！

#### 早朝ゴルフはとってもリッチな気分なのです

団さんは大学の体育でゴルフをやったというだけあって、まあキマッテル。久木山さんは力強く振り切ってる。でもそこに白いボールがそのまま。川畑くんはこれはゴルフじゃない、バットスウィングじゃ。できた写真を見てのコメントが以上。9ホールのミニコース。6時半起き、7時からのプレイは爽快そのもの。ホテルサンコーストはグリーンいっぱいリゾートホテル。夕方、水面に光が放つてあるプールサイドでの語らい、星を見ながら、そしてハイビスカスの花を揺らし、その香りを運んでくる心地好いそよ風を受けながら、パンツの替えをバッグに入れてくるのを忘れて何処で買えるかを考えていたのも、それもわび。食事もおいしくて、やっぱりホテルサンコーストイズベターザンホテルミヤヒラなのだ。

#### 海、空、そして花と蝶

昭和62年11月13日から15日までの京都児相ハイビスカス班の旅行は、デイゴ班(ホテルミヤヒラ泊)に比べてまず天候に恵まれ、素晴らしいものになった。海はエメラルド、空は快晴、人は温かく、タクシーは安い(300円)。石垣、西表、竹富、それぞれに趣が異なり、とくに竹富島では時間がそこだけゆっくり流れているように感じられ、咲き乱れる花、それに群がる大袈裟でなく20~30匹のあげはちょうは、私たちが神の国に近づけてくれた。みんな楽し

## ザイコロジー⑤ (川畑 隆)

んだ。久木山さんが飯野さんの肩をもみほぐしているその光景は、まばゆいばかりであった。団さんと川畑が下痢をしていると知っていながら、その前で2個も3個もアイスクリームを食べる野口さんには、昼食に下剤を混入してやろうかと思った。「グアバ」を連発していた所長は、腕に「写真」という腕章を巻いていいほどの連写ぶりであった。最後の昼食には「タンタン」という肉料理の店でタンタンちゃんとヘレヘレちゃんを、おいしく、安く、多量に食べた。空港の戻し税（気分が悪くなって戻したら税金がかかる、というのではない）店で、お酒など買う人は買って、みんな満足して帰ったと、そういうお話なのであった。（『京都児相マンズリー』第6号 昭和62年11月）

### テーマソング…

べつに頼まれたわけではなく勝手に作りました…『京都府児童相談研究会フェスタ』はその合宿のために、『今ここで』は京都府職労福祉労働支部婦人部へのプレゼントでした。

### 京都府児相研フェスタ

今 幕があがる  
竜馬の船が帆をあげるように  
赤銅色の夢たちが 明日を切り開こうと  
Kyoto prefecture jisouken festa

子どもたちの  
現在(いま)と未来が輝くように  
昔の子どもたちこそ さあ いい顔で  
Kyoto prefecture jisouken festa

やりたいことをやろう  
やりたさを信じて

学びと遊びを分けたのは誰だ！  
Kyoto prefecture jisouken festa

喜びつらさも  
一人のなかに押し込めないで  
小鳥のさえずりのように  
語り合っていこう  
Kyoto prefecture jisouken festa

やりたいことをやろう  
やりたさを信じて  
学びと遊びを分けたのは誰だ！  
Kyoto prefecture jisouken festa

### 今ここで

あなたが寂しい時は 強く強く膝を抱いて  
涙があふれるのなら 清水の流れるように  
あなた 心が生きてます  
わたし 心が震えます  
今ここで 今ここで あなたのままで

思わずこぶしを握る 願いは胸中めぐって  
わかってほしいから 言葉がほとばしる  
あなた 心が生きてます  
わたし 心が火照ります  
今ここで 今ここで あなたのままで

よかったこと抱きしめて 街が優しく映る  
身体が波打ってくる  
止めるなんて無理なこと  
あなた 心が生きてます  
わたし 心が弾みます  
今ここで 今ここで あなたのままで

2024.04

## 応援、母ちゃん！17

### ～ 帝王切開レポ ～

たまむら ふみ

玉村 文



### 1. はじめに

2024年4月18日に第三子を出産しました。37週6日、3336gの男の子でした。我が家は子どもは3人までと決めたこともあり、妊娠出産は今回で最後。最後なので、3

回目の帝王切開について記録しておこうと思ひ、今回の原稿にまとめました。「自分の帝王切開を見た」というレポートは、医師で漫画家のさーたり氏の漫画で読んだことはありましたが、まさか今回自分もそれを体験できるとは。気分はブラックジャックの



ようでした。

## 2. 予定帝王切開までの道のり

過去2回の出産が帝王切開だったので、今回の出産も予定の帝王切開になりました。ということで、事前に予定日が決まっていました。わたしの場合は、過去の帝王切開の傷跡部分の子宮が薄くなっていること、お腹が張る頻度が上がってきたこと、胎児が下がってきていることから、医師から安静の指示と張り止め薬の処方を受けていました。帝王切開の予定日を早めるかどうか医師と検討していました。前回のお産のとき、予定していた帝王切開の日よりも二週間も早く陣痛が始まってしまい早産で出産、そのためか子どもの発達が遅くクリニックに通った経過もあったので、今回はできるだけお腹の中で胎児を育ててから出産したいことを伝えていました。予定日までは慎重に安静にして過ごすことを心がけていましたが、内心はハラハラしていました。

安静にしながらも、出産後しばらくできないこと、やっておきたいこともありました。映画館で映画を見る、美容院に行っておくのはその代表的なことです。また産休に入ったことで、ママ友とランチ行ったりもできました。「自分時間」を確保しながら出産まで過ごしました。

出産にあたってわたしが入院する期間、北海道から義母が我が家に来てサポートを受けました。上の子二人のお世話などをお願いしました。子どもが増えるにつれ大人の手がより必要になります。もちろん親がメインで上の子達の世話をしますが、

わたしが入院中、夫は仕事と両立しながらワンオペ育児はしんどい。そもそも夫の場合、定時帰りだとしても保育園のお迎えに間に合わないという問題もありました。今回は、産後ケアサービスにも申し込みをし、実母や義母のサポートをお願いしました。それは、あらゆる手を借りて出産及び産後を乗り切れるための準備でした。子どもが増えるにつれて、意識的に他者やサービスを頼るようになってきました。

## 3. 手術日

### ～気分はブラックジャック～

手術前日の4月17日(水)の夕方から入院しました。手術日の18日(木)は絶食で、点滴を開始。輸血する可能性もあったため、点滴とは別の腕に点滴ライン(ルート)を取っておきました。手術は19:30開始だったため、それまでは点滴をしながらTVを見たり漫然と過ごしていました。

帝王切開は手術のため立ち会いが必要だということで、今回は実母に立ち会いをお願いし、彼女は18:30頃に来院、コロナ検査を受けてから手術時間まで一緒に過ごしていました。過去2回の帝王切開は夫が立ち会ってくれたのですが、今回夫は子ども達の世話のため自宅にいました。

手術開始時間の19:30になると、自ら歩いて手術室まで行きました。その後裸になり、手術台の上に寝転びます。この手術台が結構狭い、落ちないようにと毎回ハラハラします。そして、局所麻酔をするために、体をエビのように丸めます。臨月のお腹は大

きくてこのポーズをするのに苦労しますが、看護師さんがぐっと支えて丸めてくれました。背中に麻酔の注射をし、仰向けで大の字に寝かされます。両腕は固定され、点滴につながれました。体の上にお腹の部分だけ空いたシートが被され、膀胱カテーテルをつけたところで、執刀医が入室してきました。

### ～帝王切開の観察～

手術室で使う天井から照らしているライトは無影灯といって、術野を見えやすくする医療用照明です。その丸いライトがたくさんついている照明の縁に反射して見える術野。視力回復をした目でははっきりと術野が見えました。これまで開腹手術なんてドラマや漫画などでしか見たことがなく、内蔵なども見たことはありませんでした。もちろん自分の身体の中も、健康診断レベルで見る範囲でしか見たことはありませんでした。

自分の帝王切開を照明器具の反射で見て衝撃だったことは、お腹の中の切り方です。メスでスーッと切るのは皮膚だけで、その下の脂肪や子宮は少しずつ切るので。過去二回の既往がありますので、癒着している部分も丁寧に少しずつ剥がしていかれました。切るというよりもハサミで少しずつ断つようなイメージでした。少し切っては止血を繰り返す様子がしばらく続きました。そして、子宮を切っていくとゴポットと言って羊水が溢れ出してくる場面も衝撃的でした。その後子宮を広げて赤ちゃんを取り出すまで、体感としてはお腹の上で餅つきをされているようなグイグイ引っ張られている感覚がありました。医師が子宮の中に手

を入れて吸引器を入れ赤ちゃんの頭につけ引っ張り出すと、赤ちゃんが大きな産声とともにお腹から出てきました。赤ちゃんが出されたあとに、臍帯と胎盤が出てきます。これらの色や形状の生々しさと、赤ちゃんに栄養を送る装置を身体が作る機構に衝撃を受けました。それは、赤ちゃんの誕生とはまた違う感動でした。

今回、部分麻酔で意識があったため、自分の帝王切開を見るという貴重な体験ができました。不思議と怖いや気持ち悪いといった感情は起こりませんでした。「すごい、こんな風になっているのか」という興奮の方が大きかったです。ですが、手術は手術。赤ちゃんが生まれた後の処置から少しずつしんどくなってきて、呼吸が乱れたり酸素を吸いすぎて過呼吸のような症状が出たりして、やっぱり今回で帝王切開は最後だと強く思いました。

## 4. 術後

### ～回復までのプロセスと子育て～

手術の準備を含めた開始は19:30で終わりは22時頃でした。癒着などもあり通常より時間がかかっている方だと思います。手術が終わると、服を着せてもらい、ストレッチャーで移動、個室のベッドに寝かされました。そして、足には血栓予防のための装置が装着されました。麻酔が聞いているため痛みはないのですが、下半身は全く動かせないためベッドで横たわったまま、腕を伸ばして届く範囲に置いておいたりモコンでTVを見たり、水を飲んだりして、少し寝たりしながら一晩過ごしました。

だいたい術後一日目に、歩行ができるようになります。自力でトイレに行けるようになると膀胱カテーテルを抜いてもらいます。ご飯もおかゆから食べられるようになってきます。わたしの場合は、麻酔のせいかなにしびれが残り歩行ができるようになったのは術後二日目でした。歩行ができるようになるといっても、最初は生まれたての子鹿のように、点滴台を支えに少しずつしか歩けません。お腹も痛むため、前かがみになって少しずつ動きます。寝返りも激痛が伴うため、退院まで電動ベッドを操作しながら、お腹に力をかけずに起き上がったたり体勢を変えたりしていました。

入院は出産日を0日として7日間が基本とされていましたが、経産婦の場合は医師の診察で可能と判断がされた場合1日前に退院することもできました。わたしは上の子達のことを気になっていたので、1日前に退院することにしました。退院したその日の夜から、上の子達の寝かしつけや添い寝を開始したため、入院していた方が身体的には負担が少なかったように思います。退院後には子育てと身体のケアとの両立が始まります。寝ている状態から起き上がるのに痛みを感じなくなるまで二週間ほどかかりました。

帝王切開の傷の痛みだけでなく、大きくなっていた子宮が元の大きさに戻る後陣痛と言われる痛みもあります。後陣痛は出産を重ねるほどに痛むと言われていますが、これがうずくまりたくなるほど痛い。後陣痛が起こるとすべての動きをストップして耐えるしかありません。この痛みはロキソニンなど効きませんでした。

## 5. さいごに

「自分の帝王切開を見た」というと、驚かれたり、よくそんなことができるねと恐がられます。帝王切開は回数を重ねると子宮破裂の可能性が高まるため、一般的には3回程度までと回数を重ねない方が良いとされています。わたしも子ども3人共に帝王切開での出産だったので、今回で最後だと決めました。ですので、最後に貴重な体験ができたことを嬉しく思います。帝王切開は麻酔が効いているから痛くない出産だと言われることも多いのですが、術後の痛みは大きく身体の回復にも時間がかかります。なんせ50cm、3キロの赤ちゃんを出すために、20cmほどお腹を切るのですから。

### 篠原ユキオ

1948年 東大阪市生まれ  
京都教育大美術科卒  
京都精華大学名誉教授  
(公社)日本漫画家協会参与  
FECO JAPAN 会長

各地の寺社に見られる千社札は人々の寺社への信仰心や願いのために許可を受けて貼り付ける物で、勝手に張り付ける事はできない。  
よくニユースになる歴史的建造物などへの落書き類とは根本的に異なるモノである。

### お札の想い

千社札やお札に限らず、巷には多種多様なシール、ステッカー類が溢れている。旅行鞆に貼られた航空会社やツーリストのステッカーなどはその人の旅行者としてのステータスシンボルであったりする。落語『牛ほめ』の中に、家の普請を誉めて小遣いを稼ごうとする男

が、床柱の大きなフシを指してそこに秋葉さんのお札を貼ればフシを隠せるし火除け魔除けにもなると言う件りがあるのだが、わが家の玄関には転居した時から貼られている小さなお札があつて、それが何十年も経つた今も剥がせないままである。



## ヘルプマーク

ヘルプマークは目に見えない障害を持つ人や妊婦などのために作られたマークだ。以前に椎名林檎さんの新曲アルバムに関連グッズがこれに酷似していたという事でニュースになったので知った人も多いだろう。このマークのついたタグを見えやすい所やバッグなどに付けて健常者にアピールするためアイテムだがまだまだ認知度は低いようだが障害者に対する意識の高まりは近年進んでいるが実際の行動には繋がっていないように思える。



思い返せば昭和の時代は差別表現となるような事象はあらゆる部分に見られた。

丹下左膳も眠狂四郎も座頭市も障害者である。

昭和にはそういうヒーローたちが大勢いたのである。



## フランケンの食材



時代劇に登場する長屋の住人の着物はたいていが『つぎはぎ』だらけである事が多い。貧しさを表現する定番ビジュアルである。

ところが現代ではパッチワークとして小さな袋物からタペストリーまでさまざまな表現がみられる。古布や着物のリサイクルなどで作られた個性的な女性たちのファッションもそのひとつだ。

私もおパッチワークジャケットをいくつか持っているが、実際に街中で同じように着ている男性と出会う事は少ない。

漫画家としてはフランケンシュタインがパッチワークジャケットを着ている場面を考えたりするが、現代では微妙な表現とされるかもしれない…。

## 野球小僧の記憶



〈ナイスキャッチ!〉

団塊世代の男の子はそこそこの空き地があればどこでも野球をしていた。

少年野球のチームなどは珍しい時代だったが、それぞれが愛用のバットやグラブを持って集まった。

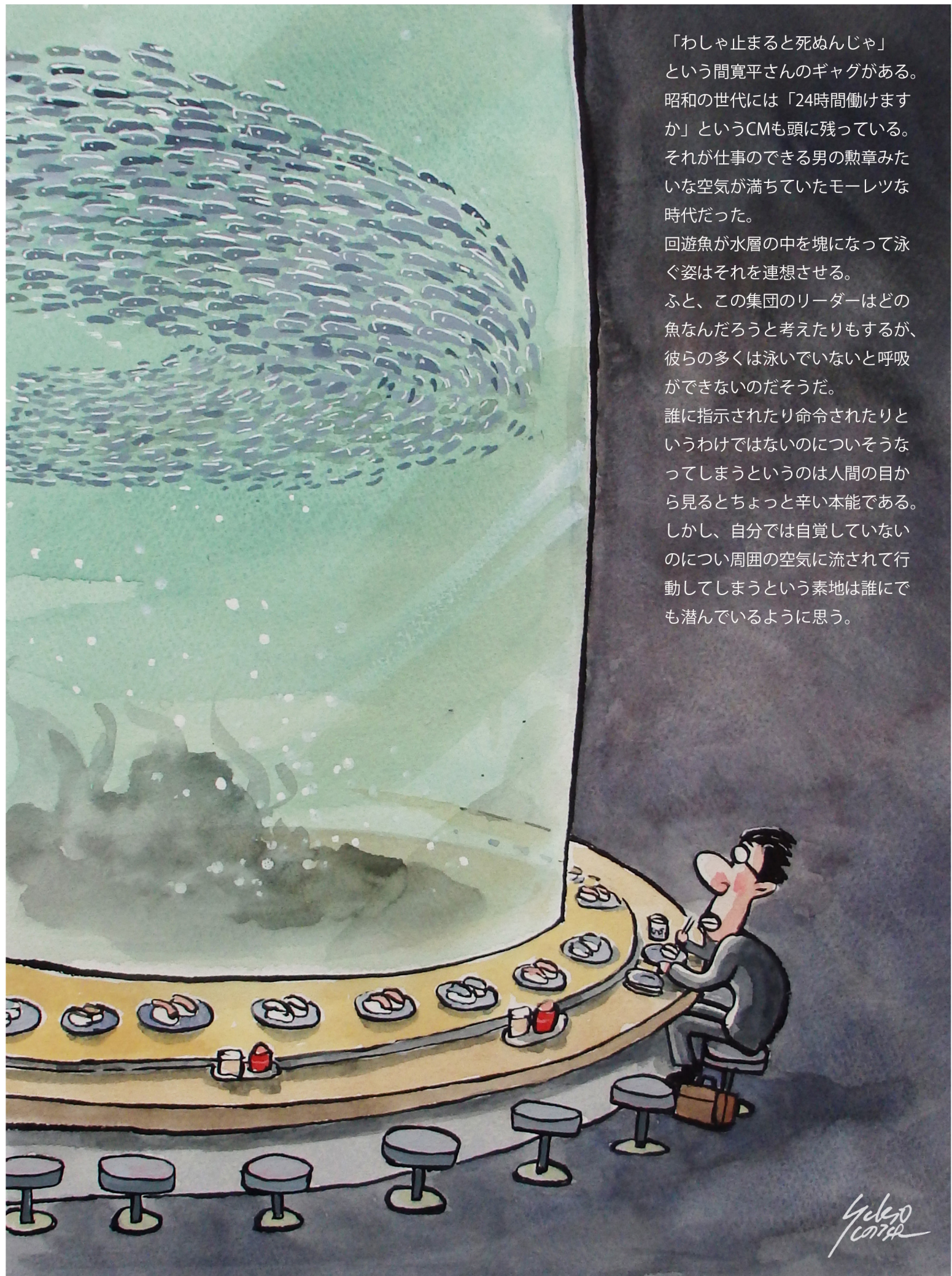
グラブを持っている子が少ない時はお互いにシェアして使った。

近所の家にボールが飛び込んでカミナリ親父に叱られるという、漫画の定番シーンもごく普通の出来事だった。

草ムラに転がったボールを探していたら犬のウンチが付いてしまったり、うっかり踏んでしまったりというのも普通だったが、近くに水道が見つからない時は草や地面に擦り付けたりしてウンチを拭いてゲームを続けたものだった。

今は犬のウンチも見かけなくなったが野球どころかキャッチボールさえする事ができない環境になってしまってる。

野球ファンは相変わらず多いが、近頃は野球はするものではなく、見るものになっているのだなと思うこの頃である。



「わしゃ止まると死ぬんじゃ」  
という間寛平さんのギャグがある。  
昭和の世代には「24時間働けます  
か」というCMも頭に残っている。  
それが仕事のできる男の勲章みた  
いな空気が満ちていたモーレツな  
時代だった。  
回遊魚が水層の中を塊になって泳  
ぐ姿はそれを連想させる。  
ふと、この集団のリーダーはどの  
魚なんだろうと考えたりもするが、  
彼らの多くは泳いでいないと呼吸  
ができないのだそうだ。  
誰に指示されたり命令されたりと  
いうわけではないのについそうな  
ってしまうというのは人間の目か  
ら見るとちょっと辛い本能である。  
しかし、自分では自覚していない  
のについ周囲の空気に流されて行  
動してしまうという素地は誰にで  
も潜んでいるように思う。

Yuko  
2014

〈廻る!〉

## 川下の風景⑭

### ～人生は川の流れるように～

米津 達也

#### 【親と子の憂鬱】

18歳で東京に出た娘のひとり暮らしも何とか1年を越えた。仕事と自分のやりたいことの折り合いが上手くいかず、今もその途上で悩み葛藤しながら明日を生きること必死だ。家賃や生活費を考えれば働き続けなければならないから、鬱々と自宅に籠っているわけにもいかない。仕事が全てではないが、生活の基軸として存在するなかで、常に生活を回していかなければならない。日常の生活を生きるという大変さと逞しさを感じるのは親の鼻根目だろう。そんな娘が某テーマパークのアトラクションで働いていたが、今の職場を離れて、別のところで働きたいと決めた。そんな連絡を受け、一度は娘の働いている姿を見に行こうと仕事のやりくりを行ったが、肝心の娘からは反応が無い。仕事を掛け持ちしているのも、そちらが忙しいのだろうと思っていたが、先日、妻を通じてこんな返事が来た。そのアトラクションの仕事、実はひと月前に辞めていて、何故かそれを親に伝えそびれたとのことだった。要は、“言えなかった”のだ。申し訳ない、心配を掛けるから、何となく、どんな感情で彼女が伝えられなかったのかと思うと、逆にこちらが申し訳ないと思ってしまう。対人援助は対象の理解が全てだと偉そうに喋っているも、結局、理解できることは僅かで、そもそも理解しようという姿勢がそこにあったのかと、反省から憂鬱な気分をもたげている。

#### 【植えられなかった稲たち】

代々続いた地主の一族。滋賀の片田舎ではまだまだそんな一族の話聞く機会がある。自宅の家系図を遡ればどこに行きつくのか興味津々だが、当事者たちにとっては埃の被った骨董品扱いかも知れない。本家があり、男兄弟がそれぞれ土地を分け与えられ、そこに家を建てて集落を形成する。分家が分家を生み、〇〇さんという表札はあちこちに点在する。だが、高度経済成長期以降、核家族化が進み、代々受け継いだ土地が順当に引き継がれる世の中でも無い。娘は嫁に行き、嫁いだ先で同じように介護問題を抱えて実家の世話が出来ない。長男は高校卒業と同時に早々に都会に出て、大学生活を謳歌しながらそこで家族を形成して帰ってくる気配もない。残された末っ子が土地の管理と引き

換えに老いた親の世話をしているが、田舎では農業や林業など兼業家業が中心となった今ではいろいろ面倒なことも背負わなければいけない。この親子もそんなライフステージを迎え、90歳に手が届く老親たちはいよいよ今年の田植えが難しくなってきた。長年の付き合いである農協からは、例年の通り稲が届く。老親たちは昨年、末っ子に相談もなく新しい田植え機を購入。使い慣れた機器なら何とかなったかも知れないが、オートメーション化された新しい機器を老親たちが使いこなせるはずもなく、結局は末っ子に押し付けるような形になっているが、もちろん彼はそれをやるつもりもない。老親たちは嘆く。このまま放っておいたら折角の稲がダメになる。なんとか息子に田植えをお願い出来ないだろうか。ある意味、勝手な親の憂



鬱は身近な援助者に届いても、肝心の末っ子には届かない。稲は徐々に生長しながらそこに実りをもたらすことはなく、新調された田植え機は納屋でその役割を果たすことはない。

### 【変化の時間軸】

周囲の援助者は思うようだ。末っ子がちゃんと老親の面倒もみて、田植えのことも協力してあげれば良いのに。長年の農作業で腰の曲がった老親たちを見ているとやるせなさも募ることだろう。しかし、この親子に共有される時間軸がない。時代はこの30年で親子を隔てる時間と価値を大きく変えてしまった。土地や家業を代々継ぐことよりも、別の資産として運用する方が孫たちの負担や利益を考えれば有益だと考えるのも無理はない。豪華な仏壇や墓がステータスとして家族の中心に据わる時代ではない。

せめてもっと親子で話し合えばよかったのに。それも外野からすれば思うことだろうが、“言えない”家族文化を継いできたのは何より老親たちでもある。ゆくゆく、自分たちが出来なくなったら子どもたちにお願ひしたい。そんな解決を見据えた対話が存在し得なかったことは、一度も使われることのなかった田植え機を見ていると分かる。そんなことすら老親たちは相談しなかったし、計画性をもたなかったとも言える。

今はまだ老親たちは生活を何とか維持できる能力を持っている。しかし、90にも手が届く歳だ。元気で長生きも良いが、生物である限りそれが5年先に約束されたものではない。人は当たり前のように老いて、多くが病になり、死を迎える。そして、身近な家族もそれに倣って変化せざるを得ない。外野でいる援助者にとって、

それは危機を感じるものであるかも知れないが、自然の流れと言える。介護保険制度は24年の歴史しかない。だが、老親の介護というライフステージは遠い昔から存在し、戦後の資本主義化と共に長寿化、核家族化が新たな問題を形成してはいるが、介護における変化という時間軸は変わっていない。タイムパラドックスではないが、あまりその時間の流れに逆らわない方が良い。

2024.5.21 米津達也

# こころ日記「ぼちぼち」 その③

## 「性と生」の学習の限界

性教育の研究と実践を始めてから随分長くなった。実は数年前、性教育の研究から離れようと思った時期があった。

その道を極めることは大事だが、そのことしか知らない人間になりたくないなと思ったからだ。性教育という学問はない。特に日本の教育現場では、やらなくても済まされる学習だ。約20年前にあった性教育バッシング以降、日本の性教育は停滞したままであることにも疲れたと言ってもいいだろう。

1999年旧文部省は、「学校における性教育の考え方・進め方」という性教育の指針である冊子を作成した。

今でいう「包括的性教育」を先取りしたものだ。HIVや援助交際などの項目もあり、人との関係性にも踏み込んだ内容であった。全国の学校に配布され、それを元に副読本を作成する行政がたくさんあった。滋賀県も、知人が編集に携わるなどしたすばらしい副読本があった。しかし、2000年ごろの一部の政治家などによる性教育バッシングから、その副読本を使用しないようにと、県内の小中学校への伝達があった。それから20年以上、学校現場での性教育の実践は後退したままだ。

学校現場にいたときは性教育の後退に抗うように、教員仲間に「なぜ子どもたちに性と生の学習が必要なのか」を熱心に説いていた。

しかし、私が転勤してしまうと、その後を引き継いでくれる教員はほとんどいなかった。すでに教員の世代交代も進み、だれも性教育の必要性を感じるものがなくなったのだなと思っていた。



昨年の中を震撼させた芸能界での性加害・被害の問題は、性への関心が高まるきっかけになったことは否めない。出会う人達は必ずこのことに触れる。私たちは、性別に関係なく性被害は起こっていると理解しているので、そんなに驚きはしなかったが、多くの人々が「そんなこと信じられない！」と声高に話題にすることに、とても違和感を持っている。

教育現場での性教育が期待できない中、あと私ができることは、地域での「性と生」の情報発信しかないのかなと考え、相談できる居場所を開室した。まちの保健室「ちむちむ」だ。これからは、今までの研究と実践を活かし、困った人たちへのアドバイスができればいいと思っていた。

いざ活動を始めると、障がいのある子ども・大人を扱う施設、学童、学校現場などで対人援助をする人達からの問い合わせや相談を頻繁に受けるようになってきた。ここ最近メディアが性に関するテーマを取り上げるようになり、声に出していいのだという空気が社会に広がってきたのかもしれない。



## まだまだできることがある？

一つ一つの困りごとに答えを出すのは簡単だが、それでは根本的な解決策にはならない。しかし支援する人たちは、今すぐにその問題を解決したいという。現場の切実感が伝わってくる。

人間は日々生きている。悲しいことがあっても食べては眠る。性もとても日常的な

ことだ。性は特別で口に出すのも恥ずかしいのは理解できるが、目の前の課題を見過ごすのは良くないことだ。今までのどの現場でも、性に関わる課題はあったはず。何とか解決したいと勇気を出して相談したいという人が増えてきている。相談者からは「今まで誰に相談していいのかわからなかった…」と。

少し前の新聞に「むかし児童虐待を扱うのに、性の問題を取り上げることが少なかった」とあった。養護学校の先生から「生活指導をしているから、性教育は特にしていない」と、やんわり性教育の必要性を否定されたことがある。

しかし、ようやく支援の中での性の問題を、前向きに捉えなおす流れになってきたのだと思う。今やスクールカウンセラーなどの心理の人達も、性加害・被害について積極的に学んでいる。性に関わる問題がないかという視点で子どもと面談することは、とても大事だ。特に思春期の子どもたちは、大人にはなかなか打ち明けられないからだの悩みを抱えていることがある。性教育の必要性に声を挙げてくれる人が多くなるのは嬉しい。

## 大人のための「性と生」の学習

支援をする人たちへの研修では、必ず事前アンケートで「あなたはいつどのような性の学習を受けましたか？」と尋ねることにしている。

例えば、保育園に通わせる養育者（30代～40代）へのアンケートでは、約80%の人が学校などで学んだと答えている。「その内容は？」との答えは、保健体育の授業で「男女の体の違い」「月経、精通」などが主だった。あるいは集団での宿泊研修前に女子は生理の話とのこと。では男子はというと、違う場所でビデオ視聴をしていたという人もいた。これは学校での教員研修でも、同じような結果だった。

私自身でいえば、もう50年以上前のことだが、小学6年時に女子のみの生理のことを教えられ、男子は外で運動をして

いたのを覚えている。今も変わらない状況に啞然とするしかない。多くの方はそれが性教育だと思っていることがよくわかる。

今「包括的性教育」という言葉を広めているが、まだまだ聞きなれない言葉に、研修会では質問が相次ぐ。

「国際セクシュアリティガイダンス」（ユネスコ編）をベースに、私たちは性教育を進めるべく新たな運動を始めている。

まず、今までの性教育のイメージを変えていくこと。性教育は、よりよい人間関係の学び、人権の学び、自分のいのちを守り安心安全な生活が送れることにつながる学習、そしてすべての人たちのウェルビーイングを目指すことだ。

学校教育を変えることは難しい。だが幸い今、学校への出前性教育に出かける機会が増えている。私は「すきま性教育」と言っているが、少しでも子どもたちに届けられることがあればと頑張っている。

あちこちで性加害・被害の事例を聞くなか、何から手をつければいいのか、どこから始めればいいのか悩むことが多い毎日だが、性のことをちゃんと学びたいという大人がたくさんいる現実、私にはまだまだできることがある、やらなければならないことがあると思うようになってきた。知識こそ性の問題を減らすことにつながるからだ。

学生や若い人たちから、「目からうろこだった！」「もっと早くに知っておきたかった！」という声を聞くと、前を進むしかないと思っている。



つづく

『父が自分の身を呈して教えてくれたことⅣ -在宅療養の日々-』

高名祐美

令和6年5月23日、父が亡くなって1年。1周忌の法要を、ゴールデンウィークに身内で勤めた。本来の命日5月23日は夫と妹家族でお参りした。もう1年、早いものだとやっぱり思う。

元旦の地震でお墓が損壊したこともあり、まだ納骨していない。父のお骨は仏壇にそのままである。石材店にお墓の修復を相談したが、順番待ちで取り掛かるのがお盆過ぎになると言われた。そこで地震後の生活も少し落ち着いてきたので、先日、夫と妹家族でお墓の修復をこころみた。素人ながら機械の力を借りて、なんとか元の形に修復することができた。素人でも道具を使って知恵と力を集結すればなんとかなるものだった。7月の母親の27回忌に合わせて納骨しようかと妹と相談している。なにかと妹家族と父のことで話をすることも多く、嬉しく思う。

今回は、父の28日間の在宅療養生活を振り返りたい。

#### Ⅳ 在宅療養というもの

病院で退院前カンファレンスを開いてもらい、退院日が4月26日と決まった。担当ケアマネは、私が信頼するNさん（MSW時代からの付き合い）にお願いした。Nさんは病院スタッフ、主介護者の妹、そして私としっかり向き合っていて、本人・家族の思いに寄り添うケアマネジメントを実践してくれた。Nさんが担当でよかったと心から思う。介護保険サービスは福祉用具（電動療養ベッド、褥瘡予防用マット、吸引器）のレンタル、医療面は医師による週1回の訪問診療、1日2回の訪問看護、訪問リハビリを週1回計画してもらった。

4月26日（水）退院当日。病棟からたくさんのNs、そして主治医の先生が父の退院を見送ってくれた。病棟看護師と訪問看護師が同乗して、寝たきりとなった父を病院救急車で搬送してもらった。自宅が病院から近いので5分ほどで到着。小雨降る寒い日だった。ストレッチャーで家に入った父は家だとわかったようなわからないような感じだった。病棟看護師が「お家に来ましたよ。」と声掛けすると、にっこりと笑った。周りのみんなも笑顔で迎えた。「今日からみんなと一緒にだよ。病室での一人ぼっち解消だね」、私はそう父に声掛けた。

準備した電動療養ベッドに父が落ち着き、私と訪問看護師はベッドサイドに

腰をおろし、父を見守る。妹家族はケアマネさんやこれから関わってくださる支援者さんたちとサービス担当者会議に出席し、これからのことを話し合った。医師から病状の説明を聞いて、父に残された時間がそんなに長くはないと妹と確認しあっていた。その残された時間を少しでも楽に、家族と過ごすことができたらと願った。

その後、病院では面会できなかつたひ孫たちもお見舞いにやってきた。私の夫も大きな花束をもって、「退院おめでとございます」とやってきてくれた。沢山の人に祝ってもらった在宅療養スタートの日。私達が決めていたのは「最期まで自宅で看ること。もう入院はしない。」そのことをみんなで確認し、会議は終わった。そして家族だけの時間。点滴が栄養源の父は食べれないけれど、みんなで退院祝いの宴をひらいた。

MSW時代に在宅療養への支援は数多く実践してきたが、今回は自分が在宅療養支援を受ける当事者となった。体験してまず思ったのは、在宅療養が『贅沢』だということだった。看護師が自宅まできてくれて、父ひとりのためにめいっぱいその時間を費やしてくれる。病院では病棟内に複数の患者さんがいて、ケアに費やす時間は限られてしまう。ナースコールを押しても、タイミングよく看護師さんがきてくれることもままならなかつたりする。それで父も寂しがって、妹や私に電話をかけてきたりしていた。家では、訪問看護の時間は看護師さんを独り占めできる。体をていねいにふいてもらったり、髪の毛を洗ってもらったりする。看護師さんは父や私達介護者の不安を受け止め、要望にもしっかり応えてくれる。「なにかあったら、家だとすぐにきてもらえないから心配」と在宅療養を戸惑う声をよく聴いていたが、その不安も取り越し苦労である。電話で相談すると確実に対応してくれ、ときに緊急訪問も。看護師さんが家にきてくれるだけで安心できることを実感した。そして状態確認後、担当の先生へ連絡し、指示をあおいでくれたりする。医師の指示で追加の処方がでたりすると、病院にもどって再び訪問してくれたりする。「贅沢すぎる」と思った。

とはいうものの、在宅介護はなかなか大変だった。父の場合、食事介助がなく、排泄ケアも尿バルーン留置だったので、ケア量は少ないほうだった。主介護者となる妹は、入院中に介護指導を受け、おおかたのケアはほぼ完璧。ただ、吸痰だけは「怖い」というので私の担当となった。それでも私の手技では限界がある。訪問看護で時間をかけてしっかり痰を吸引してもらった。そして点滴を毎日。一日の介護スケジュールは、訪問看護の時間を基本にして作成され、そのとおりに実践。実施したケア内容を日誌に記録した。

一番大変だったのが父の要求に応えることだった。少しでもそばを離れると

「寂しい」とブザーを押してくる。妹夫婦、妹の次男が交代で父のそばにいることになった。妹は家事をしながら、妹の夫は仕事にいきながらよく付き合ってくれていた。妹の次男も祖父の介護に協力的だった。仕事をやめてから引きこもり気味だったこの息子が、訪問看護師さんと会話し、祖父のそばにすわって母を助けるようになった。この変化は大きかった。介護は一人だけではできない、そう強く思った。交代できる人がいること、みんな同じ気持ちで関わること、それが大切だと思った。

痛みへの対応として処方されている医療用麻薬の量が徐々に増え、寝ている時間も多くなっていった。そしてせん妄がひどくなっていった。昼夜逆転、状況がわからない、急に怒り出すなど・・・それでもひ孫が来ると、嬉しそうに手を出して握手したり、頭をなでたりしている。日が経つにつれ、妹の介護疲れが顕著になってきた。交代を申し出るが「わたしは大丈夫」と自分のペースを崩そうとしない。妹は「わたしの家族だから」「わたしたちはわたしたちの生活のペースもあるし」「自分たちのペースでこれからもやっていくつもり」と、姉の出る幕はない。それがとても寂しく思えた。私の父でもあるのに。私だって父のために精一杯したいと・・・しかし私は他家へ嫁いだ人。現在の家族に任せるしかないと自分に言い聞かせた。

これで最期かと思った局面が2回訪れた。1回目は5月1日。父が家族を自分の周りに集めて、ラストメッセージを伝えた。声がうまくだせず話ができないので、ホワイトボードに書いてくる。

「家を守ってほしい」「家族みんな仲良くしてほしい」。みんなで父を囲んで「わかったよ～」「みんなで守るよ」と口々に応えた。

2回目は5月17日の夜。自宅にいた私に、妹の夫より電話。「お義父さんの溶体が悪い。病院にも連絡したのですぐに来てほしい」と。夫と急いで実家へ向かった。妹がパニックになっている。みんなが父の周りに集まっている。

妹：ねえちゃん、お別れや。お別れのハグ、いっぱいしたよ。ね、よしおちゃん。  
(泣きながら父の顔をなでている)

看護師：先生に状態報告しました。脈も弱いのでいよいよかもしれません・・・私もずっとついていきますから。みなさんもそばにいて、声をかけてあげてください。

私：家に帰ってきて3週間たったね。帰れてよかったね、みんなと過ごせたね。

孫（私の長女）：じいちゃん、小学生のときいつも病院につれていってもらったね。駐車場で車の止め方、教えてくれたよね、ありがとう。

私の夫：お義父さん。お義父さん。いっぱいしてもらったね、ありがとう。

孫（妹の次男）：じいちゃん。ようがんばったな。みんなで仲良くやな、わかったぞ。

妹の夫：お義父さん、みんないるよ。家、守るから。自分に任せて。

と口々に声掛け、父の体をさする。緊急訪問してくれた看護師もそばにいて血圧をはかったり脈をみたりしてくれている。

看護師：先生に状態報告しました。いよいよかもしれません・・・私もずっとついていきますから。みなさんもそばにいて、声をかけてあげてください。

そこへ遠方にいる孫（妹の長男）から電話。

孫（妹の長男）：じいちゃん！清孝やぞ。

（その声が聞こえたようで反応がある）

孫（妹の長男）：じいちゃん、俺と一緒に酒のむんやぞ。お盆に帰るからそれまで頑張り。えいえいおーやぞ！

「えいえいおー」に家族に笑いが起きる。その言葉と家族の笑い声で父は目を開け、瞬きし、みんなの顔を見た。手にも温かさが戻ってきた。緊急訪問してくれた看護師が血圧をはかる。

訪問看護師：血圧、上がりました。バイタル安定してきています。

みんなが口々に「すごいぞ！」「復活した！」と歓声をあげる。

父は孫の電話で復活し、訪問看護師はいったん帰ることになった。

この日は持ち直したが、その後徐々にレベルダウンしていった。

（次回に続く）



*miho Hatanaka,*

スクールカウンセリングの担当校では不定期ながら年に数回のカウンセラーだよりを発行している。助産師として行う性教育の場面でもスクールカウンセラーとしての現場でも、子どもたちに向けて伝えたい想いは同じ。“あなたがしあわせでありますように”。今回は、昨年度の“子どもたちへのメッセージ(ねがい)”と、掲載した4コマ漫画を。



【第14話 伝えたい想い：昨年度のスクールカウンセラーだより から】



■ 中学校5月号 こころのおはなし 自分に“問いかけてみる”ということ

みなさんが最近、一番うれしいと感じた自分の変化は何でしょうか？  
 例えば、赤ちゃんはとてもシンプルで、ある日、歩けるようになったら何回も何回も、転んでも起き上がって歩こうとします。歩けることがうれしくてたまらないのでしょ、だって自分が「行こう」と思う方向に、思うように“自分の意志と力で”動いていけるのですから！ 大人になるにつれてそのような目に見える変化は少なくなっていくますが、最近の心理学では、人は歳をとっても死ぬまでずっと、成長をし続けると言われています。そしてその成長を感じられ、喜べる人が、心の健康度が高く幸福度も高いとのこと。  
 さてみなさんはどうでしょうか。  
 変化は目に見えるものばかりではないし、また、良いことばかりでもないかもしれません。でもまずは自分の変化を感じ、「それはどんな気持ちかな?」と感じてみるのが、心を大切にするための一歩です。あまり好ましくない想いでも、その気持ちとどのように折り合いをつけていくかを考えてみることもできますよ。時々静かに、自分の心に問いかけてみてくださいね。



## スクールカウンセラーだより

★ 中学校 令和5年2年生特別号

2学期が始まったばかりの9月1日(金)、2年生ではメンタルヘルス授業を行いました。ストレスやレジリエンス(元に戻ろうとする力)について話をしたほか、みなさん自身が行っている“気分転換の方法”について話しました。真剣に、とてもよく聴いてくれて、大切なことをたくさん学んだようです。今回は、感想の一部を紹介します。



■今日の授業では「立ち直る力」が必要だとわかりました。私は、今まで「心が傷つかない方法」を探していましたが、いざその方法が効かなかったときはどうすることもできないことに気づきました。そして、立ち直るには自分の好きなこと、得意なことが生かされると知り、これからはそれらを大切にしていきたいと思いました。

■私はポケセンがアニメとかゲームとか友達とかいくらでもあるので自分で自分が素晴らしいと思いました。これからもポケセンを増やし続けながら、自分も誰かにとってのポケセンになりたいと思いました。

■「折れない心」じゃなくて「立ち直る心」っていうのがとても自分にとって励ましの言葉になりました。

■自分はよく自分のことを幸せじゃないなと思ってしまうけど、何か一つでも幸せなことがあればそれだけで幸せなと思っていいし、自分に自信を持っていいという考えを持っていきたいと思う。

■心へかかる負担が溜まっていくと心だけではなく体にも悪い影響が出るということを知りました。だから、そのようなときはしっかりとケアをするようにしたいです。

■何かに辛くなったり、ストレスと感じたら一回寝るなどの「心」を安心させていった方がきっと、いい感じに「心」が安定・安心できるということがわかってとても良かったです。

■人はつらいことや嫌なことがあった時でも、立ち直る力を持っているとわかりました。これからストレスを受けようがないことがあっても、自分のことを信じて、ゆっくり休み、自分を大切にできるように心がけようと思いました。

■ストレスは今までは我慢して過ごしていることが多かったけど、好きなことをしたり、人に相談したりすることが大切だと思った。

■僕は、悩みがたくさんあり、その解決策は、あまりたくさんありませんでした。ですが、この授業を聞いて、他の人は悩みをこんなふうに解決しているんだと思い、ためしてみようと思いました。

■今日の授業でみんなも自分と同じような悩みや不満とかあるんだなと思いました。でもそんな中でも大切な友達とか一人でもいたりするといいなと思いました。

■僕は、何でも自分で抱え込んでしまいます。それは、自分の中で、誰にも迷惑をかけたくないとってしまうからです。でも、お話を聞いて、これからはいろんな人に頼っていいかなと思いました。

■円グラフで悩み事、みんなの見てたけど、みんな色々な悩みがあり、それでも一生懸命学校に来ているというのがすごいなと思いました。

自分の心や体について考えるだけではなく、身近な人たちのことを気遣い、“自分には何ができるか”を真剣に考える言葉も多くみられました。人と話をする大切さにも気づいた人が多かったようです。

また、「心と体は密接に関係しているため心を大切にすることで自分の命を守ることにつながるから心を大切にしていきたい」という人や、睡眠の重要性、スマホを見過ぎてしまうことの悩みなど、日常生活をととのえることが心と体の健康を守ることに気づいた人もいました。そのほか「前向きな気持ちになれた」、「授業を聴いてとても安心できた」、「人それぞれ心の強さや悩みは全然違うけどみんな生きづらさを感じたり不快に思うことは誰にでもあることが分かった」ほか、自分の心を「ポジティブでいい心だと思う!」、自分のよいところを素直に認められる人もいてうれしかったです。

心は自分の大切な一部。どのような話が心に残ったかは人それぞれ違うと思いますが、みなさんが心も体も良い状態であるように、何か役に立つことがあったならいいなあと思います。SC 畑中美穂

# スクールカウンセラーだより

★ 小学校 令和5年度3月号

6年生のみなさん、ご卒業おめでとうございます 🌸

小学校での生活を終え、春からは中学生。  
今、どのような気持ちで過ごしているでしょうか。  
うれしいばかりではなく不安もあるかもしれません。

そして 1年生、2年生、3年生、4年生、5年生のみなさん、  
春からはあたらしい学年になりますね。

こころ ととの あたら せな  
心を整えて新しいスタートに備えましょう。



ぶうさん はたなかせんせい

## ■こころのおはなし■

贈ることば：“好きなことをふやしましょう”

みなさんは、何が好きですか？ 得意なことは何ですか？  
自分の、“こういう部分”はいいなあ。好きだなあ”と思うところは  
どこなところですか？  
「野球が好き!」「歌がうまい♪」「元気がない友だちに話しかけてあげる」…ほかにたくさん、思いうかぶかもしれませんね。  
“自分の良いところ”をたくさんみつけることは、とても大切なことです。  
人は誰でも、生まれたときからその人らしい良さを持っていて、その良さをいかして“育っていき”とする力があると言われてます。「元気がある」「力が強い」「かけこが速い」というのはわかりやすいかもしれません。  
でも例えば、自分ではそれほど“いい”とは思えないことでも、実は“良さ”であることもありますよ。「泣き虫」な人は、心がとてもやさしい人かもしれないし、「何をやるのにも時間がかかる」人は、慎重で丁寧かもしれない。「おとなしい」人は、人の話を聴くのがじょうずかもしれない。これらはどれも、その人の“能力”で、“自分が何に向かうか”を考えるとときのヒントになります。そしてその“能力”を自分で大切にしていこうに、好きなことが仕事になるかもしれないし、おじいさんやおばあさんになっても続けられる趣味になるかもしれません。同じ趣味の人と友だちになるかもしれませんね。

誰にでも、へこんだり何もしたくなくなったり、ひどく自信がなくなったりするようなことは起こります。そのような時に“私にはこれがある”と思える何かがあると、また前に進む力もわいてくると思えます。“あなた”らしく生きていける力となるもの。そういったものをみなさんがみつけ、大切に育てていけたらいいなと思いました。

\* \* \* \* \*

### 【保護者の方へ】

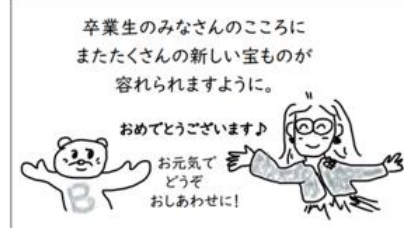
お子さんからの相談だけでなく、保護者の方からのご相談もうかがっております。お子さんが安心して毎日を送るようにご一緒に考えていけたらと思います。「友だちとの関係に悩んでいるようだ」、「どのように子どもと接していいかわからない」、「学校に行きたがらない」など、どうぞお気軽にご相談ください。

カウンセラーへのご相談の申し込みは、



までご連絡ください。

## くまの Bu さん miho



スクールカウンセラーだより

（中学校 令和5年度3年生特別号）

🌸 3年生のみなさん、ご卒業 おめでとうございます 🌸

中学校での生活を終え、春からはそれぞれ新しい道を歩み始める今、どのような気持ちで過ごしているでしょうか。うれしいばかりではなく不安もあるかもしれません。心を整えて新たなスタートに備えましょう。



■ ころのおはなし ■

贈ることば：“自分の内側を育てる”ということ

みなさんは、何が好きですか？ 得意なことは何ですか？ 自分の、“こういう部分はいいなあ。好きだなあ”と思うところはどんなところですか？

「バスケが好き!」、「歌が上手い♪」、「元気がない友だちのことを気遣える」etc…。どんなことが思い浮かんでくるでしょうか。右下のメッセージは、今年度のPTA新聞最終号に私（畑中）が寄せたみなさんへのメッセージです。「すでに自分の持っている良さや才能」「問題解決のために、いまできること」を心理学用語で“リソース”と言います。

“自分の良いところ”と言ってもいいかもしれませんが。“人は誰もがそのリソースを備えており、成長する存在である”と心理学では考えられていますが、大切なことは、そのリソースに自分自身が気づいており、伸ばしていくための環境を整えることができるか、ということです。これがなかなか難しく、誰かから言ってもらって初めて気づくこともあります。

好きを、増やす。得意を、伸ばす。持ち味を、活かす。

おめでとう!

自分の一番の応援団長になって、“あなた”自身を豊かに育てていけますように。

私が臨床心理学を学んだ先生は、常々「てめえの好きなことで勝負しろ」（江戸っ子!）とおっしゃっていました。それは自分の好きなこと、得意なことがその人を支える力になり、その人がよりその人らしく生きていけるからだ、私もだんだんとわかってきました。誰にでも、へこんだり何もしたくなくなったり、ひどく自信がなくなったりするようなことは起こり得ます。そのような時に“私にはこれがある”と思える何かがあると、また前に進む力もわいてくると思います。好きなことが仕事につながる人もいるかもしれません。共通の話ができるサポートし合える人に会えるかもしれません。あなたらしく生きていける力となるもの。そういったものを大切に育てていけたらいいなと思いました。

\*\*\*\*\*

- ・「無理せず自分のペース」で。  
「心の容量と相談してみよう!」
- ・頑張って失敗するならしないよりいい。
- ・気持ちが沈んでいる時こそ笑え!
- ・嫌なことばかり考えるんじゃなくて、それを忘れるくらい、頭の中を好きなことでいっぱいにする!
- ・今しかできないことを全力で楽しんで。
- ・自分で「できる」と思ったことは、絶対にできる!
- ・相手のために何かをするのも良いけど、  
自分のためになることもしてあげた方がよい!
- ・自分のよさを出す
- ・自分の心を信じて
- ・勝負だろ
- ・人の夢は終わらねえ
- ・人生は、成功が全てじゃない
- ・生きろ

もうひとつ。  
左の囲みのなかの言葉を一つ一つ、丁寧に読んでみてください。これは、みなさんが2年生の時のメンタルヘルス授業でアンケートに書いてくれた【勇気づけ、励まされ、うれしくなるような自分自身への言葉】です。覚えていますか？ この中に自分の言葉がある人も、もしかしたら今はまた別の言葉が思い浮かぶかもしれませんが。改めて新しい言葉を探してみるのもいいですし、この、みなさんのなかの誰かが書いた言葉をそのままもらってもいいかもしれません。どれも確かに勇気の出る、すてきな言葉だと思います。私も勇気をもらっています。

2年生の時に私がお預かりした皆さんの大切な言葉を、今、お返しします。これらの言葉を心の中に持って、勇気づけられ、“あなたらしく”歩いていけますように。皆さんのお幸せを願っています。心もからだも、健やかでありますように。元気でね(^^) / ご卒業、本当におめでとうございます。

スクールカウンセラー 畑中美穂

## スクールカウンセラーだより

中学校 令和5年度1・2年生特別号

### 🌸 1年生、2年生のみなさん、進級おめでとうございます 🌸

3年生が卒業して、春からはそれぞれ2年生、3年生になりますね。クラス替えがあり、委員会や部活動での新しい役割を担う人もいます。春はエネルギーがたくさん要る季節。心を整えて新たなスタートに備えましょう。



#### ■ ころのおはなし ■

##### “ころとは何ですか？”

“ころ”とは、何でしょうか？ 人からそのように尋ねられたら、あなたはへと答えますか？

これは私(畑中)がもう何年もずっと考え続けてきたことです。「それは畑中先生が臨床心理学を勉強したからだろうな」と思うかもしれませんが、もしかしたらその逆で、私は“ころって何だろう？”ということを知りたかったから心理学を学ぼうと思ったのかもしれない。

もう20年以上になりますが、私は小学校や中学校で性教育「いのちの授業」を行ってきました。(助産師でもあります!) 授業では性の話だけではなく「生きる」とか「いのち」とか「ころ」について、子どもたちと一緒に考えてきました。性や体に関する話ではまだ解明されていないような不思議なことはたくさんあるにせよ、多くの場合、答えを探すことはできます。でも「ころ」とか「いのち」の話には“これが正しい”という一つの答えはありません。

“答えのない問い”を持つ、ということ。心理学では「容易に答えの出ない事態に耐える能力」のことを『ネガティブ・ケイパビリティ』と言います。「どうにも答えの出ない、対処しようのない事態に耐える能力」「性急に証明や理由を求めずに、不確かさや不思議さ、懐疑の中にあることができる能力」のこと。これは一見、マイナスのようにみえるかもしれませんが、“そこにとどまることのできる力”とみれば、“自分にとっての大切なことを守ることができる力”とも言えます。自分なりの問いを持つことも、“何を大切に生きていくか”につながることもかもしれないなあと思います。

\* \* \* \* \*

右の言葉は、2年生の皆さんに“ころとは何か”について書いてもらった言葉です。“定義”とも言えるかもしれませんが。詩のようなすてきな言葉の数々です。1年生の皆さんも、一度考えてみてください。2年生のみなさんには、お預かりした大切な言葉を、今、お返しします。進級しても、心もからだも、健やかでありますように。どうぞお元気で(^^) / 進級、おめでとうございます。

##### ころとは何か

自分の本当の気持ちがわかるころ  
自分の性格や感情などを作っているもの。  
自分が今どういう気持ちなのか知らせてくれる、  
大切な自分の一部

あたたかくて、ポカポカするもの。  
何かを考えたり、感じたりする、人間の軸  
目には見えないが、どんな人にもあって、  
変わりやすいもの  
目に見えなくて、意識の中に存在するもの

##### ころとは、

人間の本体  
なにかをするための意思  
どこにあるか分からない物。  
体の体調をおしえてくれる場所  
存在しない2つ目の心臓  
人生の中のいろんな選択をする場所

##### おもいやり

建物 — 建物は少しずつ作っていくのと  
「心」も少しずつ作っていくから —  
うれしかったことなどを大切におさめておく場所  
本当のことがいえる所。自分の部屋。

体とつながっている、体全体で感じること  
自分の行動と真逆のもの  
きずつきやすいもの  
いやし  
愛だな  
楽しいや悲しいをかんじやすい所

##### ころとは、

ものごとや、相手の気持ちなどを考えたりするための  
とてもいいもの  
自分や人のことを思う気持ち  
自分の味方。守ってくれるもの  
考えること。  
自分そのもの

スクールカウンセラー 畑中美穂

## 言葉に依らない援助の可能性

著：渡辺修宏

企画：渡辺修宏

小幡知史

二階堂哲

---

### ～前回までの内容～

筆者がソーシャルワーカーとして未熟だった頃に出会った、成人男性 A さん。

A さんには、就労する意欲が全くなかった。それがゆえ、近いうちに、公的扶助である生活保護制度を活用しようとしていた。

多くの関係者の説明・説得を経ても話は平行線のままで、A さんの気持ちは変わらなかった。そんな A さんとの関わりによって、筆者が理解していた「公的扶助の意義・趣旨・理念」が揺さぶられるのであった…。

---

### A さんの幸せ

「働いて生きる」、「自立して生きる」という意欲がない A さんは、近い将来の生活保護受給を希望していた。A さんの両親はご健在で、比較的裕福な家庭であったのだが、そのご家族も、「実家をでて単身生活をする、生活保護を受給して、一人で生きていく」という A さんの希望をそのままに、尊重すると意思表示していた。

前回にも記したが、ここで改めて、A さんの強い意志を以下にまとめるので、その内容を確認したい。

- 1 私は精神障害者だ。ちゃんと診断名もついている。
- 2 就労して、社会で生きていくことに、私はとても耐えられない。
- 3 家族と一緒に住み続けることに、私はとても耐えられない。
- 4 生活保護受給は、権利であるから、なんら問題ない。
- 5 生活保護受給をしながら、TV をみたり、ゲームをして、人生を謳歌したい。

以上が、Aさんの考えというか、生き方であった。そんなAさんの考え方に、それこそ以前はご家族を筆頭に、再考を促すかかわりが散々繰り返されてきていた。しかしAさんの気持ちは変わらずであった。

言わずもがなAさんには、十分、就労できるレベルにあるという評価がすでに出ていた。四肢および体幹は健全、言語に基づく意志疎通も当然良好であり、精神疾患の陽性・陰性症状もほとんどみられないので、周囲の理解を得られればなんら問題なく、就労・自活生活できると見込まれていたのである。ただ、そのように頑張ろうという気持ちだけが、なかったのである。

もし、本当にAさんが生活保護受給となり、本当に「TVをみたり、ゲームをして」人生を全うできるのならば、それはそれで、いわゆる「幸せ」なことかもしれない。「幸せ」であるならば、誰がそれを「よくないこと」と否定できるのだろうか。「好きなことをして生きたい」と願うことや、そしてそれが「叶うこと」は、多くの方々も同じように求めることなのではないだろうか。

しかしその一方で、一定の年齢になって、一定の教育や訓練を経れば、地域や社会の維持や発展にかかわる役割が求められるのもまた、多くの方々も当然と考えることである。つまりそれは就労や家事などのことであるが、そういったことを皆が果たさなければ、私たちの今日の社会は、成り立たなくなってしまうだろう。まして、その役割を果たせるだろう技能、能力、才能、機会などが、それなりにあるとみなされれば、なおさらである。そしてAさんには、それらがあるのである。

## 言葉を使わない、Aさんへの支援

Aさんにかかわる援助職者のミッションは、Aさんの「幸せの実現」や、「自分らしい生き方の実現」であるといえる。しかしそれを、速やかで円滑な「生活保護受給の実現」であるといつては、あまりにも安直である。むしろ、生活保護を受給しないでも、「生きていけると思える意欲」をAさんに喚起してもらうことのほうが、より望ましい援助目標といえるだろう。

だが、これまでの取り組みにおいて、そのようなミッションはすべて失敗してきたようである。いろいろな方々が、いろいろな表現を用いて、Aさんに語りかけてきて、ついにはそのように、思っただけでなかったから、今があるのである。相談、説得、情報提供、促し。時には、脅しや説教もあったかもしれない。数えきれないかかわりを経て、Aさんの今の気持ちが固まっているのである。正確なことはわからなかったが、10年以上に渡ってそのような働きかけがなされてきたようであった。

10年を経て、最近出会ったばかりの私が、いったいAさんに何を言えば良いのだろうか。いったい何を、投げかけられるというのだろうか。まさに私は、Aさんに語る言葉をほとんどみつけられずにいたのであった。

文字通り、語り掛ける言葉が見つからなかった。Aさんに対する願いとか思いとか、希望とか可能性とか祈りとか、言葉にならない何かは沸々とわいてくるのに、それらを言葉に紡ぎ合わせて言い表すことだけが、できなかったのである。

そこで私は、言葉を使ってAさんと向き合うことを、あきらめた。あれこれ言うのではなく、その代わりにAさんに、「よかったら、みてみませんか？」と、いくつかの映画をおすすめすることにしたのであった。

Aさんに紹介した映画は10本弱であった。本連載でも以前登場した、「レナードの朝」や「ペイフォワード」など、ひとたび視聴しはじめればすぐにのめりこめるような作品を集めて、そしてその中からAさんに選んでもらって、実際にAさんが視聴できる環境を整えた。うろおぼえだが、確か「ショーシャンクの空に」、「アカシアの道」など、洋画・邦画を問わずに集めたと思う。「なにをもってしてその作品を選んだのか」と問われると、うまく答えられない。ただ、感覚的に、Aさんに見てもらいたいと思って集めた作品であり、ついでに、自分ももう一度見てみようとおもった作品なのである。そう、私もAさんと一緒に、映画を見たのである。つまり、向かい合って語るのではなく、横並びで同じものをみる、というかわりを展開したのである。

## 映画をみて感じる世界

Aさんと一緒に映画をみる途中、あるいは見終わった後に、Aさんが何を感じたのか、何を思ったのかについて、あえて聞くことはしなかった。Aさんも、「なぜ、この映画をすすめてきたのですか」と、尋ねてくることはなかった。ただ、映画の内容に感動したのか、面白かったのかは明らかではないが、「他のおすすめの映画はなんですか？」と、次の作品を知りたがってきた。そういったこともあって、映画鑑賞は順調に進んでいった。

以降、目を開けて、時々、Aさんと私は映画をみる時間を共有した。この、Aさんと一緒に映画をみる時間は、私にとって、「考える時間」にもなった。Aさんに立場になって考えよう、彼を理解しようとしながら、その上で、現在の状況で自分は何をすべきなのか、何ができるのかと、模索する時間になっていたのである。

そういった日々が数週間続いた後、ある日、思いもよらない変化が訪れた。これまでに一緒にいくつかの映画をみてきたAさんが私に、今までにないような落ち着いた口調で、次のように話しかけてきたのだ。

「渡辺さん」

「・・・なんですか？」

「あのですね・・・。働いてみる、っていう手も、ありかもしれませんね・・・。」

「！」

私は絶句した。まさかAさんがそんなことを言い出すなんて、まったく予想していなかったからである。

## その後

その日以後、紆余曲線、二転三転があったものの、Aさんは就労する。つまり、生活保護の申請はしなかったのである。正確には、「申請を先延ばしして、とりあえず働いてみる」という生き方を、Aさんは選んだのである。

就労したものの、「疲れた」と言っただけは仕事を休んだり、「自分には仕事が向いてない」とぼやくことがよくあったが、幸い、その職場の上司に理解があった。Aさんは、すぐには仕事を辞めなかった。

それにしても、Aさんが働こうと心変わりした理由は、いったんなんだったのだろうか。映画を紹介しておいて私がこういうのも変な話だが、そして、まったくもってお恥ずかしい限りだが、私には正直、Aの気持ちの変化の理由がよくわからなかった。どんな映画が、あるいはどのようなシーンが、Aさんにどのようなメッセージを発信して、Aさんにどのような気持ちを創造させたのか、まったく見当がつかなかった。

でも、わからなくてもよいと、私は思っている。あの時も、今も。

それよりも、Aさんがそう変わってくれたことが尊いと感じている。援助者の恣意的な働きかけによってそのような結果に至れば、もちろんそれはそれで良いのだが、「よくわからないけど、よい結果になった」ということもあるのだろうと思う。そんな偶然性に期待するような援助を肯定しては、多くの関係者に対して失礼かもしれないが、私はAさんとのかかわりを通して、「どうしていいかわからないから、ともに学ぶ」を経験したと思っている。そう、映画という教材を使って。

「よくわからない」けど、「よくわからないこと」をして、「よくわからない結果」になった事例など、一般的に、人に話すことではないのかもしれない。そういった意味で、本稿に対する多様な批判が、あちこちからあがってもおかしくない。そうとなれば、甘んじて受ける覚悟である。ただ、恥を上塗りしながら告白を続けることを許していただけるのならば、次のことも合わせて記したい。

私がAさんと最後にあってからもう、かなりの時間が経っているが、今になって私がAさんとかかわりをここで述べたのは、援助者として、「わからないことは、わからない」と認めたかったからである。それは、「わからないことを、わかろうとしない」という意味ではなく、「わからないことを、わかったふうにしなさい」と宣言である。

人を支える、人を助けるって本当に、複雑で、不可解で、簡単ではない。にもかかわらず、あれこれ経験を積んでいくと、時々、「あまりわかっていないのに」、「なんとなくわかったような気になる」ことがある。そして、そんな自分を認めないままでいると、「なんとなくわかったような気がする」ことが、どんどん増えていく。だから自分が怖い。

リポートを忘れた援助者には、なりたくない。そんな思いで、本稿を上梓する。本稿を最後までお付き合いいただき、ありがとうございました。



## 新・島根の中山間地から Work as Life

### 第1回

### 「想像力と、内側からの理解」

野中 浩一



#### 1. あなたの「哲学」は何か

先日、恩師である村山正治先生から声をかけていただき、東亜大学大学院の集中講義で話をさせていただきました。拙著「カウンセラー、元不登校の生徒たちと、フリースクールをつくる」の出版記念も兼ねていただいていたため、本の題名そのままに、フリースクールでの高校生たちとの日常や、子どもたちと一緒に成長していくために必要な過程や集団形成について話をしてきました。



その話が終わったのち、村山先生から私に「野中さん自身が、フリースクールを運営するうえで一番大切にしている哲学は何ですか」との問いをいただいた。私はすぐに答えることができず、少し考えてから「(生徒と接するとき)自分が自分らしくあることだと思います」と答えた。しかし答えはしたもの、言葉だけがひとり歩きしたような、答えとしてじっくり馴染まないような感じが残った。

## 2. つつかえ感

それから1週間が経ち、フリースクールの生徒の保護者さんから情報をいただき、約200名が参加する教育フォーラムに足を運んだ。そこでは社会教育士、学校コーディネーター、高校魅力化に連なる取り組みが紹介されるとともに、参加者同士で話し合う参加型イベントが行われていた。

司会の方とパネリストの方とが「伴走」についてのトークを繰り広げるのを聞きながら、私の頭の中で雑多な考えが巡るのを感じた。なぜ自分は今の仕事をしているのか。身銭を切って、リスクを冒してまで、17年間もフリーランスでこの仕事をやっているのか。もしくは、そうした形でしかやっていけないのか。

また、今回のような大イベントで、その業界の流行の先端をいつている取り組み、地域や人を明るい光で照らそうとする試みに対して、何かしらの抵抗感や猜疑心が芽生えてくるのはなぜだろうか。(※1)

## 3. はぐれる、つながる

私は、不登校の児童・生徒と親和性が高いと感ずることがある。ただし私自身は不登校になった経験はない。そんな私が今の仕事をするうえでの粘りや執着に繋がる原体験は、間違いなく子ども時代の転居・転校体験であろう。

学校から帰ると母が泣いている。子どもである私には、次に行く場所が突然に告げられる。1か月後には家が段ボールだらけになり、クラスの友人と別れの言葉を交わす。好きだったシールやカード、プラモデルなどを交換し合う。そして次の土地に行き、初めての登校をして、知らない人に囲まれる。

父の転勤は大なり小なりこのような感じで、2年おきに繰り返された。神戸、福岡、鹿児島、東京。父と母と私。核家族だったわが家は、(少なくとも私と母にとっては)頼る人がいない土地を、短いスパンで放浪した。行く先々で親切にしてくれる人はいり、気遣ってくれる人もいた。しかしそうした特別な感じは初めの数週間だけで、お互いに慣れてくると初めの過剰なまでのブームは去り、波が去ったあとにぽつんと自分だけがとり残される。まだ子どもであったこともあり、どの土地でも遊び友達はできたが、友達やクラスメートとの関係を通じて、長年の積み重ねのある・なしによるズレ感や、その土地に生まれ育った子だからこそ身に沁みついている場所感(親子間や友人間で長年交換・共有されてきた感覚群や情報群)のなさを、折々に感じずにはいられなかった。

子どもの頃の私は常に、馴染んだ土地からはぐれ、やっとな関係を築いた人ともはぐれ続けていた。そして新たな場所で、その土地に長年住む人との圧倒的な格差の中で、少ない情報と多少の足がかりを駆使

して、新たな関係を模索した。

## 4. なぜ公平なのか

尾崎豊のシェリーの一節、「シェリー、俺ははぐれ者だから、お前みたいにうまく笑えやしない」という感覚。別の言い方をすれば、ふと褒められたときに、なんと返していいか分からず思考停止するほどの悪さの感覚。シェリー的な意味において、私は不登校との親和性が少なからずある方だと自認している。

不登校になりがちな子は、よく何かからはぐれる。言葉、時間、もの、イメージ、目的。はぐれたことに気づかれないままに、集団の中で摩擦が増大し、流れからはじき出され、一緒にいるのに別世界をさまよう存在になる。そして何らかのきっかけで私のところに来る場合がある。

生徒の中で、小学校低学年から学校に行っていない、筋金入りの不登校だった子がいる（そうした子は決して珍しくはない）。高校1年から私のところに通い、朝から夕まできっちり勉強して、合宿や修学旅行のときには一緒に離島や東京に行ってきた。寡黙ながら勤勉である。私が主催するフリースクールでは、毎昼、生徒と職員二十数人が車座になり即興のテーマ（※2）で各自ひと言ずつ話す時間がある。そうしたとき、その子は楽しそうに自分の考えを話す。普段、自分から進んで話をしない子や、自分の意見に自信がない子もまざまざいる。しかし、そうした子も自分なりの考えがあり、なんでそう考えるかを聞けばはっきり答えてくれる。

面談の際、生徒のお母さんから「どうしてそんなに公平に接する場ができるんですか」と聞かれたことがある。本当に公平であるかの自信はないが、公平でありたいとは願っている。特に子どもは、新参者や勝手がわからない者ほど、ものを言うことは難しい。だから、ほとんど声をあげない子の声を聞く。その場にいない子の存在を味わう。これらは私の内にある感覚と共鳴しているため、自然な行為である。

また反対に、声が大きな子2~3人が言った「キックベースしたい」という意見。それを聞いて「みんなが言うからキックベースしよう」という大人の「みんな」の感覚。その「みんな」に自分が入っていないときのいたたまれなさ。遠足やグループ授業でグループ分けをするとき、（クラスの関係性をマネジメントできていない中で）「自由に組んでいいよ」という先生の感覚。ほぼ選択肢がない一本道の既定路線を「自由」と呼ぶその想像力。わが家で繰り返された転居は、こうした疎外を招く言動をキャッチする電波塔を、私の頭にずぼずぼと増設していったようである。

疎外のされ方にもいろいろある。いじめや仲間外れなど表面上や水面下で起こるトラブルによる疎外もあるが、目に見えないズレや違和感の蓄積により、関わりの土俵から相手がやんわり引いていくような疎外もある。学校に限ったことではなく、家であれ、SNS上であれ、関わりをもちたい相手の視界に入っていない自分を感じ続けることで、自分が消えてしまったような感覚に陥ることがある。不登校か

どうかなどは関係ない。人と人との関係をもつとき、目に見えないものやその場にはないものを捉える感性が存在することを願う。眩しい世界には、そうした日陰への配慮が欠けていると感じてしまう場合がある。嫌いなのはそういうところであろう。

## 5. 内側からの理解

村山先生からいただいた問いを、その後もずっと考え続けている。その中で、私の哲学は想像力ではないかと思いついている。ここで言う想像力の対象は、その場にいる人や、語られる言葉だけではない。むしろ、その場にはいない人、見過ごすと発されない言葉、その子自身も気づいていない自分、言葉にできない感覚。そうした目に見えない何かと対話し続ける想像力である。

その人の人生は、言わずもがな、その人のものだ。また、その人本人以外で、その人の人生に大きく左右されるのは（及びその人の人生を大きく左右するのは）、家族である。その一方で赤の他人の私であるが、関わった生徒やそのご家族の求めがあれば、一生関わっていくつもりでいる。それと同時に、その生徒やご家族の求めがなければ、ほんの数年、日々を共に過ごすだけの行きずりの1人であるとも考えている。これは私や主催するフリースクールに限らず、学校や先生、病院や医師も同様であろう。

だからこそ、私は（一生関わるつもりで）思ったことや感じたことをハッキリ言う一方で、その考えはあくまで行きずりに過ぎない私の考えであり、その生徒またはそのご家族にとって大事なことは、その人が最も自分らしく生きられることであると考えている。そのため、心理師であり、福祉師であり、教育者である私は、その人が今向いている方向を理解し、私もその方向を向いて話をする必要があると考えている。

こうした関わりの中核については、先達の言葉に委ねたい。ロジャーズ曰く、相手に「変化を起こさせる」のは、接する側の「態度や方法がどのように（相手に）知覚されているか」だと述べている。また、接する側が「一致した、あるいは透明な状態であり、その言葉と感情が調和した状態であって矛盾がなければ」、また接する側が相手に「無条件に好意をもっていれば」、そして接する側が相手の感情を、相手が「感じるままに理解すれば」、効果的な援助関係となる可能性が極めて大きいと述べている。

また、諸富（2021）は、自分目線のものさしを相手にあてはめて評価したり判断したりするのではなく、「内側からの理解」が重要な視点であると述べている。大切なことは「ああ、この人は、まるで私自身のように、いや、もしかすると、私以上に、私自身になりきって、私自身の内側から、私のことを理解しようとしてくれている。」と感じる理解であり、フレーム・オブ・レファランス（the internal frame of reference）による、相手の内側に入りこむ視点であると述べている。（※3）

発達障害がどうか、学校での適応がどうか、そうした外側からの目線は、本人の人生の歴史からすると、一見さんでしかない他人が持ち出すヒトゴトであろう。多くの場合、本人の目線はまったく別のと

ころを見ており、家族の目線もまた別のところにある。松岡（2014）は、「自分が見ているものと全然違うものを相手が見ていることに気づくときの違和感こそが、文化人類学でものを見ることのおもしろさである」と述べている。私は経験上、この違和感に気づくことができているならば、大概の問題はほぐれると感じている。それは、相手との対話の積み重ねによる相互理解、現在に至るまでの状況や環境の把握、そしてそれらを基にした想像力が作用していることを意味するからである。

人は誰しも、成長する奔流を内在している。身近な人のその流れを、想像力をもって一緒に感じることでできれば、これ幸いである。

※1 この言葉は、参加していた個人やその取り組みに向けたものではない。ある先進的な取り組みがムーブメントとなり、良い取り組みであるとの認識が生じて組織化や公的機関との連携により予算化されたときに、そこの中に含まれないものを想像してしまうのが私の質であり、その点を指している。

※2 ここ最近のテーマは「体育のトラウマ」「家族」「これはイヤ」「陰キャ」「異性」など。著者が事前にエピソードトークをしてからテーマ発表をすることもある。その日の集団の雰囲気、生徒との会話、天気や時事など、場を感じながら即興性をもって設定される。

※3 公立の学校がこうした内側の理解を取りこむためには、溢れる足し算の世界を抜けて、引き算をすることが必要であろうと考えている。それは部活動や労働時間などの「ものごと」の引き算ではなく、積み重なりすぎて微動だにしない、制度や規則など「管理の枠組み」の引き算である。この引き算の参考になる視点は、数十年に一度行われる神社の遷宮ではないだろうか。

#### 引用・参考文献

H.カーシェンバウム, V.L.ヘンダーソン編 伊東博, 村山正治監訳 (2001)『ロジャーズ選集 (上)』誠信書房

松岡悦子 (2014)『妊娠と出産の人類学 リプロダクションを問い直す』世界思想社

諸富祥彦 (2021)『カール・ロジャーズ カウンセリングの原点』KADOKAWA



# ヨミトリとヨミトリ君で 一緒にしましょ！(9)

高木久美子

意識があるのに、わかっているのに、言葉を発しているのにそれが伝わらないことについて、どう向き合い、取り組んでいくかということは、人の尊厳に関わる大切なことです。技術と技能を心で繋ぎ、障害のある方のコミュニケーション支援・レクリエーションの楽しい機会の提供を目指して非営利で活動しています。活動を通して学んだこと、感じたことなどを書いていきます。

## 「進めヨミトリ君！ボケとツッコミと共に」

今号も、前号に続き対人援助学マガジン編集長の団士郎先生の連載ご投稿「晩年D・A・N通信」をお手本に、前号の投稿締め切り日からの約3か月の指筆談ヨミトリとヨミトリ君の活動について、日誌風に書きたいと思います！

### ■2024年3月●日

「Kariya Micro Maker Fair (刈谷メーカーフェア)」に出展参加。錚々たる企業、有名高専、オリジナリティ溢れるものづくりの団体が集う会場に、応募多数の中から選ばれて参加できたことはとても栄誉なことでした。障害福祉の分野の出展が少なく、ヨミトリ君はどうかなーという心配は初日の開場と同時に払拭。二日間の開催中ヨミトリ君のブースに来てくれた方は引きも切らず、たくさんの方がヨミトリ君の説明を聞いて操作を体験、テーブルに置いていたひまわりのパンフレットを受け取っていただきました。遷延性意識障害のご家族をお持ちだったという方の「これを知っていたら」という言葉が胸に。より一層励むことを誓いました。

それにしても、ブースを訪れる人にヨミトリ君のメカニズムを説明し、「私が指筆談で読み取ると、ずっと『超能力ですか』『霊媒師ですか』と言われていたのが、ヨミトリ君ができてから『ただの技能者』だということが明らかになってしまい…」というエピソードをウケを狙って披露するも、皆さん「なるほどね」「そうでしょうね」と。さして驚くふうでもなく、当たり前、普通に受け取られて、おそろべしメーカーフェアご来場者。早く世の中でこんな風に指筆談ヨミトリによる意思疎通の理解が広まったらいいんだけどなー。ヨミトリ君益々がんばって！

### ■2024年3月●日

用事で行った東京から、JR 東日本の「東北日帰り乗り放題(新幹線指定席含む)1万円」切符を利用して新潟のMさんを訪問。平日のため高木単独でのヨミトリ君支援。初。テレビ番組「はじめてのおつかい」は苦難を乗り越えて大成功に終わるパターンがほとんどだけど、高木は撃沈哀れ。レンタルでお使いいただいていたヨミトリ君1号を最新式の4号と取り換えた後、新しいアプリをPCにインストールして更に高度な操作の練習に入っていたくというミッション、だったのに、ヨミトリ君のPC上の設

定が難航し、時間切れで無念の撤退。Mさんに「たかぎさん もっとべんきょうしてきて」と言われてしまいトホホ。本当に申し訳ありません…。指筆談での対話支援も時間が少なくなっていました。Mさん腐らずいろいろ語ってくださいました。ご両親に「おやこうこうできなくてすみません」と書かれました。ご両親が少し長めの旅行に出られる間ずっと施設にいることについて「だいじょうぶだからきかないでいってきて」と。高木が「(旅行の)パンフレット見せていただけますでしょうか」と言ってみると、「みたい。ぱんふれっとみせて。かえったらいろいろきかせて」と。ご両親喜んでおられました。肝心のヨミトリ君4号は出直して、名古屋に戻ってから岡田さんに見てもらったところ、惜しい！PCの接続設定は良い線行っていてあと一步のところだった！って、完遂できなくちゃ意味ないと猛省。

### ■2024年3月●日

新規のご依頼で事故の後遺症で遷延性意識障害となったYさんを訪問。ご家族で指筆談ができる方がいるので、日常のコミュニケーションができておられ、ヨミトリ君の導入もスムーズでした。遷延性意識障害の方のご支援で見受けられるケースですが、どちらかの手に動きがあっても、完全に随意での動きでない場合は、指筆談でもヨミトリ君でもその不随意的動きがノイズとなって干渉してしまいうまく読み取れないことが多いのです。むしろ動かない(目視に至るレベルの動きがないという意味ですが)手の方が読み取りやすい。ご家族が驚かれるところです。「かぞくいがいともはなせるのはうれしいですね。いろいろはなしたいのでたかぎさんまたきてください」と言っていたき嬉しい。

### ■2024年3月●日

新規のご依頼で事故の後遺症で遷延性意識障害となったKさんを訪問。最初にお訪ねした際には皆様に見え具合(ピントの合う距離、およその視野の範囲)、聞こえ具合、痛み・痒み等の有無をお聞きします。Kさんは、かなりの範囲で「みえます」と答えられ、今後のヨミトリ君のアプリの導入にもバリエーションが出せそうで楽しみです。ヨミトリ君の左右の押し分けにより項目を選択・決定するアプリでは、初回からコツを飲み込んで上手に操作されたので嬉しい驚き。特にジャンルがジャズの曲の選択練習をした時は、「じゃすがすきなのでとてもうれしいです」と。著作権フリーの曲を岡田さんがインターネットから探して集めて入れてこられたアプリだったので、喜ばれて岡田さんも大喜び。高木負けじと会話に食い込み、「Kさんはジャズはどんなものがお好きですか。コンテンポラリーとかクラシックとか」と、よく知りもしないのに聞きかじったことのある単語をとっさに並べてみる。「こんてんぽらりーがすきです。」「よかった。項目選択、もう一度やってみますか」「やります」。帰宅してから慌ててコンテンポラリージャズについて調べる。はったりと泥縄式に自分でもかなり恥ずかしいけど、でもおかげでいろいろ新たに知ることができて勉強になりましたよ、Kさん。ありがとうございます！

### ■2024年3月●日

ヨミトリ君プロジェクト仲間の遷延性意識障害のヨーコさんが音楽発表会に参加。指筆談ヨミトリとヨミトリ君で応援しました。舞台上、ヨーコさんがスピーチカニューレで先ず声で挨拶され、それからヨミトリ君でドラムアプリを操作して、音楽療法の先生とドレミの歌をコラボレーション演奏♪そして高木の指筆談介助でご自分の思いと会場の皆様へのメッセージを伝えられました。最後は他の出演者の方々やご関係の方も舞台上に上がられヨーコさんの好きな歌を合唱。素敵な機会にご一緒させていただき楽しかったです。ヨーコさんは自分で語ってヨミトリ君を広めていきたいという意欲を持ってくださって

て、ヨミトリ君プロジェクトのご支援対象者であり同時に頼もしい PR 担当でもあります。これからも一緒にがんばっていきましょう！

### ■2024年3月●日

うーん、今日が東海地区遷延性意識障害者と家族の会「ひまわり」(ひまわり)の会報 35 号の発行日。の予定だったけど、諸般の事情で 1 か月延期。すごいプロジェクトのお話があるけれど、ある程度目途を付けて会報でも発表したい旨も理由の一つ。高木の担当原稿もできていないのがあるでしょう。急げー！

### ■2024年4月●日

昨年 12 月のひまわり主催の講演会アーカイブ動画を観てヨミトリ君体験のご依頼をくださった低酸素脳症から遷延性意識障害となった S さんのヨミトリ君の第1クールが無事終了。指筆談の技能の習得に強い意欲を持たれているご家族。毎日の介護の合間の練習、練習、また練習。そのがんばりに本当に頭が下がります。「文字はまだ読み取れないですが、○(はい)と／(いいえ)はなんとなく違いがわかってきました。でも、たぶんこういう答えかなとこちらが思って聞くからか、答えが○ばかりなんです。本当に合っているのかなって…」とご家族。Sさんは書きました。「あってます。まるがおおいのはとうぜんです。Sのことよくわかっているから。わかりあっているから」「よくわからない時もあるので、自分で練習していて、合っているかどうか確認できないのに、こんなので続けていいのかなと思ってしまったり」「つづけて。だいたいあっているし あってるとかあってないとかきにしないで いっしょにやるのがとてもうれしいので やめないですとつづけてほしい いつでもやって」Sさんの指先から伝わる力は実際は本当にとっても小さくて目に見えないレベルですが、書字には確かにSさんの熱い思いがこもっているのがわかります。その思いの力強さに高木もぐっと来てしまいます。これまでレンタル主体だったヨミトリ君ですが、Sさん宅で譲渡 1 号。しばらく自主練習をしていただき、質問や難しい点は追ってメールやZoomで対応していくことに。がんばってください！

### ■2024年4月●日

昨年 10 月のひまわり三重交流会がきっかけでご依頼いただいた A さんの初ヨミトリ君体験で関西へ。ヨミトリ君体験の初回は当事者の皆さんもご家族も緊張しておられるので、なるべくリラックスしていただけるよう雑談などから入るのですが、関西在住経験のある岡田さんから「いいですか。指筆談も、関西では、ボケにはツッコミ、ツッコミにはボケで返してください。」と厳しい指導が。「ひえー、正しく読み取ることに要全集中の上にボケとツッコミの要素を入れろって、難易度が高すぎ君(泣)」「その調子です」。Aさんから先ずは何か笑いを取らないとと、こちらの肩に力が入る。事故で遷延性意識障害となられたAさん。あえて明るく始めます。いいのかな。迷いながら。「どうも～。ヨミトリ君とヨミ子です～。上沼恵美子さんの「怪傑！えみチャンネル」という番組、前ありましたよね。その恵美子をもじってヨミ子。『怪傑』は意思疎通のお悩み解決の解決で、『ヨミ子の解決！ヨミチャンネル』って紹介してます。Aさん「おもしろいですね」。よかった、掴みは成功。って何なののでしょうか。今後はご支援にネタ帳を用意すること。



## ■2024年4月●日

やったー。ひまわり会報 35 号を無事発送完了。計 34 ページでいつもよりボリューム増で、内容も、昨年 10 月の三重交流会と 12 月の講演会の報告、隔週開催のズームミーティングでの皆様のトークから「災害に備えよう」のタイトルで情報交換。岐阜の嚙下カフェの取材記事も。そしてヨミトリ君の紹介シリーズ第 3 回には今年 2 月に岡田さんが支援に行った全国遷延性意識障害者・家族の会会員の方のヨミトリ君体験記も含まれ、充実のコンテンツとなりました！ひまわりの新規プロジェクトである脳神経外科の先生との指筆談・ヨミトリ君を使った脳波の測定・検証プログラムは、会報ではテストを行ったことを報告し、詳細は追ってひまわりHPやZoomミーティングの場でということに。とてもとても楽しみです！

## ■2024年4月●日

先月ヨミトリ君体験①でお伺いしたKさんのご家族から、体験②に向けての打ち合わせ中に、「見えていると本人は先日高木さんに言ったようなんですけど、目は多分見えていないという診断もありましたし、目の前で私が指を動かしても追視もないし、やはり見えていないのではないかと思うんです。すみません、失礼なことを言って」と。失礼なんてとんでもないです。ものすごく大切なご指摘です。今まで「見えますか」という質問に対して、「見えます」と回答があった時は、すぐ、どの範囲まで見えるか、どのように見えるか、いろいろお聞きしますが「見える」を前提に進めていました。そうなのか…。Aさんは見えているように思えたけど、いや、待てよ、ご家族の気づきは本当にきめ細かく、鋭いでしょう。「見えている」前提で思い込んで進めてしまっていたのでは…。岡田さんにもすぐ相談し、次回にタブレットの視力検査アプリでやってみましょうということに。そのすぐ後のひまわりの Zoom ミーティングで、指筆談で日頃コミュニケーションを取られているご家族から、「うちは、大きめのカラーの絵とか写真を用意して、見えているものを本人に言うてもらうようなやり方で見え具合を確認しました。色の識別のできているかわかったし、絵のどういうところを口にするかで、何に着目しているか、本人の興味もわかったし、よかったですよ」という貴重なアドバイスが。確かに視力検査アプリでは、いかにも「調べられている」と感じるかも。Yさんのお母さんありがとうございます！

## ■2024年4月●日

Aさんのヨミトリ君体験②。ご家族が用意された題材で、やはり、Aさんはよく見えていないことが判明。その見えにくさはかなり重い症状だということもわかりました。「ひかりはわかりますがなにかがうごいたのがぼんやりわかるていどで、ぜんぜんみえないんです いろもわからない」「全体は色がついていきますか」「みどりいろにみえます」

Aさん、ごめんなさい。やっぱり 1 回目は何もかも初めてで、ようやく言葉が届くようになって自分に力になってくれそうな人が来たのに、見えないとかできないと言うと支援が受けられないと心配されたのではと。なかなか言いづらかったのではと今は思いが及びます。「みえないこと、とてもこまったなとおもっていて、つらかったです。たかぎさんにいえてよかったです」と。本当に申し訳なかったと思いました。言い出せない雰囲気になってしまったことが大反省。ご家族の気づきに助けられました。やっぱり違うんじゃないかという違和感を、ご遠慮があったと思うけど、ちゃんと言ってくださったこと。Aさんには、他にも目が開けられなくて見えない方、目は開けられてもよく見えないかたがいて、そういう方にはヨミトリ君も音で確認して操作できるようにしているし、これからもっと工夫するからとお伝えしま

した。Aさんは「あんしんしました」と言ってくださいました。本当に大切な学びでした。当事者の方、ご家族に教えられてヨミトリ君は成長していくことができます。これからも意見を出し合い進んでいきましょう！

## ■2024年5月●日

ひまわり会報 35号を読んでヨミトリ君体験のお問合せをいただいた会員さん有り。嬉しいです。土日の日程が上手く合わなかったのも、とりあえずひまわりアプローチ企画(指筆談による対話支援)のプログラムで高木が単独でお伺いし、Mさんとお話しさせていただきました。ものすごくしっかりしていて、ご家族への思いが深く、特にお母さんのご多忙と負担を心配されていることを書かれました。5年ぶりのお子さんの言葉に、お母さんはたくさんの涙が。「ともだちはだんだんいなくなっちゃったので」とのお言葉が胸に詰まりました。なかなか対面は難しいけれども、同じような思いで皆さんつながりを求めておられるので、ヨミトリ君で繋がっていけるような工夫をします！と宣言。何か良い方法を考えなくちゃ。

みんなでつながっていきましょう。新しい仲間をつくっていきましょう！

No Promises. Just Possibilities.

確約はないです。でも可能性を信じましょう！

あなたがわかっていること伝えたい。

情報を必要としている方、表出しているのにまだ伝わっていないあなたの大切な方に、

ヨミトリ君が届きますように

ご一緒しましょ！

ヨミトリ君HP

<http://www.aizyoushien.com/index.php/yomitol-kun-project/>

[東海地区遷延性意識障害者と家族の会「ひまわり」](http://site.wepage.com/himawari)

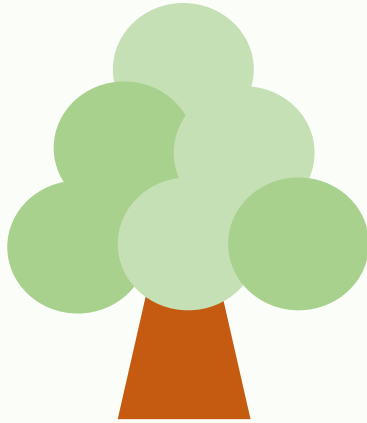
<http://site.wepage.com/himawari>

\*\*\*\*\*

<筆者プロフィール>

インドネシア語・英語通訳・翻訳を経て、介助付きコミュニケーション「ヨミトリ」による意思疎通支援をライフワークとする。コミュニケーション支援の任意団体「ご一緒しましょ」代表。脳卒中障害者のいきがづくり「NPO 法人ドリーム」理事。「東海地区遷延性意識障害者と家族の会「ひまわり」会員。第52回NHK障害福祉賞優秀賞。ヨミトリ君共同考案者。

ご一緒しましょHP <https://www.goisshoshimasho.com/>



## こかげのにちじょう⑧

～自作自演～

鳴海 明敏

5月某日

### <エピソード>

夕食後、それぞれがテレビを見たり職員と話したり和やかに過ごしている2階ホールに、小6男子の次郎くんが走り込んできて、「Aくん（中2男子）が、チンチン出してます～」と大声で叫んだ。ホールに居た皆が何だろうと注意を向けると、次郎くんは再び男子棟に走って行った。しばらくすると、また次郎くんがホールに現れたとおもったら、Aくんが追いかけてきて、次郎くんに土下座をして謝り始めた。

### <次の日、Aくんが話したこと>

このエピソードの時、たまたま2階ホールで勤務していた職員のbさん（女性）が、次の日の夜の時間帯でAくんと一緒になったので、ストレートに「あなた本当にチンチン出したりしたの？」を聞いたところ、Aくんから「（自分の担当の）cさん（男性）と話がしたい」という申し出があった。

早速bさんは、Aくんがcさんと話せるように手配をした。

### <Aくんがcさんに話したこと>

最初に、次郎くんが居室内で、ふざけて無理矢理Aくんのズボンを降ろしてペニスを露出させた。Aくんが「嫌だ、止めろ」と言っても、次郎くんはケラケラ笑っているだけで止めようとしなかった。

Aくんのペニスを露出させたら、次郎くんはホールへ走っていった。そして、すぐまた戻ってきて、Aくんに対して「おまえ、ガチでヤバイよ」と言って、さらに「チンコ出したこと、謝れ」って言ってきた。

Aくんは、「なんで次郎くんがそう言うのか、わからなかったけど・・・土下座しろって言われて・・・しないと関わらないよって言われて・・・（次郎くんと関われないのは）嫌だから

土下座した」という内容だった。

#### <次郎くんがやっていたこと>

次郎くんは入所半年くらい経過しているが、表面的にはお利口さんになっているが、どうも裏でいろいろ他児を操作しているような気配があって気になっていたのだが、なかなか実態を見極めることが出来なかった。

今回、たまたま bさんと cさんの職員の連携プレイで、次郎くんの実態の一端を垣間見ることが出来た。次郎くんは、①無理矢理 Aくんのペニスを露出させておいて、②その Aくんの問題行動（ペニスを露出する）を発見したとホールで職員や皆に報告し、③問題行動をした Aくんを「ガチでヤバイよ」と決めつけ、④皆の前で自分に謝罪をさせるという一連のストーリーを自作自演していたのである。

#### <気が付いたこと>

交替勤務の職員は、決められた時間、決められた場所を把握することになるので、一人のこどもの一連の行動についてその全体を把握することが出来ないということなのである。

そのことを踏まえながら、他児を支配し自作自演をしてまで次郎くんが欲しいと思っているものはなにか。ここから次郎くんを理解しようとする試みが始まる。

(了)

# コソダテノシンリ (7)

中谷陽輔

連載第 7 回目です。ここ最近のテーマが、コソダテにおける「睡眠」「コントロール」「質と量」と、形のないテーマが続いていました。

そこへきて今回は、コソダテにおける「スマホ・タブレット」という、形のあるテーマにチャレンジしてみたいと思います。

正直、これまたかなりの大テーマだと思っています。

というのは、現代における多くの保護者や養育者の方が、既に、スマホ・タブレットについて子どもがどのように関わるか、そもそも関わらせて良いものなのか、と悩みながらの日々を送っていることが容易に想像できるからです。

先に言ってしまうと、コソダテノシンリとしては、コソダテにおけるスマホ・タブレットの使用について、メリットを打ち消してしまうほどの大きなデメリットがある、と結論付けています。ただ同時に、日本のコソダテにおいて、スマホ・タブレットの使用を避けがたいような雰囲気と現状があり、その中をどうやって乗り切っていくか、にも触れていくつもりです。

大テーマであるがゆえに、スマホ・タブレットの子どもの心身への影響として、①学業面、②対人面、③生活面と大きく分けて述べた後に、日本のコソダテにおける現状、と繋げていきたいと思っています。

今回の原稿でどこまで書けるか、自分でもまだわかりませんが、気長にお付き合いいただけたら幸いです。

## 子どもとスマホ・タブレットを巡る日本の現状

令和5年度「青少年インターネット利用環境実態調査」報告書(こども家庭庁, 2024)によると、すでに小学生・中学生・高校生すべての学校段階において、子どもの 90%以上がインターネットを利用しています。そして小学生のうち、「学校から配布・指定されたパソコンやタブレット等」によるインターネット利用率が 5~7 割程度で1位ですが、中学生以降は、スマホによるインターネット利用が 8~9 割とより高率になるため1位となっています。

周知のとおり、文部科学省の取り組みとして、2019 年から「GIGA スクール構想」が開始されました(文部科学省, 2024)。「GIGA」は「Global and Innovation Gateway for All」

の略で、「すべての児童・生徒にグローバルで革新的な扉を」という意味が込められており、具体的には、全国の児童・生徒 1 人に 1 台のコンピューターと高速ネットワークを整備することが掲げられています。そして上記の「学校から配布・指定されたパソコンやタブレット等」について、小学生においては持ち帰りができる可動型端末、いわゆるタブレットが主流となっている実態があります。

このように、スマホ・タブレットを通じてインターネット利用を行う子どもたちが確実に多くなってきている中ではありますが、日本医師会と日本小児科医会の連名で作製された、[こんな啓発ポスター](#)があるのをご存知でしょうか。



このポスターは、2017年に公表され、視力や体力など6つの力がスマホによって悪影響を受けうることが示されています。ちなみに、小児科医会は「子どもメディア」に関する対策委員会を2004年から立ち上げており、子どもとスマホ・タブレット等のICTについても提言や啓発・情報発信を当初より積極的に行っています(日本小児科医会, 2024; 岡田ほか, 2015)。

ポスターの内容について、そこまで断定してよいものなのかといった疑問の声や、その根拠の確証度などについて、議論が沸き起こりました。それらに対する私の見解はおいおい書いていけたらと思いますが、まずは上記①学業面に直接関係しうる、「スマホを使うほど、学力が下がります」と書かれている点について、記載されているデータ以外もふまえながら、スマホやタブレットによる学習のメリット・デメリットについて、それぞれ分けて述べていこうと思います。

## スマホ・タブレットによる学習へのメリット(効果)は？

GIGA スクール構想を導入する際に、文部科学省(2020)は、データも元に、学校における ICT(Information and Communication Technology, 情報通信技術)の環境整備の状況は地域差が大きく脆弱であることや、学校授業におけるデジタル機器の使用時間は OECD 加盟国で最下位であることを指摘しました。そして、学校による ICT 活用を積極的に行う必要性や、これまでの教育実践の蓄積に ICT を加えることで「学習活動の一層の充実」や、「主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善」が可能になるという展望を示しました。

また、直感的にも、スマホやタブレットを活用することは、情報検索がスムーズになったり、大量の紙や本を持ち運ばなくていい、などの理由により、手軽でコスパがいい学習ツールのように思えたりします。

では実のところ、ICT による学習効果はいかほどなのでしょう。

OECD が進めている PISA(Programme for International Student Assessment)と呼ばれる国際的な学習到達度に関する調査では、学力に関する 3 分野(読解力、数学的リテラシー、科学的リテラシー)および、学習に関連する背景要因(学校内外の学習環境や学習への取り組み方など)について調査されています。その中で、上述の、学校授業におけるデジタル機器の使用時間が OECD の中で日本が最も少ないことは確かに示されています(国立教育政策研究所, 2019)。

一方で、PISA(2015)の報告書をよく見てみると、学校におけるパソコン台数が多いほど「数学リテラシー」が低いこと、授業中にインターネット利用頻度が多いほど「読解力」が低いことが、データをもとに示されています。素直に解釈すると、パソコン台数を増やしてインターネットをどんどん利用できるようにするということが、学力向上には繋がらず、むしろ学力低下に向かいそうだという結果です。

・・・受け入れがたい結果かもしれませんが、他にもこのことを裏付ける研究があります。例えば、パソコンでメモを取るより手書きでメモを取るほうがテスト結果は良いこと(Mueller & Oppenheimer, 2014)や、パソコンの電子スクリーンで読むより紙のテキストで読むほうがテスト結果は良いこと(Mangena, Walgermo, & Brønneck, 2013)が実証されています。

ちなみに、「脳トレ」開発者として有名な脳機能研究者である川島隆太氏は、『少なくとも、現時点で、オンライン教育が子どもたちに良い影響を与えたことを示すデータは全くない』(川島, 2022, p7)と断じてます。

ICT 教育は、手軽でコスパがいいようで、実際のところ、学習効率が悪い、と言えそうです。

## スマホ・タブレットが子どもの学習に与える悪影響

川島隆太氏は、上記の啓発ポスターに記載されている、「スマホを使うほど学力が低下します」のデータ(国立教育政策所, 2014)を裏付ける研究を仙台市とともに複数行っており、それらの結果ももとに、『スマホが学力を破壊する』(川島, 2018a)や、『スマホを捨てるだけで偏差値が 10 上がる』(川島, 2018b)と述べています。

それぞれなかなか衝撃的な文言ですが、その根拠のほどはどの程度なのでしょう。

具体的な調査結果の例として、スマホ・携帯電話を長時間使用(1 時間以上)していた生徒は、そうでない生徒より成績が低いことが示されています。

この結果について、睡眠時間の長短や、家庭学習時間の長短によっても多少の成績の違いはありましたが、何よりもスマホ・携帯電話の長時間利用が決定的な違いを生んでいました(仙台市, 2018)。ただ「長時間利用」といっても、1 時間以上か 1 時間未満かです。

なお、科目によっては、家庭で平日 2 時間以上勉強しているがスマホ・携帯電話も 4 時間以上使っている生徒の成績のほうが、家庭で平日 30 分未満しか勉強していないがスマホ・携帯電話も全く使っていない生徒の成績よりも低かったという結果(数学)も得られています(仙台市, 2013)。

換言すれば、学校でしか勉強していない生徒よりも、家庭学習や塾に時間を多く費やしている生徒のほうが、成績は低くなる、という結果です。成績が低くなるのは、スマホをかなり長時間が使っている場合、となりますので、スマホ・携帯電話の長時間使用が勉強の効果を打ち消している、ともいえます。

また、スマホを見ていなかったとしても、スマホが近くにあるだけで、集中力がそがれ注意力が散漫になる「Brain Drain(脳からの資源流出)」とよばれる現象も確認されています。こちらのほうが感覚的に理解しやすいかもしれません。

具体的には、スマホの置く場所を変えて(机、ポケットや鞆の中、別室の 3 条件)、集中力が必要な課題 2 つ行ったところ、スマホを使用していなくても「スマホが近くにある」だけで脳の認知資源が消費されてしまうと指摘されています(Ward et al., 2017)。少し違う視点で、川島(2018c)も、アラーム音よりインスタントメッセージの通知音のほうが情報処理を阻害し、課題成績が低くなることを明らかにしています。

もし通知音が頻繁に鳴るタブレットで動画学習をしていたら・・・、もしくは、もし音楽が聴きたいからとスマホを部屋に置いて学習していたら・・・。本人や保護者が気づかないまま、せっかく学ぼうとした学習内容が思うように身につかない、ということは十分にあり得ることです。

さらに、川島隆太氏は、「スマホやタブレットを使う習慣のある子どもは脳の発達が止まる」と語っています。たとえば、脳の中でも記憶・学習や思考・判断に深く関連した部位である「前



頭前野」の働きは、紙の本を読んで学習するときと比べ、動画学習中のほうが明らかに低下している、むしろ働きが「不活性化」することが確認されています(産業能率大学総合研究所, 2020)。他にも、スマホを使って調べものをしているときと、スマホを使わずに国語辞書で同じような調べものをしているときとで比較するという実験を行うと、スマホを使って調べ物をしているときは前頭前野が全く動いていないことが示されました(川島, 2018c)。

他にも、11 歳の子どもの 3 年間の追跡研究を行い、知能及び脳(灰白質・白質)の成長量を確認した研究(Takeuchi et al., 2018)では、ネットの使用頻度(週当たりの使用日数)が増すほど、言語性知能及び脳の成長量が減少したという結果が示されています。

川島(2018a)は、“Use it, or lose it”という言葉で、脳が機能し続けるには脳を使い続ける必要があるが、スマホやタブレットによる学習により、脳を使うことを止めてしまえばその機能も止まってしまう、ということに警告を発しています。

以上より、スマホ・タブレット使用によって、いくら勉強したとて思うように結果が出なかったりするだけでなく、本来なら発達とともに自然と身につくはずの能力が身につかない、といった、子どもにとって大いなる悪影響が容易に推測されます。

…人間はなかなかどうして、楽をしたいと考えてしまう生き物です。ただ事実として、「面倒で厄介な活動」のほうが、脳は大いに働き、育っていきます。

可愛い子には旅をさせよ、という諺が頭に浮かんでしまうのは、私だけでしょうか。

## スマホ・タブレット使用について「大人が見極める」ことが第一

アメリカの IT の中心地、シリコンバレー。そこでは、「テックフリー」という、授業に ICT 機器を一切使わない学校が人気となっています(COURRIER JAPON, 2018)。

また、Microsoft の創業者であるビル・ゲイツや、iPhone を開発したスティーブ・ジョブズが、自身の子どもたちには、パソコン、スマホなどのデジタル機器の利用を厳しく制限していたことは有名になってきています。Apple 社の幹部も、スマホを子どもに買い与えないといいます。

…なぜでしょうか？

アンデシュ・ハンセン(スウェーデンの精神科医)による書籍「スマホ脳」は、2021 年、最も日本で売れた本としてベストセラーになりました。

その書籍の中にも、スティーブ・ジョブズはなぜ iPad を触らせなかったのか、という問いについて書かれています。詳細は書籍に譲るのですが、さらにこの書籍の中には、「スマホは私たちの最新のドラッグである」という章があります。

…どういふことでしょうか？

ドラッグといふば、薬物依存やアルコール依存など、依存症治療における日本の総本山とすらいえる「久里浜医療センター」(独立行政法人国立病院機構)というところがあります。

久里浜医療センターは 2011 年に全国に先駆けてネット依存専門診察を始めました。そこで精神科医長となった中山秀紀氏(当時)が、「スマホ依存から脳を守る」(中山, 2020)という題名で、本を書きおろし、その帯には「スマホは最強(最凶)の依存物です」と書かれています。

…なぜでしょうか？

他にも、元マイクロソフトの研究者である外山健太郎氏は、研究者当時、派遣されたインドの現場で試行錯誤をしながら、貧しい人々や子どもたちにパソコンを配布したり、インターネットに接続できる環境を整えました。その経験をもとに、「テクノロジーは貧困を救わない」(外山, 2016)という本を書きおろし、単純なテクノロジー礼賛に警告を発しています。

…どういふことでしょうか？

スマホ・タブレットについて、その便利さの陰となり、大人が思っている以上の危険性が潜んでいる。IT 業界の中心にいる人ほど、その危険性について肌感覚として理解している…。

そのように考えることは、荒唐無稽な仮説でしょうか。

…もしくは、GIGA スクール構想をはじめとして、大人側が ICT に過度な期待を持っている、ともいえるかもしれません。

外山健太郎氏は、上記書籍内で、増幅の法則、というものを唱えており、『テクノロジーの1番の効果は人間の能力を増強することだと言える。(略) パソコンは、必要な知的作業を人力でやるよりもっと早く、簡単に、強力にこなす手助けをしてくれる。だがどのくらい早く、簡単に、強力にできるかは、利用者の能力にある程度左右される』と記しています。

つまりは、まずは利用者の能力が一定程度、すでに備わっていることがテクノロジーを有効に使うための前提となるということです。

それでは ICT を活用できるための能力とやらは、どれくらいの年齢で、どれほどスマホ・タブレットを触っていれば身につくのでしょうか。

久保谷・田辺(2019)は、中学・高校時代からスマホを使用しており「スマホネイティブ」ともいえる大学生を対象に、スマホの利用時間と、具体的な ICT 活用能力との関係を調査しました。その過程において、スマホの学習への悪影響を示したり、そういった問題意識のもとに行われる研究が一定あることは認めつつ、肯定・否定に関するいずれの予断もしないという前置きの元、分析が行われています。

その結果、高校での学習経験が ICT 関連スキルに対する自己評価の高低に影響しているものの、スマホの利用時間の長さは、具体的な ICT 活用能力に結び付くとは必ずしも言えない、と結論付けられました。加えて、『「生活の中で自然にスマホを使いこなしているスマホネイティブ世代には、わざわざパソコンの使用方法を教えなくても自分で勝手に習得する」ということを期待するのは難しい』とも述べています。

つまり、高校で学んだことが ICT への効力感を高めるものの、スマホをいくら使っても、ICT を使いこなせるようになるとはいえない、ということです。

タブレットは基本的にスマホの画面が大きいだけなので、GIGA スクール構想という御旗の元で、各学校に配置されているタブレットをいくら使用したとて、GIGA スクール構想の目的は達成されない、ということになるのではないのでしょうか。

パソコンの使用方法を習得し、ICT を適切に活用するためには、高等教育において、その学習体系や教育可能な人材を整備することのほうが優先度は高いはずです。『テクノロジーは、すぐれた教師や優秀な学長の不在を補うことは決してできなかった』(外山, 2016)とされています。限られたリソースをどこに優先的に割くか、大人側が見極める必要があります。

逆に、既述のように、スマホ・タブレットを子どもに安易に手渡すことについては、学習に対して悪影響のほうが勝ってしまう可能性が高い、といえます。

ただでさえ、すでに人手が足りず業務量も多すぎることが各所で報じられている学校現場です。先述の文部科学省(2020)のデータにもあったように、ICT 環境整備の状況にも大きな地域差があった学校に、ただ一人一機器のためのお金を渡して、ICT を活用できる人材を育ててほしいと急に言われたとて、それが可能なのかというと甚だ疑問です。

お国の方針に何とかついていこうと、なけなしの時間と労力を費やして、しかもそれが子どものためになっていない・・・とすれば、やってられませんよね。

・・・学業面だけで大いにページを取ってしまいました。残りのテーマについては、次回、続きを書いていきたいと思います。

最後に、あくまで余談として。

世界的に、タブレットの出荷台数は 2010 年代で既に頭打ちして低下気味であり、コロナ渦需要で一時的に少し持ち直した程度です(ATY-JAPAN, 2024)。

そして、周知のとおり、世界的な IT 企業を数多く擁する国がアメリカです。かたや、国の方針で、毎年、新たに入学する生徒数の分だけ、多くのタブレットを輸入する国、日本。

アメリカにとって日本は、さぞや良いお得意先でしょうね。そしてアメリカに良い顔をしておきたい日本の事情を考えると、外交的には Win-Win のように思えてしまいますよね。

…もちろん、それ以外のことを考えなければ、です。

本稿をもって、何をどう感じ、考え、見極めるかどうかは、皆さん次第です。

#### 【引用・参考文献】

Anders Hansen (著)・久山葉子(翻訳) (2020). スマホ脳 新潮社

ATY-JAPAN (2024). 世界のタブレット出荷台数(2023 年 4Q は 17.4%減の 3,680 万台、年間では 20.5%減の 1 億 2,850 万台) Retrieved May 25, 2024 from <https://aty800.com/tablet/market-trend/tablet-share-4q2023.html>

COURRIER JAPON (2018). シリコンバレーの親が「テックフリー教育」を推進する理由(2018 年 8 月 23 日記事) Retrieved May 25, 2024 from <https://courrier.jp/news/archives/133353/>

川島隆太 (2018a). スマホが学力を破壊する 集英社

川島隆太 (2018b). スマホを捨てれば子どもの偏差値は 10 上がる:「ながら勉強」が子どもに与える深刻な影響(東洋経済 2018 年 3 月 18 日付記事) Retrieved May 25, 2024 from <https://toyokeizai.net/articles/-/212824>

川島隆太 (2018c). スマホが脳の発達に与える無視できない影響:脳トレの川島教授が2つの実験結果から分析(東洋経済 2018年5月20日付記事) Retrieved May 25, 2024 from <https://toyokeizai.net/articles/-/220685>

川島隆太 (2022). オンライン脳 アスコム

こども家庭庁 (2024). 令和5年度「青少年インターネット利用環境実態調査」報告書 Retrieved May 25, 2024 from [https://www.cfa.go.jp/policies/youth-kankyau/internet\\_research/results-etc/r05](https://www.cfa.go.jp/policies/youth-kankyau/internet_research/results-etc/r05)

国立教育政策研究所 (2014). 平成 26 年度 全国学力・学習状況調査 報告書・調査結果資料 <http://www.nier.go.jp/14chousakekkahoukoku/>

国立教育政策研究所 (2019). OECD 生徒の学習到達度調査(PISA)2018 年調査補足資料(生徒の学校・学校外における ICT 利用)Retrieved May 25, 2024 from [https://www.nier.go.jp/kokusai/pisa/pdf/2018/06\\_supple.pdf](https://www.nier.go.jp/kokusai/pisa/pdf/2018/06_supple.pdf)

久保谷政義・田辺亮 (2019). 大学生のスマートフォンの利用状況と ICT 活用能力 教育情報研究, 35 (1), 11-24. Retrieved May 25, 2024 from [https://www.jstage.jst.go.jp/article/jjsei/35/1/35\\_11/pdf/-char/ja](https://www.jstage.jst.go.jp/article/jjsei/35/1/35_11/pdf/-char/ja)

Mangen, A., Walgermo, B. R., & Brønnick, K. (2013). Reading linear texts on paper versus computer screen: Effects on reading comprehension. *International Journal of Educational Research*, 61-68. Retrieved May 25, 2024 from [https://educacion.udd.cl/files/2017/05/MI\\_MAngen-et-al-2012-Reading-linear-texts-on-paper-versus-computer-screen-effects-on-reading.pdf](https://educacion.udd.cl/files/2017/05/MI_MAngen-et-al-2012-Reading-linear-texts-on-paper-versus-computer-screen-effects-on-reading.pdf)

文部科学省 (2020). リーフレット:GIGA スクール構想の実現へ Retrieved May 25, 2024 from [https://www.mext.go.jp/content/20200625-mxt\\_syoto01-000003278\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20200625-mxt_syoto01-000003278_1.pdf)

文部科学省 (2024). GIGA スクール構想の実現 Retrieved May 25, 2024 from [https://www.mext.go.jp/a\\_menu/other/index\\_00001.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/other/index_00001.htm)

Mueller, P. A. & Oppenheimer, D. M. (2014). The Pen Is Mightier Than the Keyboard: Advantages of Longhand Over Laptop Note Taking. *Psychological Sci*

ence, 25(6), 1159–1168. Retrieved May 25, 2024 from <https://www.benjaminsjameswaddell.com/wp-content/uploads/2014/09/mueller-the-pen-is-mightier-than-the-keyboard.pdf>

中山秀紀 (2020). 「スマホ依存から脳を守る」朝日新聞出版

日本小児科医会 (2024). 子どもとスマホ・メディア(一般の皆様へ) Retrieved May 25, 2024 from <https://www.jpa-web.org/information/sumaho.html>

OECD (2015). How Computers are Related to Students' Performance(Capter6). In OECD, Students, Computers and Learning:Making the Connection(pp.145-164). Retrieved May 25, 2024 from <https://www.oecd.org/publications/students-computers-and-learning-9789264239555-en.htm>

岡田知雄・村田光範・鈴木順造・山縣然太郎・前田美穂・原光彦・井口由子・田澤雄作・斎藤伸治・村上佳津美・内海裕美・川上一恵・仁尾正記・川島章子・横井匡 (2015). 子どもと ICT(スマートフォン・タブレット端末など)の問題についての提言:日本小児連絡協議会「子どもと ICT~子どもたちの健やかな成長を願って~」委員会. 小児保健研究, 74(1), 1-4. Retrieved May 25, 2024 from <https://www.jschild.med-all.net/Contents/private/cx3child/2015/007401/001/0001-0004.pdf>

産業能率大学総合研究所 (2020). [特別インタビュー]東北大学 川島隆太教授「読む&書く」からこそ学びは深くなる』 通信研修総合ガイド 2020 特集「いま、なぜ通信研修なのか」 Retrieved May 25, 2024 from <https://www.hj.sanno.ac.jp/cp/feature/201911/08-02.html>

仙台市 (2013). 中学生向けニュース:スマホや携帯電話の使い過ぎは勉強の効果を打ち消す!?(平成 25 年度 学習意欲の科学的研究に関するプロジェクトより) Retrieved May 25, 2024 from <https://www.city.sendai.jp/manabi/kurashi/manabu/kyoiku/inkai/kanren/kyoiku/documents/h25sumaho.pdf>

仙台市 (2018). 平成 30 年度 学習意欲の科学的研究に関するプロジェクト リーフレット Retrieved May 25, 2024 from <https://www.city.sendai.jp/manabi/kurashi/manabu/kyoiku/inkai/kanren/kyoiku/documents/h30gakushuiyoku.pdf>

Takeuchi, H., Taki, Y., Asano, K., Asano, M., Sassa, Y., Yokota, S., Kotozaki, Y., Nouchi, R., & Kawashima, R. (2018). Impact of frequency of internet use on

development of brain structures and verbal intelligence: Longitudinal analyses. *Human Brain Mapping* 39(11), 4471-4479. Retrieved May 25, 2024 from <https://www.ncbi.nlm.nih.gov/pmc/articles/PMC6866412/pdf/HBM-39-4471.pdf>

外山健太郎 (2016). テクノロジーは貧困を救わない *みすず書房*

Ward, A. F., Duke, K., Gneezy, A., & Bos, M. W. (2017). Brain Drain: The Mere Presence of One's Own Smartphone Reduces Available Cognitive Capacity. *Journal of the Association for Consumer Research*, 2(2), 140-154. Retrieved May 25, 2024 from <https://www.journals.uchicago.edu/doi/epdf/10.1086/691462>

<プロフィール>

児童福祉施設の相談員。資格は、公認心理師、社会福祉士、臨床発達心理士など。大学院に進学後、研究者の道から方針転換して子ども福祉臨床の現場に飛び込み、早10年強。現在、仕事でもプライベートでも、子育て&子育て支援まみれの日々を送っている。プライベートでの子育てやらをめぐる由無し事を、ブログに月数回、不定期投稿中。  
(<https://childcare-support.hatenablog.jp/>)

# 教室の窓から

令和 6年  
(2024年) 5月  
来須 真紀

## 春だ、4月だ、新学期だ。

春ですね。桜のころを少し過ぎて、新緑の季節。4月と言えば新学期。新学期は、ドキドキワクワク、楽しみ？不安？いろいろな感情が湧き出てきて、楽しいという人もいれば疲れるという人もいるでしょう。学校も同じで、春は、いろいろな行事とともにいろいろな感情があふれる子どもが多い季節となります。もちろん保護者も。

さあ、いろいろな行事とともに、教師自身も新しい環境に戸惑いながら、子どもや保護者にどう接していくか。どんなアプローチをしていくのか…。ここは腕の見せ所と言ってもいいでしょう。

## クラス替えあれこれ

新学期と言えば、一番ドキドキするのはクラス替えではないでしょうか？担任も、友だちもガラッと変わる。この1年を左右するクラス替え。ドキドキするのは当たり前ですよ。

クラス替えってどうやって決めるの？こんな疑問をもったことはありませんか？今回は、ほんのちょっとだけ、クラス替えってどうやって決めるの？という疑問にお答えしたいと思います。

前の年度の年明けになると来年度のクラス分けに関する提案が、担当の職員からあります。その提案が承認されると提案に沿ってその年の担任がまずは自分のクラスのメンバーを次年度のクラス数に分けます。分ける基準は、たくさんありますが、一番は次の年度も子どもたちの学校生活が楽しく充実したものになるように願って人間関係や、下校する道などに至るまで配慮しながら分けていきます。

自分のクラスを分けたら、他のクラスの担任とそれぞれが分けたものをドッキングしていきます。ドッキングして終わり…ではありません!!もう一度全体を見渡して、「この方がいいのではないか?」「いや、こうした方がいいのでは?」と2~3回、日にちを変えて、話し合いながら決めていきます。よし決まり!!となるとこれで終わりではありません!!学年で分けたものを、専科の教諭、養護教諭、管理職と関係する教諭に見てもらい、そこからまた分けたものを変えていきます。それが終わって、やっと「とりあえずは完成」となります。完成したものは厳封して校長室保管。というものが私が経験したクラス替えの一般的な流れとなります。



## クラス替え要望あれこれ

保護者のとってのわが子のクラス替えは、ドキドキものです。「意地悪なあの子と一緒にになったらどうしよう」「仲の良い子がいないクラスになって行きたくないって言ったらどうしよう」「あそこの保護者とは以前にもめたのよね。」等々。心配はつきものです。多少の心配なら、家庭で子どもの不安をやわらげたり、解消したりすることもできるかもしれませんが、親子そろっての解消できない不安は、やはり担任に相談してほしいと思います。これくらいのことでは図々しいかしら?とは思わなくても大丈夫。(だと私は思っています。内容にもよるところはありますが…)ただ、要望が100%通るとは限らないということは、ご理解の上でということが大切だと思います。残念ながら、今の学校では、学年の全人数によってクラス数が決まります。すべての要望をかなえたいのは山々なのですが、かなえることができない現実もあるということをご理解いただければと思います。しかし、保護者から切実にお願いされたことは、確実に配慮事項として新年度に引き継がれるはず…ですので、要望したことに無駄はない!と、私は信じております。今年度過ごされて、来年度のクラス分けにお願いしたいことがある保護者の皆様、要望を相談するなら、ぜひ年末までに。されてみてはいかがでしょうか?

## 担任決定のあれこれ

クラス替えに続いて気になるのが、「誰が担任になるの?」ということでしょうか?残念ながら、こちらに関しては、要望は、配慮することができない。というのが正直なところだと思います。配慮しないというよりしたくてもできないという言いの方がしっくりくる気がします。というのも、教員には避けて通れない「転勤」というもの、会計年度の教諭に関しては「来年度も同じ学校で採用があるのか?」ということがあります。これは3月の終わり、内示の時期にしか分からないので、どうしようもありません(涙)来年度の人事が分かった後、それぞれの教員の専門教科や得意なこと。年齢、次の転勤まで何年位あるのか、新しく転勤してくる先生はどんな方がいらっしゃるのかなどなどバランスを取りながら、決めなければならず、教員にとっても引き続き今の学年を担当したいなと思っていてもそうはならないことも多くあるというなかなかシビアな世界なのです。この校内人事の決定をする管理職の方は本当に大変な思いをされていると心中お察しします…。

もし、今年度の担任の先生に不安があると思っていられる方がおられるなら、その不安を、現担任に言いにくければ管理職、前年度の担任学校などの言いやすい教員に打ち明けてみられるといいのではないかと思います。きっと話を聞いてくださると思います。

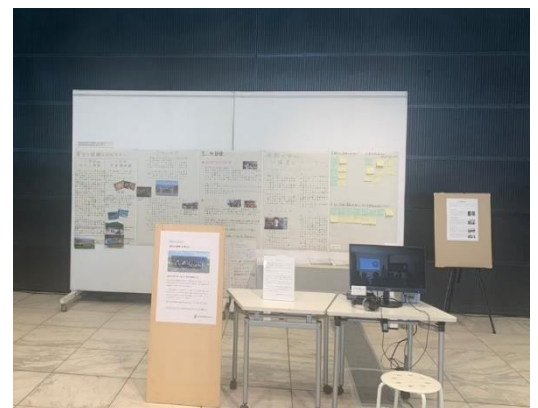
# 社会科の授業を対人援助学の視点から⑥

2024年5月15日 内田一樹

## 1. 2年目の終わりに

3月から4月に宮城県仙台市にあるせんだいメディアテークの3がっ11にちをわすれないためにセンター(通称、わすれん!)の企画展「星空と路」に、「東北と復興」を考える」として出展をさせてもらった。これは今年度スタディツアーに参加した生徒が、ツアー後もわすれん!の担当者の方達とやりとりを続けていて決まったことだった。(詳細は、<https://recorder311.smt.jp/information/66310/>)

3月10日にはやりとりを続けていた生徒が企画展を出している他の記録者たちと一緒にギャラリートークに登壇した。



### 「震災と被災地を記録してきた3人が語り合う 仙台市

せんだいメディアテークでは、震災や被災地をさまざまな形で記録してきた3人の展示が開かれている。この日は3人が集まり、それぞれの記録について話し合った。

震災前から仙台市の風景写真を撮り続けてきた建築士の高橋親夫さん(76)は、2011年2月の同市荒浜などの写真を、当時の日記とともに展示。雪が積もった浜辺の流木や消波ブロックなど震災前の日常を切り取った。「変化していく世界を誰かが記録しないと、何も残らない」

自閉症の息子(当時10)と仙台市で被災し、避難所に行けなかった主婦の橋本武美さんは昨年、障がい児の親7人を取材し、震災での苦労を聞いた。「(支援を求めたいと)言いづらい、申し訳ないって思わなくていい世の中になってほしい」といった音声記録やその文字おこしを展示している。「他の地域で災害が起きた時に自分だったらどうするか、考えるきっかけにしてほしい」

埼玉県の自由の森学園高校の佐野友紀さん(18)は、校外授業で訪れた石巻市での住民インタビューを模造紙にまとめた。「自分が教えてもらうだけでなく、記録として他の人に返すことが重要だと思う」と話した。」—朝日新聞 DIGITAL 「【東日本大震災13年】「風化させない」 能登の被災地にも祈

り」2024年2024年3月10日12時27分(2024年3月11日21時16分更新)より一部抜粋  
(<https://www.asahi.com/articles/ASS3B2RFYS38UTIL01L.html>)

今回3月9日から11日まで2泊3日で仙台、石巻ツアーを組んで、会場には同僚数名と一緒に訪れた。ギャラリートークを通して感じていたのは、「普通の風景」とは?「復興」とは?といった根源的な問いの存在であった。同時に「関東の」高校生が考えていることに対して、東北ではない地域から自分達がどのように眼差されているのかについて知ることができたというような言葉もあった。東日本大震災についての記録のイベントで、東北以外の地域に住んでいる高校生がこうして登壇することはこれまでなかったようだ。そこに東日本大震災のことを考えているのは自分達(仙台市、宮城県、東北)だけではないのか、他の地域の人たちは東北についてどのように思っているのか、という一抹の不安にも似たような思いを感じ取った。そこに東日本大震災を東北のものとして忘却していかようにしているような今の社会があるように思わせてしまっているのではないかと感じた。一方で、関東の高校生がこうして学んで、自らの学びを記録として残したり発信したりすることに対して、希望を感じているということも他の登壇者たちからの言葉から感じられた。

その後、石巻市に移動し初めて3月11日という日を石巻市で迎えた。広く市民向けの追悼のイベントにも参加をした。黒い喪服を着た遺族の方達をたくさん目にして、改めて石巻市を襲った災害の大きさを感ぜずにはいられなかった。普段訪れている日と違うからこそ、町の様子も全然違ったり、当たり前ではあるけれど探訪者である私と当事者の方たちとの間の「隔たり」を久しぶりに感じた。黒い喪服に身を包んでおられる方々や感情に震えている方々を目にして、少し遠い位置にいる自分を久しぶりに認識する。だからこそ「つながり」をつくっていくことが大切で、これからも「つながり」続けることが大事なのだと感じた。午後に訪れた雄勝ローズファクトリーガーデンで代表である徳水博志さんがおっしゃられていた人と人との「つながり」をつくる場としてのローズファクトリーガーデン。選択講座「東北と復興」もまた埼玉と宮城、東北の人たちと関東の高校生の「つながり」をつくる場としてもあるのではないかと。自分達の活動を進めていくためのエネルギーを得たように思う2泊3日だった。

## 2.3 年目に向けて

対人援助か社会構造か。対人援助学か対人援助スキルか。高校生達の授業を通して行うべき方向は、と悩みながらの3年目がスタートする。

昨年度の講座は2年目ということもあり、社会構造を考えたり議論したりということが多かった。「対人援助」として何かを行ったわけではない。様々な方々の話を聞く、傾聴することはあったが、これも発信をしたいという現地の方の声を受け止めるということが主であったように感じる。

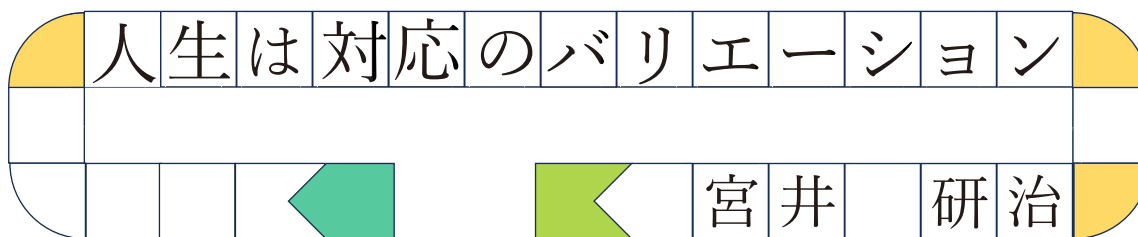
しかし、2年目が終わってみて感じていることは、高校生が来て、話を聞いてくれること、考えてくれることに言葉にすることは難しいが「希望」のようなものを感じてくれている人たちは多いようだった。これは教員が意図して作りだしているわけではなく、生徒達が自主的に質問をしたり、全体のプログラム以外の部分のちょっとした隙間時間で話したりする中で感じてもらっている様子だった。現地で移動支援をされている、特定非営利活動法人移動支援 Rera さんは2年連続で講演をしてくださったが、毎年喜んで快諾して下さり、多くのメンバーを連れて参加をしてくださっている。3月の

メディアテークでの企画展「星空と路」では、展示会場でスタッフの一人の方に声をかけられ、関東の高校生たちが一生懸命学んで考えてくれていることを嬉しく思う、という趣旨の言葉をいただいた。

学ばせてもらっている、受け入れて貰っているのは「東北と復興」の講座の方であるにもかかわらず、この講座で高校生達が学んでいる、考えてくれることを嬉しいと感じて貰っていることは何だろうか？対人援助か、それとも継承の受け手としてのものか。生徒達の学びの楽しさの源泉もこの辺りにあるような気がしてならない。現地の人たちからの「言葉」から生まれた疑問やまだまだ分からないということが継続して受講する原動力になっていることは間違いない。

3年目となる今年は、20名の受講者のうち継続して受講した生徒が5人、うち2人は高校1年生から毎年受講してきた生徒である。(昨年度は継続受講した生徒は21名中4名)彼らが学びを継続したいということは興味関心が1年だけで終わるものではなくて、現地に足を運ぶことから生まれる興味関心もあるということだと思う。

社会構造や基礎となる知識がなければ、目の前の人の語る「言葉」の意味の理解に近づくことはできない。だからこそ事前学習や事後学習では基本的な知識や社会構造などの学びを大切にしたい。しかし一方でこの「東北と復興」を通して生徒達の中に身につけて欲しいという教員としての願いとしての対人援助学、対人援助スキルとは何なのか。自然発生的に生徒達の中に生まれる対人援助学、対人援助スキルはあるのか。今年もその意味を探っていきたい。



## -第5話 私説「岡田隆介」論 -

「対応のバリエーション」は、私たちが仕事で出会う様々な「対応」場面をロールプレイで再現し、いろんな対応の仕方を試してみて、感じたことを自由に話し合おうというワークショップ式体験学習です。ゲームみたいな感覚でみんな楽しんでながら、実は、その中から何か日常の業務に役に立つものを持って帰っていただけたらと思っています。（「そだちと臨床」研究会主催 対応のバリエーション勉強会のお知らせより）

### まえがき

なぜ、今これを書くのか？

単純に、岡田さんの考え方、言わんとするところ、雰囲気自分が自分にフィットして、自分の臨床で使い回してきました。感謝です。お礼の意味もこめて、この文章を書き始めたと思います。ある種の天才は、解説しないと誤解に終わってしまうことがあると思います。岡田さんの場合は、これだけ後輩（特に若い人にはウケがよいと思います。そこは、ご本人が一番意識して取り組んでいることだと思っています。岡田さんの新もん好きにも符合しています）に、慕われているのであるから、誤解に終わる心配は稀有でありましょう。それでも、かの天性を伝えておきたい使命感に駆られるのは何故でしょう。そんな自分への問いから、この小論説を始めたいと思います。もちろん、捉えどころのなさが氏の魅力でもあるので、私が関わりの中で勝手に形作っていることも含まれるのはお許し下さい。たぶん、この小論説の掲載号を読んでもらっても、「あかんわ、やっ

ぱり俺誤解されてるわ。昔からずーっと誤解されてきたしなあ」と本気とも嘘ともつかない表情で遠い眼差しをするのでしょから。

### 1.さん付け無用の哲学

冒頭から、敬愛する岡田さんと評しながら、なぜ岡田先生とは呼ばないのか、違和感を覚えた読者もおられることと思います。そこには、岡田さんや、岡田さんの盟友でありこの対人援助学マガジンの編集長の団士郎さんも含めたある種の哲学があるからです。振り返れば、30年ほど前に開かれた「児童相談所とその近接領域における家族療法・家族援助の実際」の第一回目の研修会（京都嵐山）でのこと。その頃のわたしといえば、児相デビュー4、5年の若い一判定員でした。でも、児相以前に知的障害児施設でそれなりの経験を積み、少しの自信とその倍はあるこれからの不安を抱えていたことを覚えています。そう、誰もが通る道と言えればそれまでですが。お二人はその研修会の

言い出しっぺであり、具体的な創設者でした。その研修会の冒頭の挨拶で、「ですから、この研修会期間中は、お互いにさん付けで呼び、決して先生とは呼びあわないこと。これがこの集まりの基本的なルールのひとつです。」と聞かされたわけです。かなり、びっくりしました。さん付けで呼ぶことなど、一見簡単そうですが実際社会人としての習慣を捨てることは、期間限定としても違和感がありました。しかしながら実行してみると、勝手に思い込んでるヒエラルキーから離れられたり、組織ではなく個人として在ることを意識させられたりの研修会でした。これは岡田さんの書籍にもよく登場するくだりの「変えられるのは行動で、まずやってみて。心なんてあとから付いてきます」の実践のようでした。もっとも、岡田さんなら行動先行で行き詰まればかりのクライアントには、別の理由付けで心の方の処方箋を出すのでしょうか。この辺りが、行動療法と一線を画すところなんだろう（知らんけど）。

## 2. 「お笑い」が源泉、受けてなんぼ

岡田さんを語る上でやはり「お笑い」はとばせないアイテムでしょう。これは、冗談ではなく、真面目な話です。アカデミックな話へのすり替えの必要は感じませんが、かのミルトン・エリクソン先生もセラピーにおいていかにユーモアの活用が大切かを説いておられたように記憶しております。岡田さんは、かつて、子どもの個性を伸ばす、あるいは殻を破るコミュニケーションスキルの方法として「ノリ、ウケ、オシエ」という標語のような言葉を使っていたことがありました。これは、予定調和的な役割り、たと

えば家族での長男、長女役割り（お兄ちゃんだから、できて当たり前のなロール。別にそれ自体は悪いことはないが、それが固定化すると息苦しさに通じたり、家族の成長の阻害要因になったりする場合は相談の取り扱い対象ともなり得る）を脱するために、来談者ができることとして、岡田さんが母親に紹介する処方箋の一つです（図1）。このノせて、ウケてあげて、最後オシエするという一連の行程がいわゆる関西のお笑い文化に底通していると岡田さんは思っていると思います。ご本人には確認してませんが、間違いありません。単にこの過程をSSTや心理教育の側面でも伝えることは可能でしょう。実際、岡田さんも補足説明として、SSTや心理教育のタームを使用します。ダブルミーニングですね。しかし、「ノリ、ウケ、オシエ」をうまく使ってもらうには、関西のノリは必須でしょう。

岡田さんの面接には、「お笑い」の要素が必須です。この辺りまでご理解いただけでしょうか。関西の「お笑い」芸能の王道は、しゃべくりでしょう。いとしいしーやすきよーダウンタウン-中川家-ミルクボーイ、この系譜にうなずかれるなら、かなりの漫才通、関西鼻根でしょう。もちろん、このお笑いの要素を岡田さんが研究していることは間違いありません。中川家なんて大好きでしょう、たぶん。しかし岡田さん自身の芸風（治療スタイル）は、前述のどの漫才師のそれとは一致しません。ずばり、ヒロシと小梅太夫がドンピシャです。みなさんご存知かと思いますが、決してメジャーとは言えません。すでに、関西の芸人さんでもありません（笑）。今でこそ別の分野（ソロキャンプ）で存在感を示しているヒロシですが、基本

的に自虐ネタで売り出した芸人です。小梅太夫に至っては、皆さんあまりご存知ないかもしれないし、ブレイクも中途半端でした。こうした超メジャーではないけど、マイナーでもない、こんな立ち位置を岡田さんは、治療者像として求めているように感じてきました。対象となる子どもへの治療者の立ち位置を、たとえば言えば、「父親や母親と同じでは、近すぎて聴く耳もたんでしょ。濃すぎる。盆暮や、たまの法事で出会うぐらいの親戚のおじさん辺りの立ち位置の人の話って、けっこう子どもらは聞くのよねぇ」ほんとに？と思いながらも、何となく説得力のある説明です。

最初の嵐山での出会いから、岡田さんの話の面白さ、たとえ話（メタファーの使い方）の絶妙さ、独特のノリ（最初は広島ノリなのかと思ってましたが、ご本人はご自身のことを根無し草のように言います。ちょっと気障です）に魅了されました。人見知りもされる方だと思いますし、最初からスムーズになんとなしのお付き合いから、もう30年近く経ちますので、ありがたいことだと感じています。たぶん、すぐにお近づきになれたのは、私が大阪市の児童相談所所属、つまり、お笑いのメッカ出身のやつということもあったんじゃないか、これは邪険に扱えんけんねという配慮が働いたんではと思っています。残念ながら、私の出身は九州の大分です。

岡田さんは、治療者としても、同業者への研修やワークショップでの講師としても、いかにその時間に「ウケたか？」ということにこだわります。自虐ネタとしてウケなかったことを取り上げることはしますが、ウケたかウケなかったかというのは、ただそ

の言葉の意味以上に、その場を治療者としてコントロールできたのかということにフォーカスしているように思います。コントロールという言葉に語弊があるなら、治療者（料理人、仕立て屋）としてクライアント（客）に満足してもらえたか（味わってもらえたか、満足してもらえたか）に主眼を置いて仕事をされてこられたように見受けられます。もちろん、症状の軽減・消失はメインディッシュのひとつでしょうが、それだけでは満足されないのでしょうか。「めっちゃ、面白かった」「どきどきした」「一時はどうなるかと思ったけど、腑に落ちた」「お腹いっぱい」「また、いつかそんな機会があればお世話になりたい」このようなブラス一言が、岡田さんの治療への原動力になるのではなからうか。治療者として欲深い人だと思のです。だから、私が岡田さんと同じ研修会での講師などをした後で、開口一番に聞かれるのは「で、宮井君ウケたの？ウケなかったの？」ということです。あまりウケたと言い過ぎても、気を悪くされます。これは誇張ですが、自分よりウケるなよというような雰囲気もあります。さりとして、岡田さんの講演を実際目の当たりにし、ぐいぐい引き込まれ、そこにいた聴衆が異口同音に賛辞を贈ろうともご本人は「あかんわ。終わってるわ。」と引き気味な発言をすることがだいたいです。自虐的に自己評価するときは、だいたい手ごたえを感じられているときです。長年の付き合いでわかるようになりました。面倒くさいですが、このあたりのやり取りも楽しいものです。

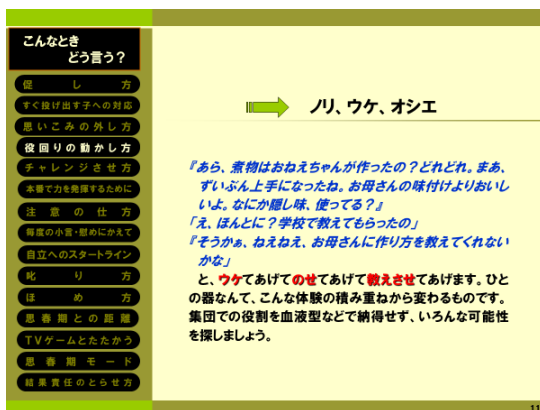
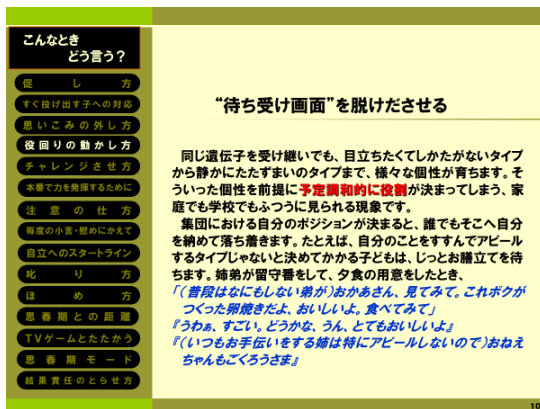


図1 「こんなときどう言う？ 家庭教育編セルフ入り」 岡田隆介作成

### 3.メタファーの魔術師

いくら名言を吐こうとも、それを他者が受け取り、自分のものとして納めてくれなければ、迷言へと墮してしまう場合もあります。メタファーそれは、「比喩表現を使うことによって、相手に物事をわかりやすく伝えたり、表示物の視認性を高めたりできる手法です。文章だけでなくデザインのテクニックとしても広く使われています。」(indeed.com よりの参照) まさに治療デザインの色合いを決めるチャートのようなもの（よくわかりませんが）。

岡田さんの言葉のチョイス、センスとTPOですが、これはどこから、どのように

して、鍛えてられてきたのかは定かではありません。しかし、「家族の法則2 こころの援助レシピ」(金剛出版 2005)の冒頭の一節にこんな書き出しがあります。先輩の精神科医が、“いつも癒しのオーラを出していたが、いつまで待っても自分からはいっこうにそれが出なかった。それが後になってセールストークや援助技術を学ぶきっかけになった。” どうやら、岡田さんはそのキャリアのずい分早期から、他の同業者とは異なる自分自身のスタイルを模索してきたことがうかがえます。これは簡単ではなかったことでしょう。盟友である団士郎さんや、家族療法というつながりの東豊さんという存在はいますが、精神科医療畑では違った意味で孤独な立ち位置を歩まれてきたのではと勝手にリスペクトしています。メタファーは言葉や文章だけ取り上げても、そのメタファーが岡田さんの口から発せられた文脈(コンテキスト。個人面接において、悩める母親にかけた一言なのか。家族面接の終わり際になにげに家族全員に投げかけた言葉なのか。ヒートアップする夫婦喧嘩に対して浴びせた逆説的一撃としての言語なのか。そこには状況における差異が生じて当然です)によって、色合い、意味合い、説得力を変えていきます。

文脈も加味しながら、岡田さんのメタファーである言葉や文章をご紹介していきましょう。前述のようにご自身のことを洋服の仕立て屋になぞらえたり、料理人にたとえたりはよくされます。それに続くように治療プランのことを「レシピ」という言い方をされていた時期もありました。推測ですが、メタファーの大枠としての着想が、技を持っている人、手に職を持つ人からきてい

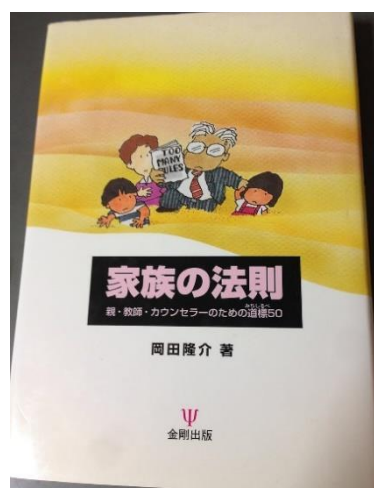


る感じはします。聞いたことはありませんが、岡田さん自身が、たぶん、ほんとに料理人や仕立て屋さん、手先一つで何かを作る人になりたかった子どもではなかったのかと想像したりします。料理系シリーズのメタファーとしては、家族の考える不調和・不適應の原因を、「お客の持ち込む食材」と例えたりします。この場合、家族が持ち込んだ不調和や不適切の原因を、即座に廃棄するのではなく、如何に扱うのかという治療プランや面接の組み立ての話へと続いて行きます。心理士や精神科医で、私が知らないだけかもですが、あまりこうしたメタファーの出し方といいですか、言葉のチョイスをする人はいない気がします。文の種類から対人関係をメタファーするという秀逸な言い回しを思い出しました。「否定形疑問文」による言い回しが、いかに母子間の関りを行き詰まらせるかというものです。母親から息子・娘に向けられる叱責パターンです。「どうしてあなたはいつも〇〇できないの？」この後考えられるのは息子・娘からの「だって△△だったからしかたないじゃん」あたりですか。でも、返しはお約束で「ほらそうやって、いつもいつも言いわけばかり」いつもではないはずですが、否定形疑問文的コミュニケーションが優位な場合は、「いつも」ということが前提とされます。岡田隆介的ワールドによるメタファーだなと感心させられます。

コンテキストを前提とせずとも、名詞・動詞・助詞や形容詞のレベルでも岡田さん独自のものを感じずにはられません。一例を挙げると「マシ」「そこそこ」「ほどほど」「うすめる」「クセ」「コツ」「目線」「結末」「思春期モード」「ねぎらい」などなど。日

本語であり、何げない言葉の羅列ではありますが、紛れもない岡田 Word です。

ところで一部の事実と、あとはほとんど好き勝手な思い込みと、推量とで、ご本人の許可も取らずにこんな文章載せていいのかしらと、いくらリスペクトありとは言え、ハタと不安になり電話してみました。ほとんどメールやLINEのやりとりばかりですから、ちょっとびっくりされてましたが、掲載許諾が下りましたので、安心して続きは次号でとのことで、ここで私説「岡田隆介」論第1部の終了です。拝読ありがとうございました。



# けふばあちゃんからの手紙

## —その2— はるこちゃんへ

じゃりんこ文庫 乾 京子



去年のことです。公園の満開の桜が散って、葉桜になった頃でしたね。

「おばちゃん、はるこです。まだ、文庫やってはりますか？」

「うん、やっているよ。コロナの後、毎週じゃなくて月2回になったけれど、第2木曜日と第4木曜日、いつもどおり開けているよ。」

「子ども、連れて行っていいですか？」

こう、あなたから声をかけられた時、本当にうれしかった。コロナ後、常連さんも中学生になり、あと2・3人の小学生。(この子たちが卒業したら、文庫も閉じようかなあ、)そんな風に思っていた頃でした。

それから毎回のように、3人の子どもたち(お兄ちゃんの太郎くんは、車博士。真ん中のはなちゃんは、「じゃりんこ文庫」にやってきていた頃のはるこちゃんにそっくり!!末っ子の次郎君は、まるでカンガルー親子みたいにはるこちゃんの抱っこ紐の中)とやってきて、けふばあちゃんに絵本を読んでもらったり、お絵かきしたり、そして、数冊絵本を選んで、持って帰ります。

はるこちゃんは、覚えていないだろうけれど31年前、生協の共同購入で生協のお兄さんを待っている時のことが切っ掛けで文庫をすることになったんだよ。

我が家のガレージに莫塵を広げて、……まだあの頃は、お向かいに家も建っていないで原っぱだったね。

「生協のおにいさん、遅いねえ。絵本でも読んで待ってようか？」と、家から『だんまりこおろぎ』を持ち出して、「……こおろぎぼうやも あいさつしたくて ちいさな はねを こし・こし・こし でも あらら おとがでないよ うたえない……」

「がが ひらひらと おともなく とおくに きえていったあと こおろぎは なかまの おんなのこを つけました

そのこも とても しずかな こおろぎでした

こおろぎは もういちど はねをこすって そのこに あいさつしようと おもいました

そして こんどは……………」

読みながら、みんなの表情を見ながら、そうとページをめくりました。

「こおろぎは うたいました！ いままで だれも きいたこともないような きれいな きれいな うたごえで！」  
そうしたら、絵本の中から、キリリ コロロ キリリ コロロコ…とほんとうのこおろぎの鳴き声がして、はるこちゃんたちは、目をまん丸くして、「ええ～っ、！こおろぎさんがはいつてる？」

あの頃のはるこちゃん、はなちゃんを見るたび思い出します。

「ここに引っ越してくる前、マンションの集会室でこども文庫を10年ほどしていて、今も時々行っているの。」と話したら、はるこちゃんたちのお母さんが「けふばあちゃん、ここでもやってくださいよ。」

そう、それから1年後。文庫仲間に手伝ってもらったり、大津市立図書館に団体貸し出しの申請書をだしたり、本や本箱や文房具と準備を重ねて、1994年4月23日に「じゃりんこ文庫」オープニングおたのしみ会を開きました。おはなしおばちゃんの素話、おもちゃライブラリー「ぴよんぴよん」のパネルシアター、けふばあちゃんのめくり絵、竜の谷文庫のおばちゃん、「じごくのそうべい」や「ハのハのこたろう」の読み聞かせにおなかを抱えて笑っていたみんなの顔を思い出します。「じゃりんこ文庫日誌」を見ると、オープニングの日は近所の子どもたち14人におとなたち20人。おとな(けふばあちゃんのお友達や文庫の仲間)の方が多いうオープニングでしたが、翌週からのふつう文庫には、友だちを誘ってきてくれる子もあり、「じゃりんこ文庫」は最初から結構賑やかなスタートになりました。

下の写真は、あの頃のおはなしおばちゃんの「コンチのおはなし」を聞いている時の写真です。ここに写っているえつこちゃんも去年の秋から、10か月のショウ君とやってくるようになって、だんだんにあの頃のような「じゃりんこ文庫」になってきましたね。太郎君がお絵かきの延長で作ってくれたミニ絵本『しょうぼうしゃ』、ちゃんと物語になっていて感心してしまいました。いつも、使ったおもちゃはちゃんと後片付けしてくれる几帳面なはなちゃん。抱っこ紐を卒業して、ショウくんやお隣のこちゃんにおもちゃを貸してあげたり、一緒に遊んだり、ちよっとだけ先輩って顔をしている次郎君。また、いろんなドラマを展開してくれるだろうな？と、たのしみにしています。

けふばあちゃんは、「子どもたちが子ども時代を子どもとして、のびのびいきいきと過ごしてほしい」と願っています。子どももおとなも一緒に心を遊ばせて、ゆったりと過ごせる『場』になったらいいなあと思ってきました。そうして「じゃりんこ文庫」は30年たって、おとなになったはるこちゃんたちを迎えています。こんな喜ばしいこと、うれしいプレゼントがあるでしょうか？ 以前のように動けません、はるこちゃんたちに助けていただきながら、また子どもたちの成長の一場面に立ち合わせていただけることをとってもらってうれしく思っています。

「こんにちは～、おじゃましま～す」元気な声が聞こえてきます。

「いらっしゃ～い。どうぞどうぞ！ あいてるよ～！」



おはなしおばちゃんとこどもたち  
(1994年)



『しょうぼうしゃ』  
(2024年)



# 生殖医療と家族援助

## ～LGBTQ 当事者編:その1～

荒木晃子

### 医療現場の LGBTQ 当事者

現在、勤務先のクリニックでは LGBTQ 当事者を受け入れる態勢の準備が時間をかけて進みつつある。生殖補助医療の専門性を持つ不妊クリニックなので、本来、受診者の大半は不妊に悩む婚姻関係にあるカップル、もしくは事実婚関係が認められた異性間カップルであり、同性カップルや性別変更手術を受けた異性間カップルへの不妊治療は想定外であった。しかし実際には、女性カップルからの問い合わせや、過去にはトランスジェンダー当事者がホルモン治療の継続に通院されるケースもあるという。筆者は、面接したふたりが異性カップルであっても、(明らかに)女性が妊娠することだけを目的に、男性と共に来院した「自称:事実婚カップル」に対応した経験を持つ。そのケースは互いに他己紹介さえできない希薄な関係性が明確になったカウンセリングであった。とはいえ、このようなケースは極めて稀であるため、一昨年までは、LGBTQ 当事者に特化した院内の受け入れ態勢を整備することは検討していなかった。

一方、国政では「LGBT 理解促進法」と銘打った(不十分ではあるが)セクシュアルマイノリティ当事者への理解を国民に周知するための法案が成立し、地方行政に於いては各地でパートナーシップ制、ファミリーシッ

プ制を導入する動きが活発になり、法的効力はないものの、家族として共に暮らす LGBTQ 当事者カップル・家族の社会生活への支援は徐々に整備されつつあるともいえる。国民はみな、安心安全な社会環境下で平等・公平に教育を受け、心身共に守られた社会生活を送る権利を持つことは周知の事実である。なかでも、教育と医療は人の生涯を通して避けることができない重要な役割を担い、誰もが社会生活を送るうえで欠かせない機能を持つため早急な整備は必須である。医療現場に従事する者として身が引き締まる思いがする。

以上が医療現場に身を置き、家族形成に困難を抱える当事者の支援を続ける筆者が、あらたに LGBTQ 当事者の家族形成支援に尽力する理由となっている。

### 当事者の家族ニーズ

まず、「LGBTQ 当事者の家族形成ニーズに関する意識調査」の結果及び考察を紹介する。

妊娠出産の可能性、養育意思のある当事者及びカップルは性のあり方に関係なく、第三者のかかわる生殖補助医療の利用ニーズがあるのであって、それは身体の生殖機能(の有無)によるものである。根拠は、生まれながらに子宮のないロキタンスキー女性とそ

のパートナー、卵子がないターナー症候群女性とそのパートナー、早発閉経女性とそのパートナー、精子がない無精子症男性とそのパートナー、ほかにも、癌などの病や事故等で生殖機能を失った当事者とそのパートナー等の異性カップルには、第三者のかかわる生殖補助医療技術の利用ニーズが確認されていることにある。両者は共に子どもの養育意思とニーズを持つが、法的婚姻関係のない（同性婚は法律で認められていない）LGBTQ 当事者は、国内でその選択肢を持つことができない現状にあるとされていた。（実社会対応プログラム「LGBTQ 当事者の家族形成に関する意識とニーズに関する調査」、2020）

調査の結果、アンケートに回答した当事者の多くは、身体の性、性自認、性表現や性行動、性的指向にかかわらず、パートナーと暮らし子どもを育てたい、原家族に自分のセクシュアリティとパートナーとの関係を受け入れて欲しいと願い、第三者のかかわる生殖補助医療の利用と法整備、社会的養護下にある子どもとの家族形成、そのための相談及び支援体制の整備を求めていることが明らかになっている。

これまでに筆者は、当事者と当事者カップルから調査結果を裏付ける以下のような声を受け取ってきた。

・「家族をつくるって、考えたことがない。つくってはいけないと思っていたから」（男性カップル）  
・「子どもは欲しいけれど、自分たちが育てることで、子どもがいじめられたり、差別されたりすると思ひ躊躇している。でも、自分たちには子どもを幸せにする自信はある。学校とか子ども同士でいじめを受けたりしたときは直ぐ飛んで行って子どもを守ることはできる。」（男性カップル）

・「子どもがいるといいな、と思ったことはあるけど、自分みたいな人間が親だと子どもがかわいそう」（トランス女性）

・「私たちはとにかく家族になりたくて養子縁組で家族になった。もちろん子どもを産むこともできるし、産みたいけど、子どもとの親子関係を考えて…」（養子縁組した女性カップル）

このように、身近なLGBTQ 当事者の声に耳を傾けると周囲の対人関係以外にも様々な社会環境下で傷つき、こころを痛める出来事が語られることが多い。例えば、行政や金融機関の窓口、生命保険加入時・賃貸住宅への申し込み申請ほか、地域住民とのかわりや暮らしに密着した必要書類の記入内容、その手続きの担当職員の対応等である。なかでも、幼少期～青年期に教育現場でクラスメートや教師と日常のかかわりの中で耳にした“ひとこと”には、大半の当事者が「傷ついた・本当の自分を隠さなければと思った・言えば仲間外れにされると思った・話に加わりたくなかった」等、集団に身を置きつつも孤立せざるを得ない感覚を持ったという。集団生活を余儀なくされる学校教育の現場で、孤独感を抱えた成長期の当事者は戸惑い、青年になったのち希死念慮をもつ者も少なくない、という調査結果もある。LGBTQ 当事者の傷つき体験は、親子関係に始まり、あらゆる人間関係に生じている。教育・福祉を含め、社会に必要とされる援助現場に従事する対人援助者には、こうした現実を知ってほしいと願っている。

## 生殖医療とLGBTQ当事者

前回（第55号）紹介した「まるっとインクルーシブ病院の実装プロジェクト（通称：まるクル）」では、誰もが安心して過ごせる医療機

関を目指し、現在も各地の医療機関で研修やワークショップを開催している。LGBTQ当事者が病院を訪れた際、受付で提出した健康保険証の性別欄と本人の外見が一致しないと判断されたときの担当者の対応、診察・検査の際、カルテの性別と患者の外見が異なると判断した医師や職員の対応など、当事者は医療現場で様々な傷つき体験があるという。そのような当事者の声をひとつひとつ積み上げて、問診票の性別欄をなくす、医療従事者にLGBTQ当事者理解を促す人権教育を受けさせるなど、数は少ないものの問題意識を持つ医療現場では少しずつ様々な変化が起きているという。

一言で医療施設といっても実に多種多様である。専門性に特化した単科病院や医院、大学に付属する総合病院には診療科目別に窓口が設けられていたり受診する側が戸惑うほどの診療科目が見受けられる。なかには、性別にかかわらず疾患を扱う歯科や耳鼻科の受診には、性別欄の記入は必要ない場合もあるだろう。対して、婦人科や生殖医療施設、内分泌内科や精神科を受診する際には、性別欄の記入は不可欠ではないだろうか。一例をあげると、性別変更特例法に沿って男性から女性に戸籍を変えたmtF女性は、健康保険証の性別欄は女性であって、外観も女性となっているが、疾患の特定・治療に必要な検査結果次第では、生まれながらの性別の特徴が表れることもありうる。更に、女性の外見の維持（女性化の維持・促進）のために定期的なホルモン剤投与を余儀なくされるため、その副作用の症状も考慮されなければならない、単に戸籍や保険証の性別に沿った治療が最適とは限らない場合も考えられる。これはftM男性も同様

で、医療施設のなかには、検査・治療のために性別を明記する必要がある診療科があるのであって、一律に全ての医療施設で書類上の性別欄をなくすことは難しいことを、当事者も医療従事者も周知しなければならないであろう。

筆者は、「性と生殖を扱う医療機関」に従事する心理援助者の立場であり、他科の詳細を述べることは難しい。しかし、子どもとの家族形成を望む当事者を援助する者として、様々な調査研究の結果、及びLGBTQ当事者の声を根拠に、医療現場の実践を今後も伝えていきたい。

次号からは、勤務する生殖医療施設で進行中の「LGBTQ当事者対応のための院内改革」を織り交ぜつつ、当事者の家族形成ニーズを紹介できればと考えている。

## 編集後記

### 編集長(ダン シロウ)

5月下旬、石川県での家族漫画展と講演会(金沢 & 津幡)の帰路、地震被災の内灘町を回り道してもらった。もう5ヶ月も経つというのに、生活道路には通行は自己責任でも言いたげな標識が設定されていた。

隆起したり、陥没したりで道が傾斜した両側に、半壊したもの、倒壊はしていないが上下に大きく歪んだ家並を見ながら進んだ。電線が低いのは、砂地の地盤に電柱が陥没しているかららしい。家の前のコンクリート石段が隆起によって軒先みたいになっていたり、反対側の地面は陥没してズリ下っていたり、とても奇妙でひどい状況だ。しかし、復旧の作業痕跡がほとんどない。実際どうなのか正確にはわからないが、放置されたままのように見える被災地だった。なかなか片付けが進まない！とニュース報道される能登半島先端の街でもない、金沢のすぐとなり。自分でなんとかしなさいの町並みだとしたら、あんまりではないか。

\*

通巻57号とは、一年4冊発行のマガジンが、15年目に入ったということだ。同じ顔ぶれの編集メンバーでこの年月はなかなかだと思う。マンネリ化、老化などと言うこともできるのだが、世の中をご覧になると良い。

まあなにも長続きしない、国を挙げて「朝令暮改」の令和の御代である。出来るものなら、どこか一所に腰を据えて、堂々たるマンネリを実現してみられたらよかろう！それを一所懸命というのである。

などと最近 Audible の時代小説にどっぷりなもので、かような口調になってしもうたわい。とは、何藩の侍？

### 編集員(チバ アキオ)

ゼミの授業で現場の方々の協力をいただいて、地域活動の現場に学生の方々と出向いた。事前学習では、その活動を支えている福祉専門職から講義と演習をしていただいた。学生もグループに分かれて積

極的に地域活動について考え、相互に発表した。そして、実際に地域活動に参加。介護予防を目的にした活動の現場へ。プログラムはチェアヨガ、椅子に座ってできるヨガだった。地域の方々が20名以上参加。私たちがいっしょに体を動かした。

チェアヨガは初体験。目的をご高齢期に感じる体の不調をテーマに絞って、体の各所をほぐし、のばして、呼吸を整えていった。普通のヨガのような転倒リスクやけがのリスクはしっかり押さえながら、ヨガの効果を最大限に生かしているように感じた。

地域の方々とも終了後、話す機会をいただいた。学生さんにもたくさん話しかけてくれてありがたい。地域にもいろんな方がいること、それはクラスにもいろんな学生がいるのと同じだよと話してくださった。ヨガは女性に人気で、男性に人気なのはグランドゴルフや筋トレと教えてくださった。地域にある、関連店舗やインストラクターの方々ともつながり、そういった地域づくりに福祉の専門職の方々も汗をかく。大事なものは「持ちつ、持たれつ」とも地域の方は話してくださった。地域がどんな価値を持つようにするといいいかな？と考えて、そのためにはこういう機会を重ねよう…。これも編集作業と重なる。地域を現代に合わせて再編集している。ヨガもいろんな方ができるように再編集してチェアヨガになっていた。

編集もよく考えると、初回以外はすべて再編集である。編集後記も厳密にいうなら「再編集後記」だろう。そして、わたしたちも再編集を重ねているのが生きるということだよねと思った。また再編集を重ねよう。

### 編集員(オオタニ タカシ)

今号のマガジンは休載になった原稿が比較的多くなりました。その理由として一番大きな割合を占めたのが体調不良によるものだったそうです。私自身、短信に書いた台湾旅行の後、コロナを発症してしまい、気管支拡張症を診てもらっている主治医には若干呆れられました。何かしら体の不調を抱えたり、“健康”を意識せざるを得ない年齢にはなってきましたが、編集会議での話題も経て、健康を“目的”にするか“手段”にするかで、生き方や考え方が違ってくるのかもしれないと思いました。今の仕事量をこなすには、それなりの体力も必要ですし、少なくとも当面は今くらい

の仕事はやっていきたいと思っています。そうすると“健康”はある程度必要な条件になってくるので、何かの足しになればと筋トレやランニングをできる範囲でやっています。

大学の授業の中で、木陰の物語の「宿題」のYouTube動画を視聴して、それから『いつもならやらないことを何かひとつやって、その結果を報告してもらおう』という課題を出しています。単に知識を問うようなレポートを出したくなかったのと、気持ちで自分の行動を縛ってしまっている学生も多いと感じる中で、わずかなことかもしれないけれど、自分で変化を起こせるし、気持ちだって自分で変えられるということを実感してほしいと願ってこの課題を選択しています。

今回も、学生さんたちはそれぞれ等身大で小さな変化を起こすことに取り組み、その結果として自身の気持ちや周りとの関係に小さな変化を起こせたことを、生き生きと楽しく報告してくれました。明るい展望が見えにくい時代ですし、できることは限られているのかもしれませんが、それでも小さな変化を積み重ねていく中に希望を見つけていきたいと思います。

## 対人援助学マガジン

通巻57号

第15巻 第1号

2024年06月15日発行

<http://humanservices.jp/>

### ■ご意見・ご感想■

マガジンに対するご意見ご感想は

[danufufu@osk.3web.ne.jp](mailto:danufufu@osk.3web.ne.jp)

マガジン編集部

第58号は2024年9月15日

発刊の予定です。

原稿締切2024年8月25日！

### 執筆希望者、常に募集

本誌は常に書き手に門戸を開いています。新たなジャンルからの、執筆者の登場に期待します。自身の生活スケジュールに本誌「連載」を持ち、継続的に、自分だからこそ描ける分野の記録を発信したいという方からのエントリーを待っています。ページ制限なしの連載誌です。

必要な回数、心置きなく書いていただけます。ご希望の方、編集長まで執筆企画をお知らせ下さい。執筆資格は学会員であること。現在非会員で書いていただく事になった方には、本誌は学会ニュースレターの位置づけですので、対人援助学会への入会をお願いしています。

対人援助学会事務局

540-0021

大阪市中央区大手通2-4-1

リファレンス内

TEL&FAX学会専用 06-6910-0103

### 表紙の言葉

人は描かずにモノだけを描くことは少ない。だからたまにそんな仕事をする、なんだか上手く描けている気がする。

ランドセルなんて描いたことは一度もなかった。写生するつもりで写真を見ながら描いたが、出来上がりは満足だった。

もともと絵が上手なわけではないので、モノがちょっと上手く描けると嬉しくなる。このランドセルは自著「わが子が小学校に上がる前に読みたい木陰の物語」の表紙のために描いた一枚だ。

近年、外国人旅行者にランドセルが人気だとか。大昔、フランスのリセの女学生が使っていた背中にも背負える通学バッグを、子ども達の土産にパリのプランタンで購入したことを思い出した。

2024/6/15